
猫とワルツを

オウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫とワルツを

【Nコード】

N3115Y

【作者名】

オウル

【あらすじ】

エミリア騎士団で新しく発足することになった第12旅団。傭兵上がりの副長さんが、上官のボクっ娘にツンデラれたりヤンデラれたりしながらも必死で部隊を運営する面白くも、涙なしでは語れないお話。

設定には色々穴がありそうです。その辺り大目に見ていただけますと助かります。

この作品は某大型掲示板でも掲載されています。

第1話 猫団長始動！

「おい、レオ、聞いているか？」

「ああ…？」

団長が呼んでいる。

いかん、考え事をしていたようだ。

俺の名前は、レオンハルト・ベッカー。このエミールリア騎士団でこの度、新しく設立された旅団クラスの部隊の副長に任命されたばかりだ。

「いつもボクの三步後ろを歩けって言ってるだろう！」

うるさいな…。小さ過ぎて見えなかったんだよ。賢い俺はその言葉を読み込んだ。まだ命は惜しい。

目の前で喚き散らしている小さい彼女はアキラ・キサラギ。第1旅団の団長。まあ…俺の直接の上官に当たる人物だ。

「お前は、ボクの言うことさえ聞いていればいいんだ……。おい、聞いているのか！」

「はいはいはい！ 聞いてます！ 聞いてますっつてば！」

「返事は一度でいい！ 大体、お前は軽すぎるんだ！ 会議の最中、お前が何度、あの薄汚いメイドに目をやったか、ボクが気付いてないとも思っているのか！」

薄汚いって……。あのメイドは、あんたと同じ下級貴族の出身でしょうが……。

「傭兵上がりか……」

吐き捨てて、団長は歩き出す。

…その傭兵上がりを副長に抜擢したのは自分だろうに。
それにしても…あの娘、可愛かったなあ。あー、犬の獣人の血を引いてるな。いい身体してた…きつと、夜もいい声で鳴くんだらうなあ…。

「おい！ お前、今、何を考えている！」

「うわあ！ 何も考えてません、ごめんなさい！」

「何も考えてないだとお…？ お前、今の自分の立場が分かっているのか！？」

団長は怒鳴り散らしながら俺に詰め寄る。背伸びしても胸ほどまでしかない。癖のある猫っ毛を怒りに巻き上がらせながら言った。

「この、うすらとんかちめ…」

俺が騎士の叙勲を受けたのは3年前。式の中で、あまりの退屈さに欠伸したところを、このアキラ・キサラギに見咎められたのが運の尽きだ。その後、修正という名の私的暴行を受け、騎士としての基本的な礼儀作法…まあ、戒律だな。そいつを身に付けるために彼女の側近として仕えることになった。

それから3年…現在もって修行中の身の上だ。

俺は細く長い息を吐き出す。

「でもまあ、旅団クラスの団長ってんだから、出世ですね。おめでとつございます…団長」

これ以前のアキラ・キサラギは一個連隊…エミリア騎士団で

は二千人ほどで編成される一個連隊の隊長であったから、旅団長に任命されたからには、その呼称も変わるということになる。

「すると……階級も上がりますね。とうとう准将ですか……将官クラス就任……俺も鼻が高いですよ」

その言葉に、俺の三步前を歩いていた団長が、眉間に深い縦皺を刻んで振り返った。

「ぐい、と俺の襟首を引き寄せる。

「二人きりのときは、ボクのことにはアキラって呼べって言ったただろう……！ 何が団長だ！ そんなもの……おまえはそんなに……！」
「って、まだそんなこと言うんですか？」

「はあ、と溜め息を吐き出す。

「団長……アキラは頭も切れるし、腕も立つ。生まれも一応は貴族の出身だ。前途有望な彼女だが、時折訳の分からない要求で俺を困らせる。」

「論すように言っ。」

「あのですね、団長。それでなくとも、俺たちは団長と副長の間柄なんです。二人きりでいることが多いんですから、普段から注意しておかないと。そのつもりがなくても、こんなところ風紀部の連中に見つかったら、えらいことになりますよ？」

「風紀部……？ 今は、ボクとおまえの話をしているんだ！ 奴らは関係ないだろう！」

「ありますよ！ 団長は貴族だからいいですけど、平民出身の俺は、除隊どころか、最悪殺されるかもしれないんですから！」

「おまえ……ボクのいうことがきけないのか……！」

平民にそんなに呼び捨てにされたいのか…？ 少し呆れてしまう。

『エミリア騎士団』は、元の始まりはただの修道会で、その名の由来は創立者の修道女『エミリア』だ。戦地での主な働きは医療活動だった。しかし、三年前に前団長であるカロツサ公爵が、後任を娘のヒルデガルドに譲り、以来その活動には軍事行動も含まれるようになった。

大幅な増員に伴い、俺のような傭兵上がりにも出世のチャンスができたわけだが、このエミリア騎士団は元々の活動は医療活動が主であっただけに、その編成は女性が半数以上を占めている。

他国の騎士団と比較して、男女の構成比に著しく公平を欠くエミリア騎士団の、現在の大きな懸念材料が男女の恋愛関係だ。

他国の騎士団には、馬鹿馬鹿しいと一笑に付されるこの懸念だが、急速に発展して来たエミリア騎士団にとっては、大きな問題だ。

現在、俺の目の前で毛を逆立てて、怒りに震えるアキラ・キサラギなんかもそうだが、エミリア騎士団の抱える上級将官の実に八割が女性だ。その内、未婚者が七割。

優秀な将官が結婚、妊娠を契機に長期の休暇、なんてことになったら、軍上層部は目も当てられんだろう。そこで新しく新設された部門『風紀部』の出番だ。

傭兵上がりや、他国の将官クラスを引き抜いて、男の人員を増やす一方で、男女の構成比にバランスが取れるまで、時間を稼ごうという腹なんだろう。『風紀部』は主に、騎士団内部の男女関係を取り締まる。

上級将官であるアキラとの間に変な噂でも流れれば、仮に、事実無根であったとしても平民出身の俺は、見せしめのために処刑されかねん。

それは、あまりぞっとしない想像だ。先程まで考えていたのも、アキラとの距離感についてだ。

周囲に人影のないことを確認し、アキラと視線を合わせる。

「アキラ、落ち着いてください」

一方のアキラは目元を赤くして憤慨している。何でそこまで追い詰められたか分からないが、過呼吸に近い様相で興奮している。

「これが落ち着けるか！ それになんだ、おまえの言葉遣いは！ 他人行儀な……！」

嫌がる俺に言葉遣いと礼儀作法を叩き込んだお方の言葉とは思えない。

「アキラ？ アキラ……？」

癩癩を起こした子供に母親がするように、背中を撫でてやる。

「うっ、ぐ……」

アキラは、ぐっと目を閉じ、うっすらと涙さえ浮かべながら、嵐が去るのを待つかのように俯いて黙り込んだ。

不思議な関係だ。我ながらそう思う。

アキラとは、上官と部下との関係だ。同じ部隊で同じ作戦をこなしたし、同じ釜のメシも食った。やばい作戦もあったし、一緒に死線を抜けたこともあった。だがそれ以外は何もない。なのに何故、こんな偏った関係になったのだろうか。

アキラの俺に対する執着……なぜ、こうなった？

肩で大きく息をするアキラに言う。

「アキラ、公私の区別のつかない貴女ではないでしょうか？」
「……」

ついに流れた涙を、袖で拭いながら、アキラは上目使いに睨みつけて来た。

「おまえ…よくも……」

「はい」

困ったものだ。ここまで酷い癩癩も久しぶりだ。一年前、人事で別部隊に飛ばされそうになった時以来の荒れようだ。

「覚えてろよ…」

「はい」

「後で、ひどいからな…」

「はい」

取り敢えず、全ての言葉に肯定しておく。アキラの癩癩には、それが一番有効だ。

その後、小一時間に渡って、俺は罵倒され続けた。

唐変木、馬の骨、でくの坊、田舎者、神父の息子、傭兵上がり。

散々言われたが、まあ、概ね合ってる。その全てに肯定しておいた。

最後に大きく鼻を嚙り、ようやくアキラは落ち着いたようだ。

「忘れてたが……お前も出世したからな」

「はい…って、え？ 俺もですか？」

アキラは少し得意そうに頷いた。

「まあ、このボクの副官が下士官じゃ、格好がつかないからな。ありがたく思え」

「そうですか…俺が、少佐に……」

複雑な気分だ。

通常、平民出の騎士がその地位につくことは、まず無い。あつたとしても、引退間近の老騎士に対する捨て扶持といったところか。だが、俺はまだ二十代の前半だ。これは平民出の騎士としては異例の出世スピードだ。

今までだって、同僚のやつかみみたいなものはあつた。アキラ・キサラギのお気に入りということ、皆、沈黙していたが、少佐ともなるとそうもいかんだろう。

これが何かの火種にならなければいいが……。

「なんだ、レオ。不満なのか？」

俺の反応は、アキラには少し不服だったようだ。唇を尖らせる。

「いえ、そんなことは…ありがとうございます……」

退役。ふと、そんな言葉が脳裏を過る。

元々、俺は片田舎の神父の息子だ。その田舎者が、騎士に憧れてこのニードーサクソンまでやって来たのはいいものの、現実はそのなにごとなく、その日暮らしの傭兵稼業に就くはめになった。時勢がよく、騎士に取り立てられはしたが……。

これが潮時かもしれない。切った張ったのやり取りにも嫌気が差していたところだ。

今、退役しても国から出る恩給で、俺と、後一人くらいは充分やっけて行けるだろう。

「……」
「やっぱり……爵位が得られないのが不満か。それは少し待ってくれないか……？」

「退役か……」。

もう少し熟慮するべきだろうが、これは結構名案かもしれない。俺をやっかむ同僚たちも、退役してしまうと知れば、団長の温情とということで納得するだろう。

「いや、別にお前を過小評価しているわけじゃないんだ。ただ、貴族の中には、元傭兵のお前に爵位を与えることに反対の者もいる。やつらを黙らせるには、もっと功績が必要なんだ」
「……」

「ぼちぼちで身辺を整理して行くか……。次の出征が終わったところが切り出し頃だな。」

「……やっぱり腹を立てているんだな？ でも、ボクだって頑張ってるんだ。それは理解してほしい」
「……？」

「いかん、また考え事をしていた。悪い癖だ。」

「お前の言う通り、公私のけじめは確かに大事なことだ。けど、それとボクたち二人のことは、また別の問題だろう……？」
「はい」

「やばい……なんの話だ？ 全然ついていけない。でもまあ……なんとなくかなるだろう。俺がアキラの話の聞かないのは、これが初めてじゃないし……」。

アキラは笑みを浮かべると、俺の手を取った。

「わかつてくれたんだな？」

「…はい」

俺は一つ咳払いをする。これ以上、分けのわからん話に付き合わされてはかなわん。

「…それでは、新しい兵舎でも見に行きますか？」

「うん、そうだな！」

アキラは、にっこり笑った。怒ったり、泣いたり、笑ったりと忙しいやつだ。

常に俺の三步前を歩くアキラ・キサラギだが、彼女には様々な逸話がある。

曰く、アキラ・キサラギは、ホビットの血を引いている。まあ、小柄だからな。確認のしようはないが、信憑性はある。

曰く、アキラ・キサラギは猫の獣人の血を引いている。噂では、尻尾が生えているとかいないとか。

多人種の住むこの大陸では、特に珍しい話ではない。

この逸話が事実であるとするならば、アキラ・キサラギはハイブリッドということになる。生物としては俺のような純粹種の人間などより、余程高みにいるということだ。

これらの逸話に関しては、信憑性はあるものの、確信はない。確信を持って言えるのは、アキラ・キサラギという名の由来は、今はもう海に没した東方の大陸のものである、ということだけだ。

アキラ・キサラギが東方の流れを引くというのは、疑いのような事実だ。それを証明する一つの証拠が、今、彼女が腰に差している『カタナ』だ。これは俺が愛用している『剣』などとは似て非なるものだ。恐ろしい切れ味と、美しい紋様。扱うには独特の技術が必要だ。

アキラはこの『カタナ』で身の丈が己の倍はあろうかという巨漢の首を、一刀で撥ねて見せたことがある。『剣』では出来ない芸当だ。

そのアキラだが、背筋を伸ばし、後ろに手を組んで少しお尻を振りながら歩く。スリムな体型に長い尻尾を持つ猫の獣人がよくやる歩き方だ。そんな彼女に付いたあだ名は、

『猫隊長』 或いは『猫大将』。

なぜか機嫌が良くなったようで、鼻歌混じりにずんずん先を歩いて行く。

「おい、レオ。置いて行くぞー！」

俺は慌てて、アキラの後を追った。

第2話 副長の怒り

この度、新設される第12旅団であるが、『旅団』クラスの部隊はこのエミリア騎士団では三個連隊を持って編成される。

一個連隊が約一五〇〇〜二〇〇〇人で編成されていることを考えると、第12旅団は最低でも四五〇〇人。多ければ六〇〇〇人の集団ということになりそうだ。

木造で古めかしい造りであった旧兵舎とは違い、新しく割り振られた兵舎は赤煉瓦拵えの二階建ての建物だった。

アキラはご満悦で、新兵舎の居住区を見て回った。無論、副長たる俺も後に続く。

「レオ、ボクの部屋は見晴らしのいい屋上にしようと思うんだが、どうだろうか?」

「何、馬鹿なこと言ってんですか。有事の際、屋上にいたら大変でしょうが。団長は離れに邸宅が用意されていますよ」

アキラの形の良い眉が、きゅっと寄った。これは機嫌を悪くする一歩手前だ。

「ちなみに……お前は、何処に寝泊まりするんだ?」

「そりゃ、この新兵舎ですよ」

副長だから個室だ。まあ、連隊の副長時代から個室は宛てがわれていたんで、さしたる感動はない。

「…ボクは、どうなるんだ?」

アキラは低く言う。雲行きが怪しくなって来たようだ。ますます表情が険しくなって来た。

「はい、入り口に不寝番の衛兵が何人か付きます」

危ない。あと少しで、知るかと言いつうになった。

「別にボクは、そんなものは頼んでない」

「まあ、堅苦しいのは分かりますけどね。我慢して下さい。偉くなるつてのは、そういうものなんですよ」

准将になるアキラは、連隊長時とは待遇が変わる。衛兵も付くし、専属のメイドなんかも付く。将官クラス扱いは別格だ。今はぐずっているが、そのうち考えも変わるだろう。

「副長は、いつから団長と離れ離れになっても良くなったんだ…？」

「俺の」

この一人称も改めんといかん。俺がだらしなければ、恥をかくのは団長のアキラだ。これでも、一応は期待されて副長の地位に就いたと自負してる。いつまでも傭兵上がりでは通用しない。

「小官の部屋でしたら、新兵舎の一階です。有事の際は」

最後まで言うことは出来なかった。

アキラの拳が鳩尾にめり込んでいる。彼女は小柄だが、その拳は石より固い。そして、何よりも効く。家に伝わる特殊な体術らしい。『カラテ』とか言ったか。

「か、は」

肺から空気を絞り出し、苦痛に喘ぐ俺に、アキラは少し周囲の様子を確認しながら言う。

「なんなんだ、お前は。ボクの嫌がることばかりしやがって。二人きりだぞ？ わかってるのか？」

…なんのことだ？ しかし、こいつは効く。頭三つは小柄なアキラに殴られて、膝を着く俺って……情けない。

俺の襟首を持ち上げるアキラから表情が消える。何か知らんが、彼女は本気だ。修正モードだ。兎に角、何か言い訳しないと、足腰立たなくなるまで叩きのめされてしまう。

「う、く」

駄目だ！ 喋れない！ 一撃でこれか……。息を吸うのも難しい。言葉の替わりに、だからだと脂汗が吹き出してくる。

畜生、このチビめ！

「反抗的な目付きだな……。言いたいことがあるのか？ 言ってみる？」

「ぜ、んぶ、あなたの、ため……」

「え？」

と、アキラは若干怯む。少しは聞く耳があったようだ。

「俺が、だらしないと……。団長に、迷惑が……」

痛みに途切れがちな言葉をなんとか吐き出す。

「え？ え？ おまえが、ボクのために？」

困惑して視線の定まらないアキラに、俺は大きく頷きかける。

「あなたの努力を、俺 私は知って、います……。私の不始末で、あなたに……」

「もういい！ わかった、わかったから無理して喋るな！」

おろおろとしたアキラが俺に近づく。しかし アキラに殴られたのは、これで何度目だ？ 身体に染み込んだ恐怖は、そう簡単に隠し仰せるものではない。思わず、身が竦んでしまう。

はっとしたように、アキラは飛びのいた。

「くそっ、くそっ……」

唇を噛み締め、俺を打った拳を摩るアキラの表情には、ひたすら困惑の色が見て取れた。

「ボクは謝らないからな。おまえがいけないんだ。ボクは悪くない！ ボクは悪くない！」

「…はい」

なんとか返事を返すと、アキラはなぜか絶望したような表情になった。

近いうちに、絶対に辞めてやる。

俺は決意を固くするのだった。

第3話 猫のメイドさん

この日は、アキラに断って早めに自室に引き取る。

第12旅団の結成は決定されているものの、正式な辞令はまだだ。手続き上の問題もあるが、この間延びした時間は、大抵の場合、準備時間に充てられる。

俺は独り者なので、準備にさしたる手間は掛からないが、その分、副長としてやっておかねばならないことが多々ある。

アキラ・キサラギは優秀な軍人だが、困ったことに怠け癖がある。雑事は俺の担当だ。

新兵舎の間取りの暗記は勿論、有事の際の連絡手段も考慮せねばならない。連絡手段に関しては、連隊時代のものを強化、見直すとして、内乱や暴動などの際の行動手順などもマニュアルとして落としで行かねばならない。これも連隊時代に作成したものがあがるが、規模が替わる以上、大幅な見直しを要求されることになる。

とかく、アキラ・キサラギの副長は忙しい。

通常、一個連隊は一五〇〇〜二〇〇〇人の集団から成るが、これを率いるのは中佐か大佐の階級を持つ上級士官である。

『旅団』クラスの編成は最低でも二個連隊。つまり、アキラ・キサラギは最低でも一名の上級士官を新たに幕僚に加えることになる。先日、解体された一個師団の連隊長二名が再有力候補だろう。目は付けてあるので、既に自然な成り行きを装って、二名には接触してある。

傭兵稼業の長かった俺は、こういう根回しが結構得意だ。まあ、それだけ苦労しているということだ。

接触した連隊長二名の資料を纏め、アキラに提出、面談の予定を組まなければならぬ。これは、おかしなことだが俺が勝手にやっていることだ。他の部隊では、こんな面倒なことはしない。軍上層

部の人事に任せきりなのが通例だ。結成の式典がお互いの初顔合わせ、などということも珍しくない。

面倒を勝手に抱え込む俺だが、この行為には計り知れない利点がある。

前以て面識を持ち、あわよくば友誼を持つことが出来れば、後々取り込み易くなる。それは戦闘の際の連携にも密接に関係してくる。仮に、お互い初対面の印象が悪かったとしても、時間を置けば理解を得られるかも知れない。最悪、この段階で物別れということになってしまえば、人事にそれとなく働きかけ、多少なりとも異動に考慮の時間を与えることが出来る。

アキラ・キサラギと同様に、俺も負けなくらい面倒臭がりだ。トラブルは少ない方がいい。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー。
イザベラ・フォン・バツクハウス。

フォンは、このニーダーサクソン古来の貴族であることの証し。今のところ、この二名が、新しく第12旅団に配属されそうな再有力候補だ。

困ったことに、二名とも未婚の女性。しかも門閥貴族の子女だ。二人とも負けず劣らずプライドは高いが、まあ、その辺りは如才なく接したつもりだ。手応えは悪くない。

後は、俺の上官の猫大将の気分次第、といったところか。
屈服させるか、或いは友誼を結び、知己を得るか。

「あの…大尉、そろそろおやすみになられた方が……」

背後からの声に振り返ると、そこにはメイドのエルが気遣わしげな視線を向けている。

エルは猫の獣人の女性だ。

四年前、未だ傭兵だったころ、軍から降りて来た作戦で、一つの村を焼き払ったことがある。

百人ほどの小さい村で、疫病と飢饉でもうどうしようもなかった。今、思い出しても軍の指示は妥当だったと思うし、判断は適切だったと思う。

村を焼き払うことも、その汚れ仕事を傭兵に押し付けることも。俺が軍の高官なら、俺だってそうする。だから、恨みはない。それとは別として、俺にもささやかながら良心というものがある。

エルは、俺が焼き払った村の住人の生き残りだ。

「お願いです、助けてください……」

と、命乞いする彼女をどうしても見捨てることができなかった。

散々、無茶して、金も人脈も使えるものは全て使って、エル一人だけをなんとか助けることができた。

それから四年。安月給にも拘わらず、エルはよくしてくれてる。

「ああ、もうこんな時間か……」

暗くなった窓の外を見やり、首を鳴らす。

「そうだ、エル。俺、今度出世して少佐になったんだ」

これでエルの月給も上げてやれる。何せ、傭兵時代からの付き合いだ。貧乏暮らして無給の時だってあった。彼女には報いてやりたい。

「そうですか……」

とエルは、素っ気ない。

無理もない。俺はエルの生まれ故郷を焼いた男だ。恨んで当然なのだ。命を助けたからといって、それを恩に着せるつもりもない。……偽善だな。素直にそう思う。罪のない民間人を虐殺しておいて、エル一人に報いたからといって、その罪が許されようわけがない。

エルは……いつ、俺を殺しにくるだろう。切った張ったが生業のこの稼業だ。いつ死んだっておかしくない。どうせいつか死ぬのなら、俺は、エルに殺されてやりたい。

それすらも傲慢か……。

それでも神父の息子だ。神の存在を信じてる。

俺の生きざまが罰せられるべきならば、いずれ報いがあるだろう。

「それともう一つ」

「……」

エルは面倒臭そうに振り返る。

「今度の出征が終わったら、退役しようと思う」

「はい……それが何か？」

そう来るか。スルーですか。少し気が抜けてしまう。エルは俺のことなど、どうでもいいのだろう。

「いや、だから……そうになると、もう兵舎に居られない。だから、その……エルはどうするかと思って……」

いかん、どうも齒切れが悪い。どう言えばいいかわからん。

「どうしましょ」

エルは興味なさそうに首を傾げる。

「まあ、確定したわけでもないから、今は具体的なことは言えないんだが……その、考えておいてほしいんだ」

「はあ……考える、ですか」

「俺としては、エルに付いて来てほしいと思ってる。もちろん、無理には言わないが……俺は、その、切った張ったしか能が無いし……エルの助けが必要で……」

「……」

ランプの薄暗い闇の中でエルと目が合う。

猫の獣人は、体の正面部位には毛が生えていない。顔、胸、腹、手のひら。それ以外の部位に薄い毛皮。頭に尖った耳がある以外は人間とさして変わりがない。

そのエルも今年で十五歳。獣人の成長は人間より早く、一般的にその成人年齢は十二歳とされているから、もう十分に大人だ。だからだろうか。少し緊張してしまうのは。

ええい、本音を言ってしまうえ！

「エル、お前が心配だ。黙って俺について来い」
「……」

その時、エルの瞳がぴかりと光ったような気がした。

「はい、それを望まれるのであれば……お供します」

正解。気を使うのは性に合わない。気分が良かった。

「よろしい！今日は下がって休んでくれ」

「はい、それでは」

短く言ってエルは引き下がる。去り際、振り返り、

「…それでは、どこまでも…」

と呟いた。

第4話 わがまま

正式な辞令が下った。

これでアキラ・キサラギの率いる第七連隊は、これに二個連隊を加えた計三個連隊 第12旅団として機能して行くことになる。

「なあ、レオ。ボクはどうしたらいいんだ？」

これが上官の言葉とは思えない。それを決めるのはあんだらう、と言ってやりたい。

アキラ・キサラギは優秀な軍人ではあるが、極めて怠け癖の強い性格をしている。

「…とりあえず、馬鹿共を集めますんで、隊長、じゃない。団長は、後ろで睨みを利かせていて下さい」

第七連隊は傭兵上がりが多く、実戦経験も豊富で結束も固い。その反面、血の気が多く荒くれ者も多い。命知らずのお調子者が多いのが特徴で、軍議は脱線することがしばしばある。そのため、団長のアキラが睨みを利かせ、俺が仕切る。

エミールリア騎士団では、一個連隊は三個大隊ほど組織されている。これらを指揮するのは、基本的には少佐クラスの士官である。

第七連隊の場合、大隊指揮官として三名の少佐。それらは各々副官として中尉クラスの下士官がついている。

俺が言った『馬鹿共』というのは、この第七連隊の中核を成す大隊指揮官、及びその副官を含めた計六名のことではなく、それ以外の平騎士たちのことだ。

「そんなことより、団長。この第七連隊を任せる士官を決めてくれましたか？」

アキラは、むすつとして腕組みした。

「第七連隊の隊長はボクだ。だれにも任せるつもりはない」
「だから……」

俺は頭を抱えた。

「……気持ちは分かりますけど、団長はこれから三個連隊の指揮を執るんです。一個連隊にばかり手を取られるわけにはいかんでしょう……まあ、直属の第七連隊が可愛いのはわかりますけどね」
「……じゃあ、レオ。お前に第七連隊を任せる」

渋々言われても嬉しくない。問題はそれだけじゃない。

「何言ってるんですか。俺は少佐ですよ？ 階級的には大隊クラスの指揮官が妥当です。まあ、どうしてもというなら出来ないこともないですけど……」
「じゃあ、どうしてもだ」
「わかりました。それじゃあ、俺に代わる副長を任命して下さい」
「なっ！」

とアキラは仰天する。

「ふざけるなよ、そんなの兼任すれば済む話じゃないか！」
「だから……」

俺はやっぱり頭を抱える。この話し合いは既に二度目だ。嫌気が

さしてきた。

「そんなことできるわけがないでしょう。だから、信用出来る大隊長の中から、一人選べって言うてるんです。大隊長の資料は持ってますよね？」

「……」

アキラは、つーんとそっぽを向いた。

「まあ、いいでしょう」

アキラ・キサラギは馬鹿ではない。嫌がるのなら、それなりの理由があるのだろう。

「アスペルマイヤー、バックハウス両大佐との面談のこと考えてくれましたか？」

「……」

アキラの表情が険しくなる。

この様子だと、報告書はちゃんと目を通したようだ。とても嫌そうな顔をしている。

つまり、アスペルマイヤー、バックハウスの両大佐はお気に召さないというわけか。それで、手飼いの第七連隊は側に置いておきたいというわけだ。

まあそうだろうな。

アスペルマイヤー、バックハウス両名とも、家名だけなら団長を凌ぐ家柄の出身だ。扱い辛いと感じたのだろう。しかし……アキラの度量なら、どうにかするのではないか、と思ったのは買いかぶり

過ぎだつたらうか。

「おまえ…二人とは知り合いなんだろう？」

「ええ、そうですが」

「特にアスペルマイヤーとは懇意にしているらしいじゃないか」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー。

傭兵時代、彼女の指揮する部隊に一時所属していたことがある。俺には、ある能力があつて彼女の部隊では非常に重宝されていた。

一年前、人事部に働きかけ、俺を旗下に加えようとしたのも彼女だ。アキラの猛烈な反対と妨害で断念したが、先日会ったときは、再会を喜んでいた。

「なんですか？ 一年前のこと、まだ根に持つてるんですか？」

「当然だ！ このボクから引き抜きだぞ？ よりによって……くそっ！ 今、思い出しても腹が立つ！」

こりや、駄目だ。アスペルマイヤーはペケ、と。

「それでは、バックハウス大佐はどうですか？」

「ふざけるな！ あいつはエルフじゃないか！」

いよいよ頭に血が昇つたのだらう。アキラは怒鳴り散らした。

種の純血に拘りを持つエルフを嫌う人間は多い。アキラも多分に漏れず、エルフは嫌いなようだ。

はいはい、バックハウスもペケ、と。

「レオ！ エルフとはどういう関係なんだ！？ 事と次第によつて

は、おまえでもただじゃおかないぞ！」

「アスペルマイヤー大佐とバックハウス大佐は、幼なじみなんです

よ。それで知己を得た。それだけです」

「本当だろうな！ アスペルマイヤーは！？ どんな関係だ！」

すごい見幕だ。少し、引いておこう。

「アスペルマイヤー大佐ですか？ 会えば挨拶くらいはしますが、それだけです。一緒に食事をしたり、話し込んだりするような仲ではないです」

顔を真っ赤にしたアキラは、苛々と執務室の中を歩き回った。

「会わないからな！」

「はい」

と言ってはみたものの。

嫌いだから、という理由で二人の率いる二個連隊の併合を断ることはできない。

やれやれ、アキラと二人の出会い、第12旅団の結成式典の時に
なりそうだ。

第5話 第七連隊

正式な辞令が下り、第12旅団は一週間の準備期間を経て発足することになる。それに辺り、俺は『馬鹿共』たちに色々と指示する必要があった。

木造の兵舎を引き払い、新造の煉瓦造りの兵舎に移動する指示を出さなければいけない。我ながら、心配症の苦労性であるが、こういった瑣末な指示を怠れば、予期せぬ事態に見舞われることがある。

馬鹿共……第七連隊の平騎士たちであるが、全員が全員騎乗の騎士ではない。歩兵、騎兵、工兵、砲兵、兵站など、兵科は別れる。

馬鹿共を旧兵舎に終結させ、移動の手順、その際の交通路などを指示していく。反対意見や懸念事項はこの時、一緒に処理する。俺の手に余る判断が迫られる時は、後背で睨みを利かせるアキラの出番だ。

大きく息を吸い、第七連隊1723名全員に行き渡るよう、声を張り上げる。

「いいか、馬鹿共！ 他の連隊と揉めるんじゃないぞ！」

他の連隊とは、アスペルマイヤー、バックハウスの両連隊のことだ。詰まらないことだが、きちんと言及しておかないと、傭兵上がりの多いこの第七連隊の連中は揉め事を起こす可能性がある。

「わかったか！ お前らの新しいヤサは、赤い煉瓦造りの第一から第三兵舎だ！」

第七連隊の連中は傭兵上がりが多く、そのため礼儀作法にはうるさくない。身体に馴染む古巢の匂いに、俺も少し気が緩んでしまう。

でかい声を張り上げながら連中を見回す。

メモを取る者もいれば、住み慣れた兵舎から離れることを愚痴る者もいる。後ろでは、なぜかアキラもメモを取っていた。

移動の手段くらい、あんたの好きにすればいいでしょう……俺は少し呆れてしまう。

「おい、神父の息子！ 階級章が変わってるが、出世したのか！」

馬鹿共が俺のマントに付いた新しい階級章を見てざわめき立つ。

「そうだ！ これから俺のことは、さん付けで呼べよな！」

「馬鹿いつてんじゃねえ！ 偉いのは、おめえじゃなくて階級の方じゃねえか！」

そうだそうだと騒ぎ出し、周囲からげたげたと冷やかしの笑い上がる。

俺は一つ頷いて、大声を張り上げる。

「そういうことだ！ これまでと何も変わらん！ バッジの色が変わっただけだ！」

「やっぱりな！ バッジの色は変わっても、オツムの具合は変わりやしねえ！」

どつと吹き出した連中に混じり、背後でアキラが吹き出す声も聞こえる。

馬鹿で気さくで底抜けに明るいのが、この第七連隊の特徴だ。

出世したからといって、俺とこいつらの関係が変わるわけはない。このおかしなやり取りは、馬鹿みただがお互いのために必要なことだ。

大きく一つ手を打って、場を締める。

「ようし、それでは第12旅団結成を前に、団長から一言ある」

突如、話を振られたアキラは、きょとんとして自分を指差している。その表情は意外そうだ。

「ボク？ いいよ！ いい！ ガラじゃない！」

それは俺だつて一緒だ。むずがるアキラに厳しい視線で言葉を促す。

「……隊長もいよいよ、准将か。猫隊長が猫將軍に出世したなあ、おい」

「こりゃあ、めでたい！」

馬鹿共が、やんややんやと騒ぎ出す。

アキラはそれを見ながら、まんざらでもなさそうに頬を緩ませている。馬鹿は馬鹿なりに、彼女のことを慕っている。それなりに可愛いのだろう。

アキラは立ち上がり、えっへんと一つ咳払いをした。その様子に馬鹿共も口を噤み、静かに言葉を待つ。俺の時とは大違いだ。

「えー……みんな、張り切るのはいいけど、怪我はしないように……」

なぜか、アキラを中心にしんみりとした空気が流れる。中には、涙さえ浮かべるヤツもいる。分けがわからん。今の言葉に感動の要素があつたのだろうか。

だが、締めるにはいい空気だ。

「何か質問はないか！ なければ解散する！」

その声に、ぱっと一つの手が挙がる。馬鹿共の一人だ。にやついている。こいつらは、俺を見れば困らそうと躍起になる。親しむのはいいが、時折、腹が立つ。

「他の連隊と揉めたときはどうすりゃいいんですか？」

「知らん！ ケツでも差し出せ！ 以上で解散する！」

いかん、これではまるで傭兵そのものだ。混ぜ返されて、ついむきになった。

馬鹿共は俺の反応に満足いったようだ。笑い合いながら、兵舎に引き上げて行く。

……こりゃ、またアキラに絞られるな。

「やれやれ……」

と顔を拭う俺に厳しい視線を送るやつらがいる。

第七連隊の中核を成す大隊指揮官三名だ。

「ベッカー、相変わらず下品だな」

階級はいずれも俺と同じ少佐だが、家柄が違う。三名とも貴族の家柄で、士官学校を卒業している。粗野で田舎者の俺とは格が違う連中だ。

「少佐になったそうだな？」

「はい……」

この三人のような中流階級の貴族たちは、平民に対して容赦がな

い。逆に門閥貴族と呼ばれる上流貴族の連中は、平民に対しては温厚で寛容だ。相手にしないと云うが。

この三人は、第七連隊が旅団クラスへの昇格に伴う際の昇級に縁がなかった。この絡みもやつかみの類いだが、平民の俺には受け答え一つで無礼討ちの対象にもなりかねない。

左から順に、アーベル、エドガー、オスカーだ。

「貴様のような下郎に階級が並ばれたかと思えば、ぞっとする」

リーダー格のエドガーが進み出て、俺のトーガで手を拭う。

「猫の腰巾着の分際で、少佐とは……」

「団長は関係ない」

しまった！ つい口を衝いたその失言に唇を噛む。

「ほう…ベッカー、また睨られたいようだな……？」

「く…」

またか。この前はアキラ。今日はこの三人か……。

これは……エルに怒られそうだな。

第6話 猫がやむとき

人気を避けた兵舎の裏手で、俺は結構な躰を受けた。

「いてて……」

奥歯が少しぐらつく。エドガーム、相変わらず容赦のない。俺がアキラのお気に入りでなかったら、とうに殺されていただろう。

……この述懐もおかしな話だ。よくよく考えれば、俺はアキラのお気に入りだからこそ、殴られたとも考えられる。しかも、そのアキラを庇うような言動が原因で。

くそつ、マントが煤塗れになってしまった。

俺の荷物は、エルに命じて既に新兵舎に運んである。平民だろうが、傭兵上がりだろうが、俺は副長だ。何より先ず、皆に手本を示さねばならない。

「副長、副長！」

第七連隊 第12旅団の騎士の一人に呼び止められる。

「なんだ？」

「キサラギ団長が探してましたよ……って、また喧嘩ですか？」

一方的に殴られることを喧嘩というのなら、そうだろう。頷いておく。

「副長も、もう少佐なんですから、謹んでくださいよ」「

「わかってるよ」

「副長は、おれたち平民の誇りです。これからも頑張ってください」

その言葉に、俺は頂垂れがちだった顔を上げる。

若い騎士だ。まだ、二十にもならんだろう。

「ああ、頑張る。お前も頑張れよ。キサラギ団長は、厳しいが信賞必罰を以て成るお方だ。努力は必ず報われる」

「はい！ それでは失礼します！」

誇り……か。間違っても退役を考えているとは言えんな。

走り去る若い騎士の背中を見送り、俺は小さく息を吐く。

アキラ・キサラギ……今は会いたくない……貴族は、すぐ俺を殴る。

いかんいかん。落ち込む暇など無い。

兵舎に向けて歩きだす。照り付ける夕陽が、少し目に滲みた。

道すがら、馬鹿共に声を掛けられる。

「よお、レオ……って、おまえ、どうしたその怪我。猫の大将は、顔は殴らんだろう」

「転んだだけだ。少々、間抜けな転び方をしてな」

につ、と笑いかけるが、馬鹿共は笑わなかった。

傭兵上がりが士官として、やって行くことの辛さや難しさは、同じ傭兵上がりには分からない。そして貴族の士官連中と、傭兵上がりの俺との折り合いのまずさは、第七連隊の皆知るところだ。

「大隊長の仕業か……！」

「言つな。俺の問題だ」

傭兵の横の繋がりは強い。とくに元第七連隊の傭兵上がりの連中は、ほとんどが俺と剣を並べて戦ったことのあるやつばかりだ。死線を共に抜け、苦勞を分かち合った絆は強い。普段、馬鹿共と連中を罵る俺だが、こんなときは、胸が熱くなってしまう。

馬鹿共は何も言わない。ただ、俺の肩を叩く。『俺の問題』と言いつ切った俺の意志を尊重してくれる。

「……………」

空を見る。こんなことだから、いつまでたっても『神父の息子』と馬鹿にされる。

「……………」

ただ空を見る。馬鹿共 仲間たちの視線が痛い。

「レオ！ レオ！ ここにいたのか！ ボクが呼んだら」

この声はアキラだ。それでも俺は空を見る。やけに滲む夕陽だ。

「……………なんだ、レオ。やけにしけた顔をしているな……………」

アキラの声が低くなった。

「…何があつた？」

「いえ、なにも。それよりどうかしました？」

なるべく平然として答える。そんな俺の視線を躲すように、アキラは、ついつと周囲に視線を走らせる。

「…！」

仲間たちは、ぎょっとして目を逸らすと、慌ててその場を立ち去って行った。俺からは、うつむき加減のアキラの表情を伺うことはできない。どんな顔をしているのだろう。

「レオ…」

アキラは呟いて、顎をしゃくる。ついて来いの合図だ。そのまま、振り返る事なく、早足で歩いて行く。

執務室の方向だ。すれ違う騎士たちは、アキラを見て固まるか逃げ出すかのどちらかだ。

荷物が運び出され、机一つになった執務室でアキラと向かいあった。

「う…」

思わず呻く。アキラは全身に怒りを漲らせ、悪鬼のような形相だった。

「だれだ……」

「はい？」

間抜けな返事だ。アキラの様子は…やばい…いつもの比じゃない…。

「だれが、おまえを、殴った……」

途切れ途切れ呟くアキラは、全身から湧き上がる怒りの炎を必死で押さえ付けているかのようだ。両肩が小刻みに震えている。

冷たい汗が背筋に伝う。

「いえ、これは……その、少し転んでしまっ……」

何が起こってる？ 何故、アキラはここまで激怒する？

「レオ、答えろ、ボクは、そろそろ、限界だ……！」

アキラが顔を上げる。髪を逆立て、剥き出した歯には四本の牙が見て取れる。……エルにも同じ牙があった。あの逸話は事実だったか……。

アキラが一步踏み出した。俺は思わず身を堅くする。

「うっうっうっう！ うあああああ！」

突然、アキラが叫び出した。刀を抜くや否や、樫の木の堅い机を一刀両断に叩き切る。

「なんなんだなんだなんだなんだなんだなんだなんだなんだ、おまえは！」

もう三年もアキラに仕えたが、こんなに取り乱した様子は見たことがない。この様子を一言で現すとしたら、それは 狂気。

「どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてボクを恐れる！ どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてボクを拒絶するんだ！」

全身から冷たい汗が吹き出す。吹きかけられた狂気に身が竦む。

「答える！ レオンハルト・ベツカー！」

答える？ 何を？ 駄目だ。目が回る。どうしていいか分からない。

「なぜ答えない！」

アキラが全身で狂気の叫びを上げれば上げるほど、どうしたらいいかわからなくなる。

だが、一つだけ分かる。アキラ・キサラギが俺に向ける感情は、
狂気。

そこで、アキラは、はっとしたように手を打った。

「そうか！ ボクがおまえを殴るからだな？」

アキラは笑む。その移り変わりの早さに恐怖を覚える。

「そうなんだろう？ ボクがおまえを殴るから、そうなんだろう？」

「は、はい……」

頷くしかない。俺はいつだってそうして来たんだから。

「そうかそうか。わかった。ボクはもう、おまえを殴らない。誓う。

これでいいか？」

「は、はははい」

駄目だ…びびっちゃまって……。声が、震える。

打って変わって、アキラは喜色満面の笑顔だ。答えを見つけて、
すっきりしたと言わんばかりだ。

「どうした？ まだ動きが固いぞ？ ははあ、信じられないんだな？ わかった！ ボクの指をやるう！」

言っ、アキラはナイフを抜き出すと、左の親指に宛てがう。

「…違うな。約束といえば、小指だよな！」

喜々と言うアキラ。鼻歌混じりに、ナイフを両手で弄ぶ。

「うわあ！ や、止めてください！ わかりました！ わかりましたから！」

俺はもう、泣きそう。アキラが怖すぎる。アキラが壊れてしまった。どうしたら直るんだろう。とりあえず

抱き着くようにして、アキラからナイフを取り上げた。

「……………」

どつと、汗が吹き出す。マントまで汗で、びっしょりだ。

「んん…」

小さなアキラが、すっぽりと俺の胸に収まっている。そんなこととは関係なく、心臓の鼓動が煩い。とりあえず、アキラから刃物を取り上げたことで、ほっとしてしまったのだ。だが、身体はこの異常な緊張を処理できずにいる。どつ、どつ、と鼓動を鳴らす。

もたれ掛かるアキラの背に手を回しながら、細く長い息を吐き出す。

幾度か深呼吸を繰り返す間、アキラはなぜか大人しくしていられた。

「アキラ、自分を傷つけてはいけません」
「……………」

よし、落ち着いてきた。声も震えない。

「それだけはしないと約束してください」
「……………」

アキラは胸の中、ためらいがちにはあつたものの、頷いた。

よかった…………アキラも落ち着いてくれたんだろうか。

そうだよ。アキラが壊れるなんてない。あれは、ちょっと興奮しただけだ。

「でも、約束には血が必要だよね」

嬉しそうにほほ笑むアキラは…………壊れたままだった。

第7話 それでも夜は終わらない

辺りが暗くなり、星が瞬くようになったころ、アキラを新しい邸宅まで送り届けた。

その間、アキラはずっと俺と手を繋いだままだった。

「ねえ、キミはどこで血を手に入れたらいいと思う？」

上機嫌で言うアキラは、猫なで声だ。俺に対する呼びかけも、いつものように乱暴なものではない。そして、かなり危うい発言を繰り返す。血に非常な拘りがあるようで、邸宅に着くまでの間、頻りにそのことを繰り返した。

「アキラ、血はいりませんから……!!」

どうしよう。どうやったら、アキラは直るんだろう。膝を折り、子供にするように目を合わせて言うが、効果の程は甚だ疑問だ。頭を撫でたり、背中を摩ったりして様子を見る。風紀部に見られれば、肅正の対象になり兼ねんが、知ったことではない。

「ああ、アキラ、アキラ……どうしたら……」

駄目だ。機嫌がよくなるだけで、危うい瞳の色に変化はない。とつともなく不吉な予感がする。このまま、放置すれば、アキラはとんでもないことをやらかしそうだ。

邸宅が見えて来て、アキラは不意に、手を放した。

「ここまでいいよ」

門の前にいる衛兵の目を避けたのだろう。その辺りは冷静なよう
だ。

「ボク、変わるから。だからキミも、もっとボクを大事にしてほし
い」

照れ臭そうに言い残し、一目散に走りだす。

変わらんでいい。全身でそう叫びたい。お願いだから、元のアキ
ラ・キサラギに戻ってくれ。神に祈ってもかまわない。

その後、どこをどう歩いたかわからない。

気づくと、兵舎の前にいた。割り振られた俺の部屋の前で、エル
が明かりも持たずに立ち尽くしている。

「ああ…エル、ただいま。少し、心配させてしまったかな」

疲労しきつた体に鞭打って、なんとかそれだけ吐き出す。

「いえ、そんなことは…」

エルはいつものように無表情だ。それに安心する俺は、余程疲れ
たのだろう。

「ひどい顔色です」

猫の獣人は夜目が利く。星明かりだけで、俺の疲労を看取ったよ
うだ。

「ああ、今日は色々、大変だったんだ。だからもう」

「お風呂にしましょう」

もう寝る、と言おうとした俺を遮り、エルは、言った。

「変な匂いがします」

エルは鼻をすんすんと鳴らした。犬ほどでないが、猫の獣人もそれなりに鼻が利く。

「そうか…そうかもしれないな。今日は、汗をかいたから……」

旅団の副長として、身なりにも気を配らなければならない。我ながら、難儀なことだ。

アスペルマイヤーにバツクハウスか……。

アキラはあんなだから、話にならんだろう。やれるだけのことはやっておかないと。

両大佐と面識を深めなければ……

エルがぼそつと呟いた。

「アキラ・キサラギの匂い……」

はて、二人に面識があつたかな。疲労で惚ける頭で、そんなことを考えた。

副長である俺に振られた部屋は、余り広くはない。昇進して稼ぎも増えたのだから、小さい屋敷の一軒でも借りていいのだが、それ

はエルに反対された。

猫の獣人は無駄に広い空間を嫌う性質がある。貧乏暮らしのときは、その性質に助けられたが、いざ貧乏から脱却してみるとそれはそれで困ったものだ。

エルもそろそろ年頃だ。俺のような独身の騎士と二人暮らしでは、どのような噂が立つかわかったものではない。

疲労にはいいだろう。ということで、エルの入れたぬるい風呂の中で、色々考える。

金は余ってる……そうだ、エルを学校にやったらどうだろう。彼女は、頭も悪くない。読み書き計算不自由ない。同年代の友人を作る機会を与えてやりたい。

これはなかなか、名案だ。

学校の寮にでも入れてしまえば悪い噂が立つこともなかるうし、将来、エルがどのように成長するかという楽しみもできる。

パタパタと廊下を走る音が聞こえる。

「レオさま、キサラギ准将が来られております……」

浴室の扉越しに、エルが小さく呟く。

アキラが？　どきん、と心臓が跳ねる。嫌な予感しかしない。

バスローブ一枚の格好で、あわてて居間に駆けつける。狭い部屋なので、すぐだ。

「やあ、レオ」

燭台のオレンジ色の明かりの中で、アキラがソファに深く腰掛けて、何故か誇らしそうに手を上げる。昼間ならコバルトブルーに光る瞳が、今は暗く淀んで見えた。

「団長、今、帰ったばかり」

そこまで言って、俺は絶句した。

アキラの纏う騎士の衣装。白いマントにもトーガにも、所々、赤い斑点がある。

返り血だ。

ざあーっ、と血の気が引く音が聞こえた。世界が足元から崩れて行くような気がした。

「どうぞ」

と、エルが呑気に茶など振る舞っている。

「だ、んちょう、何して来たん、ですか……？」

口からはカタコトの言葉があふれ出す。

「それだよ」

アキラは微笑んで、パチリと指を鳴らす。よく見ると、その頬にも返り血が浮かんでいる。

「キミにお土産を持って来たんだ。外の馬車に入ってるよ」
「み、やげ？」

呼吸が荒れる。今度は、何が起こったのだろう。
ふらつく腰をエルに支えられ、表に飛び出す。
馬車の中から、今にも消え入りそうな呻き声が聞こえる。
幌を捲ると、そこには……。

第8話 奥の手

オスカーとアーベルが、ガタガタと歯を鳴らしながら、膝を抱えている。

よかった。生きてる。

オスカーとアーベルは、一瞬視線をさ迷わせ、それから俺を見つめた、

「べ、ベツカーか……？」

「ああ」

二人に、いつものような居丈高な様子はない。おびえきっている。「た、頼む！ エドガーを助けてくれ！ きつと、おまえは俺たちのことなんて、嫌いだろうけど、それでもどうか……！」

オスカーが馬車の荷台の中で両手を付く。

「頼む、ベツカー。このとおりだ。おまえ、『治癒魔法』が使えるんだろ？ 頼むよ……エドガーを、命だけは……」

確かに俺は治癒魔法が使える。

だが、それは傭兵仲間でもごく一部しか知らないことで、なるべくなら使用を控えている能力だ。喋ったのはだれだ？ 僅かな苛立ちが込み上げる。

「……」

視線を落とす。

自らが作ったであろう血溜まりに、後ろ手に縛られたエドガーが転がっていた。

視界がクリアになり、鼓動が落ち着きを取り戻す。

俺は戦争屋だ。騎士なんぞのたまっているが、所詮人殺しだ。

これより酷い光景は山ほど見た。血を見て落ち着くとは、我ながら呪われた性分だ。

「…おい、エドガー」

「……」

返事はない。浅く早い呼吸。多量の出血。意識の喪失。

エミリア騎士団の創立者『エミリア』は修道女である。エミリア騎士団の主な活動が医療活動であったことからしても、このニードーサクソンでは『治癒魔法』自体は特に珍しいものではない。

『治癒魔法』は神官の秘術である。『騎士』である俺がその秘術を使うことは、誰にも知られたくない。『奥の手』は誰にも知られたくない。

「……」

もう一度エドガーに視線を戻す。

首を一突きだ。アキラらしい無駄のないやり口だ。致命傷だが、傷自体は大きくない。『治癒』は可能だ。

「わかった。エドガーを助けよう」

「ほ、本当か？」

ほつと胸を撫で下ろすオスカーとアーベル。

……現在のエドガーは、死んでいないだけだ。傷を治したとしても、その状態は変わらない。出血が多すぎる。今は感謝するオスカーとアーベルだが、二、三日もすれば呪詛の言葉を口にするだろう。神官の秘術であるこの『治癒魔法』であるが、この能力は、決して『奇跡』などではない。失った血液は戻せないし、死者の蘇生は不可能だ。

無駄と知りつつ、それでも治癒を行うのは、戦場以外では、アキラに殺しをさせたくないというただ一点に過ぎない。

「エル……？」

背後にいたはずのエルがない。アキラもだ。

アキラを遠ざけたのはエルだろうか。それなら好都合だ。俺が『治癒魔法』を使えることは、アキラには絶対に知られたくない。

最後に、

「オスカー、アーベル、ここで見たことは他言無用だ」

二人が頷くのを確認し、袖を捲る。

『治癒』の守護者『アスクラピア』の象徴である蛇の紋様がとぐろを巻くようにして両腕に浮かび上がる。エドガーに触れる。

そして 俺の意識があつたのはここまでだ。

俺は、あまり強くない。剣の腕前でいえば、第七連隊の中では、中の上というところか。それもおまけしてのことだ。へたすりゃ、中の中、並もいいところかも知れない。その俺が門閥貴族であるアスペルマイヤーの知己を得たのも、傭兵上がりの連中から信頼されているのも、治癒魔法という『奥の手』があつたからに過ぎない。燭台の薄暗い明かりの中で、エルとアキラが談笑しているのが見える。足元には青ざめた表情のエドガーが転がっていて、その奥に拘束されたアーベルとオスカーの姿がある。

世界が回る。視界は薄い粘膜に覆われたかのように霞んでいて

これはマジックドランカー（魔法酔い）の症状だ。

『奥の手』を使うのは一年ぶりだ。こんなに鈍ってしまったのか。そう思わずにいられない。

意識に、また、夜の帳が落ちる

粘つく水の中から、身体を起こすように、ゆっくりと覚醒していく。マジックドラランカーから回復する際に訪れる症状の一つだ。治癒魔法は便利だが、それなりに代償も大きい。

意識が微睡みながら回復する。

早朝の青い光りに霞む世界の中、エルが、うっとりとした表情で紫の紋が浮いたナイフの刀身を見つめている。

「……………エル、それは……………？」

エルは息を吐き、ナイフの刀身をゆっくりと鞘に収めた。

「アキラさまに頂きました。キクイチモンジという刀の刃から造った『短刀』というものらしいです」

「キクイチモンジ……………」

「はい。なんでも、愛に狂った女の情念が染み付いているとか……………」
笑い飛ばそうとしたが、真剣に言うエルの様子に、思わず息を飲む。

「アキラ 団長とは顔見知りか？」

エルは否定の方向に首を振った。

「いえ、昨夜が初対面でしたが……………あのようなお方なら、もっと早めにお会いしたかったです」

エルが自分の要望や願望を口にするのはとても珍しいことだ。

……………なんだろう。この粘つくような不安は。

アキラとエル。とてもよくない組み合わせのような気がする。

「エドガーたちは？」

「軍規に照らして処罰されるようで、昨夜のうちに連行されて行き
ました」

「処罰？」

訳が分からない。凶行に及んだのはアキラで、奴らではないはずだ。

「上官に対する不敬と、副長の少佐に対する暴行で、罷免させるのに十分な罪状だそうです」

「……………」

確かにそれは事実だが、なんだか詭弁のようにも聞こえる。

……大隊長三人を更迭するのはいい。だが、代わりに誰を据えるつもりだ？

行かなければ。俺は副長だ。アキラを支える義務がある。

「お待ちを」

身を起こそうとした俺を、エルが押し止める。

「出仕は午後からで構わないとアキラさまはおっしゃっておいででした。なんでしたら、休んでも構わないとも……」

「しかし……！」

「お役目に励まれるのは、結構でございますが……そのように強く『アスクラピア』の加護の影響をお受けになられては……」

エルは、ほんのりと頬を上気させ、なぜか機嫌が良さそうだ。細かい指先を宙に漂わせ、俺の腕を指す。

「……」

両腕には、未だはつきりとアスクラピアの蛇が浮かび上がっている。身体が魔法酔いの影響から抜け切っていない証拠だ。

エルが、そっと俺の胸を押し、もう一度ベッドに押しやる。

「……まだ、アスクラピアの御力を失っていないかったですね？」

「……」

知るか。親父が出来る。俺が出来て何の不思議がある。それとエルの上機嫌は関係があるのだろうか。今朝のエルは、とにかく饒舌だ。普段はこの半分も口をきかない。

短く息を吐く。慌てても仕様が無い。

「アキラさまは、そのことを非常に評価されておいででした」

「……！」

ばれたのか！ エルが話した？ いや、事態の予測は容易か。これは参った。隠していたことを何と非難されるか分かったものでは

待て、評価している？ 非難の間違いでなく？

わからん。俺が秘密を持っていたことをアキラが喜ぶとは思えない。

第9話 勘違い（前書き）

アキラ視点です。

第9話 勘違い

赤い煉瓦拵えの新兵舎の執務室で、アキラ・キサラギはこれ以上ないくらい上機嫌だった。

「よし、その棚はそこに置け。そつとだぞ」

にやにやと緩む頬を隠すこともせず、運び込まれる備品の置き場所を指示していく。

「大将、ご機嫌ですね？」

副長の不在に代わり、この引越し作業の指揮を執る壮年の騎士が問いかける。

「ああ、ボクは気分がいい」

アキラは否定せず、手に持ったタクトで拍車の付いたブーツをぴしゃりと叩く。

副長をいじめ抜くことに定評のある、あのアキラ・キサラギが、その副長の不在にも拘わらずこの上機嫌。こりやまた不思議なこともあったもんだ、と壮年の騎士は眉を吊り上げる。

「副長は、そんなに具合が悪いんですかい？」

「ああ、とてもね。休むよう命じてある。……だからと言って、手を抜くなよ？ 奴が居なくても平気だつてところを見せてやれ」

「へい」

と答える彼も傭兵上がりの出身だ。気取らない彼らの性分は、アキラにはとても好ましいものに感じられる。

「なあ、レオ 副長は、神父の息子だよな？」

「へえ、そうですが」

「だとすると、アスクラピアの洗礼を受ける機会は十分にあったわけだ」

「まあそうですね」

「アスクラピアの力を使う神官の必須条件は、処女童貞だよな？」

これまた下世話なことを言う。壮年の騎士は眉根を寄せる。

「それがなにか？」

「だったらさ、副長は……なのか？」

「ああ……」

そりゃ、ネタだ。騎士は苦笑いを浮かべる。

飲む打つ買うは男の業。傭兵たちにとっては宿命のようなものだ。レオンハルト・ベッカーもまたしかり。色街で遊びほうける姿は何度も見かけたことがある。色を好むのは、男ならやむを得ぬこと。

傭兵上がりたちが、副長を『神父の息子』とおちよくるのは、そういう意味だ。罰当たりめ、と呼んで遊んでいるのだ。ちよっと泣き虫で、根は真面目な彼をからかっているに過ぎない。

処女童貞であることと、アスクラピアの力の行使は、なんの関係もない。そもそも、レオンハルト・ベツカーは神官ですらない。

壮年の騎士はそれを説明しようかどうか、少し悩み……結局は止めておいた。あの若い副長をからかうネタが一つ増えただけのこと
に過ぎなかったからだ。

第10話 嵐の前

大隊長三名の罷免、更迭。この事態をどう処理するか。第12旅
団結成式典まで、あと三日もない。

新しい兵舎の執務室は、連隊クラスの時より間取りが広く気分が
いいが、このトラブルの対処を間違えれば、その上気分も長続きし
ないだろう。

「部隊への発表はどうしますか？」

「取り繕ってもしょうがない。事実を公表しろ」

アキラは新しい椅子が気に入ったようだ。頻りにひじ受けをなで
回している。以前のものは、材質が気に入らないとこねていたのを
思い出す。

「で、後任はいかがなさいますか？」

「……」

アキラは煙るような表情でこちらを見る。どうせ他人行儀な言葉
遣いが気に入らないとか言い出すのだろう。

溜め息を吐く。最近の俺は溜め息ばかり吐いている。

「……アキラ、あなたのためです」

「わかってるよ」

おお、聞き分けがいい。どうしたことだ？ 目を置いて直ったの
だろうか。

「おまえにも案があるだろう。聞かせてくれないか？」

言葉遣いが直っている。キミとか優しく言われたら、どうしよう
かと思った。

……直ったんだ。つーんと鼻の奥が熱くなる。よかった。本当に、
よかった。

「ばつ、バカ！ 今は執務の最中だぞ！」

涙ぐむ俺にアキラの叱咤が飛ぶ。普段なら身を小さくするそれすらも暖かく聞こえる。

「……すみません。アキラ、あなたが……」

「ぼ、ボクは、変わるって言ったからな……いい子になりたいんだ」

直ってないのかもしれない。

どちらとも決め兼ねてしまう。だが、瞳の色の危うさはかなり薄まった気がする。それがどうしてかは分からないが。

話を濁してしまった。一つ咳払いして、続ける。

「後任の案ですが、二つあります。一つは人事部に計らって、佐官クラスの人材を用意してもらおう」

この時点で、アキラは首を振った。

「却下だ。もう一つにしろ」

「しかし……」

と俺は再考を求める。

アキラ・キサラギは優秀な軍人だ。優秀過ぎるくらいがある軍人だ。己の立場に疎いところがある。

自己の直属部隊『第七連隊』。指揮官に貴族の子弟を含まない。

ということの意味を、アキラは知っているのだろうか。

「わかってるんだろ？ ボクの気に入る案を」

アキラの言葉に険が混ざる。

考え過ぎだろうか……そんな気がしてくる。

「……はっ、それでは大隊の副官クラスに代理という形で、後任を任せましょう」

代理の字は、次の出征が終わり次第、取ってやればよい。副官クラスの三名は下士官だが、目の前にぶら下がった出世のチャンスに

発奮するだろう。そのやる気を生かすのはアキラの仕事だ。

この展開は既に予想してあった。関係書類に、アキラのサイン一つで事が進むよう、既に根回ししている。

「それではこれにサインを」

「ん」

ここまでは予定調和だ。アキラの方でも、手際の良さに驚くことはない。

阿吽の呼吸とでもいうのだろうか。俺を仕込んだのはアキラだが、叩けば響くこの関係は居心地がいい。

アキラも同じ気分なようで、僅かに笑む。

「一二〇〇に執務室に來い。今日は、一緒に食事をとりたい」

ひとふたまるまる…軍の時間呼称だ。食事の誘いであるが実に色気がない。だが、それが返って落ち着く。俺もアキラも、ただの戦争屋なのだ。それを認識する。

「なあ、レオ……」

書類を手に関係各所に行こうとした俺を、アキラが呼び止める。

「おまえ、アスクラピアの加護を受けていたんだな……」

ここで来るか。予想していたが、若干表情が歪むのが自分でもわかる。

「あつ、いや、隠していたのを怒ってるわけじゃないんだ」

「……?」

「その…恥ずかしいと思う気持ちは、理解できる……」

見る見るうちに、アキラの頬に血の気が上る。

「ボクも……だ」

またわからんことを……。

「じろじろ見るな！ 行けっ！」

突然、怒鳴られた俺は、這う這うの体で執務室から逃げ出した。

大隊長二名の更迭処分が公表された。

この一件が旅団内部にどのような波紋をもたらすか。取り敢えず、結成の式典を前日に控えた今、元第七連隊に限っていえば、動揺は少ない。

元々、評判のよくなかった連中だ。致し方ない出来事なのかもしれない。

大隊長の地位を引き継いだ副官たちも、困惑しながらも、運よく巡ってきたこのチャンスにやる気を見せている。

だが、アスペルマイヤー、バックハウスの両連隊については、大きな動揺があったようだ。

当然だ。結成目前に、自ら部隊の弱体を招くこの人事。動揺のない第七連隊の方がどうかしているのだ。

アキラの掌握能力がそれだけ優れているということの証明なのだが、それがアスペルマイヤー、バックハウスの両連隊に反映するまでは、今しばらくの時間がかかりそうだ。

結局、第七連隊には隊長は置かず、アキラの希望通り直属の部隊として、彼女自らが指揮を執ることとなった。新しい大隊長三名の上に、直接団長のアキラがいるということになる。

さて、この『旅団』であるが、エミリア騎士団ではこれを『戦略上』の一単位としている。『戦術上』の一単位である『連隊』との違いは、戦闘での勝利を至上の目的とする『連隊』に対し、『旅団』の目的は『統治』を至上とする点である。

第12旅団の結成は、新たな戦乱の予感を孕んでいる。

これに関するアキラの推測はこうだ。

「またアルフリードとの間に、大きな戦が起こるな。これまでになり規模のものになるだろう。軍上層も腹を括ったということかな」

叩き上げの将官『アキラ・キサラギ』と傭兵上がりを多く含む超
実戦部隊『第七連隊』そして、万夫不当の『アスペルマイヤー』。
性悪女こと知恵者『バツクハウス』。この組み合わせに何も思わな
い者はいない。

さらには『旅団』の目的と性質。これまでは一戦場の事だけを考
えるだけでよかったが、これから先はそういうわけにもいかない。
アキラと俺は、『戦略上』の『統治』について議論を深めねばな
らなかつた。

その話し合いで緊張感溢れる執務室に一人の来客があつた。
ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだ。

第11話 万夫不当

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、門閥貴族にして、
純粋な狼の獣人だ。

狼の獣人は体格と運動能力に優れており、その戦闘能力は他の種族とは一線を画する。狼の獣人のプライドはその類い希なる戦闘能力に裏打ちされたものであり、基本、彼らは優生主義だ。

優生主義……ぶっちゃけて言ってしまうえば、強かったら何やっただけ許される。弱い奴は生きる資格がない。弱い奴は、強い奴の食い物にされるために生きている。そういった主義思想のことだ。

ただ、純粋にそうか、といえばそれは違う。狼の獣人は非常に義理堅い。一度受けた恩は、死んでも忘れない。その反面、とても粘着質で一度憎しみを抱くと、これも死んでも忘れない。

こんな言葉がある。

狼の決意は、鉄より固い。

俺がジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーに出会ったのは五年前のことだ。

当時のアスペルマイヤー少佐が率いる一個大隊は、国境にてアルフリード騎士団の一個連隊と不意の遭遇戦に陥った。

狼の獣人は、粘り強く辛抱強いが、その反面、決断に欠けるところがある。アスペルマイヤーも多分に漏れず、戦術的撤退 所謂『逃走』の指示を出しそびれた。

万夫不当の強さを誇るアスペルマイヤーであるが、大隊と連隊では数に差があり過ぎる。それでも戦線を維持し続けたのは、彼女の勇によるところが大きいだろう。だがそれが、戦況の泥沼化を招い

たのは否定できない事実だ。

アルフリード側からすれば、一個連隊二〇〇〇を用い、何故、一個大隊六〇〇を制圧できないのか、という苛立ちがあり、一方、アスペルマイヤーは無敵の戦闘能力に裏打ちされたプライドが、戦況に於ける不利を感じながら、なおも撤退を許さぬというジレンマ的状况を構築しつつあった。

結局、戦況を決定づけたのは、一本の矢だ。

ふらり、と飛来したそれは、すんとアスペルマイヤーの胸当ての下に命中した。

肺をやられたアスペルマイヤーは、見る見るうちに消耗し、ついには立ち上がることもできなくなった。

アスペルマイヤー一人で維持し続けた戦況は、瞬く間に総崩れの様相を呈し、重傷を負った彼女を擁したまま、大隊は見るも無残な撤退戦を余儀なくされた。

少数に手こずらされたアルフリード側の追撃は凄まじく、大隊からは戦死、逃亡者が続出し、俺もいよいよ進退窮まった。

ここで俺は一つの決断をした。

最後まで、アスペルマイヤーに従軍することを決意したのだ。

彼女は狼の獣人だ。この苦境に最後まで付き従った者を、彼女は絶対無下にせまい。その思惑があった。

たとえ、アスペルマイヤーがこの地に斃れようとも、その一族が恩を返す。死んでも忘れぬというのはそういうことだ。他の者が返す。

うだつの上からぬ傭兵稼業にも飽きて来たころだった。たった一つの己の命。乗るか反るか、ここで張るのも悪くなかった。

そして運命の日がやって来る。

その晩、アスペルマイヤーの本陣は悲惨で、ついに副官までも逃げ出した。率いた大隊六〇〇の内、半数が戦死し、残りは相次いだ逃走のため、ついに五〇騎を切っていた。副官の逃亡も止むなし。

むしろ頑張った方だろう。

だが、アスペルマイヤーの武運は尽きていなかった。残騎を率い、逃亡した副官が見捨てた一人の傭兵　俺だ。

朝、目を覚ますと本陣で苦痛と無念に唸るアスペルマイヤーと俺を残し、部隊は消えていた。

『肺』の治療は難しい。矢傷を塞いでも、溜まった血はどうにもならない。一度萎んでしまった肺は『治癒魔法』だけでは治らない。俺が『奥の手』の使用を渋った理由がそれだ。張り切って進み出て、治りませんでした、では済まないのだ。

一度傷を塞ぎ、溜まった血を出すためもう一度傷を付け、血を吸い出すという地獄のような処置を行った。出血量は凄まじく、見立てでは、アスペルマイヤーが命を取り留める可能性は三割もないだろうと思っただ。

しかし、俺にはもう、アスペルマイヤー以外に賭けるものはない。彼女の狼の血に賭けるよりない。

そして、万全の呼吸を取り戻したアスペルマイヤーは、見事に俺の期待に応えた。というより、応え過ぎた。

迫り来る追っ手を、悪鬼羅刹もかくやという活躍で、引き裂き食い破り、捻り潰した。

アスペルマイヤーの怒りは凄まじく、追っ手を叩き潰した後も止むことはなかった。帰国後、己を見捨てて逃げた副官を素手で引き千切った光景は、一生忘れないだろう。

その反面、最後まで付き従った俺は、とんでもなく厚遇された。傭兵でありながら、騎士分として扱われ、そんな俺をアスペルマイヤーは『レオ』と呼び、俺もまた、彼女を『ジーク』と呼ぶことを許された。

そこから二年間はよかった。

ジークの隣りにいる限り、俺は命の心配をする必要がなかった。傭兵の俺には、それだけで充分幸せだった。イザベラ・フォン・バツクハウスと知己を得たのもこのころだ。イザベラは、俺のことを

『ジーク専用救急箱』と呼び、それを怒ったジークが否定するとい
うことがあった。

命を張った甲斐はあった。狼の獣人に恩を売り、エルフとの間に
知己を得た。しかも、二人ともが門閥貴族のお偉いさんだ。一介の
傭兵には、過ぎた財産だった。

そしてジークからの推薦を受け、ついに騎士になることになった
俺だが、その叙勲式でアキラ・キサラギに出会ってしまう。

この時、アキラ・キサラギは中佐。ジークリンデ・フォン・アス
ペルマイヤーは一度部隊を壊滅させた科で未だ少佐だった。

ジークは優生主義だ。絶対の強者をこそ上に戴く種族主義からか、
軍の人事には口出ししなかった。

そのジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーが、第12旅団の
新兵舎で執務に励むアキラ・キサラギの元に、たずねてき
た。

第12話 修羅場

先ず、変化を見せたのはアキラだ。

コバルトブルーの瞳が暗く淀み、活発な意見を出して、俺と意見交換していたのが、突然、無口になった。

後で思ったことだが、猫の獣人は危険察知に優れている。その血を引くアキラの敏感なセンサーが、アスペルマイヤーの持つ何かに反応していたのだろう。

執務室のドアを叩く音が無機質に響き、アキラが許可を出すと同時に、それは現れた。

「やあ、団長。おや……レオもいるね」

ゆったりとした口調に、ハスキーな声。

狼の獣人は体格に恵まれている。アスペルマイヤーは、俺より頭一つ分はでかい。豊かな胸に、ほっそりとした、だがムチのようにしなやかな腕。八頭身の均整のとれた躰軀。銀色の髪は裾の当たりで一つに纏めてあった。ぴん、と立った狼の二つの耳になんだか愛嬌がある。

「アスペルマイヤー……!!」

敵意を剥き出しにして、低く唸るようにアキラが呟く。既に、髪が巻き上がり、悪魔のような形相だ。嫌っていたのは知ってるが、この様子は尋常ではない。

「団長の方から、挨拶に来ると思ったけどね。まあ、ばたばたしてるみたいだったし、私の方から来てあげたよ」

なんとというアスペルマイヤーの傲慢。

上官であるアキラに向かって、来てやった、とは。

「ボクは呼んでない……消えろ！」

アスペルマイヤーは眠そうな視線を向ける。

なんなんだ。この二人は、最初から喧嘩腰だ。しかし、謎なのは、アスペルマイヤーの態度だ。彼女が上官に敵意を剥き出しにするようなことは、これまでなかった。

「そういうわけにもいかないよ。レオから、よろしく頼まれているからね。私は、レオのためにここに来たんだ」

「……！」

ぎろりとアキラが睨み付けてくる。

その顔に書いてある。おまえ、一遍、死にたいか？ と。

勿論、俺は死にたくない。もう少し稼ぎたいし、エルも学校にやらなきゃならん。

「アスペルマイヤー大佐！ 団長に失礼です！」

「……ジーク」

呟いて、アスペルマイヤーはふわりと笑う。

こんなときだが、ドキッと一つ心臓が跳ねる。

戦場の女神。そんな言葉が脳裏にちらつく。

「……ジークだ。ほら、言ってみて……私は何も、変わらない。レオも変わってない。だから……」

のんびりとした口調と共にするりと伸びた指先が、俺の唇に触れる。

「アスペルマイヤー！ きさまあああ！」
ついにアキラが激発した。

机を蹴って跳ね上がる。同時に、チンツという鞘走りの音が耳を衝く。

やばい！

アキラの得意技の『居合』だ。こればかりは、まずすぎる。神速で繰り出される抜き打ちの斬撃は、いくらなんでも

「ジーク！」

叫びにも似た悲鳴。一瞬、アキラが固まる。微弱な遅れ。それがもたらした結果は劇的で

はらり、とジークの銀髪が数本宙に舞う。

「びっくりした……」

ジークは、ほうと息を吐く。

躲した？ あれを？ アキラの『居合』を？ いや、アキラが外したのか？

とにかく ジークは無事だ。

「イザベラの言うとおり、おまえはやっぱり狂っているね……」

厳しい表情でジークが吐き捨てる。

対するアキラは、刀を構えた姿勢でふらりと動いた。これがまた、何とも言えず嫌な動きだ。音も気配も何もない。特殊な歩法であることは疑いない。

「アキラッ！ やめてください！」

一喝する。こんなことがどこまで意味を持つかは分からないが、やらないよりはましだろう。

対するジークは、油断なく距離を取りながら言う。

「無駄だよ。猫は、レオが気になって、気になってしかたがないんだ」

なぜかジークは帯剣していない。護身用のレイピアすら腰に差していない。これが知らしめる事実はなんだ？　なぜ、ジークは丸腰なんだ？

ジークはさらに言い募る。それはまるで、尽きせぬ恨みを晴らすかのようにだった。

「猫はね、レオがいないと落ち着かない。言うことを聞かないと腹が立つ。自分以外の女を見ると、気が狂いそうになるんだ。もうずっと、ずっとそうなんだよ。三年以上前から……」

「！」

見た目にも鮮やかな、アキラの動揺。

「猫は、レオを嵌めたんだ。三年前の叙勲式……理由は何でもよかったんだ」

俺を嵌めた？　いやそんなことよりも……アキラが動揺している。ここを置いて、場の收拾の機会はない。

「だまれ！　ジーク！」

俺のその一喝に、えっ、とジークが目を丸くする。アキラの方も、驚いてこちらを見る。

この機を逃す俺じゃない。生じた隙に飛び出して、アキラの首筋を捕まえる。猫なら　これで上手く行く……はずだ。

「……」

くてり、とアキラが身を任せてくる。

やはり。アキラは猫の獣人の血を色濃く引いている。

かつて、猫の獣人は四本の足で動く四足獣だった。親が子供を運ぶ際、首筋を咬むようにして掴み、移動した。その際、子供には防衛本能が働き動けなくなる。移動の妨げをしないように。その名残から、猫の獣人は首筋を掴まれると動けなくなるのだ。

与太話の類いだろうと思っていたが、実際エルで試したときは、瞬きすらせず完全に動きを停止した。ハイブリッドであるアキラに通用するかどうかは、完全に賭けだったが。

ジークは、ぱちぱちと瞬きをしている。微動だにしないアキラの様子に驚きを隠せない様子だった。

「これは驚いた……。レオ、なにをしたの？」
「……」

ジークにだけは、絶対に言えない。アキラを嵌めに来たのだから。

「ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー大佐。今すぐ、執務室から退去してください。これは第12旅団副長としての命令です」

「命令？」

「そうです。どのような経緯があれ、今の私は、キサラギ団長の忠実な副長です」

「ああ、なるほど」

ジークは深く頷いた。

「レオは、私がキサラギ団長より劣ると思っっているんだね。それはよくわかる。今の私は、大佐だからね。いいよ。そのうち、力で奪りに来るから」

力関係に拘る狼の獣人らしい言い草だ。ジークは嫌いではないが、この優生主義というやつは好きになれない。

「あなたがアキラに敵うとは思えませんが、できるんですたら、どうぞ」

「いいね、それ。カづくつていうの、嫌いじゃない」

ジークは俺の胸で瞬きすらせずに、身を任せるアキラを見下ろした。

「これはイザベラのやり方で、私の趣味じゃない」

言つて、長い舌で、ペロりと俺の頬をなめ上げた。
ぞぞぞっ、と背筋に悪寒が走る。

「少し遅れたけど、これからそれを取り戻したいと思う」

頭が、ズキズキと痛んだ。

ジークは、なぜ今頃になって来たのだろう。

アキラは俺に何を隠しているのだろう。

第13話 暗雲

「このことは、レオの方に貸しておこうか。言ってること、わかるね？」

そう言い残し、ジークは去った。

俺の胸の中でアキラはぴくりとも出来ず、じっとりと額に汗を浮かべている。

「いいですか、アキラ。無理にでも、俺の話聞いてもらいますよ」

「……」
アキラは瞬きすらしない。今頃、強すぎる『猫』の本能と戦っているのだろう。

「先ず、アスペルマイヤーは帯剣していません。武装していない門閥貴族に剣を向ける。これがどういうことか、あなたには理解できませんよね？」

「……」
アキラの瞳が僅かに揺れる。

「おそらく、知恵を授けたのは『バックハウス』。性悪女こと、知恵者『バックハウス』です」

「……」
「あなたは狙われているかもしれない。この数年で、あなたほど力を付けた者はいません。爵位を上げ、さらには『戦略』レベルの軍隊を所持している実戦経験豊富な将校は、あなた以外に存在しません」

「……」

「アスペルマイヤーの安い挑発に乗らないでください。あなたなら、できるはずです」

「……………」
胸の中で、アキラの揺らめきが増すのがわかる。コバルトブルーの瞳に、理性の光が灯り出す。

「……………最後に。これが一番重要です。俺は、アキラ・キサラギの副長です。何かあるうと、あなたを裏切りません。これだけは信用してください」

正確には、裏切れない、だ。

アキラが貴族である三名の大隊長を処分したことで、俺の去就は決まった。

アキラ・キサラギの子飼いの軍隊『第七連隊』。大隊長以上の指揮官で、貴族はアキラ以外いない。その『第七連隊』の筆頭はだれだ？

アキラ・キサラギが最も目を掛けた子飼いは誰だ？

答えは、元傭兵のレオンハルト・ベツカー。俺だ。

場合によっては国すら揺るがす力を持つ異端児『アキラ・キサラギ』。

指揮官に貴族を含まない軍隊『第七連隊』。

門閥貴族は、動きを見せた。ならば、自ずと俺の去就も帰結する。有力な外戚を持たない。何の背景もない平民のレオンハルト・ベツカーの去就など、当の昔に決まっている。悩めるような立場じゃない。

一番大きな反省点は、この問題に気づくのが遅すぎたことだ。気づくのが早ければ、別の身の振り方もあったかもしれない。

だがなぜだ……………まだ足りない気がするの。理屈でない何か……………もっと、こう……………俺自身にまわりつくような、何か不吉なものの存在を感じる。

「…離しますよ。暴れないでくださいね」

「……」

アキラの瞳が、怒りの色に燃えている。不吉だが、狂ってはいない……そう信じたい。

手を離す。掴むポイントや、その強弱は俺だけの秘密だ。

「……」

アキラはしばらく黙っていた。苛立っているようだが、頭は回っているようだ。

「……ボクに何をした」

「教えません」

ぎりつと、アキラが歯を鳴らす。だが、聡い彼女のことだ。しばらくすれば、答えに行き着くことだろう。

「……貴族どもとは、やりあうことになりそうか？ 私見でいい、聞かせろ」

「俺の予想では、まだ。今日のは、揺さぶりというところですか。ですが不確定要素が多すぎます。もっと調査をしてからでないと、なんと……」

「……まだ早いな。せめて、少将クラスでないと」

俺は少し呆れてしまう。

『少将』というと、指揮権は『師団』クラスだ。このどら猫は、それだけの権力があれば、貴族を敵に回しても、やり合えるつもりなのだ。

国でも奪るつもりか？

そこでアキラが床を踏み鳴らす。

「くそっ！ むかついて考えが纏まらない！ レオ、なんとかするんだ！」

むかついて、それを俺に、処理させるのか？

いかん。俺の理解を超えている。

アキラも、ジークもそうだが、行動の原理が俺とは違い過ぎる。

猫の習性に、狼の優生主義。どちらも俺の理解からは遠い。遠すぎる……。

「早くしないか！ おまえなら、何かあるだろう！」

「うわあ！」

アキラの怒鳴り声に反応してしまう。俺のは悲しい習性だ。

第14話 静かな夜に

兵舎に帰ったのは夜半過ぎてからだった。

アキラの怒りは、激しく、なおかつ深刻だった。

だが、思考に関してはいささか冷静な面を残しているようで、俺にいくつかの指示を出した。

現在の状況で門閥貴族と事を構えるのはまずい。アスペルマイヤー、バックハウスの両名の意図、背後関係を調べることに。

二人への対処法。

アスペルマイヤー、バックハウスを毛嫌いするアキラだが、二人の所有する戦力には魅力を感じているようだった。なんとかして、取り込みたい。という意志を強く覗かせた。

それに関しては、俺も賛成だ。戦場において、数は力だ。指揮官である二人はともかく、『第五連隊』と『第八連隊』の騎士たちの信望は得られたほうがよい。

これらの問題に対する方法を、数日以内に書類の形にして献策せよ、とのことだ。

「少佐、そろそろおやすみになられた方が……」

思索にふける俺に、エルがいつものように言うてくる。

「ああ、そうするよ」

エルが来れば、仕事は終わり。そのように俺は決めている。

眠る前に、暖かい飲み物を頼み、エルがやって来るまでの間にこれからのことを考える。第12旅団の目的が『統治』である以上、任務には戦闘後の『治安』や『警備』も含まれる。アキラも俺も、権限は増すがその分、多忙になる。一度、出征してしまえば、おいそれとこのニーダーサクソンには帰れない。

「どうぞ」

エルの差し出した暖かいココアを一口含みながら、薄暗い室内で見つめ合う。

「なにか？」

「……なあ、エル。学校に行つて見る気はないか？」

「ありません」

エルには一言で切つて落とされた。

少しくらい、考えてくれたっていいだろう。うむむ、と思わず唸つてしまう。

「だから……」

俺はエルに『旅団』の目的とその存在意義を説明する。

「もう、帰つて来られないかもしれないから、ということですか？」

そのエルの問いかけに、静かに頷く。

帰つて来られないかも、の中には当然俺の戦死も含まれる。だとすれば、ひたすら気掛かりなのはエルの行く末だ。

「退役なさるのでは……？」

「いつになるかわからん」

窓の外では、夜の虫が鳴いている。静かな夜だった。

「それでは従軍いたします」

「なにを馬鹿なことを……おまえは騎士ですらないだろう」

「では、ここで少佐のお帰りをお待ちいたします」

「だから……」

これは駄目だ。話が堂々巡りになってしまう。

「……修道院に進み、尼にでもなります」

「なぜ、その若さでそんな世捨て人のようなことを言う……」

頭が痛くなつて来た。本気を出したエルは中々、手ごわい。いつもなら折れてやるが、今回ばかりはそうも行かない。

「譲らんど。今回ばかりは折れてもらつ」

「……」

沈黙。そして、いつものようにエルは無表情だった。

手を振って、エルを追い払う。下がってくれ、の合図だ。この際、彼女の意志はどうでもいい。

「……」

エルは出て行かなかった。沈黙を守り、ひたすら俺の目を見つめ続ける。

「少佐は、まだ生きておいでです……」

「ああ、だからなんだ」

「……レオンハルトさまの、お命は、エルのもです」

「……!」

激しく目を逸らす。息苦しくて、とてもでないがエルを見る事ができない。

「そのうち、頂戴に上がります」

「……」

覚悟はできている。頷く俺を見て、エルはうつすらと笑った。

「なるべく、レオンハルトさまのお命が、一番輝かしいときに……」

そしてエルは去る。遠くでは、夜の虫が鳴いていた。

第15話 12旅団結成式典

第12旅団結成式当日。

正面切って、アスペルマイヤー、バツクハウスの両大佐と会わねばならないアキラは、ぴりぴりとして機嫌が悪い。

新兵舎の前では、第12旅団総員5732名が集結して、大元帥であるカロツサの訓辞の言葉を聞いている。

俺のよくない癖で、あまり有り難いお話を聞き過ぎると、つい欠伸をしてしまいそうになる。

欠伸をかみ殺していると、それを遠目で見たアスペルマイヤーが、口元に笑みを浮かべ、バツクハウスが呆れたように肩を竦めていた。前に立つアキラが振り返り、囁くようにこう言った。

「おまえ、本当に死にたいらしいな……」

「へっ？」

恩讐も一昔。喉元過ぎれば熱さを忘れる、とでも言うのだろうか。三年前を彷彿とさせるこの状況にあっても、今の俺が緊張することはない。

笑みを返すと、一瞬、アキラからどす黒いオーラのようなものが吹き上がったような気がしたが、気にせずにおいた。

カロツサの有り難い訓辞が続く中、アキラに耳打ちする。

「アキラ……表情が強ばってます。いろいろありましたが、めでたい式典です。もっと朗らかに……」

「おまえを殺してからそうするよ。まったく、ろくなもんじゃない……」

アキラはしばらくの間、口の中でもごもごと呟いていたが、表情

から緊張は消えていた。

続いてアスペルマイヤーとバックハウスが決意の言葉を述べ、アキラがそれに倣う。

最後に、この三名がニーダーサクソンに命を捧げる言葉を述べ、カロツサ元帥に忠誠を誓った。

その後は、兵舎の前に張られた大きな天幕の中で、結成の祝賀園遊会が開かれることになり、俺を含めた第12旅団の主要人物が、一様に顔を面した。

出会いは、思惑を超えた波乱からはじまることになった。

「やあ、クソ犬じゃないか。こんなところで何をしているんだ？」

のっけから敵意を隠さぬアキラの言葉に、俺は飲みかけたシャンパンを鼻から吹き出すことになった。

さすがのアスペルマイヤーも、これには顔を引きつらせ応戦した。

「これは猫団長。ご挨拶だね」

血の気を飛ばし、呆然とする俺に、バックハウスが歩み寄って来る。

イザベラ・フォン・バックハウス。

第八連隊の隊長で、階級は大佐。軍内部では『知恵者』。その根性の悪さから『性悪女』とも呼ばれている一癖も二癖もある人物だ。俺の考えでは、武人でありどこか単純なところがあるアスペルマイヤーより、参謀タイプのバックハウスの方が役者は上だ。

「久しぶりね。救急箱」

イザベラ・フォン・バックハウスはエルフ特有の長い耳に長く美しい金髪を靡かせ、柔らかな笑みを浮かべた。

救急箱……俺のことだ。まあ、その呼び方も昔からのこと。門閥貴族であり、プライドの高いエルフに、こんな調子ではあるが、口を利いてもらえるのは、そうはないことだ。

「はい、イザベラさま。おひさしぶりです」

「面白いことになって来たわね？」

イザベラが、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「面白い？ あの二人の争いがですか？」

そのうち、血の雨が降るぞ！ 長い耳に向かって叫んでやりたい。

「まあ、なんにしても……」

イザベラは溜め息を吐き出した。

「ジークはようやく本気になったようだし……あれでよかったのよ。全然よくない。」

先日の二人のやり取りを、手取り足取り説明してやりたい。

「それで……救急箱は、どっちが好みなの？」

「はい？」

それは思ってもみない質問だった。

「もうしわけありません。意味がよくわかりませんが……」

「呆れた。もちろん、女としてよ」

「はあ…女性としてですか」

ぴんと来ない問題だった。

アキラに関しては、その好意はかなり歪んではいるが感じている。それだけだ。何も思わない。女性としてというより軍人としては尊敬している。

ジークに関しては、彼女は門閥貴族だ。平民の俺とは違い過ぎる。最近は疎遠でもあったし、女性としては美しいとは思いが、それだけだ。特に恋愛感情はない。

「抱きたい、とかないの？」

「ありませんね」

なんてやらしいエルフだろう。少し呆れてしまう。

「本気で言ってるの、それ？」

「はい」

イザベラはなぜか真剣そのものの表情だ。醜い言い争いを続けるアキラとジークを見つめ、それから俺を見つめる。

「……」

それきりイザベラは黙り込んでしまった。

深く青い瞳が揺れてさ迷っている。

素直に、エルフという生き物は美しいと思う。愛したいとは思えないにしても。

「さて、そろそろ二人を止めてきますね」

そう言い残し、俺はその場を立ち去った。

「抜け、けだもの。ボクはおまえを殺したくて、うずうずしてるんだ」

結成の式典は終わり、カロツサ元帥は城に帰ってしまった。そのため、アキラの言葉に遠慮はない。

「卑怯者の猫。その手には乗らないよ」

ゆったりと返すジークも、金色の瞳に怒りの炎を揺らめかせている。

一触即発の空気を撒き散らす二人を前に、俺は一度頬を叩いて気合を入れる。

二人とも帯剣している。この場で先に剣を抜くことの不味さは、熟知しているのだろう。お互いに挑発しあい、睨み合うがそれだけだ。

「はいはい。団長、ここまでです」

アキラの肩に手を置く。

「レオ、遅いぞ！　どこで油を売ってたんだ！」

「なに言ってるんですか。油を売ってるのは団長でしょう」
ぎろりとアキラを睨み付ける。

「仕事は山積みです。式典の後も書類仕事があるでしょう。こんなところで何をやってるんですか……」

「そ、それは……おまえがやればいだろう！」

コバルトブルーの瞳は怒りに燃えているが、理性の光を失ってはいない。

これが消えた時がまずいんだ。全ての理屈が通用しなくなる。アキラの癩癩にも、だいぶ慣れて来た。聞こえるうちに言うておく。

「俺の仕事は終わってます。後は団長が確認して、サインするだけです」

それに、とアキラの目を見て付け加える。

「例の案件に関する献策書類が、既にできています。確認してほしいのですが」

アスペルマイヤー、バックハウス両大佐に対する対処の献策だ。

「本当か？　早いな。自信はあるんだろうな」

「はい」

「つまらない出来だったら、承知しないぞ」

「はい」

「……」

アキラは、俺の襟首を引っ張って視線を合わせると、何か言いた

そつに唇をなめていたが、

「おまえはボクのことだけ考えていればいいんだ。わかつたな……」
そつ言つて、ギロリとアスペルマイヤーを一瞥し、執務室の方へ
去つて行つた。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーとアキラ・キサラギの
激突は必至だ。それは最早避けられないところまで来ている。

どちらも死なせたくない。どちらにも、仲間の血で己の手を洗う
ようなことはさせたくない。俺の本音はそこにある。

「レオ、猫のあしらいがうまいね」

背後からそつと、ジークの手が肩に掛けられる。

「あなたのためにしたことではありませんよ、ジーク」

「言つね。でも、つれないレオも嫌いじゃないよ」

やがて、どこからか現れた楽士たちが手にした楽器で緩やかな音
楽を奏で出した。

洒落てはいるが騎士の兵舎においては、ふざけているとしか思え
ないこの演出は、バツクハウスあたりの仕業だろう。

「カドリールだね」

四組の男女が四角になつて踊るダンスだ。このダンスは、基本的
な幾つかの動作を覚えれば、誰でも踊れる。その気安さから、最近、
宮廷の流行になりつつある。

ジークの声に驚いた様子はない。この演出を知っていたのだろう。

「踊ってくれるよね、副長」

「……」

お道化たように言うジークの手を取る。この誘いを断るのは、立場的に非礼にあたる。

「私の方が背が高い。レオは、女のパートを踊ってほしいのだけど……」

「はい」

ダンスは腐るほどアキラとやった。これも騎士の礼節を知る上で必要なことだそうだ。だから、嗜みはある。

ぐいつ、と腰と手を引き付けられる。

「う……」

痛くはないが万力のような力強さに、思わず唸る。

「ジーク……これは、そういうダンスでは」

「いいんだ。ずっと、こうしたかった。だから、やっているんだ」

カドリールの緩やかな調べに合わせ、くるり、くるり、とジークは回る。

「私は少し、考え過ぎていたようだよ。らしくないことにね」

一方の俺は、踊るといふより振り回されるといふ表現が正しい。

ジークの切れ長の瞳が、しつとりと潤んでいる。

「口づけしてやるうか、レオ」

「なっ？」

怯む俺を無視して、くるり、とジークは回る。パートナーの交替にも応じず、ひたすら俺とのダンスに興じる。

「くっ、離せ、ジーク……風紀部に目を付けられるぞ……」
「んん…？ ああ、そんなものもあつたね。さつきからおかしいと思つたら、そんなことを気にしていたんだ」

ジークの金色の瞳に血の色が浮く。戦闘時に見せる精神の昂揚だ。ぎくりとした俺は、青い腕章をした風紀部の騎士に視線を合わせる。

どうだ、アキラだけじゃない。だから俺を止めてみる！ 止めてくれ！ 頼むよ！

訝しげにこちらを見た風紀部の騎士は、一瞬ジークと視線を合わせ、

「ひえっ！」

という悲鳴を残し、逃げるように去っていった。

俺の心の叫びは、風紀部には届かないようだ。

「レオ……私の小鳥……今は籠の中……そのうち、力で奪りに行く……」
「なにを……」

なにを馬鹿なことを、と力任せに振り解こうとした俺だが、ジークの紅い瞳の迫力がその抵抗を許さない。

カドリールの緩やかな旋律に狂気の調べを乗せ、俺たちのダンスは続く。

「……すごい。想像以上だよ、これは。なぜ私は、一年前……」

ぶつぶつと呟くジークは、狂気を浮かべた瞳に俺以外の何も映していない。

……食われる。

はつきりと浮かぶその光景に、悲鳴を上げそうになったのと同様

に、カドリールの調べが止まる。

「……もう終わってしまったのか。つまらない……」

ジークは動きを止めた。だが、万力のような剛腕で掴んだ俺の手首を離さない。その鮮血の瞳が、捕らえた俺を離さない。

「うあっ!」

ぎりぎりと締め付けられた手首の痛みにも、俺はとうとう悲鳴を上げた。

「!」

刹那、弾かれたようにジークが戒めを解く。

「……いけないね。猫と同じことをしてしまうところだった」

血のざわめきを伝えるように震える己の手を見つめ、ジークは言う。

「今日はこれくらいにしておこうか。少し、興奮してしまった……。私は猫とは違う。レオを壊すつもりはないんだよ……」

振り切るようにジークは踵を返した。

痺れた手首を摩りながら、俺は全身に吹き出した冷たい汗を感じていた。

第16話 眠れぬ夜のはじまり

「万夫不当のアスペルマイヤー

倒した敵は数知れず」

アキラは唄うように言った。

「鬼より強いアスペルマイヤー

向かうところに敵はなし」

ニードーサクソンの城下町で、民衆がアスペルマイヤーの武勇を称えるときに使う唄を唄いながら、手にしたタクト（指揮棒）で右のブーツをぴしゃりと叩く。機嫌がよいときのアキラの癖だ。

第12旅団結成の式典以来、アキラの上機嫌はずっと続いている。俺が献上した策が気に入ったようで、それ以来アキラはずっとこの調子だ。有頂天と言ってもいい。

「アスペルマイヤー……あいつには、八つ裂きですら、生ぬるい」

上機嫌の表情とは裏腹に、アキラの吐き出す言葉は非常に剣呑だ。そしてまた、ぴしゃりとブーツを引っぱたく。

「上機嫌ですね？」

「ああ、ボクは機嫌がいい。おまえのおかげだ」

くいつと、アキラは執務室の椅子を顎で指した。

「座るんだ。ボクから、特別にご褒美をやるう」

偉そうに言うアキラの言葉から、俺は嫌な予感しか感じない。

「いいえ、遠慮します。そんなことより」

「座るんだ！ レオンハルト・ベッカー！」

「うわあ！ 座ります座ります！」

アキラの怒鳴り声に反応してしまふ俺……情けない。

「アキラは手を後ろに組み、少しお尻を振りながら、着席している俺の回りをぐるっと歩いた。

「おまえの策は中々の出来栄だった。あれを見て、おまえの馬鹿も大分よくなつたと思った。そこで、だ……」

「はい」

嫌な予感しかしない。俺は頷いておく。

「ボクらの関係を、一步前に進めようと思う」

「一步前に……」

それはなんだろう。小便をするときのコツだろうか……。アキラは手にしたタクトを、ぐりぐりと俺の胸に押し付ける。地味に痛い。

「……しよつ、と」

言いながら、アキラは俺に馬乗りになると

「○×……！」

キス、した。

あまりの衝撃に、打ち上げられた魚のように足が震える。

目を白黒させる俺の唇を、アキラは一方的に貪った。それはあまりにも一方的な凌辱。

そこには、一方的な感情しか感じられなかった。

そしてその行為は、俺が時間を忘れそうになるまで、続いた。頬を紅潮させ、ようやく離れたアキラの視線は、潤み、蕩けていた。

「これは……うん、これから毎日しよう……」

アキラは陶然として、静かに、俺の胸の中で眠りに落ちた。

「それで、部隊編制の件ですが、どうなさいますか？」

「……………」
アキラは呆然としている。昼食時も虚ろなままで、意味もなくパンを千切って投げたり、観葉植物の鉢植えにスープをかけたりしていた。

これは……あのキスのせいだと思えばきなのだろうな……………。
まあ、俺もショックがでかかったからな。理解はできるが、そろそろ……………

「アキラっ！ しっかりしてください！」

「……………ん？ またしたいの？」

駄目だ、これは。

「ア・キ・ラ！ 今は執務中です！」

「……………ああ、次の段階については、もう検討しているところだ。少し、待ってくれないか？」

なんの話だ？ しょうがない。次の案件に入るか……………。

「それで、二週間後の実戦形式の模擬訓練ですが、問題ないようでしたら、そのまま俺が立てた計画通りに事を進めて……………」

「ああ、それなら少し修正を加えてある。この通りにするんだ」
突如、アキラの瞳に力が宿る。

場の空気がぴりりと締まる。やはり、アキラ・キサラギはこうでなくては張り合いがない。

引き出しから出した書類を、ぽんと俺に放り投げる。

「読め」

アキラが出したのは、俺が立てたアスペルマイヤーへの対処法の策略だ。

具体的には、どのようにして彼女を屈服させ、率いる『第五連隊』の信望を得るか。或いは、どのようにして彼女から『第五連隊』の信望を奪うか。

生半可なやり方では、アキラは納得しない。俺は辛辣な策を献上したつもりだ。とても気に入ったように言っていたはずだが……。

「……………」

書類を読み進めて行く。内容はほとんど変わりが無い。だが……
「実行するのが、俺になってますね……………」

「なんだ、嫌なのか？」

値踏みするように、俺を見つめるのは、軍人のアキラ・キサラギだった。

「いえ、そうはいいませんが、しかし…………アスペルマイヤーは、臍抜けになってしまいかもしれませんが、それでも？」

「ボクは、そうしろと言ってるつもりだ」

「はい……………」

てつきり、自分でやりたがるものだとばかり思っていた。

俺が、あのジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーを、潰すのか…………。

俺に優しくかった、騎士に取り立ててくれた、あのジークを潰すのか…………。

アキラの眉間に皺がよる。その感情のベクトルが指し示すのは、不快。

「できないのか？」

「……」

「なぜ黙る。おまえは、できもしない策をボクに献上したのか？」

「いえ……そのようなことは」

「じゃあ、おまえの指摘したアスペルマイヤーの弱点を言ってみろ」

腹を括れ！ レオンハルト・ベッカー！

おまえは軍人だ！ 戦争屋だ！ 余計な感情は捨てる！

策を立てたのはおまえだろう！ すべて上官に押し付けるのか！

瞳を閉じ、歯を食いしばる。

さまざまな思いが、胸を駆け巡り、消えて行く。

「アスペルマイヤーの弱点は……それは、彼女が最高の戦士であることです」

アキラはしたたるような笑みを浮かべた。

それを見て、俺は理解した。

ここまでのことを、アキラは全て予想していたのだということ。

夜が更けて、俺は眠れそうにない。

恩知らずのレオンハルト・ベツカー。
裏切り者のレオンハルト・ベツカー。
そんなおまえに、ぐっすり眠れる夜があるというのか？

「少佐、もうお休みになられた方が……」

エルが一日の終わりを告げる。それでも俺は眠れそうにない。

「とても、苦しそうに見えます……」

その言葉に、俺は黙って手を振る。下がれ、の合図だ。

「それでは、なるべく長く苦しめるよう、目の覚める飲み物をお持ち
하십시오」

「……」

眠れる夜は、もう終わったのだ。

第17話 苦悩

統帥総本部で開かれる会議では、来るアルフリードとの新しい大きな戦乱の内容が話し合われることになった。

アキラは、第12旅団の団長としてその会議に出席せねばならず、しばらく兵舎を空けることとなった。

「留守は任せたぞ」

「はっ」

特に人目があるわけではなかったが、敬礼でアキラを見送る。

「なんだ、それは……ボクは、そんなことしるなんて、一言も」

「それでは、小官は会議がありますので」

背後でアキラが怒鳴り散らす、知ったことではない。

早々にその場を後にする。

俺自身、佐官の階級を持つ上級士官の会合に出席せねばならず、多忙を極めていた。

「ちょっと、救急箱、あんた、死にそうな顔してるわよ？」

「……」

うるさい、アスペルマイヤーの次はおまえだ。

会議は新兵舎の会議室で行われた。

この新設された第12旅団では、佐官以上の階級を持つ上級士官は九名だが、例外として『第七連隊』の大隊長の代理を務める下士官の二名も呼び寄せ、会議に出席させた。

「司会は副長たる俺が行う。」

「部隊の再編成の件ですが、模擬戦の結果を踏まえてのことにする
と、団長からのお達しです。何か質問は……?」

挙手したのはアスペルマイヤーだ。

「その模擬戦には、団長も出るの?」

「はい。……ほかには?」

「レオ、顔色が悪いようだけど、どこか具合が」

「アスペルマイヤー大佐、私の体調のことは、本会議になんの関係
もありません。私的発言は、謹んで下さい」

会議は殺伐と、だが順調に進んだ。

俺はなるべく、アスペルマイヤーの方は見ないようにした。

会議終了後『第七連隊』の大隊長の代理を務める下士官の三名を
残らせ、連携を密にするための話し合いを持つ。

模擬戦で『第七連隊』の指揮を執るのは俺だ。

戦いはもう始まっている。手抜きやミスは絶対に許されない。

「副長、ひどい顔してますぜ?」

大隊長代理の三名は、いずれも傭兵上がりだ。そのため言葉遣い
も気安い。

「おまえらに気遣われるようじゃ、俺もまだまだだな。そんなこと
より、分かっているな?」

「へえ、アスペルマイヤーのやつを、カタにはめるんでしょ?」

「そうだ。ここで張り切りや、団長の覚えもいい。おまえら、稼ぎ
時だぞ?」

「……おう」「」

意気揚がる三人を送り出し、執務室に戻る。

傭兵上がりの仲間三人と話したことで、少し気が抜けたような気
がした。

ありがたいことだ。

第18話 衝撃（前書き）

イザベラ視点です。

第18話 衝撃

「なによ！ なによなによなによ！ ねえ、ジーク！ 救急箱のあの態度、見た？」

イザベラは秀麗な眉目を苛立ちに歪ませ、腹だたしげに吐き捨てた。

「ニンゲンのくせに！」

「その言い方は好きになれないね、イザベラ」

第五、第八連隊に宛てがわれた兵舎は隣り合っている。ジークとイザベラの二人は、己の兵舎に帰る道すがら、それぞれの思惑を胸に話し合う。

万夫不当 ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは思わしげに眉を顰めた。

「先の祝賀会の時は普通だったんだ。あの猫が何かしたと思うべきなんだろうね。会議中も、ずっと私の方を見ようとしなかったし…」

「…」
「呆れた！」

イザベラは金髪をかきあげ、苛立ちをそのままに吐き捨てる。

「いくらあの、おかしな猫が関係してるからと言って、この私を無視したのだけは許せないわ！」

「今日は、やけにむきになるね。何かあった…？？」

ジークはゆったりと言う。

八頭身の大柄な体躯に、鷹揚な物腰。何も無い時は、何も無い。平時の万夫不当は、優雅な銀色の鬘を持つ狼の獣人だ。

イザベラは、この幼なじみの義理堅い所を気に入っている。それでなければ、気難しいエルフの彼女が長年友達付き合いをするわけがない。

「むきにもなるわよ、なんたって、あいつは」

そこまで言って、口ごもる。イザベラが口にしたのは別の話題だ。「それで、あんたの方はどうなのよ。この前の園遊会、うまく行ったの？」

「……まあまあだね。相変わらず、とてもいい匂いがしたよ……」「はあ？」

イザベラは軽い目眩を覚えながら、うふふと口元に手をやるジークを生まれて初めて見る珍妙な生き物のように思った。

「少し、興奮してしまっただね……私も、あまり猫のことは強く言えないかもしれないね」

「……」
呆然とするイザベラを置き去りにして、『万夫不当』は兵舎の影に消えて行った。

恋、というやつだろうか。

経験のないイザベラにはよくわからないが。

あの『万夫不当』をして、おかしくさせる代物であることだけは間違いない。

だが、あの人情無しの救急箱は、誰のことも愛していないのだ。

よどみなく言い切った事を、イザベラは知っている。

かわいそうなジーク……相手にもされないで。

そう思うと、この上なく腹が立った。

あのニンゲンは何様のつもりなのだ。一言、言ってやらねば、とてもでないが収まりがつかない。

イザベラは踵を返すと『第七連隊』の兵舎へと向かった。

すれ違つ騎士たちに、どことなく着崩しただらしない格好の者が増えてくる。傭兵上がり共だ。それらがエルフのイザベラに向けてくる視線は、興味半分、おもしろ半分といったところか。

(ニンゲンが…！)

人間が己に向ける奇異の視線に嫌悪を覚えるのは、これが初めてではない。

イザベラは思つのだ。

あの暢気者で、馬鹿のレオンハルト・ベツカーは、見世物小屋の出し物を見るような好奇心に満ちた視線でエルフを見たことはなかったぞ、と。

そういえば……レオンハルト・ベツカーといえば、あれだ。

四年前、猫の獣人の娘を連れて、何も聞かずに助けってくれと頭を下げてきたのを思い出す。

あの娘、名前をなんと言つただろう。

エス…エヌ……そう、エルだ。

そんなことに思いを馳せるイザベラの顔からは、いつの間にか陰が消え、僅かな微笑みすら浮かぶのだった。

第12旅団、団長アキラ・キサラギの執務室の扉は、現在、薄く開かれている。

何度、呼びかけても応答のないことに不審と苛立ちを感じたイザ

ベラが、無断で立ち入ったためだ。

そのアキラ・キサラギの執務室で、イザベラは棒立ちになって、己を持って余している。

視線の先では、レオンハルト・ベッカーが眠っている。

青白い表情にびっしりと脂汗を浮かべ、時折苦しそうな呻き声を上げていた。

なんとかせねば、イザベラはそう思う。

だが、何をどうしたらいいのか分からない。汗を拭けばいいのか、起こしてやればいいのか、いや、そもそも自分は何をしに来たのだろうか。

そう、文句を言いに来たのだ。

青白い表情で苦しそうにうなされるレオンハルト・ベッカーに。

果たして、それはどんな罪悪だろう。

あの暢気者で馬鹿のレオンハルト・ベッカーが、眠っている間すら苦悩している。

それはどんな苦しみだ？

暢気で馬鹿な男が身を擦る程の悩みとは、どの程度の大きさだ？

イザベラにはわからない。ただ、文句を言うつもりはとうに失せている。そしてひたすら戸惑うのだ。今、何を為すべきかと。

取り出したハンカチを揉み絞りながら、なおもためらうイザベラは胸に激しい動機を感じている。

その視線は『救急箱』と呼んでいる男の顔から離れない。

やがて、レオンハルト・ベッカーが一際苦しそうに吐き出した。

「ごめん……ごめん、ジーク……」

イザベラは、胸の奥に小さな軋みの音を聞く。

その女は、ここにはいない。口にする名前を間違っているのではないか……？

「すまない……イザベラ……」

レオンハルト・ベッカーの頬に一筋の涙が落ちる。

イザベラ・フォン・バックハウスが生まれて初めて見た男の流した『涙』。

そして イザベラの胸は、引き裂かれた。

第19話 猫のワルツ

デスクの上に、四角く丁寧に折り畳まれたハンカチが乗っている。ハンカチは、ぐっしょりと濡れており、それには、

イザベラ・フォン・バツクハウス

と金の刺繍が施されている。

「まずった……」

俺は頭を抱えた。

眠っている間のことだ。何が起こったかは、わからない。この執務室は、第12旅団のもとい、アキラ・キサラギの秘密の山だ。そのアキラの留守中にイザベラがこの執務室に入り、その時、俺が居眠りしていたなどと知れたら……

「ふっ……死んだな」

黙っておこう。

固く心に誓うのだった。

統帥総本部からは、一日二十通以上の手紙が、俺宛に届く。この馬鹿げた量の手紙の差出人は、アキラ・キサラギだ。内容のほとんどは、俺に対する恨みつらみで固められてあった。どうやら、アキラは統帥総本部の重要な会議でへまをやったらしく、そのことで酷く叱責を受けたようだった。アキラの手紙の内容によると、その責任のすべては俺にあるらしい。

最初の二、三通は目を通した俺だったが、似たような内容の手紙に飽きてしまった。それ以降、アキラからの手紙はすべて、処理済みの棚にほうり込んで置いた。

そのアキラ・キサラギが明日帰ってくる。

執務室で、近く行われる模擬戦のためにあらゆる状況を想定し、事前に策を練る俺だが、一日中、そればかりをやっているわけではない。

ふと、暇を持て余し、アキラの手紙の中から一番新しいものを選び、封を開けて中身を確認してみる。

「……………」

アキラの手紙には、くしゃくしゃになった字で、

おまえを殺す。

と短く書かれていた。

どこかの誰かが言っていたのを思い出す。

女という生き物は、神が男の曲がった肋骨で創ったものである。

こつとも言っていた。

女とは男の曲がった肋骨で創られた。元々、曲がったそれは、捨て置けばなお曲がる。

「やれやれ……………」

まさか本当に殺されはしないだろうが、気の重い話だ。

翌日の早朝、単騎、馬を飛ばして兵舎の外れまでアキラの出迎えに向かう。

これはまあ、ご機嫌伺いのようなものだ。拗ねくれたままにしておけば、執務に滞りが出るのは目に見えている。

アキラ・キサラギは、優秀な軍人であるが、その彼女をして個人の欠点とは無縁でいられないものであるらしい。

俺に対する異常な執着。

アキラの気持ちを愛情と呼んでいいものだろうか。

「副長、ふくちよー！」

向かいから、情けない声が飛んでくる。

俺と同じように、単騎、馬を飛ばす若い騎士。銀の拍車の付いたブーツは、彼がまだ見習いの従騎士であることの証だ。ステイクス

通常、正騎士は金の拍車の付いたブーツに、マントの留め金にはやはり、金を使う。

涙さえ浮かべた若い従騎士からは、悪い予感しか感じない。一瞬、後背に視線をやり、逃げ出すかどうか思案するが、そういうわけにもいかない。

やむを得ず、馬を止め、事情を聞く。

「どうした？ そんなに慌てて。内乱でも起こったか？」

「に、逃げて下さい！ 団長が、団長がー！」

任せる！ 遠くに行けばいいんだろ！？

俺はその言葉を飲み込む。

空は晴れている。だが、血の雨が降りそうだった。

ニーダーサクソンの下町を見下ろす小高い丘で、アキラ・キサラギに乗せた馬車は立ち往生しており、駆けつけた俺を見て騎士の何名かが頻りに手を振って、

「来るんじゃない！」

とか、

「殺されるぞ！」

とか剣呑な叫びを上げている。

その仰々しさに異変を感じたのだろう。馬車から既に抜刀したアキラがおっとり刀で飛び出して来た。

「きいさあまあ！ よくも！ よくも！」

ぐしゃぐしゃに泣き濡れており、もはや人目を憚る余裕もないようだった。

やれやれ。

アキラ・キサラギという女性は、小柄で短気だが、これでも何者かではあるのだ。副長である俺はそれを知っている。だからこそ、俺は選んだのだ。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーでなく、アキラ・キサラギを。

若くして、最早、『何者』かであるアキラ・キサラギを。

「そこに直れ！ ボクがこの手で殺してやる！」

「はいはい、アキラ。お帰りなさい」

「くそお！ 馬鹿にしているな！？」

さんざん喚き、抵抗するアキラを捕まえる。取り巻きの騎士数名が見ているが、かまいやしない。すかさず抱き上げて、

「なにを」

キスしてやった。

驚くには値しない。ささやかながら、これはこの前のお返しだ。

「おお！」

ついに現場を押さえたり、と嬉しそうに驚嘆の声を上げるのは、傭兵上がりの馬鹿共だろう。

唇を離すと、アキラは大きく鼻を啜った。その手から、がしやりと力なく刀が落ちる。

「卑怯者……このうすらとんかちの唐変木め……」

「はい、仰せのとおりです」

人というものは、色々なことに慣れる生き物であるようだ。

この身に背負う裏切りや苦悩にも慣れ、いつか自由になれる日が来るのだろうか。

レオンハルト・ベッカー、そのときお前は、何者になるのだ？

今は、このおかしな猫のワルツに合わせて踊る。それだけだ。

第20話 決意

「それで、会議はどうでした？」
「うるさい。少し黙ってる……」

第12旅団の執務室では、アキラが俺の膝に座り、未だおかんむりの様子で口を噤んでいる。

現場を見た馬鹿共には勿論、固く口止めしておいた。

「なんにも見てませんぜ、副長！」

その口元は下世話に歪んでいた。部隊内で周知の事実になることは間違いないだろう。

「……わかってるのか、おまえは。そのうち、ほんとに殺すぞ……？」

アキラは居心地が悪いのか、ぐりぐりと腰を揺する。

「はいはい、わかってます、わかってます」

「……相変わらず軽いやつだ……って、おまえ！」

「小官も男ですから」

膝の上で腰を振られては、反応してしまう。悲しい男の性というやつだ。

「待て！ 待て！ おまえはよくても、ボクの準備はできてない！」

「ええ、いくらでも待ちますとも」

慌てるアキラの表情を窺うことはできないが、耳まで赤かった。

……おぼこだな、こりゃ。

こうなれば、猫將軍も可愛いものだ。からかってやるうかとも思うが、話が進まないのを止めておく。

アキラは、ぱっと飛びのいて、いつものタクトを取り出すとそれでブーツをぴしゃりと叩く。

「ぼ、ボクのことより、まずおまえだ。おまえのことを聞かせろ。留守中、アスペルマイヤーとバツクハウスに動きはなかったか？」

一瞬、バツクハウスの、あのハンカチが脳裏を過る。

だが、口に出してはこう言った。

「アスペルマイヤーからは何度か食事の誘いがありましたが、バツクハウスの方は何も」

「食事!？」

アキラの眉が、ぎゅっとよる。

「断ったんだろうな!？」

「はい」

「ならいいんだ……」

そこで、またもやブーツをぴしゃり。手を後ろ手に、お尻を振って歩きます。

「それで門閥貴族の方は、何か動きがあるか？」

「いえ、何も。先のアスペルマイヤーの行動と、門閥貴族は無縁のようですね。秘密裏に連絡を取っている様子もないです。ただ……」

「ただ、なんだ？ 言ってみろ」

俺は一つ頷く。ここからは真面目な話だ。

「今はまだ、と思うべきでしょう。あなたが力を付けければ、向こうの方でも反応せざるを得ません。今の内に準備を進めないと」

「うん……うん……」

アキラは執務室の中央で、タクトを片手に思い悩むふうだった。「信用できる子飼いの部下を増やしましょう。内偵するにしても、身を守るにしても今のままではあまりに無勢ですし……」

「そうだな。その必要性はボクも考えていた……」

アキラはなぜか歯切れが悪い。珍しいことに、決断を迷っている

ようだった。

「なにか懸念が？」

「うん…それは……逆に、裏切り者を抱えることになりはしないだろうか……」

「その懸念は向こうにもあります。力の差でいえば、向こうに圧倒されています。多少の不利はやむを得ないかと」

一際大きくアキラは、ブーツを引っぱたく。きりりと表情が引き締まり、前を向いている。

「そうだな。おまえの言うとおりだ。早速、準備にかかれ」

「はい、実はもう人選を済ませてあります。段取りはこちらでいたしますので、一度直接会ってください。最終的な判断はお任せします」

アスペルマイヤーを切つて捨てた時に、悩みも切つて捨てた。

俺はアキラ・キサラギに自らの運命を託す。俺の死も栄光も、彼女と共にある。力の出し惜しみはしない。全力で事に当たるのは当然のことだ。

戦場ではミスした者でなく、迷ったやつから死んで行く。遅れたやつから死んで行くのだ。俺は元傭兵だ。難しい判断は何度もあった。これでも思い切りはいいほうだ。

そして、俺はまだ生き残っている。

アキラは、ぴしゃっぴしゃっ二度ブーツを引っぱいた。

「その癖、止めたほうがいいですよ？」

アキラのブーツは、いつも右から駄目になる。いくら軍からの支給品とはいえ、少しもつたない。

「おまえ、使えるようになったな？ 何かあったのか？」

「……」

いまさら何を言う。俺を仕込んだのは、ほかならぬアキラではないか。副長として、いつでも細かいことに気を配れ、常に先を考え

ると言ったのは自分ではないか。

それが『支える』ということだと、何度言ったと思っているのだ。

「ふん……ボクのほうでも、ご褒美を考えなくちゃいけない……」

その言葉からは、よくないものしか感じない。

「アスペルマイヤーの件は？」

「万全です。百度やっても、負けません」

「よし」

そしてアキラは、またお尻を振り振り、室内を練り歩く。上機嫌で言った。

「楽しみだな！」

アスペルマイヤーとの決戦が近づいている。

第21話 武人として

大隊長以上の指揮官の会合で、模擬戦での予定がアキラの口から発表された。

「明日の訓練は、第七連隊と第五連隊の模擬戦を実戦形式で行う。なお、第七連隊の指揮を執るのは副長だ。何か質問は？」
「団長はどうするの？」

『第五連隊』の指揮官、アスペルマイヤーの発言は拳手と同時だった。

「ボクはその様子を見学させてもらう。部隊の実力を測りたい。この模擬戦の結果を踏まえ、第12旅団の新しい編成内容を考えさせてもらう」

「つまらない……逃げるの？」

その言葉に、一瞬アキラは目を剥いたが、口元に凄惨な笑みを浮かべ、こう切り返した。

「たいした口を利くじゃないか、アスペルマイヤー。いいだろう。おまえがレオに勝るようなら、このボクが直々に相手してやるんじゃないか」

「いいよ、それでも」

会議終了後、俺のマントを捕まえ、アスペルマイヤーはこう言った。

「ごめんね、レオ。手加減するから、前に出て来ちゃいけない。わかったかね？」

「はい。お手柔らかにお願いします」

口元に広がる笑みを実感する。

俺は武人として、アスペルマイヤーになめられたのだ。

どこまでも冷えたその思いは、恐ろしいほどに俺の戦闘意欲をかき立てた。

実戦形式の模擬戦は、兵舎の外れにある練兵場で行う。訓練ではあるが、その内容は実戦形式で行われる。

元傭兵のこの俺が一軍を率い、あの『万夫不当』と相対するのだ。戦争屋とは業の深いものだ。俺の胸にあるのは、僅かな逡巡と大きな昂揚。

相手にとって、不足なし。

そして 戦闘の火ぶたは、ついに切って落とされた。

アキラには、俺という副長がいる。しかし、俺には『俺』がいない。

そのため、俺は大隊長の中から一人を選び、副長として機能させた。

「副長！ やっこさん、綺麗な陣を敷いてますねえ」

アスペルマイヤーは練兵場のほぼ中央に全兵力を集中させ、『フアランクス』の陣を敷いている。圧倒的な突撃力を誇るこの陣は、正面決戦では無類の強さを発揮する。

「どーしやすか、副長」

「ふむ…」

なるほど、確かにアスペルマイヤーは綺麗な陣を敷いている。

陣というものは、外観を美しくすれば実用的でなく、実用的にすれば美しい。

アスペルマイヤーは最高の戦士であるかもしれない。だが、指揮官としては二流だ。

「斜線陣を敷いて対抗しろ。わかっていると思ってるが……」

「へえ、ヤローは無視するんでしょ？ 副長も心配症ですねえ」

さて、この圧倒的突撃力を誇る『フアランクス』の陣形であるが、側面の攻撃に弱いという特質を持つ。

『フアランクス』の火力は前方に対して発揮されるものであり、それを受け流す斜線陣との相性はよくない。

そして、ついに激突する『フアランクス』と『斜線陣』。

『第七連隊』はアスペルマイヤー率いる『第五連隊』に側面から張り付くようにして戦線を構築した。

戦鬨の推移は俺の予想通りに展開する。

第七連隊に防御力を削られた第五連隊は、ややもして縦長の戦列を見せはじめた。アスペルマイヤーを先頭とした本隊を孤立させる形で、だ。

「頃合いよし」

俺が直々に手ほどきした一個中隊を新たに戦線に投入する。

「副長は行かねえんで？」

「戦場であれに遭ったら、すつとんで逃げるね」

「ちげえねえ！」

傭兵上りの大隊長は勝利を確信したのだろう。大きく声を上げて笑った。

アスペルマイヤーは最高の戦士だ。だがこの場合、それがよくない。傑出した彼女の突進力について来られる者などいない。

一戦場を駆ける一戦士が、戦況全体を操る指揮官に勝てるはずがないのだ。惜しむらくは、アスペルマイヤーはそのことを知らずに、これまでの戦闘を戦い抜いて来たことだ。

「アルフリード側にも、優秀な指揮官は少ない、か……」

やや離れた場所で、戦況を俯瞰する俺の目に入ったのは、孤立しがちだったアスペルマイヤーの本隊が、新たに投入された一個中隊におびき寄せられるようにして、さらに突出する光景だった。

「そろそろですね」

「ああ、そろそろだ」

『第七連隊』全体にアスペルマイヤーは、無視しろと命令してある。相手にされない『万夫不当』はいきり立ち、目の前の一個中隊を追い回した。

そして アスペルマイヤーは、消えた。

「ぶはっ！ はまりやしたぜ！ あのヤロー」

大隊長が吹き出すのと同時に、わっ、と鬨の聲が上がる。

「終わったな……」

戦端が開かれて、まだそれほどの時間は経ってない。だが、決着を知らせるラツパの合図に、第五、第七連隊は鉾を収め、後退して行く。

俺は本隊として自ら率いた一個中隊とともに、騎士たちの集う喧噪に降り立つ。

第五連隊の騎士たちは、一様に、きよんとした表情で、

「え、もう終わったのか？」

「俺たち、負けたのか？」

「うそだろ、おい」

とざわめき立っている。皆、不完全燃焼の顔付きをしている。あの『万夫不当』を戴く騎士たちだ。最強の誉れ高かろう。今日までは。

練兵場の一角では、大きく空いた落とし穴に、やはり、きよんとしたアスペルマイヤーの姿があった。

その顔には、驚愕しかなかった。己の置かれた状況を理解できないのだろう。

アスペルマイヤーは、数人の取り巻きの騎士と共に、深い落とし穴の中で頭上に掛かった鉄の網を見上げている。

「レオ……これは……?」

「捕まっただんですよ、あなたは」

鉄の金網越しに呼びかける。

「おつかれさまでした、大佐。訓練は明日もあります、今日はこれくらいにしましょう」

「……………」

まだ昼飯時にもなっていない。

くしゃり、とアスペルマイヤーの顔が歪む。

「あ、あああああああああああああああああああああ！」

落とし穴の中で、砂埃に塗れた『万夫不当』は絶叫した。最強の戦士と謳われたその誇りも、きつと泥と埃に塗れたのだろう。

「卑怯者、卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者！
なぜ、私に正面切って立ち向かわない！」

俺はその叫びを無視した。

戦場で負け犬の遠吠えほど、無意味で惨めなものはない。それを知らぬ彼女でもあるまいに。

狼の本性そのままに、落とし穴の中で吠え続けるアスペルマイヤーは、惨めなだけでなく滑稽ですらあった。

だが、まだ続くのだ。

アスペルマイヤーの屈辱と絶望は。

二日目。

怒りに燃えるアスペルマイヤーが用いたのは、またしても『ファランクス』の陣形だった。

その意気やよし。素直にそう思う。一敗地に塗れたとはいえ、アスペルマイヤーの『万夫不当』が地に落ちたわけではない。

ただ、それは正しくないだけだ。

「あちゃあ……やつちまつてますねえ……」

俺の隣で控える大隊長が、可哀想なものを見るかのように顔を覆った。

「おい、二日目も予定通りに行くぞ」

「へえ」

この日、俺が用いたのは、アスペルマイヤーと同じ『ファランクス』の陣形だ。

おそらく、アスペルマイヤーは内心で会心の笑みを浮かべているだろう。

同数、同陣形のぶつかりあいだ。小細工の入り込む余地はないと思っただろう。

ただ、それが間違いだ。

アキラ・キサラギが未だ、大佐であった時分、『第七連隊』での模擬戦は、常に本気で行われた。刃を潰し、布を巻いた模擬刀だが、全力で突き、叩けば骨折させ得るし、下手すれば殺しもする。

アキラ・キサラギ曰く、練習で死ぬような弱卒はいらない。

痛みというものは中途半端に与えれば、相手の怒りを誘発するが、ある一定の値を超えれば恐怖を抱かせるものであるらしい。

アスペルマイヤーは気づいていない。『第五連隊』に根付こうと

している『恐怖』に。本気で打ち、本気で突き、本気で掛かってくる相手の恐怖は、強者である『万夫不当』には理解できない。

この時点で、俺とアスペルマイヤーの戦力比は既に五分でない。もとより、指揮官としての能力は五分ではない。

この日も『万夫不当』は相手にしない。

前線は、アスペルマイヤーがまたしても突出する形となった。凹形に展開する『第七連隊』に取り込まれるという最悪な形だ。

勇猛果敢に前進するアスペルマイヤーは、気づいた時、退却する術を失い、行き着く先で見つけた俺に遮二無二突撃して、

またしても、消える。

すべては予定通りだった。呆気ないほどに。

そして この日も、昼飯前に決着のラッパが鳴る。

「こりゃ、つまんねえや」

第七連隊の騎士たちが吐き捨てる。

アスペルマイヤーはこの日も落とし穴の中。ぼんやりと、俺を見上げる。

「大佐、おつかれさまでした。また明日やりましょう」

「……」

くしゃりと歪んだアスペルマイヤーの顔は、泣き笑いの表情だった。

胸が痛んだ。その表情は、『万夫不当』がしてよい表情ではない。

哀れを誘う表情は、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーが
してよい表情ではない。
アキラの小躍りする姿が浮かぶ。

そして、ここからアスペルマイヤーにとっての地獄のはじまり
だ。

第22話 歪む心（前書き）

ジーク視点です。

第22話 歪む心

七日目。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、第五連隊のほぼ中央にある本陣で、ひっきりになしに飛び込んでくる急報を聞いている。

模擬戦、三日目以降、指揮官として本隊に留まった結果がこれだ。

「第一大隊、押されています！」

「第四中隊、降伏しました！」

「第二中隊、降伏しました！」

「第二大隊、連絡が取れません！」

その急報に、ジークは右往左往を繰り返す。彼女が駆けつけたところで、敵は逃げて行くばかりなのだ。

慌てて突っ込めば、また落とし穴に嵌まってしまふ。

今はもう、練兵場のそこかしこに落とし穴が掘られているような気がして、ジークは歩くのにすら気を使うありさまだ。

二日連続で穴に嵌まって、捕縛の憂き目を見た大将分を見る騎士たちの目は冷たい。

「大佐。また明日……」

レオのあの言葉を、もう何度聞いた？

ああ、でもまた負けたら、レオに会えるかも。

「隊長！ 至急救援を！」

第五大隊の騎士たちの目が白い。口に出しこそしないが、目が言っている。

『おまえは、なにをしているんだ？』

『役立たずの狼め』

敵ではなく、味方からのその重圧がジークの『万夫不当』を押し潰しつつある。

そして レオンハルト・ベッカーに負けるとは、どういうことがジークは理解する。

小鳥と愛でたあの青年は、どうやら鷹か鷲のような猛禽類の類いであつたらしい。それに敵わぬ己は、アキラ・キサラギの足元にも及ばぬ。

世界が揺れる。

弱者が強者に付き従うのは、世界の理だ。そう教えられて生きて来た。それしか知らず、生きて来た。

圧倒的な強者としての生のみを許されて来たジークは、徹底的な敗北の衝撃に押し潰されつつある。

「わ、わたしは、いっしょうけんめいやっている」

ジークの口から溢れ出した言葉は子供のようにつぶく、か細かった。

「だ、だから、そんなへんなめで、みないでほしいんだ」

そして、最後の報が飛び込んで来る。

「隊長……包囲されて、ます……」

「うん」

もうどうしていいか分からない。ジークはひたすら頷いた。

この七日間で、ジークは六度の敗戦と六度の捕縛と六度の、

「大佐、また明日……」

を耳にしている。

自身が『小鳥』と呼んだ男の手によって、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの『最強』の自負心は潰え去ろうとしている。

己が最強であることを疑うことはなかった。だがそれはもう、過去の思い出になりつつある。

周囲の騎士たちも同様であるようだ。力なく、言った。

「降伏を、勧告されてます……」

「うん」

ジークは頷いた。

「これは、れんしゅうだから、まけたっていいんだよ」

第23話 悲劇

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの敗因は、彼女が本物の『万夫不当』ではなかったことだ。

勇将には勇将の、知将には知将の戦い方がある。

たとえ、敗戦の恥辱に塗れようと、勇将は勇将であればそれではなかったのだ。

七日間の実戦訓練を終え、数人の騎士を伴い、ジークの天幕に向かう。

古典に有った故事に倣い『七度捕らえ、七度放つ』。俺がアキラにした献策の正体はそれだ。これによって狼の牙を折り砕く。

ジークに八度目はあるだろうか。

『不撓不屈』の強さを、『万夫不当』は持ち合わせているだろうか？

訓練三日目からは、一方的な展開だった。

前線に出ない『万夫不当』に意味はない。『第五連隊』の騎士たちにとって、ジークは弱みでしかなかったろう。指揮官として未熟なジークは、重荷でしかなかったろう。

『第五連隊』の騎士たちは、皆、満身創痍で疲れ切った表情を浮かべている。右往左往するばかりで、解決策を持たぬ指揮官に引きずり回された結果がこれだ。

「あ、あの副長、まだ訓練は続くんですか……?」
「敬礼せんかあっ!」

怒鳴ったのは、俺の取り巻きの騎士たちだ。

特に命令したわけではない。彼らの方で、『第五連隊』の騎士たちを、己と五分の立場だとは思わなくなったただけだ。

アキラ・キサラギの下に、弱卒はいない。

『第五連隊』の方でも、俺たちは恐持てに見えていることだろう。

「おまえら、いじめるな」

意地悪でなく、真面目に窺める俺の声に、騎士たちが大声で笑い出す。

戦士であることも出来ず、指揮官であることも許されなかったジークは、どうなったろう。

そのジークは、己が設営した『第五連隊』の天幕のどこにも姿が見えなかった。

「おい、アスペルマイヤー大佐はどこだ?」

「さ、さあ?」

その問いかけに、傷ついた騎士たちは首を傾げる。

「おまえらの大将だろう。知らんとは何事だ」

唇を噛む。

自身の策とはいえ、これは少し効き過ぎだ。部隊全体にジークを軽視する空気が出来上がってしまったている。

この練兵場では、様々な訓練が行われる。

急勾配を利用して物資の運搬訓練を行う急坂路の向こうで、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは見つかった。

斜面に隠れるようにして蹲り、膝を抱えて座り込んでいる。

「ジーク…?」

「あっ、レオ!」

俺の呼びかけに応じ、ぱあっ、とジークの顔に無邪気な笑みが広がる。

「どうしたんですか、こんなところで……」

目頭が熱い。

俺がやったのだ。

「うん、ジーク、いっぱいいっぱいまけちゃったから、せめてかくれんぼでかとうとおもって……」

ジークは照れ臭そうに、鼻の頭を擦る。

俺の知っている『戦場の女神』は、もういない。

「そうですか………すいません………俺、見つけるの遅れちゃって………」

なんともろい。

なんとあつけない。

狼のプライドは、きつとこの敗北の大きさを受け止め切れなかったのだらう。

「それじゃあ、ジークのかちでいいかなあ」

「いいですとも」

熱い涙が、次から次に湧いて来る。

その涙を、ジークがぺろりと舌で嘗め取る。

「レオは、やっぱりかわいいね。ジーク、こんどはもっとてかげん

してあげるから」

「はい」

「レオ、すきだよ」

「はい」

このようにして、俺は、七日間の模擬戦を終えた。

失ったものは大きく、得るものは何もない戦いだった。

第24話 そして

アキラ・キサラギは模擬戦の結果に大層満足で、二足のブーツを取り替える嵌めになった。

「レオ！ レオ！ よくやった！」

「……」

俺は嬉しくも何ともなかった。

一方のアキラは、手にしたタクトで狂ったようにブーツを叩き、執務室で一頻り笑いに噎せた。

「見たか！？ アスペルマイヤーのあのつらを！」

「……はい」

著しく精神が退行したジークは、俺のマントを掴んで離さず、子供のようにだだをこね、離れようとしなかった。

その様子は、アキラの嗜虐心を大いに満足させたようだった。

「あいつは、もう終わりだな！」

「……はい」

これは予想を超えた、最悪のケースだ。

戦闘に関する限りプライドの高いジークが、模擬戦での徹底的、なおかつ屈辱的な敗北を許せず、今後の軍務に大きく差し支えを残すのではないか、という懸念は確かにあった。

だが、まさか精神を病んでしまうほどとは思わなかった。

「さあ……さあ！ レオ！ ご褒美は何がいい！？」

有頂天で浮かれるアキラだが、ことはそんなに単純ではない。

「なんでもいいぞ！？」

「はあ……」

俺はため息を吐く。それがまるで宿命でもあるかのよう。

アキラは鼻息を荒くして興奮していたが、しばらくして何か思いついたように、

「そうだ！ ボクを孕ませるか！？」

「ぶばっ……ごぼっ！ ごぼっ！」

一足飛びに予想を超えた発言に、俺は激しくむせ返った。

「な、なんでそうなるんです？」

「気にするな！ いいんだよ！ おまえはそれだけの結果を出したんだ！」

駄目だ。アキラの目が、いつかのように怪しくなってる。

先日、この状態のアキラを放置して、大変な目に遭ったのを思い出す。エドガーのような気の毒な犠牲者を出すわけにはいかない。

「アキラ、落ち着いて下さい。一度、座りましょう」

「椅子をするの？ いいよ！ ボクはもう、準備ができてるからね！」

やばい。口調が変わり始めた。これは……とんでもないことをやらかす前兆だ。

椅子の上で、馬乗りになったアキラの背を摩りながら、腰のカタナを外し、机の向こうに押しやる。……なんとかに刃物は、とても危険だ。

「ボクが脱ぐ？ それとも脱がせる？」

「……」

もう、嫌とは言えんのだろうな、きつと。

不意に、思う。

もし、ジークを潰したのが、アキラだったらどうなっただろうか、と。

きつと、ジークは練兵場の露と消えていただろう。アキラならそ

れをやる。理由は練習中の事故とでも、なんとでも言える。そう思ったからこそ、俺は進んでジークと戦ったのだ。

「アキラ、落ち着きましたよ。俺は逃げませんから」

「ん？ あ、うん。そう？ そうだね。がつつくのは、みっともないよね」

頬を上気させたアキラの腹をさすってやる。

「んん……なんか、それおちつく……」

アキラは、俺を愛しているのだろうか。

すくなくとも俺は、この狂暴な求愛には辟易していて、彼女を愛そうなどとは思えない。

アキラは、ジークと戦わなかったのではない。戦えなかったのだ。ジークを殺せば、俺は決してアキラを許しはしない。だからこそ、アキラは己の手による決着を避けた。今なら、それがよく分かる。

もったいないことだ……。

おそらく、アキラ・キサラギという人物は時代の寵児であり、風雲児の一人なのだ。俺より若くして幾多の戦場をくぐり抜け、下級貴族の出身でありながら、将官の地位に着いたことが、それを証明している。

それが俺のような、凡庸の範囲から出ることのない男に思いを寄せるなど。

「アキラ、しばらくこうさせてください」

「……え？ あ、うん」

アキラを抱き締める。

俺は、この余りにも狂暴なアキラの思いを、大事に取り扱わねば

ならない。この時代の風雲児が、俺ごときのために道を誤らぬように。

いつか、俺という名の軛くわから逃れ、自由に羽ばたくその日まで。

「まるで、夢のようです……」

「……！ お、おまえ……」

これは夢だ。

アキラ・キサラギという時代の風雲児が、俺に見せるうたかたの夢だ。

平民出の俺が士官の身分にあることも。

あの万夫不当を撃破し得たことも。

俺は、彼女に付いて行けるほど優れた男ではない。いつか、武運拙くして消え去るだろう。自分のことだ。確信に近い思いがある。

だが、その日までは彼女の傍らにあり、共に夢を見ていたい。

どこまで行くのか。そんなことは聞かない。

つまらぬ男の俺は、どこまでも連れて行かれるだけだ。

「こんな気持ちだ、あつたんだな……」

ぶつぶつと、アキラは夢見心地で呟く。

「ボクを抱いていると、夢のようか……」

はーっと、アキラは悩ましげな息を吐き出す。

「すごい……すごいぞ。今のボクは、充実している。今なら、なんだってやれる。なんだってできる気がするぞ……！」

そこで俺は、一つ大きく手を打つ。

「それもいいでしょう。ですが、今は目の前のことに集中しましよ
う」

「……そうだな。勢いで関係を持つのはやめよう。うん、この気持
ちは、もっと素晴らしいものだ。それに気づけた。今は、それでよ
しとしよう」

お、おお……あのアキラが理性的だ。落ちてるものでも食べたの
だろうか。

そこでアキラの眉間に皺がよった。

「おまえ、いま、とても失礼なことを考えているんじゃないか？」

「いえ、そんなことは……」

一つ咳払いして、続ける。

「アスペルマイヤーの後任をどうなさいますか？」

アキラは意外そうに答える。

「いや、あれはあのまま使っぞ？」

「え？　しかし、アスペルマイヤーは……」

「壊れてるな。それがいいんじゃないか」

意味がわからない。胸に、どろりと粘着質の液体を流し込まれた
感じがした。

「い、今のアスペルマイヤーが職責を全うできるとは思えませんが

「……」
「だから、それがいいんじゃないか」

「……」
「どうした？」

わからない。アキラが何を考えているのか。

「……アスペルマイヤーを髑るのは、おやめください……」

アキラは鼻を鳴らした。

「ボクに動物虐待の趣味はない。とにかく、これは決定事項だ」

「……」

「副長！」

怒鳴られ、身が竦む。

「副長！ 返事をしないか！」

そうであることを迫るかのように、俺を怒鳴ったのは、アキラ・キサラギ。

時代の風雲児だ。

第25話 覚醒

イザベラ・フォン・バックハウス率いる『第八連隊』との間に予定されていた模擬戦は中止となった。

『第八連隊』とやり合っても勝つ見込みは十分あったし、その仕込みは既に終えていた俺だが、それでもイザベラの反応は以外としか言いようがなかった。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー……『万夫不当』を完膚なきまで叩き伏せた俺だが、なによりもイザベラが怖かった。

戦友であり、竹馬の友でもあるジークを心を壊す程までに追い詰めた俺を、イザベラは決して許しはしまい。その思惑からだ。

しかし、その反面で俺はイザベラに罰してもらいたかった。

恩知らず、恥知らずの裏切り者と、切り捨ててもらいたかった。そうしてもらえれば、この胸に押し寄せる良心の呵責からも、いくらかは解放されたものを。

だが、イザベラはそうせず、壊れたジークを見たときも、少し驚きはしたものの、取り乱した様子はなく、静かにこの後予定されていた模擬戦を断った。

ジークを見たイザベラは、憤慨するか警戒するかのどちらかである。そのどちらにしても、敵対は避けられまいと踏んでいた俺は、いささか肩透かしを食らう結果となった。

不気味。

アキラはそう評した。俺も同様に感じた。

『性悪女』バツクハウスが何を考えるか、『知恵者』バツクハウスが何を企むのか。

執務室に置き去りにされた、あのハンカチが今も脳裏から離れない。

イザベラはその後の部隊編制にも反対する様子を見せず、己の子飼いである『第八連隊』の大幅な人員入れ替えに同意した。

『第五連隊』の騎士たちは、己らの指揮官である『万夫不当』を徹底的に叩き潰した俺を恐れるようになった。

俺という鞭。それに対し、飴を与えたのはアキラだ。模擬戦終了後、疲れ切った『第五連隊』の騎士たちに特別休暇という名の愛想を振り撒いた。

自然、人望と好意はアキラの元に集まる。嫌悪と恐怖は俺の担当だ。自ら立てた策とはいえ、いささか気の滅入る話だ。

そんな俺に、『猫の懐刀』という迫力に欠ける二つ名を贈ったのは『第七連隊』の馬鹿共だ。ありがたくもなるともない。

大きな違和感を感じるものの、『第五連隊』と『第八連隊』の取り込みは順調に進んでいる。

夜。

静かに自室で思索に耽る俺の元へ、エルが一日の終わりを告げにやって来る。

「少佐、そろそろ、おやすみくださいませ」

静かに頷く俺の背中の中に、エルが、そっと、もたれかかる。

「模擬戦で、あの『万夫不当』に打ち勝たれたそうで……」
「……」

そのときが来たのだろうか。だとすれば、ありがたい。
壊れたジークの、天使のような微笑みは、どこまでも俺を苛み、
苦しめる。

エルが抱き着いて来る。

「レオンハルトさまの、ただ一つは、エルのもです」

「……」

「レオンハルトさま、もっと、輝いてくださいませ。エルのために」
「……」

「そのときは、きっと……」

そして、一日が終わる。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、以前と同じように『第五連隊』の隊長として第12旅団に留まっている。

表向きこそ隊長だが、現在の彼女の執務室は託児所同然の扱いを受けており、出入りするのは数人のメイドだけだ。実質の執務はアキラと俺が執り行っている。

自然な流れで『第五連隊』の騎士たちはアキラに依存するように

なっ行ってた。

著しく精神を退行させたことにより、判断能力のほとんどを失ったジークが、なぜ軍に留まることになったのか。

それは、本人の強い希望と彼女の父親であるアスペルマイヤー伯爵の利害が一致したためだ。

全てを失った現在においても、俺と共に在りたいと願うジークと人間である俺に完膚なきまでに敗れ、自己を崩壊させた娘を忌避するアスペルマイヤー伯爵。

アキラが、そのジークを使うと言った。それが全てだ。

旅団内で定期的に行われる佐官級の会議は、副長の俺と大佐であるイザベラが中心となって執り行うことが多くなった。

この日の会議内容は、実際に旅団による『統治』が行われた際の部隊編制についてだった。

そこで、事件は起こることになる。

「その際は、旅団　三個連隊を九個大隊に分け、一個大隊を管理、行政用の一単位とする。そこまではいいわ。それで……指揮官には、どの程度の権限を与えるのかしら？」

ジークの崩壊以後、イザベラの態度に変化はない。会議中の発言も至極真つ当なものだった。足を引っ張るか無視のどちらかだろうと思っていた俺は、ペースを狂わせられっぱなしだ。

「そうですね……小官は政治家でないので、何もいえませんが……」

「あんだ、それで戦時中の旅団の副長が勤まると思ってるの？」

俺を責めるイザベラは、なぜか上機嫌だ。

「す、すいません。勉強しておきます……」

「しょうがないわねえ……私が考えるに」

「ここはつまらない。レオ、そとにいこう」

にこにこ笑顔で発言していたイザベラを遮ったのは、ジークだ。模擬戦以降もアキラが権限を取り上げなかったため、現在も会議に出席している。そのジークだが、会議中はいつも俺の隣に腰掛ける。

「どうしました、ジーク？」

鷹揚に答える。これは俺の罪の証しだ。逃げるようなことはしない。

イザベラは押し黙り、表情を消して静かにこちらを見つめている。会議中のジークは強いストレスを感じるようで、よく爪を噛む。噛みながら言った。

「たびにでよう、レオ。ジークがゆうしゃ、レオがおひめさまをするんだ」

息が詰まった。これは俺がやったのだ。俺の責任なのだ。

この余りに痛々しい発言と光景に、皆一様に目を背ける。

「は、はい、ジークは勇ましいですね。お供いたし」

涙が溢れる。アキラはこれがやりたかったのか？

わからない。

わからないが、俺には耐えられない。

「レオは、なきむしだね。でも、かわいいよ」

「すいません、すいません、ジーク……」

嗚咽が止まない俺の涙を、ジークがなめ上げる。

「レオ、すぎだよ」

「はい」

その次の瞬間 会議室内に、激しい炸裂音が響き渡った。

ジークを除いたほぼ全員が、何事かとそちらを見やる。

イザベラ・フォン・バツクハウスだ。

右手に持ったタクトを、会議用の円卓に叩きつけたままの姿勢で、俯いている。

「…バカ犬」

俺は耳を疑った。今、イザベラは何と言ったのだ？

「……なんで、あんたみたいなバカが、ここにいるのよ？」

室内は水を打ったように静かだった。その中で、一人イザベラだけが、押し出すようにして言葉を吐き出す。

「もう友達でもなんでもないわ……」

「……？」

ジークは首を傾げる。自分に言われていることが理解できないらしく、不安そうな面持ちで、俺の袖を引っ張る。

イザベラが、すっと顔を上げた。

「あんたみたいなバカ、死んだらいいのに」

そう呟いたイザベラは、相変わらず大理石の彫像のように美しくだったが、その深く青い瞳には、何の感情も浮かんでいなかった。ジークを、ただ、その存在だけを許された路傍の石のように見つめている。

俺はアキラ以外で、こんなに恐ろしい表情をする女は見たことがない。

アキラが炎だとすれば、イザベラは氷だ。

そのイザベラの放つ刺さるような『無関心』が、冷氣のように室内に立ち込めている。

「ごくり、と息を飲む。

世界は全ての生命活動を停止したかのように静かだ。その停まった世界の中で、士官の何人かの視線がある一点に集まり、はっとしたように逸らされる。

俺の隣。ジークだ。

「……………」

ジークは口元だけに薄い笑みを浮かべている。

壊れている。アキラはそう表現した。だが、なにか違うような気がした。羽化する前の蝶が、蛹として準備期間を必要とするように……ジークも一時の待機時間を必要としているだけではないのだろうか。

ジークは、ゆっくりと瞬きして、イザベラを見つめ直したその瞳の色が、

一瞬 鮮血の紅に見えた。

ひどい胸騒ぎがした。世界は依然として、イザベラの冷氣が固めたままだ。それを鮮血の紅が覆う時、何かが終わる。そんな気がして

「や、やめてください」

言えた。俺は、ほっと息を吐く。

「ジークを怒らないでください。俺が全部、悪いんです。ジークは悪くない」

なぜか、ふっ、と場の緊張が薄れる。

「馬鹿じゃないの、あんたも」

イザベラの口調には強い苛立ちが滲んでいる。
だがその表情は深く青い瞳を大きく揺らし、とても傷ついたように唇を震わせている。

「しらけたわ」

そう吐き捨て、イザベラは、早足で会議室から飛び出して行った。
会議に出席していた一人の士官が、ぽつり、と呟く。

「副長……少し、女性関係を整理された方がよいのではないでしょうか……？」

「なんのことだ？ 自慢じゃないが、この数年は身綺麗にしていたつもりだ。」

「わるいまじよは、ジークがたいじするよ」

ジークは笑顔すら浮かべ無邪気に言うが、そこからは不吉なものしか感じない。

不吉はアキラだけで十分間に合っている。

ジークを第五連隊の士官たちに任せ、俺も会議室を後にする。

向かうは『第八連隊』の兵舎。

イザベラ・フォン・バックハウスの執務室だ。

『第八連隊』は通常の部隊とは違い、大きくその編成内容は異なっている。

元々、女性が多く、戦場では兵站や工作等の役割を担うことが多かった『第八連隊』であるが、先の部隊編制以来『第八連隊』はその特色をさらに色濃くすることとなった。

どうやら、アキラは戦時中のバックアップを、全てこの『第八連隊』に押し付けるつもりであるらしい。

うまい手だ。

イザベラから実質的な軍事力を削り行動を制限する一方、戦時中の役割を分担することで効率化を図っている。無論、これにも問題がないとは言えないが、今のところ打てる手段では、有効な手段の一つであることは間違いない。

「副長！ 副長！」

急ぎ『第八連隊』兵舎に向かう俺を、一人の女性士官が呼び止める。

「なんだ？」

「副長、どこへ行かれるの？」

ぴしりと敬礼して背筋を伸ばす女性士官は帯剣していない。きっと、内務専門の軍関係者だろう。

「第八連隊の兵舎だ。バックハウス大佐に用件がある」

「そ、それは……キサラギ団長の許可を取っておられるのですか？」

女性士官は、困ったように眉を寄せている。

「俺は副長だ。兵舎内を歩くのに誰の許可もいらんだろう」

「え？」

固まる女性士官。そして、なぜか嫌な予感がする。

「副長に限り、第八連隊の兵舎への出入りは禁止されていますが…

…」

「なんだと……！？」

俺に限り……？ 動機を伴う強い目眩を感じた。

「い、いつからだ？」

「ずいぶん前からですよ？」

アキラは何を考えているのだろう。己の片腕たる俺の行動を制限して、何か得になることでもあるのだろうか……。

頭を抱え、ふらつく俺に「失礼します」と言っただけで女性士官は去って行く。

こんな馬鹿なことが、軍で許されていいのだろうか？

いいわけがない。俺はアキラの戯言に行動を制限される必要を感じない。だが、足取りが重くなるのだけはやむを得ない。

そして俺は歩きだす。大丈夫さ、きつと。そう固く信じて。

第八連隊隊長、イザベラの執務室は、アキラのそれよりはやや小さいものの、洒落者の彼女らしく、瀟洒な仕上がりになっていた。

日光が入るように、壁には高価なガラスを多く使っており、壁紙やインテリア等にも気を使っている。兵舎としては実用的ではないが、長居する分には非常に居心地がいい。

その居心地のよい執務室の中で、イザベラ・フォン・バックハウスが、苛々とペンを片手に弄んでいる。

「なんの用？」

顔を見るなり、ご挨拶だ。めげそうになるが、言いたいことがある。ここに来たのだ。引くわけには行かない。

「先ほどの件です」

「ああ……」

イザベラは気のない返事をして、ふいつと視線を逸らす。

「会議中、発言を遮られて腹を立てるのは分かりますが、ジークは貴女にとって戦友であり、幼なじみの間柄でしょう。もう少し、柔らかい態度で」

「ジークを目茶苦茶にした、あんたにだけは言われたくないわ」

「！」

目を逸らす。イザベラの言うとおりだ。俺は付け上がっていた。

その思いから、口を閉ざす。

「……………」

「ちょっと、やめなさいよ。その辛気臭い顔」

イザベラは、苛々と金髪をかきまわした。

「……………あんたの言いたい事はわかってる。少し、大人気なかったかもしれないわ……………でも、我慢できなかったのよ……………あの、ジークの……………」

そこでイザベラは言い辛そうに口ごもる。ちらちらと俺の顔を窺いながら、

「だから、もうやめなさいって。あんたは、好きでジークをあんなふうにしたんじゃないんでしょ？」

「いや、俺は……………」

勿論、そうだ。しかし、あのジークを相手取り、優勢に事を進めて行く中、俺が昂揚を覚えなかったと言えば嘘になる。だからこそ、俺という男は罪深い。

イザベラは忌ま忌ましそうに言った。

「どうせ、あのおかしな猫の差し金でしょ？」

「……………」

その質問に答えることは出来ない。肯定も否定もしない俺は、き

そして

がりっ。

「ねえ、なんで……？」

「……」

「どうして、あんたは、あのおかしな猫を選んだの？」

「……」

冷たい汗が全身に伝う。脳裏に、いつかのアキラの狂った笑みが浮かび、消えて行く。

「どうして、私を選ばなかったの？ あのときのように……」

また、唾を飲む。

「あ、あのとき？」

「そう、あのときのあんたは、ジークじゃなく、私を選んだ……」

なんのことだ？ だめだ。わからない。

「なんで、猫なのよ。今回も、私を選べばよかったじゃない……」

そしてまた

かりかりかりっかりかりかりかりかりかりかりかりかりかり……

「……そういえば、これも猫繋がりよね。偶然かしら……」

猫繋がり。そう聞いて、浮かぶのはエル顔だ。

「あら……?」

時が止まった世界。

止めたのは、イザベラ・フォン・バックハウスだ。今の彼女からは、アキラに感じるものと同種の恐怖を感じる。

「ねえ、救急箱。大変なことになっちゃったわ」

一度、唾を飲み込み。覚悟を決めると、ゆっくりと目を開く。

そこには、右手を血まみれにしたイザベラが、薄い微笑みを浮かべていた。

狂気に彩られて、なおイザベラは美しかった。

エルフという生き物は確かに美しいが、見方を変えると、こんなにも恐ろしいものだったのだ……。

どうやら、俺は、この飛躍し過ぎた現実に着いて行けてないようだ。現実味のないこの光景に、一步も動けずにいる。

「……救急箱。治しなさい」

「は、ははははい」

くそつ、まただ。また、びびっちゃまって……。

大きく深呼吸して、動機を鎮める。『アスクラピア』の力の行使には、集中力が必要だ。

「あんたって、結構、便利よね」

挨拶をする貴夫人のように差し出されたイザベラの手を取りながら、怪我の様子を診る。

「……三枚、剥がれてます。爪の再生はできませんが、いかがなさいますか?」

「そうね……」

とイザベラは、少し思い悩む様子を見せた。

その間に、頻りに大きく呼吸して平常心を取り戻すよう努める。

大丈夫。俺は傭兵だ。血には慣れてる。

……よし。

イザベラの血に塗れた指先が、ねっとり俺の頬に触れる。

「あんだ、私のものになりなさい。ジークはあんなだし、問題ないでしょ？」

「……」

寒気が走ったが、無視する。

血に染まった机上から、欠けた三枚の爪を拾い、イザベラの指先に押し付ける。

洒落者のイザベラだ。爪がないのは、きつかるう。その思いからの意趣返し。

「……」

激痛が走ったはずだ。だが、イザベラは眉一筋として動かさなかった。

線の細いエルフに耐えられる痛みではないはずだ。

アスクラピアの蛇が、ぞぞと両腕にとぐるを巻く。

イザベラは言った。

「ねえ、私、おかしいのよ」

「……」

「あんだが、誰も好きじゃないって聞いて……ジークを壊した時も……嬉しかったの。遠慮しなくていいんだって」

それが第八連隊の解体に応じた理由であり、アキラと反目することのなかった理由なのだろうか。

ただ、俺に対する強い執着があるのだけは分かる。

アスクラピアに意識を侵されながら、ぼんやりと考える。

「あら、眠るの？」

霞む意識の向こうで、イザベラが笑う。

口元だけを歪めるその笑顔からは、よくないものしか感じない。

そして 背後のざわめきに、ふと気づき、振り返る。

青い腕章をした数人の騎士が厳しい表情でこう言った。

「レオンハルト・ベツカー少佐。風紀部の者です。あなたを拘束します」

ここにいるより、百倍いい。

そんなことを考えながら、俺は意識を手放した。

第26話 営倉にて

夜。

「少佐……エルは、情けなく思っております……」

エルはいつになく、どんよりと言う。

「少佐が少し足りないお方なのは、存じているつもりでしたが……まさか、バックハウスさまと浮名を流されるとは、よもやこのエルも、思いもありませんでした……」

「だから……」

ここは第12旅団の営倉だ。懲罰房ともいう。

「なにもなかったって!」

「痴れ者は、みんなそう言うのでございます」

面会にやって来たエルの小言が始まって、早一時間余りが経過している。

「……団長から何か連絡は?」

これが一番、思いやられる。

「はい、アキラさまは、大層ご立腹のご様子です……帰られた暁には、右腕をもらうとおっしゃっておいででした」

「み、右腕を!？」

「……お覚悟なさいますよう」

容赦なく言い放つエルの様子に、俺は頭を抱えた。

「なあ、エル。俺と亡命しないか?」

「流石は少佐。恥知らずにも程があります」

エルは格子越しに、俺の腕に残ったアスクラピアの蛇の名残を指す。

「でもまあ、蛇も無事なようですし……今回は、エルが仲立ちすることになっています」

「仲立ちって……エル、おまえは団長と仲がいいのか？」

エルは無表情で頷く。

「猫は仲間内では争いません」

「……」

また種族の習性か。

だが、確かに『猫のはつたり』という言葉がある。本来、猫という生き物はとても温厚で、喧嘩の勝敗もはつたりで決めると聞いた。本当だったのか？

アキラが温厚？ なんの冗談だろう。

「バックハウス大佐はどうなった？」

「あの方は、門閥貴族でございます」

おとがめなし、か……。

「まあ、いい。豚箱暮らしも気軽なもんだ」

「流石は、恥知らずの少佐。慣れっこというわけですか」

「まあな」

しかし、営倉入りも久々だ。

連隊時代は、再々ぶちこまれていたからな。いやはや、なつかしい。飲む打つ買うが当然だったあの頃に帰りたい。

「少佐、また恥知らずなことを考えていますね？」

今夜のエルは手厳しい。

そしてまた、一日が終わる。

営倉暮らしが三日目に入った。

最初、のほほんと構えていた俺にも、焦りが出る。

アキラの手紙には、しばらくそこにいろ、と短く書かれていた。

これが、どういうことか俺は深く考え込む嵌めになった。

何が起こっているかは分からないが、今の俺はここに居た方がよい。少なくとも、アキラ・キサラギの判断ではそうだ。

俺を取り巻く状況が、著しく変化したのだ。具体的な事は何一つ分からないが、そういうことだ。

そして今のところ、アキラにはそれに対する効果的な手段がない。「こりゃ、本気の大目玉を覚悟せにやならんな……」

俺が割と本気で反省しだした頃、一つの噂が耳に入った。それは

アスペルマイヤーが俺を殺す。

というものだ。

向かいの牢に入った営倉仲間が教えてくれた。

なんだ、そんなことか。と気が抜けてしまう。ジークに殺されるのであれば、俺にとってはむしろ迎合すべきことで、思い悩む必要は何一つない。

「エルにも教えてやらんと……」

早い者勝ちだ、と。

なにせ、命は一つしかない。目玉のように二つあればよかったが。

面会には、第七連隊の馬鹿共も訪れた。

通常、営倉では面会を許されないが、士官であり副長である俺は、

その立場上特別に許された。

「おお、神父の息子。割と独房が似合つとるな！」

「うは！ 副長！ エルフとやったって、本当ですか！？」

だが、何人かは割と心配そうな顔を見せた。

「長いな……士官のお前が、三日も営倉入りとは……マジな話、ベツカー、何をやらかしたんだ……？ 貴族のお偉いさんに手え出す程、お前に根性ないだろう」

「なんだと、根性見せてやろうか！」

いかん、むきになった。

「アスペルマイヤー伯爵に気をつけるよ。団長が営倉明けを許さんのも、そういうことだろう」

「伯爵……？ ああ、そういうことか」

アスペルマイヤーの一族郎党か。それはそうか。得心行った。

「ここは大丈夫だとは思うが……食い物にも気をつけるよ？」

「いいんじゃないか？……べつに」

俺は神父の息子だ。神の報いを信じてる。

第27話 猫と性悪女

第12旅団の執務室では、エミリア騎士団准将アキラ・キサラギが、ぴんぴんと撥ねた癖った毛をかき回している。

副長のレオを営倉送りにしたのは、外ならぬアキラだ。

『第八連隊』の兵舎への訪問の報を耳にしたアキラが風紀部への密告を進んで行ったのだ。

しかし、その後の経過は失笑すべきものになりつつある。

営倉にぶち込んだまではよい。アキラは腹を抱えて笑ったくらいだ。しかし、その後旅団内部で流布し出した噂。

アスペルマイヤー伯爵が、レオンハルト・ベッカーを狙っている。

アスペルマイヤー伯爵は、自慢の愛娘ジークリンデを精神の崩壊にまで追いやった者を許しはしまい。想像し得ることだった。だが、副長の彼を狙うとは……アキラの誤算はそこにある。

プライドの高い伯爵は、ジークリンデが人間に負けたことを認めはしまい。きつと、团长たる自分を狙うはず。そのときは一族郎党、皆殺しの憂き目に遭わせてやる。その目論みをあざ笑うかのように流布した噂が、元々癪性なアキラの神経を苛んでいる。

見込みが甘かった。アキラは内心臍を噛む。そして、くしゃくしゃになつた髪をかき回す。

「くそ、いつもだ…！」

ミスをするときはいつも、副長のレオンハルト・ベッカーに拘わることに関してのことがほとんどだ。

レオンハルト・ベッカーが死ぬ。

そんなことは思いもしない。

そんなことは許しはしない。

レオンハルト・ベッカーが死ぬ時は、アキラ自らの手によってであるべきだ。

しかし、狼の獣人はプライドが高くしつこい。きつと執拗にレオを付け狙うだろう。

守り切れるか。

アキラの懸念は、それだけではない。

第12旅団の副長たるレオに秘密裏に届いた手紙の数々。

アルフリード、トリスタン、ノルドライン、ザールランド、諸外国からの調略の書状。

引き抜きだ。

あの『万夫不当』を模擬戦とはいえ、徹底的に打ち負かした平民出の士官、レオンハルト・ベッカーの評判はうなぎ登りだ。

どの書状を見ても、このニーダーサクソンより待遇はよい。

現在、エミールリア騎士団は、レオを持て余している。平民出でありながら、並ならぬ軍略の才を見せた彼を、どのような地位、立場を持ってしても遇するわけにはいかないからだ。

打ち破ったのが、エミールリア騎士団の『万夫不当』である以上。

全ての状況が、レオの出国を機としている。

「ふ、ぐっ……」

アキラは泣きそうになった。

副長たるレオを磨き上げ、力を示す機会を与えた。全部、自分でしたことだ。この状況を作ったのは、外ならぬ自分自身なのだ。

この状況をレオに教えるわけには行かない。営倉に入れたままにしてあるのはそのためだ。

入れたのはよい。だが、いかに会いたかろうが、この状況を打破する道が開けぬ限り、出すことは適わない。

まさしく泣きっ面に蜂のアキラの元へ、一人の招かれざる来客が訪れる。

イザベラ・フォン・バツクハウスである。

「へえ、これが准将の……」

イザベラは、やや感心したように執務室を見回す。

「ノックくらいしろっ！」

アキラは袖で目元を擦りながら、机上の封筒をかき集める。

アキラ・キサラギの執務室は、本人の職業軍人的気質を具現化したかのように実用的なものだった。

書類の束が積み上げられた机上には、観葉植物の鉢植えが一つ。一応、応接のための長椅子やテーブルもあるが、それにしたって革張りの無骨な代物だ。洒落者のイザベラには少し気に入らない。

「しかしまあ、こんな殺風景なところで、いつも救急箱と二人で何や

ってんの?」

「き、救急箱だつて?」

問い返ししながら、はらりと一枚の封筒が机を挟み、向こうへイザベラの方へ落ち、アキラは、あつと悲鳴を上げそうになった。それを見落とすイザベラではない。

「あらあらまあまあ」

封筒の宛て名にちらりと視線を走らせ、イザベラは、ふっと笑った。

「……おやおや、救急箱へのラブレターじゃない」

「み、見るなあっ!」

慌てて詰め寄るアキラを差し止めるように、イザベラは、すっと手を差し出す。

「その様子じゃ、ラブレターはまだありそうね」

「凶星を突かれアキラは、

「うつつ」

と立ち止まる。

「きさま! ボクは上官だぞ!」

「それを言うなら、私はバックハウスだわ」

権威には権威。高級軍人であるアキラは軍階級を、門閥貴族であるイザベラは門地を振りかざし対抗する。

「ぐぐぐ……」

イザベラは、ここで切り捨ててよい相手ではない。ジークリンデの時と違うのは、レオがいないことだ。それが返ってアキラを冷静にさせている。

「……引き抜きか。まあ、ウチもやってることだし、卑怯ではないわね」

他国の優秀な士官を引き抜くのは、特に珍しい話ではない。そのため、イザベラに驚いた様子はない。

「それでどうするの、団長」

「なにがだ!」

アキラは憤慨して怒鳴り返す。

「これよ、これ。救急箱にはいい話よね、これ」

イザベラは、ぺらぺらと書状を振った。

「あ、あいつはボクの部下だ。ボクの勝手だろう！」

そのアキラの勝手に懸かっているのは、外ならぬ彼の命である。

そのため、アキラは歯切れが悪い。

「ふーん……」

『性悪女』イザベラ・フォン・バックハウスは、にやりと笑う。

「私が知恵を貸して上げようか？」

「おまえが……？」

アキラは怪訝に眉を寄せる。

エルフの知略は捨て難い。その提案は魅力的ではある。だが、その意図するところが分からない。不気味過ぎる。

「今の私は、とても冴えているのよ」

「……」

「私はね、貴女のことともジークのことも、これまではよく分からなかったの。でも、今はよくわかる」

「おまえに、ボクの何がわかる」

アキラは腰の刀に手を回す。今すぐイザベラを切り捨てた方がよい。本能が強く囁くのだ。イザベラ・フォン・バックハウスは危険である、と。

「ジークがなぜ、あんなに簡単に壊れちゃったのかも、今の私には、よくわかるの」

アキラは鼻を鳴らした。

「おまえの、お喋りに興味はない」

アキラの思いは、アキラだけのものだ。これがどんなに素晴らしきものであるか。それはアキラが時間を掛けて育んだものだ。それを

「おまえのような、たちの悪いエルフに、ボクが理解できるわけないだろう」

「わかるわよ！」

イザベラは喜々として言う。

「どうでもいいんでしょ？ …… のためなら、世界を焼き尽くす覚悟がある。神だって、八つ裂きにする覚悟がある。 …… 以外は、何がどうなったって構わないのよ。それを、私はついに理解したの！」

「なんだおまえ？ おまえは大概おかしいぞ？」

…… 変わった。アキラの中に直感に近い確信がある。

イザベラ・フォン・バツクハウスは変わった。

アキラ・キサラギに仕える忠実な副長なら、きつとこつ答えただらう。

これはこれで、もう『何者』かであるのだ、と。

第28話 月猫のワルツを

「おい、こらぼんくら」

そもそも菅倉の見張りというのは、罰則で決められる。罪人の面倒は罪人で見ろということだ。

士官である俺が菅倉にぶち込まれて、七日が経過しようとしている。見張り番の衛兵への呼びかけもぞんざいになるうというものだ。

「なんです、また少佐ですか？」

「またとはなんだ、このごろつきめ」

面倒臭そうにやって来た若い衛兵とのこの掛け合いも、もう四回目になる。

「お前、元傭兵だろ？」

「あれっ、わかりますか？」

「どうだ、うちの部隊に来んか？ 第七連隊は傭兵上がりが多い。

他所とは違って堅苦しくない。楽しいぞ？」

「その変わり、命の保証はない、でしょ？」

言って、にやりと笑い合う。

第七連隊は、ほとんど前線に出ずっぱりの実戦部隊だ。その分戦死者も多い。明日をも知れないやくざな戦争屋が、賑やかに、陽気に、時には残酷に命を散らすのが『第七連隊』だ。

「考えときますよ」

「おう、待ってるぞ」

しかし、ここに来て何人のごろつきを引っ張った？ もう十人は数えたぞ。

エルにはこの状況を告げてある。

一言、『急げ』と。察しのいい彼女は、それで全てを悟ったようだった。薄く笑い、

「それでは、準備をしておきましょう」
とだけ言った。

事態が動いたのは、夜も更けてからだ。

「少佐、少佐……」

呼びかける聞き慣れた声に俺は目を覚ます。

堅い寝台の上で身を起こし、鉄格子の方へ目をやるとそこには、ランプ片手にエルがこちらを見つめていた。

その隣には引っ張った若い衛兵の姿もある。

「少佐、やばい雰囲気です。逃げてください」

「伯爵の手の者か？」

俺に関する噂を知っていたのだろう。衛兵は格子の錠を開けながら、静かに頷く。

「囲まれているか？」

「いえ、その最中つてとこです。急いでください」

「すまん、恩に着る」

「それはいずれ形のあるもので……」

囁くように言い交わし、ごつんと拳をぶつけ合う。しかし……

「エル、おまえがなんでここにいる？」

「黙ってついて来いと、おっしゃったではありませんか」

頭を抱える俺に、エルが剣を突き出してくる。戦って、切り抜けるということだ。

「命の保証はないぞ？」

「はい……！」

答えたエルは、笑顔だった。

「こちらです」

衛兵の案内で営倉の裏にある馬厩へ向かう。

「ご武運を」

頷く。

追っ手は後ろよりかかる。エルを先に馬に乗せ、俺はその背後に乗り込む。

女連れか。俺も中々、洒落者だ。一つ、深呼吸して

「行くぞ、エル」

「はい…！」

気合を入れて、馬の腹を蹴飛ばす。

正面入り口の衛兵所を抜ければ、第12旅団の兵舎はすぐそこだが、そこを抜けられると思うほど、俺は馬鹿ではない。向かうのは裏手にある非常用の出入り口だ。

左手にエルを抱え、右手で馬を繰りながら、周囲を見回す。

馬厩から俄に上がった物音に反応した人影が、大声で叫びを上げた。

「いたぞ！ レオンハルト・ベッカーだ！」

正面入り口の衛兵所は篝火を焚き、一個小隊……三十人程の人数で固められている。既に制圧されてしまったらしく、衛兵の姿はない。装備にばらつきがあることから、アスペルマイヤー伯爵の私兵であることは間違いない。正規の騎士でない。おそらく傭兵だろう。その場で馬首を巡らすと、怒号を上げる追っ手に背を向け、走り出す。

小さく震えるエルを抱く腕に力を込める。

「怖いか？」

「いいえ！ いいえ！ エルは嬉しいのです！」

「よし！」

戦場の空気に当てられたか、激したエルは俺の首に手を回す。

「もっと強くつかまれ！ 振り落とされるぞ！」

「はい！」

この緊迫した空気に、俺もまた激する。

戦場の空気とはこういうものだ。生き死にを賭けた空気が、人をどこか、おかしなものにさせる。

「ああ、レオンハルトさま！ お慕いしております！」

「よし！ では地獄までついて来い！」

「はい！」

あれ？ 何か、今、どさくさに紛れて

「こつちだ！ レオンハルト・ベツカーは裏手に向かったぞ！」

新しい怒号が上がり、俺は再び、馬の腹を蹴り上げる。

蹄鉄が砂煙を巻き上げ、篝火の光が、はつきりと目に映る。裏手の非常用の門に人影は二つ。白いマントに赤いトーガを纏ったその姿は正騎士だ。敵ではないが

「おし通る！」

老朽化し、もろくなっていた門戸を突き破って飛び出す。二人の騎士は、この状況が飲み込めならしく、大声で俺を呼び止める。

「少佐！ 短気を起こされるな！」

次の瞬間には、追って来たアスペルマイヤーの私兵と有無を言わず斬り合いになるだろう。巻き添えを食らう彼らには悪いことをした。

単騎、闇を駆ける。

このままどこへ向かうというのか。

尖った月が照らす道を砂塵と共に駆け抜けながら、俺はひたすら

この先の展望に思いを巡らせるのだった。

エルが、ぼんやりと蕩けたような視線で俺を見つめている。

「ああ……少佐……少佐は、エルのものでございます……少佐の蛇も、エルが食べてしまいたい……」

わからんことを。

俺の回りの女は、皆そうだ。理解できないことばかりを言う。街道を逸れ、細い山道に入った所で馬の歩みを緩める。

「エル、金は持って来たか？」

「はい！ ああ……はい！」

エルはまだ雰囲気に当てられたままにいるようだ。ひどく興奮している。潤んだ瞳が、きらきらと月明かりに照り返り、抱いていると少しいけない気分になってしまう。

ここで一つ、決断をしなければならぬ。

旅団に帰る道を模索するか。

思い切って、このニードーサクソンを捨てるか。

地位に未練はあるし、アキラの信頼を裏切ることにも抵抗はあるが、俺が魅力を感じるのは後者の案だ。

俺が運命を変えたとしたら、今この瞬間をおいて外よりない。

幸い、金はある。そして、今の俺はついてる。菅倉の見張り番が

いい仕事をしてくれたのもあるが、あと少し手引きが遅れていれば今頃、死んでいてもおかしくない。

そのついてる俺の判断は

「エル、俺はこのまま国を捨てようと思う。また、その日暮らしの傭兵稼業に逆戻りかもしれないが、おまえも来るか」

「はい、はい……！ エルはどこまでも少佐にお供いたします！」

エルがまた、俺の首に回した腕に力を込める。

「少佐、口づけを……」

「……」

エルには命をくれてやると決めている。今更、その行為に抵抗は感じない。抱き寄せながら、

「なあ……目を閉じてくれないか……？」

「そんなことをしては、少佐の顔が見えません……」

苦笑いと共に、肩から力が抜ける。こんなことをしている場合ではないのだが

「女と一緒にとは、余裕だな。レオンハルト・ベッカー」

憎しみの籠もった低い声。

月夜が照らす一本の山道の向こうに、銀色の髪を短く刈り込んだ狼の獣人が騎乗して立ち塞がっている。

「誰だ……？」

「テオドル・フォン・アスペルマイヤー」

驚いた。伯爵本人のお出ました。

ついていると思ったが……この逃げ場のない一本道で、しかも狼の獣人の追っ手に出くわすとは……俺も相当ついてないようだ。忌ま忌ましそうに鼻を鳴らす。

「ふん、あのエルフの言う通りだったか……」

エルフ……脳裏に一瞬、イザベラの顔が浮かんで消える。

「大胆で狡猾なお前は、逃げ場のないここで追っ手をやり過ぎ……半信半疑だったが、まあいい」

こりゃあ、終わったぞ……。

苦い笑いが込み上げる。何の準備もなく、剣一本でどうにかなるほど、狼の獣人は甘くない。

そつとエルフの耳に囁く。

「……最後のチャンスだ」

エルフは、熱く悩ましい吐息を俺の耳に吹きかける。

「まだです……まだ、レオンハルトさまは輝かれます……それに……逝くときは、共にと、エルフは決めております……」

まだ頑張れということか。エルフもなかなか厳しいことを言う。しょうがない……。

それでは、精一杯の努力をするか。永遠ならざる命のために。

赤い瞳に殺意を燃やし、テオドル・フォン・アスペルマイヤーは言った。

「レオンハルト・ベッカー。おまえを殺した後、その猫の娘も殺す」
さすが狼。一度憎めば、徹底するというわけか。

だが、今の俺は時間を稼がねばならない。万が一にも希望があるとするならば、それは救援の到着だ。それに賭けるよりない。

故に、今はお喋りに興じる。

「無力な女を手にかけるとは、伯爵、狼のプライドはどこへ行かれたので？」

「ニンゲンごときが、我らの誇りの何を理解できるというのか」

素晴らしい。

テオドル・フォン・アスペルマイヤーは、狼の獣人の見本のよ
うな男だ。

誇り高く、残忍で、それでいて容赦がない。

混じり気のないそれに、感心してしまう。俺は、ここまでにはな
れない。

「ジークには気の毒なことをしたと思っている。だが貴方の行動を、
ジークが喜ぶとは思えない、いかが」

本心を語る。少し聞きたいこともあった。

雲の切れ目から月明かりが差し、筋骨逞しい伯爵の全身が露にな
る。

「あれには家督を譲ろうと思っていた。だが……ニンゲンのおまえ
に思いを寄せたばかりに、あの体たらく。『七度捕らえ、七度放つ』
か。ゴキブリに虐げられた、狼の気持ちがおまえに理解できるか？」

伯爵は岩を思わせる頑強な風貌に、怒りを漲らせ、語り続ける。

「あれの恥辱を雪ぐには、おまえの断末魔をもってほかよりない」

「俺を殺したからといって、ジークが元に戻るとは思えない」

「だが、我らの屈辱は雪がれる」

「一門、総意の決断ですか？」

「無論」

「ジークは？ 彼女がそれを」
「ジーク！」

伯爵は突然大声で喚き散らした。震える肩は今にも吹き上がりそうな怒りの奔出を予感させる。

「ジーク！ ジーク！ ジーク！ 娘を気安く呼ぶな！ ニンゲン風情が！」

この瞬間、俺は理解した。逃れられない死というものの存在を。

「連れて来い！」
「？」

伯爵が吠える。そして

じゃらり。

伯爵の背後から、重い金属質の音が響く。

数人の騎士に、大型の四足獣捕縛専用の鎖で拘束され、引き出されたのは

「ジーク！」

ここまで余程抵抗したのだろう。ジークの美しい銀髪は乱れ、衣服は所々汚れ、破れている。

「貴方という方は……！」

伯爵は狂ったように大声で笑った。

「おまえの断末魔を聞き、血を浴びれば、娘もきつと正気付く！」
ジークは、自由にならない五体を頻りに振り、牙を剥いて周囲を威嚇していたが、俺の姿を闇の中に見つけると、

「レオ？ レオだ！」

嬉しそうに天使のような笑顔を浮かべる。

胸が痛む。これは、俺がやったのだ。そして理解する。伯爵の胸の内を。

伯爵は、この胸の痛みを、きつと何度も繰り返したのだろう。

死んで当然。

だが、俺の胸の中で事の成り行きを見守るだけだった、エルが囁く。

「さあ、レオンハルトさま。戦い下さいませ、エルのために」

なんとということだろう。エルの胸には、愛と憎しみとが同居している。ここまで、彼女を歪めたのも俺だ。

俺が、やったのだ！

エルが笑う。これもまた、天使のような柔らかさをしている。

「レオンハルトさま。輝いて下さいませ、エルのために！」

俺は剣を取る。

そのときが来たのだ。

第29話 遅れた勇者と壊れそうな姫

俺は、あんまり強くない。

そもそも、この大陸においては、人間という種族は滅びつつある種だ。皆、形こそ俺と似通っているが、ドワーフやホビット、犬や猫の獣人。そんなものの血を引いている。それらは皆、人間より強く賢い。

「どうした！ レオンハルト・ベッカー！」

伯爵にたたき伏せられた俺は、血反吐を吐き捨て、ぎゅっと拳を握り込む。

剣は、最初の一撃で弾かれ、どこか遠くに飛んで行ってしまった。どうやら伯爵は、素手で楽しみたいようだ。

……悪趣味な。そう思わずに、いられない。

遠目に、両肩を抱くようにして、うっとりどこちらを見つめるエルの姿が見える。

俺は立たねばならない。生きている限り、ゼロでない可能性に賭けねばならない。

「伯爵、少し手加減してくれませんかね……」

不敵に笑って見せる。

「まだ減らず口を叩けるか」

伯爵が地を駆け、迫って来る。

その動きは、素早すぎて残像のようにしか見えない。

俺は何度も宙に舞い、叩きつけられ、引き起こされ、そしてまた、
飛ぶ。

伯爵の狂ったような笑いが耳を衝く。何か喋っているようだが、それはもう、意味を成さない音としてしか聞こえない。

俺は、あんまり賢くない。

ガキの時分、何も知らずに騎士に憧れ、何も知らずにここまでやって来た。

神父の親父は、俺には馬鹿みたいに甘かったから、

「精一杯やって来い」

とか言って、少ない金をかき集めて、送り出してくれた。

その息子が戦場で人を殺し、罪のない民間人を焼き殺したと知れば、親父はどんな顔をするだろうか。

息子が恩知らずにも裏切りの上に身を立てたと聞けば、どんな顔をするだろうか。

どこかから、哭いている声が聞こえる。

酷く苦しそうで、奥底から絞り出すような、魂の慟哭だ。

頭の奥で、少し鈍い音が聞こえた。どうやら、目が潰れたらしい。

「うあああああつ！ レオ！ レオーーーーっ！」

とても苦しそうな悲鳴だ。俺はこんなに悲しい悲鳴を聞いたことがない。

「やめて、やめて下さい！ 父上！ 私が弱いのがいけないのです！」

そんな悲しそうな声で、俺を送るのはやめてほしい。

人という生き物は、戦う者だと親父から聞いたことがある。生きている限り、立って戦わねば、その日の糧を得られないとも。俺は、立っているだろうか。

「レオ！ ああ、レオ！ もう立つな！ 立ってはいけない！」

俺はどうやら、立っている。まだ、戦えるようであるらしい。

「やめろ！ やめないか！ それ以上、レオを傷つけてみる！ 殺してやる！ 殺してやるぞおっ！」

だから……そんな苦しそうで、悲しそうな声で、俺を惜しむのはやめてほしい。

「許さない！ 許さない！ 許さない！ 絶対に殺してやる！」

ついに戦場の女神が吠えた。

銀色の髪が、月明かりに映えて美しい。

深紅の瞳に灯が灯り、月夜の闇に、鮮血の赤が、轟音と共に乱れ飛ぶ。

最後に、一つ思い出した。

親父が言っていた。

人間だけが、不可能を可能にする。

雨が降っている。

優しい雨。

暖かい雨。

「ああ、ああ！ 神さま！ 夜空に輝くあの月のように、私の命を欠いてしまってもかまわない！ だからどうか！ どうか……」

洒落たことを言うやつだ。

銀の美しい髪が、俺の頬を髭り、風に流れて行くのが見える。

「レオ、許せ！ 許せ！ 私が弱かった！」

いつか見た、戦場の女神が泣いている。優しく暖かい雨は、彼女の流した涙であるようだ。

どうやら、俺は、彼女に愛されているようだ。

「レオンハルトさま……おつかれさまでした……」

苦しい。とても、痛い。もう終わりにしてほしい。

「まだです。まだ、レオンハルトさまは、輝かれます」

そう言って、エルも泣く。女神に勝るとも劣らぬ悲しそうな表情

で。

俺はまだ踊らねばならないようだ。

くるくると回る、この猫のワルツに合わせて。

第30話 猫目石

宵闇。

薄暗い室内で、エルとアキラが激しく言い争っている。

「……ふざけるな！ キミは一体なにをしていたんだよ！」

「……」

エルは、ぼそぼそと喋る。その声は俺の耳までは届かない。

「それは……でも、まさか戻るなんて思わないだろ！？」

「……」

「うるさいな！ キミこそ、バックハウスをなんとかしたらどうなんだ！？」

何の話をしている……？

「……」

「わかった。それはなんとかしよう」

「……」

「うん……うん……そうだな。ボクらが争うのは、馬鹿らしいな」

この二人、一体どういう関係だ？

「……ジーク……危険……」

「あいつは殺しても、殺し足りないやつだ」

「……！」

「レオ！？ 目を覚ましたのか！？」

見つかった。

テオドール・フォン・アスペルマイヤー伯爵は、行方不明になった。

正気を取り戻した伯爵の実娘、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの証言では、事の露見を恐れた伯爵は、国外に逃亡したということだ。

「伯爵？ あのミンチみたいなのが、そうさ。けど、あいつ、余程、腹が立つたんだな。まあ、やつがやらないなら、ボクがするつもりだったけど」

とはアキラの談だ。

徹底的に痛め付けられた俺は左目を失い、若干ではあるものの、右足を引きずることになった。

失った左目に関してはどうにもならないが、足の方は、訓練次第で走れるようになるらしい。これもアスクラピアの神官のおかげだ。

ジークはアスペルマイヤーの門地を引き継ぐことになった。これからは、アスペルマイヤー伯、ジークリンデとなる。今は相続の手続きと新しく編成された『第五連隊』のとりまとめに忙しいようで、療養所にいる俺の元へは会いに来ない。

だが、ひっきりなしに届く手紙の内容には、

逢いたい。

愛してる。

迎えに行く。

と、びっしり求愛の言葉が書き連ねられており、少し辟易してしまふ。

ジークの手紙を読んでいると、自分が女になったような気がする。

イザベラは、俺の暗殺未遂事件を経て、実父クラウディオ・フォン・バックハウスの身柄を拘束した。事件に大きく関与した疑いがある、ということらしいが、俺はこの顛末に、黒い影のようなものを感じる。

強く調査の必要を感じた俺は、そのことをアキラに具申ししたが、それは、

「あの性悪女が尻尾を出すわけないだろ？ 今は休め」

と一蹴されてしまった。

現在バックハウス侯爵家の実権は、イザベラが掌握していると言っている。彼女が、ジークのように家名と門地を引き継ぐ日もそう遠くはないだろう。

模擬戦から、端を発したこの一件について、アキラは何か思うところがあるらしく、この件に関しては口が重たい。

そのアキラだが、現在、俺が休養しているこの療養所にいる。

海に近い療養所の一室では、エルが、

「どろぞろ」

などと呑気に茶など振る舞っている。

アキラは、気分よさそうに茶の香りを楽しんでいるが、この光景が既に一週間連続で続いている。

「いつまでここにいろつもりですか？」

「どういう意味だ？」

アキラの眉間に、びしりと深い皺がよるが、ここで引いてはもられない。

「団長が、なんでここにいろんですかって聞いてるんですよ」

「そんなことは関係ない。おまえは、黙ってボクを受け入れればいいんだ」

なんと横暴な……。

「旅団はどうなるんですか？ 帰った途端、書類仕事で忙殺される、なんてのは、俺は嫌ですからね？」

「しょうがないやつだ。その時は、ボクが付き合ってやる。安心しろ」

駄目だ。理屈が通用しない。

事件以来、アキラは俺の顔をまともに見ようとしな。茶を飲んだ後、テラスに腰掛け、潮風を浴びていたが、不意に、言った。

「ボクを見る目が、半分になってしまったな」

アキラは頑なに、俺の方を見ようとはしない。

「しょうがないです。目玉一つで済んで、よしとしますよ」

「よくはない」

「まあ、そうですね。二つあるから、一個くらい、いいやつてもの

ではないですね」

自分でもよくないとは思うが、こういう性分だ。のんびりと答える。

「おまえの全てはボクのものだ。流れる血も、今正に打つ鼓動の一つですらも、ボクのものであるべきだ。それが……少し欠けてしまった。この責任を、誰に取らせればいいんだ……？」

アキラが振り向く。両肩が猛烈な怒りに震え、毛が逆立っている。

「ボクが馬鹿だった……。高い授業料を払うはめになったが、もう、遠慮はしない。おまえにもだ」

強すぎる愛は、治らぬ病に似ている。

本来は、健やかであるべきはずのものが、返ってそれを危険なものにしてしまう。

「早く治せ……そろそろ、出征の気配がする……」

「はい」

アキラはまた、吹き付ける潮風の方に視線を戻す。

「旅団の正式名称を決めねばいけませんね……」

「うん……それなら……」

二人、海を見る。

「何か、案がお有りですか？」

第12旅団は、あくまでも便宜上の名だ。無くともよいが、出征するとなれば、あつた方がよい。その方が皇帝の覚えがいい。アキラは、言った。

「クリソベリルキャッツアイ……」

猫目石だ。

第30話 猫目石（後書き）

猫は四人のヒロインが繰り広げるワルツです。主人公はそれに合わせて踊る。

テンポの早いシーンの展開が、逆に目まぐるしく感じるかもしれません。猫は最後に折り返しに入ります。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

そして、これからもよろしく願います。

皆さんの感想、待ってます。

第31話 猫2匹（前書き）

この作品はヤンデレものです。狂愛を理解できない方は、これ以降の読了をお薦めできません。

これより物語は佳境に進んでいきます。過激できつい表現もあります。胸をえぐるシーンも目白押しです。

そして、この作品は大人のファンタジーです。清濁合わせ飲む覚悟のある方のみの読了をお薦めします。

このような前書きは、非常に苦しい限りですが了解よろしくお願います。

第31話 猫2匹

エミールリア騎士団への復帰が間近に近づいている。

既に、旅団へと帰って行ったアキラからは、毎日のように手紙が届く。その内容は、俺の不在に対する恨みつらみが半分。もう半分は起こった出来事についての考察や意見を求める内容だった。

身体はともかく、頭の方は無事なんだから、そちらの方は、しっかり働かせろ、ということだ。

我ながら、いい上官を持った。憎たらしくて涙が出そうだ。

まずは、復活したジークについての私見。俺に関する、個人的な感情はさておき、彼女の行動から察することのできる思考や、これから予測される行動などを手紙に書いて送り返した。

テオドール・フォン・アスペルマイヤーの失踪の証言は偽証だが、これは咄嗟の判断で出来ることではない。その後、門地を引き継いだことからして、この事実は彼女の政治的野心や権力に対する執着を示唆するものではないか。

果たして、武人のジークがそこまで考え得るだろうか。ここでもやはり、イザベラの姿が脳裏にちらつく。

そして、イザベラのことに関しても言及しておいた。

俺自身、未だ療養中の身のため、現在のイザベラの状態について言及することは出来ないが、それでも一層の警戒を促すことは出来る。

イザベラ・フォン・バックハウスは、エルフである。

エルフという生き物は、『魔術』を使う。

『魔術』は地、水、火、風の『エレメント』を用いたものの他に、

『妖術』 『呪術』 『託宣』 『奇跡』 『仙術』 の五つがある。

問題は、イザベラ・フォン・バックハウスが個人の資質として、どの系統の『魔術』を得意とするかだ。

イザベラがどの系統の『魔術』を得意とするかは未だ判明していない。通常、エルフはそのプライドの高さから、能力を誇示する傾向がある。

だが、イザベラはそれをしていない。つまり……彼女の能力は、大っぴらにできるものではない。知られると、周囲に警戒を及ぼす類いのものであることが考えられる。

俺の予想では、イザベラ・フォン・バックハウスの得意とする『魔術』は『呪術』だ。

陰ながら、人を呪い、行動を覗き見ることのできる『呪術』は、どこへ行っても忌避されることが多い。イザベラが扱う『魔術』が『呪術』であるならば、能力を隠していることの説明にもなる。

『呪術』により一層の、注意をされたし。
そして、バックハウス、アスペルマイヤー、両名の共謀に警戒されたし。

その思いを手紙に書き記した。

「密書になさいますか？」

俺の仕事の性質上、手紙を出す場合、エルには、いつも気を使わせることになる。

「いや、かまわない。そのまま出してくれ」

この程度のことはアキラも考えているだろう。イザベラの方でもこの手紙の内容に興味は覚えまい。その思惑から、エルには通常の手簡として処理するよう指示を出す。

「少佐、見て……かまいませんか？」

「ん？ なぜ？ ……いや、うん、そうだな、読んでおいた方がいい」

今回の手紙に限り、エルがなぜ中身を気にしたかは謎だが、イザベラが使う『魔術』が『呪術』であるならば俺の周囲にも注意が必要だ。

「……………」

エルのスカートの裾から覗いた長い尻尾が、ひくひくと動いている。

「呪術、でございますか……………」

「そうだ。抵抗策を練らんな」

「それは必要ありません」

首を傾げる俺に向かって、エルは、にこつと微笑んだ。

「エルも准将も、猫でございます。猫に呪いは効きません」

確かに、猫の獣人、というより祖先の『猫』という生き物は厄除けや魔よけとして珍重されていたらしいが……………。

「俺は、どうなるんだ？」

「エルと准将、どちらかの側からは離れられぬよう、お気をつけください」

「……………」

どうやら俺は、とても猫と縁が深いようだ。

旅団に帰った俺を待っていたのは、アキラの抱擁だった。兵舎にある俺の部屋の前で、しばらく待っていたらしい。人目も憚らず、俺の胸に抱き着き、しばらく無言だった。

遠目に、物影からちらちらと窺う馬鹿共の姿が見える。

「アキラ、人目がありませんから……」

「そんなこと、どうでもいい。おまえはじっとして、ボクを受け入れろ」

「准将、お部屋の中で、ごゆるりと楽しまれては？」

エルが余計なことを言う。

「……そうする」

アキラは、なんだか元気がない。頷いて、鼻を軽く嚙る。

「何かありましたか？」

「……たりない。たりないんだ……」

ぶつぶつと呟くアキラに促され、ようやく部屋に入る。

しばらくぶりの我が家に、なんだか、ほっとしてしまふ。兵舎に帰って、落ち着くとは、俺は骨の髄まで軍人になってしまったようだ。

アキラの肩を抱くようにして居間に行く。右足を少し引きずるせいで、抱き着かれたままでは歩きにくい。

「取り敢えず、座れ」

「はいはい」

促され、ソファに腰掛ける。その途端、アキラが馬乗りになって来る。

「今のボクには余裕がない。余計なことは言っな」

「はいはいっ、て」

アキラはためらうことなく、唇を俺に押し付けて来る。

いつものように乱暴で、一方的な凌辱。一方的な愛。行為は、エルが茶を持って来るまでの間、延々と続いた。

「……すごい……二週間ぶり、これは……うん……」

そしてまた、アキラは眠る。

きっと、この行為は、アキラには強すぎるのだろう。

「はあ……やはり……」

と、行為を見ていたエルが大きく息を吐く。

「あるとき、少佐の蛇を食べておくべきでした」

またわからんことを。アスクラピアのことだろうか。あれは食べる物ではない。ではエルはなんのことを言っているのだろう。背徳的なことを言ってるのだけはわかる。

そんなことを考える俺の頬を、エルが、がしつと驚掴みにする。

そして あの日、お預けになった口づけを交わす。

しつとりと絡み付くような、全てを味わい尽くすような、そんな口づけだった。

「……准将の味もします」

そう言って、濡れた視線を逸らさぬまま、エルは唇の回りをゆっくりとなめる。

「まあまあ、でございませす。……准将は、少し刺激に弱すぎませす。」

「これではエルの番はいつになったら来ることやら……」
「ん……」

と胸の中でアキラが身じろぎし、俺の背中に冷たい汗が伝う。

「んん…… エルか…… キミだけだぞ…… おすそわけは…… 少し、眠るから……」

「はい、おやすみなさいませ。 准将」

そう言い残し、エルは、ふらふらと怪しげな足取りで去って行く。

……いかん……頭の中が、真っ白だ。

しかし、この二人、一体どういう関係だ？ 面識は余りないはずだし、療養所でも殆ど口を利いていた様子もなかった。だが、二人の間には確実に友誼が存在する。

わからん。おれには特殊過ぎる。猫の誼みは理解できん。

今日、一日だけで二人と なんて日だ。

第32話 弱気

望もすが望むまいが、朝というものはやって来る。

療養明けの俺は、エルに用意させた軍用の杖をつきながら、溜ま
っているであろう仕事をこなすため、執務室へ向かう。

「副長！ 帰って、きた……」

「派手にやられたそうだな！ 神父の息子って、おい……」

馬鹿共の挨拶に切れがない。閉じたままの左目と、引きずる右足
が気になるのだろう。

気遣ってくれるのは嬉しいが、俺も男だ。同情は嬉しくない。

やれやれ、と俺は立ち止まる。

「おお、すかたんども。まだ生きてたのか」

「……」

皆、痛々しそつに目をそらす。

「戦場じゃ、目玉の一つ、足の一本無くすくらい珍しくないだろう。
しけた面するんじゃない」

「そつ言つがよお……」

馬鹿共の言いたいことはわかっているつもりだ。

俺たちは傭兵上がりの戦争屋。殺して幾らの商売だ。五体に不備

が生じたら、それが潮時。だから、この俺の様子に色々と思う者も多い。

「なんだ？ この足のことか？ これならその内、治る。走れるようにだってなる」

「目玉は……どうにもならんだろ……」

隻眼で通用するのは天才的な才能を持つ者か、余程努力と習練を積んだ者に限られる。俺は天才でなく、努力をする時間があるわけでもない。

わかってる。

わかっているんだ。

それでも留まるということが、どういふことかは。そして、馬鹿共も、そのことの意味を理解している。

「まじかよ、副長……」

「俺……副長に命助けてもらったこと、あるわ……」

「やばいって、誰が団長抑えんだよ……」

馬鹿共がそろそろと集まって来る。

俺は、空を見る。

馬鹿 仲間たちも、空を見る。

しばらく、そうしていた。

その日のアキラは、ずっと俺の膝の上にいた。

「アキラ？ その、執務ができないんですけど……」

「何もなくていい。ボクのために、そこで、じっとしていらいたいんだ」

「そういうわけにも行かんでしょう」

そつと、アキラの背後から書類を覗き見る。

『軍事法制関連の書類だ。』

ニードーサクソンは、元々は専守防衛の中立国家だ。『エミリア騎士団』の主な活動内容が医療活動であったこともあり、戦うための軍隊は国境を守備する程度しか保持していなかった。

事情が変わったのは三年前からで、北の大国『アルフリード』との間に結ばれていた不可侵条約が破棄されたためだ。

その後、国境を挟んで大小の小競り合いを繰り返して来たが、この『エミリア騎士団』は、あまり『占領』『統治』の経験がないため、その手の軍事法制が整備されていない。

だが、今はやっている。これはつまり

「ついに、大きく打って出ますか」

「……ああ、アルフリードは内政に不安を抱えているからな。上層もこれを契機と見たんだろう。領土を削ってやって、その返還を条件に新しい条約でも結ぶのかもな」

「新しい条約、ですか？ ぴんと来ませんね。どうせなら、ガツンと領土拡大しちやえばいいのに」

「まだ中立国家だからな、うちは」

ふむう、と俺は、アキラのお腹をすりすり考える。

「……ボクのことがかわかってきたようだな……」

「なんのことです？　って、それアキラが一人で決裁しちゃっていいんですか？」

アキラは頬を緩め、持っていたペンを投げ出した。

「思っていたより、いい椅子だ。なんか、こっ、下っ腹が暖まる感じがする……」

そう言っって腰を揺する。

「だから、立ちますって」

「座っているのに、おかしなやつだ」

「……で、先の書類ですけど、アスペルマイヤー、バックハウス両大佐と検討して、それから結論出した方がいいと思うんですけど」

「んっ……あの二人のことはいいよ」

なぜかアキラの声が少し惱ましく聞こえる。

「……二人は、俺が帰って来たこと、知ってますか……？」

イザベラはともかく、ジークは毎日のように手紙を送り届けて来たのに、帰って来た今朝になって何の連絡もない。

アキラは、きゅっと眉を寄せた。

「二人には、この兵舎への出入りを禁じてある。案外簡単に了承したぞ？」

「なんでそんなことを……」

アキラは、ぱっと膝から飛び降りた。

「知れたこと。アスペルマイヤー伯爵は、お前を暗殺しようとした。いくら、お前を助けたからと言って、その娘であるヤツが、お前と顔を合わせるの是对外的にもまずいんじゃないか？」

正論だ。アスペルマイヤー伯爵の門地をジークが引き継いだ以上、俺と懇意にすることは、ジークに取ってプラスにならない。内通の疑惑でも掛けられれば、一連の事件を画策したとも取られ兼ねない。

「バックハウスのやつは、風紀部に目を付けられてる。これはおまえのせいだ。うん、おまえが悪い。ボクは悪くない」

何故かアキラは視線を逸らす。

「ああ……」

なるほど確かに。当事者の一方である俺が営倉入りで、いくらイザベラが門閥貴族でおとがめなしだからとは言え、その後もそうとは限らない。

おかしな嫉妬や執着から来る行動ではないようだ。
納得して頷く俺に、アキラは言った。

「おまえは、もう、何も考えなくていいんだ。何も気にしなくていい。そんな身体じゃ、役には立たないだろ？」

それは、何げなく放たれた一言だった。

余りにも軽い調子が、俺の心に投げかけた波紋は大きく

「どうしたんだ。固まって……」

「いえ、俺は……」

見る見る内に、アキラの顔が青白くなって行く。

「ちっ、違う！　今のは違う！　ぼ、ボクはそういつつもりで言っ

たんじやない！」

「はい……」

いや、正論だ。こと、軍事に関する限り、アキラ・キサラギの見解は、いつだって正しいことがほとんどだ。

組織というものは個人の存在に拘わらず、どのような形にしても、なんとかやって行くものだ。俺が居なければ駄目、などということはない。

退役。

その考えが、一気に現実味を帯びて来る。

「やめる！ そんな遠くを見る目で、ボクを見るな！ おまえの残った目は、ボクをそんな目で見る為に残ったんじゃない！」

「アキラは正しいですよ？ 胸を張っていて下さい」

涙すら浮かべ、身振り手ぶりで必死に訴えるアキラに笑みを返す。

俺だけか。未練があるのは。何もなくていい、と言ったアキラの同情が、今の俺の現状を指し示す全てなのだろう。

これでも、剣一つで身の上を立てて来たつもりだ。次の出征が終わり次第、などとのんびりしたことを考えていたが……。

同情されるとなれば、話は別だ。これでも、決断力だけはあるつもりだ。

肩から、ふっと力が抜ける。今朝方、馬鹿共にも氣遣われたばかりだ。

「アキラ……」

「や、やめろ……！ その先を言うんじゃない！」

アキラは身を小さくして上目使いで俺を睨み付けて来る。小さな身体全体で、俺の言葉を拒絶しようとしている。

だからこそ、俺は告げねばならない。

この小さな時代の風雲児が、俺に対する執着故に、行く先を誤らぬように。

震えるアキラの肩に、そっと手を掛けた。

その瞬間

「ああああああああああああああああああああ！ なんでもわからない！ ちがう！ ちがう！ あれはただの言葉のあやだ！ おまえがボクから離れることは、絶対に許さない！ 絶対に許さない！ その先を言うてみる！ 絶対に許さない！」

それは、正に、爆発。

コバルトブルーの瞳が、黒い狂気の炎に燃えている。

「言うな！ 足を切るぞ！ 足を切って飼ってやる！ おまえはボクのものだ！」

その迫力に俺は息を飲む。

アキラ・キサラギという人物は、その小さな身体の中に、どれだけの狂気を秘めているのだろう。

俺はどうなるのだ？

決して逃れられぬ運命というわけか？

だとしたら、俺は踊り続けるよりほかない。

この狂った猫のワルツを

そして、夜。

「少佐、そろそろお休みに……どうかされました？」

背中越しにエルという言葉聞きながら、未だ痺れるような感のある、働きの悪い右足を摩る。

「……今日、団長に役立たずと言われてしまったな。少し、落ち込んでいたところだ。気にしないでくれ、俺は立ち直りが早いのが信条だからな」

いかん。エル相手にぼやくとは、俺も相当参ってるようだ。

「役立たず……？ 少佐が、でございますか？」

「いや、いいんだ。本当のことだ」

「本当？」

窓ガラスに映るエルの肩が小刻みに震えている。そしてなぜか、今夜の彼女は食い下がる。

「何が本当なのですか？」

「目が潰れて、足を引きずるようになった騎士のことだ。そんなことより、何か暖かいものを持って来ては」

「少佐がそのような在様になられたのは、少佐のせいではございません。それに、足は治りません。それを……!!」

「怒るな。もう、どうにもならん。それより」

「仕返しなさいませ、少佐」

ええ、俺の頼みは無視ですか……って、今、エルは何と言った？

「力及ばずながら、エルがお手伝いいたします」

はっきりと意思表示したエルは、いつものように無表情だった。

「むきになるな。もういいんだ」

足を切るとまで言われたからな。そこまでされてはかなわん。どうにでもなれ、というのが現在の俺の心境だ。

「……どうしましょう。ああ、それがよいかもしれません……」

ぶつぶつと呟きながら、エルは去って行く。

そして、また一日が終わる。若干の不安を残したまま……。

第33話 勇者の求愛

また新しい朝がやって来る。

俺が失ったものは大きい。気を取り直して、新しい何かを手に入
れなければならぬ。

「副長！」

杖をつき、出仕する俺を、一人の騎士が呼び止める。

「なんだ？」

「はっ！ 私は第五連隊の者です。お時間を少々、よろしいでしょ
うか？」

「……かまわんが……」

俺を呼び止めた騎士は、全身をきつちりとした礼装で固めてある。
殺伐とした軍用のそれではなく、何らかの式典時のように胸には勲章
を飾り、マントやトーガには高そうな質のよい生地のものを使って
ある。脚絆レギンスも清潔で、見た感じでは卸したてのように見えた。

「こちらへ……」

騎士は、門閥貴族にするかのように、恭しくこつべを垂れる。

『第五連隊』の隊長はジークだ。……嫌な予感がする。

先導され、『第五連隊』の兵舎へ向かう。

通路の端に、これもまた正装の騎士たち立っており、平時であれば敬礼のみに留まる挨拶が今朝は膝を折り、まるで王侯貴族に対するような恭しさだ。

「おい、これは何の茶番だ……」

「あちらへ。隊長がお待ちです……」

俺の質問に、先導する騎士は答えず、他の騎士に倣って通路の端で膝を折る。

曲がり角を曲がると、赤いカーペットが敷き詰められた通路に出た。ぎよつとして、その前方に視線を滑らせていくと、そこには

通路の端に立ち並ぶ第五連隊の騎士たちが一人残らず抜剣し、剣の切っ先を天に向ける形で直立している。

空いた口が塞がらなかった。

その立ち並ぶ騎士たちの向こう　赤いカーペットの終点には、一人の銀髪の騎士が膝を折ったままの姿勢で微動だにせず、じっと何かを待っている。あれは……

「……ジーク？」

なんの真似だ？　何かするだろうと思っていたし、何かあるとも思ったが、これは予想を遥かに超えている。しかも、この後の展開が、まるで予想つかない。

カーペットを踏み締め、急いでジークの元へ向かう。

「大佐、これは、どういうことですか？」

「……………」

ジークは膝を折ったままの姿勢で、俯いて答えない。

「あの、大佐？」

「……………」

沈黙を貫くジークに、一人の騎士が歩み寄り、耳打ちする。

「……………隊長……………副長が来られました……………」

「え？ いつ？」

「今です……目の前におられます……」

「まだ……心の準備が……」

全部聞こえている。何の茶番だ。俺は少し呆れてしまう。

「大佐、用件がなければ、小官はこれで帰りますが……」

「ま、待ってほしい！」

ジークは一度、びくりと震え、意を決したように立ち上がった。その瞳が

鮮血の赤。

深紅の紅。

ぎくりとした俺は、慌てて退こうとするが、未だ不自由な右足が杖にぶつかり、転倒しそうになった。

「危ない！」

ぱっ、と飛び出したジークに抱きとめられるようにして支えられる。

「……………」

ジークと目が合う。

「レ、レオ、いつも私の想像を超えるのは、やめてほしい……」

こちらの台詞だ。これではあの結成式典のダンスの続きのようじやないか。

身じろぎして、離れようとする俺に、ジークが言った。

「あ、怖がらないで。目は、あれ以来戻らないんだ。特に、その……いや、今は少し興奮しているかもしれないけど……乱暴はしない」

目の色が戻らないだと？

いつも昂揚している

戦闘態勢とい

うことか？

「大佐……離れてください」

「なぜ？ レオは……ああ、そうだね。まだ、早いね」

少し名残惜しそくに、ジークは二、三步引き下がった。

ほう、と一息つくジークに、一人の騎士が花束を差し出す。

あれは……薔薇？ 薔薇の花束か？ 何のために？

ジークは受け取った薔薇の花束を両手で胸の前に持ち、切れ長の目元を、きりりと引き締め、俺を見つめ直した。

「……………」

なんだ？ 何をするつもりだ？ いかん、何故か焦ってしまつ。自分でも、頬に血の気が上がって来るのが分かる。くらくらする。その目を回す俺に、ジークが言った。

「ずっと、この日を待っていた。私はこの日のために生まれて来た。私、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、貴方 レオンハルト・ベッカーを愛している。受け取ってほしい」

「……………」

差し出された薔薇を受け取りながら、俺はもう、ぶっ倒れそうだった。

堂々。

それ以外に言葉が見つからない。そして俺は、ここまで真つすぐな愛の告白を受けたことがない。きつと、この日のために備えたのだろう。吐き出された言葉には、これっぽっちも淀みがなかった。

しなやかな肢体に、八頭身のすらりとした体型の背筋を伸ばし、ジークは両頬を羞恥の色に染めている。

やはり、きつちりとした騎士の正装を身に纏い、皇族の式典にでも出席するのではないかというくらい、騎士としてめかし込んでいる。

目の前が、ちかちかする。だが、これだけは言っておかなければならない。

「ジ、ジーク……あなたのされようは、男のものです……」

ジークは再びその場に膝を折る。

「そんなことを言われても、私はこのやり方しか知らないし、これ以外のやり方をする気もない。だから、このままの私を受け入れてほしい」

「ああ、しかし、しかし！ ジーク、困ります……！」

蹲り、膝を折ったままの騎士たちが、ぼそぼそと何やら言い交わしている。

「……おい、堕ちるぜ……賭けるか？」

「ああ……乗った……しかし、うちの隊長もなかなかやるねえ……」
「まさか本当にやるとはな……」

くそつ、連隊でグルか。しかし、堕ちるとは何事だ。俺はそこらの小娘ではない。浮かれた町娘とも違う。だが……ジークを、はっきりと拒絶出来ないのも事実だ。

そこへ更に、一人の騎士が進み出て、ジークに小さな小箱を渡すのを見て、俺は悲鳴を上げそうになった。

ジークは強く頷き、その小箱を受け取る。決意を秘めた強い目付きだった。

「私、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、貴方、レオンハルト・ベッカーにこの剣と忠誠を捧げることを誓う。」

この生涯を賭けて、貴方を幸せにすると誓う。私と結婚してほしい」

ひどい動機がする。なんだ、俺は。ときめいているのか!? 女になった気すらする。

「堕ちるぞ……」

うるさい馬鹿共め。だが、自分でもこれ以上ないくらい赤面しているのが分かる。

ジークが囁く。

「迎えに行くって、手紙に書いたよね?」

確かに、そう書いてあった。それは認める。アキラの読む気にもなれない手紙とは違い、ジークの手紙は全て読んだ。それも認めよう。

だから、その小箱を開くのだけは、やめてくれ。

いよいよ切羽詰まったその時、背後から

「アスペルマイヤー！ きいさあまああああ！」

聞き慣れた声がある。これは悪魔の声だ。ひどく怒っている。きつと、地獄からやって来たに違いない。ジークが、ぽつりと呟いた。

「後少しだったのに……つまらない……」

第34話 最後の切り札

「ジーク！ 逃げて下さい！」

このまま行けば、ジークとアキラは、血で血を洗う修羅場を展開することになる。

「今、いいところなんだ。レオの頼みでも、それはできないね」

ジークは、ゆったりと言い放ち、自然な動作で腰の剣に手を掛ける。

後の都合など知ったことが、とその顔に書いてある。…やる気まんまん。

「アスペルマイヤー！ おまえだけは、この手で殺す！」

その背後からの声に、全身の毛が総毛立つ。アキラのこれほどの怒りに満ちた声を俺は、今まで聞いたことがない。

だが、なぜ？ なぜ、そんな全てを知っているような……

覚悟を決めて、振り返る。

必殺の黒いオーラを身に纏い、未だ抜刀こそしていないものの、アキラは、元々吊り目がちな目を更に吊り上げ、修羅のような形相だった。

その背後でイザベラが、にこやかに手を振っているのを見て、頭をレンガでぶつ叩かれたような錯覚を覚える。

……性悪女が！　なんてことをしてくれたんだ！

この身体を盾にするよりほかない。兵舎内で刃傷沙汰を起こすわけには行かない。

「アキラ！　落ち着いて下さい！」

決死の覚悟でアキラに抱き着く。

「レオ、離せ！　このけだものの顔を引き裂いてやる！」

大声で喚き散らすアキラの瞳は、ぎらぎらと殺意の炎に燃えているが、俺を傷つけるつもりはないようだ。俺の足に気配りをしているのか、抵抗は弱い。

ぎりぎりだ。アキラの限界は、すぐそこだ。

張り詰めた一本の糸が、なんとかアキラの理性を繋げている。それが切れてしまえば、俺を傷つけることも厭わなくなるだろう。

「嫉けるね……」

アキラを抱き締める俺の背後で、ジークが押し出すように低く呟く。

「レオ……あまり焦らされると、我慢できなくなってしまっよ……」

杖をかなぐり捨て、渾身の力でアキラを抱きとめながら、足を引きずりこの場から立ち去る。最後に、イザベラがこう言った。

「頑張つてね、救急箱」

大声でジークへの殺意をぶちまけるアキラを抱き、俺は必死で第七連隊への兵舎へ引き返すのだった。

人間、頑張れば修羅場もなんとかなるものだ。

暴れ回るアキラを、なんとか執務室に放り込み、吹き出した汗を手で拭う。

「……………」

そのアキラだが、執務室に入った途端、今度は急に無口になった。俺の首っ玉にしがみつき、腰に足を回した姿勢で動かない。

低く、地獄の闇からはい出た影のように、アキラは呟く。

「レオ……………求婚、されたのか……………」

「え？ あ、はい」

耳元で、ぎりっとアキラが歯を食いしばる音が聞こえる。

「今日、アスペルマイヤーを殺す。あいつは、ボクのものに手を出した。もう、生かしてはおけない……………」

「アキラ……………」

「この世で、最も惨たらしいやり方で、やつを殺してやる……………！
目をくりぬき、舌を引き抜き、五体という五体を寸刻みに切り刻んでやる！」

これは……もう……俺の手には負えない……。

「俺はジークの求婚を受けるつもりはありません。アキラ、お願いですから、そんな物騒なことを言わないで下さい」

「ジーク……？ やつのことが……！」

駄目だ。呼称一つで、ひどく反応している。

営倉から脱出したあの日、運命を変えることが出来なかったのが悔やまれてならない。

「決闘だ。やつも断らないだろう……」

確かにジークは断らないだろう。そして、どちらか一方が永遠に姿を消す。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーとアキラ・キサラギ。

どちらも、今の俺を語る上では欠かせない恩人だ。

俺に切れるカードは、あと一枚。

これも時間稼ぎにしかならんだろう。これだけはやりたくなかった。だが、この時代の風雲児を、俺への詰まらぬ執着から、道を誤らせるわけには行かない。

アキラ・キサラギの隣に侍る以上、一瞬でも長く、彼女が時代の風雲児でいられるために、俺は、最後のカードを切る。これでもう、俺の手札はすっからかんだ。

アキラの耳元で、そっと囁いた。

「愛しています……」

その言葉のもたらした効果は劇的だった。

「え？」

驚愕。アキラの顔にはそれしかなかった。

「レ、レオ、今、なんて言ったんだ？」

「はい、俺は」

大きく一つ深呼吸して、アキラの、ぱつちりと見開かれたコバルトブルーの瞳を、真正面から覗き返す。

「アキラ、あなたを愛しています」

「……………」

アキラは俺の首に回した手の力を抜き、ちよつと離れようとして、それから少し迷う素振りを見せ、今度は腰に手を回し、そつともたれ掛かるようにして、俺の胸に顔を埋めた。

「もう一度、言ってほしい」

「……………あなたを愛しています」

「もう一度」

「愛しています」

「ボクだけか？」

「あなただけを、愛しています」

アキラは、俺の胸に顔を埋めたまま、深呼吸を何度も繰り返した。とても穏やかで、静かで、それでいて平安に満ちた呼吸だった。

「アスペルマイヤーを意識するのは、もう、お止めください」
「…うん」

「あなたは、アキラ・キサラギです。瑣事に拘泥して、自らを貶めることはお止めください」

「…うん」
「アキラ、愛してる」
「うん」

アキラは苦しそうに、胸に手を当てて、ふらふらと己の椅子に腰掛けた。

頬を赤く染め、俯きかげんに言った。

「今日は、ボクの邸宅に泊まって行ってくれ」
「はい」

これで俺の命運は定まった。もはや、変わりませぬ。力尽き、命果てるのが先か。
それとも

第35話 アキラ・キサラギ（前書き）

アキラ・キサラギはとても複雑なキャラクターです。

そして、彼女の過去の話には不快な出来事や表現も含まれます。

ここを飛ばされましても、特に問題はありません。

それでも私は大人だよ、この作品を楽しんでる。という方のみどうぞ。

押し付けがましい前書き、度々、すみません。

第35話 アキラ・キサラギ

十年前。

レオンハルト・ベッカーという名の少年が、傭兵稼業に就いて未だ、間もない頃。

ニーダーサクソンの首都、サクソン。

古く寂れた城下町サクソンの一角。『オールドシティ』とも呼ばれるそこは、未だ建築様式の古い木造の家が立ち並んでいる。

当時のニーダーサクソンでは、内政面の不安が経済を圧迫し、それが数多い浮浪児を生み出す土壌となっていた。

経済の不安定から来る家族の崩壊。酒浸り、借金、育児放棄。理由は様々だが、子供達は、そんなものから逃げ出し、自由な街角で浮浪児としての生活を選ぶ。アキラもその中の一人。

アキラはアキラ。それ以外の何者でもない。自分のことに関しては、猫の獣人の血を引いていることと、アキラ……『晶』という名が、今はもう失われて久しい東方の大陸のものであるということだけしか知らずにいる。

未だアキラがキサラギでない時分のお話し。

浮浪児の増加は、当時のニーダーサクソンに取っては深刻な社会問題であった。取り分け、オールドシティでは増加の一途を辿る浮浪児たちが起こす問題が首都サクソンにおいて大きく取り沙汰されている。

窃盗、売春、薬物売買、色々だ。

浮浪児たちは、あまりにも自由な生活と引き換えに、よく死んだ。貧困から。或いは、薬物、不衛生。家の前でたむろされると邪魔だから、そんな理由もあった。

浮浪児たちの着衣が匂い、不快である。

ある貴族が発したこの言葉が原因で、街頭の『浄化作戦』が決行されたのはこの時期だ。

その『ある貴族』の名をテオドル・フォン・アスペルマイヤーと言った。

貴族たちの『浄化』は徹底を極めた。

この浄化作戦の指揮を執ったのが『ある貴族』であったため、『浄化』は執拗かつ悪辣を極めた。

住処は人の所在の有無に拘わらず焼かれ、捕まった者は問答無用で暴行を受け、切り殺された。

未だ幼く十になるならずだったアキラも、捕まった者の一人。

遊び半分で小突かれ、殴り倒され、その小柄故か性別を勘違いされたようで最悪の暴行こそ受けなかったが、尻尾を持って振り回された際、根本から尻尾が取れてしまった。

「おらあ！ この汚らしい、小僧が！」

小さなアキラは蹴り飛ばされ、外壁に身体を叩き付けられた。

胸の奥で鈍い音が響き、口中が鉄の味で溢れ返った。

殴られ、蹴られ、路地の奥まった場所へ追い立てられる。

もうだめ……

ついに絶望と痛みに屈したアキラが、全てを投げ出そうとした瞬間

間、狭い路地から一本の手が伸びて来て、暗闇にその小さな身体を引っ張り込んだ。

「大丈夫か、ぼく？」

「…ボク…？」

路地に引き込んだ少年の身体からは、教会で嗅いだことのあるお香の匂いがした。

「くそっ、ここに居ちゃ、俺もまずいぞ」

「……」

少年の年の頃は、自分と五つも変わらないだろう。身なりは割としっかりしているが、浮浪児と強弁できないこともない。ここに居ては彼も『浄化』の対象になるだろう。

「畜生、貴族のぼんくらどもめ。なんてことしやがる。こんな小さな子にまで……」

甘ったれたことを言うやつだ。きつと、この少年の親も、とびつきり甘いのだろう。苦痛に喘ぎながら、アキラはそのように考える。

「キミ、酷い出血だぞ。どこを………あの、くそ共……！」

「……」

アキラの頬を、熱い水滴が打つ。

どうやら、少年は泣いていて、熱い水滴の正体は、彼の流した涙であるようだ。

「大丈夫……。大丈夫だ。俺が治してやるから……」

少年は、必死に袖で目元を拭いながら、悔しそうに言う。

頬を伝う水滴が落ちて来て、アキラの唇に触れる。
それを、こくと、飲み込んだ。

「いたぞ！ こつちに二匹いる！」

喧噪から一際大きな声上がる。

「行くんだ……」

少年は、青ざめた表情で、そつとアキラの背中を押す。

「俺は、あんまり、強くない。このままじゃ、キミを守れない……」

息も切れ切れに呟く少年に、アキラは頷き掛ける。

最後に聞いた。

「名前……」

「……？ レオ、しがない傭兵さ……」

この辺りでは『レオ』というのはペットによく付ける名前だ。

アキラは、その場を駆け去る。何故か身体の痛みは消えていて、その足取りは軽い。

ホビットの奇運という言葉がある。

ホビットという種族は、器用さと愛嬌。そして類い希なる強運とを持っている。

ホビットの持つ不思議な運命は『奇運』とも呼ばれており、その行く末が不幸か幸福かは分からないが、その奇妙な運命が、アキラに味方したのは確かだ。

その後、アキラには幸運が幾つかあった。

逃げ込んだ先の『キサラギ』の名を持つ老夫婦が、晩年まで子供に恵まれず跡継ぎを探していたこと。東方の名を持つ老夫婦が、自分たちと同じように、やはり東方の血を引く跡継ぎを求めていること。

『キサラギ』の家は『名誉貴族』の出身で世襲による爵位の譲渡こそ許されるものの、個有の領地はなく、貴族の家柄としては下級だった。そして、代々続く職業軍人の家系であり、そこでアキラは厳しい習練を積むことになる。

必殺必倒の抜刀術『居合』。東方の格闘技『空手』。特殊な歩法術も身につけたものの一つだ。元々、猫の獣人の血を引くアキラは、並ならぬ才能を発揮し、それらを真綿が真水を吸い取るように習得した。そして、ついに『キサラギ』を名乗ることを許された。

老夫婦は厳しくも優しくアキラを育て上げたが、アキラが『キサラギ』を好いたことは一度もない。『空手』も『居合』もキサラギのお仕着せであったからだ。アキラが厳しい習練を好んだことなど一度もない。元々、彼女には酷い怠惰の悪癖がある。

家名を継ぐと同時に、アキラは『キサラギ』を飛び出し、幼年学校を飛び級で卒業した後、『エミリア騎士団』に所属することになる。

老夫婦の悲願である家名の復古を果たすためだ。『キサラギ』を好いたことのないアキラだが、恩は感じていた。

かくしてアキラ・キサラギは世に出ることと相成った。

『キサラギ』は武門の名門で、それ故アキラ・キサラギは『中尉』の階級からはじまることとなった。

門閥貴族の出身でないアキラは、貴族であるにも関わらず前線に

配されることが多かった。そのため武勲に恵まれ、苦勞せず『中佐』の階級まで進む。

折しも、北の大国『アルフリード』との間に結ばれていた不可侵条約が破棄され、大幅な騎士の増員が議会により可決された。

アキラは中佐として『第七連隊』を指揮することとなり、そこに配属されるであろう新入りの騎士たちの叙勲式に参加せねばならなかった。

忌ま忌ましいことだ。アキラはそのように考えていた。

『第七連隊』は、傭兵上がりスライクスと従騎士の寄せ集めだ。それを押し付けられる自分は、いい面の皮ではないか。

貴族の家柄としては下級である『キサラギ』にはやむを得ないことなのかもしれない。

やむを得ず出席した叙勲式。

だが、そこで、アキラは思いもよらぬ運命の再会を果たすことになる。

「ああ、レオ。マントの留め金がずれているよ。これからは正騎士になるんだ。きちんとしなければいけない。これが終わったら、晴れて私の部下だよ」

耳に飛び込んだその名に反応したアキラは、視線を滑らせる。八頭身の優れた体躯に銀色の長い髪。知っている。有名人だ。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだ。

こいつは、今、なんと言ったのだ？ レオ？

あの日、路地裏で会った少年の名前は、遊びで呼んでいい名ではない。

アスペルマイヤーの前に立つ、ちよつと惚けた青年の顔を、アキラは見てしまう。

あいつだ。

今、この瞬間までは臆げだった過去に、眩しいほどの光が当たる。なんで、こいつがここに居る。

彼を手に入れることが出来れば、理由は何でもよかった。

アキラはそう考え、実際、そのようにした。

必死だった。恥も見栄も外聞も何も無い。アキラは、ただひたすら、それを掴んだ。

レオを殴るアキラの拳は怒りに満ちていた。

（おまえは、なんだ！？ 何故、アスペルマイヤーの玩具になっている！）

「二人きりのときは、ボクのことはアキラって呼べ」

アキラが『キサラギ』を好いたことは一度もない。

そして、出会いから十年の時を経て、路地裏の少女は、ついにレオと結ばれる。

ホビットの『奇運』がアキラ・キサラギをどこまで運ぶのか。

知る者はいない。

第36話 戦乱の足音

質の良いシルクのシートに破爪の痕跡を残し、アキラ・キサラギが俺の身体に、肢体を絡ませるようにして、健やかな眠りにについている。

小さな出窓から薄暗く青い朝の光が射して来て、新しい一日の始まりを告げようとしている。

だが、俺の胸にはついぞ晴れ渡ることを知らぬ曇り空のように、どんよりと暗く、重苦しい灰色の雲が垂れ込めていた。

この日から、アキラ・キサラギは変わった。

闇雲に癪癢を起こし暴挙に至ることはなくなり、執務においても冷静沈着。殊更、俺を気遣うようなこともなくなり、以前と同じように様々な雑務を押し付けて来るようになった。以降は何事も騒動を起こすことなく、第12旅団 改め、クリソベリルキャッツアイの運営に励んでいる。

さて、この『クリソベリルキャッツアイ』であるが、時を於いて、その名称の長さから、或いは、ごろの悪さからか、『猫目石』または単純に『猫』と呼ばれるようになった。

軍事法制も詰めの部分に入り、『猫目石』は、日々濃くなる戦乱の気配に、ぴりぴりと神経を尖らせている。

ジークからは、俺の元へ毎日のように書状が送り届けられる。

以前の求婚の返事、食事やパーティ等への勧誘が主な内容だ。

先の伯爵の暗殺未遂の一件による因果を含め、俺はその全ての回答に拒絶の意思表示をした。

だが、毎日のように求婚やパーティ勧誘の書状が届く。狼の求愛は気高く、やはり、しつこい。

「耐えられない」

「苦しい」

それらの文言が書状に見え隠れするようになった頃、息苦しさから、俺は、ジークの手紙を読まずに破棄するようになった。

その俺の態度に、アキラは概ね満足なようで、最初こそ敏感に反応していたものの、しばらくして、気に止める素振りすら見せなくなった。

定期的に分かれる佐官級の会議には、俺は出席を見合わせるようになった。これは、ジークを避けているのではなく、団長であるアキラの仕事が忙しくなって来たためだ。副長として、俺は雑務をこなす一方で、アキラの補佐もせねばならない。

第七連隊からは大隊長の三人のみが会議に出席し、自由な討論の結果が書面の形で提出され、それをアキラが見聞、吟味する形になった。

右足は、毎晩マツサージをしてくれるエルの献身的な介護のお陰か、日に日に具合がよくなり、今では歩くくらいなら杖の補助を必要としないほど回復している。

「少佐、これを」

そう言って、エルが差し出して来たのは片眼鏡モノクルだった。

騎士である俺は、見た目の迫力から軍用の眼帯を希望したが、そ

れは残った目によくないらしく、少しの押し問答の末、結局はこのモノクルを着用することになった。

「……まあまあ、でございませう」

とはエルムの談だ。

人の顔を捕まえて、まあまあとは何事だろう。

「……キミには、それが似合うよ」

俺と結ばれて以降、アキラは劇的に変化した。その最も顕著な変化が言葉遣いだ。

人目がある場所や執務の際は、やはり以前と同じように乱暴な言葉遣いをするが、それから離れると、借りて来た猫のように大人しく、年頃の女性となんら変わらぬ可愛らしいものになる。

不吉だ。

この余裕とも取れる間隙が損なわれた際、アキラはどのような変貌を見せるのだろうか。俺は、それが怖くてたまらない。

馬鹿共の意見は賛否両論だった。

「おお、神父の息子。少しだけ賢そうに見えるが、気のせいかな？」

少しだけとは何事だ。

「うはっ、副長！　ますます弱っちく見えますよ？」

ますます弱いとは何事だ。まったく、けしからんやつらだ。

だが馬鹿共とは真面目な話もする。

「副長、おまえさんには、『あれ』をやらん。死ぬまで猫の懐刀でいてもらう。覚悟するんだな」

『あれ』　引き際を見失った傭兵にやる最後の通過儀礼だ。腕利き十人と腕試し　まあ、早い話がリンチだ。

いいやつだった、過去形でそう言わないために、手っ取り早く叩き出す。

杖もいらなくなつたし、そろそろかとは思って備えていたのだが……。

「覚悟は出来ているぞ？」

「言つな」

馬鹿共の話ではこうだ。

俺の不在時、アキラの人格は豹変するらしい。

軍規に厳しくなり、度々癩癩を起こしては下士官に当たり散らし、その態度は平騎士たちにも同様のようだ。

それが、俺が居ると、ぴたりと止む。

以前から、その傾向はあったらしいが、俺の負傷療養、長期の不在という結果を経て、その傾向はより一層顕著に、激しくなつたらしい。

「おまえさんが、この『猫』のアキレス腱だ。身体は気遣えよ」

「……わかつた」

複雑な気分だった。

俺とアキラは、もう切つても切れぬ間柄であると再確認したかのようだった。

「第五連隊の連中に気をつけるよ。やつこさん、大将が復活して、

盛り返して来てるからな。色々もあるかもしれん。出歩く際は、俺らに一声掛ける。一個小隊くらい護衛に付けた方がいい」

「一個小隊……?」

その忠告に、俺は思わず笑ってしまう。

一個小隊と言えば、三十人程の集団だ。そんなにぞろぞろ連れて、兵舎の中を歩き回る馬鹿は見たことがない。

「馬鹿馬鹿しい」

「そう言うがな、今のおまえさんの価値を考えると　　って、ベッ
カー！　待て！」

遠足に行くのでもあるまいし。

背後で馬鹿共が喚き立てるが、それを無視して歩きだす。

夜。

アキラと関係を持つてからの俺は帰宅することが少なくなり、アキラの邸宅にて寝泊まりすることが多くなった。

「少佐、どうぞ」

エルもアキラの許可を得て、この邸宅に入り浸るようになってい
る。元居たメイドは、暇を出されたらしい。気の毒なことだ。

そのエルの注いだ茶を飲みながら、ベッドの上で寝返りをうつア
キラに視線を向ける。

「ねえ……そろそろキミもおいだよ」

俺とアキラの関係は、既に『猫目石』の中では暗黙の了解だ。風紀部の連中も、団長であるアキラからの圧力を恐れ、口を噤んでいる。

俺は傭兵上がりのぼんくらだ。のんびりやっていて、士官学校出の士官連中について行けるほど上等じゃない。夜は貴重な時間だ。過去の戦術書や戦略書を読む等、読書か思索の時間に充てている。アキラが全裸で、手を後ろに組み、お尻をふりふりやって来る。

「何をしてるの？」

「……シュヴァルツブルク要塞攻略の計画を立てています」

ふうん、とアキラは感心したように鼻を鳴らす。

俺が要塞攻略の計画を立てることに、特に不思議はない。アルフレード側に攻め入るのであれば、戦略上の要衝となる『シュヴァルツブルク要塞』を陥落させることは自明の理であるからだ。

「まだ出征の目処も立っていないのに」

「……予想できることは、早めにやっておけて言ったのはアキラですよ」

「それにしたって、年が明けてからになると思うけどね」

アキラは機嫌が良さそうに、ぺたりぺたりと足音を響かせながら、ぐるりと俺の回りを一周する。

……しかし、まあ、見事なぐらいの少年体型だ。これに欲情しているのかと思うと、俺は自分が情けなくなる。

「でも、そうやって夜遅くまで仕事をするキミは、嫌いじゃないな」

「そいつはどうも」

「こっちの、なに？ 見ていいかな？」

「そつちのは失敗案です。見てもいいですけど、笑わないで下さいよ」

アキラは俺が却下した案の書類を片手に、ベッドの方へ歩いて行く。

しばらくして、くすくすと含み笑いが聞こえて来た。

「ぷっ……空からって、キミ、頭でも打ったのかい？」
「だから……」

見せるんじゃないかった。俺は頭を抱える。また馬鹿扱いか、とうんざりする。

「重装騎士……」
「だから、それも」

いらつと来て振り向くと、厳しい表情のアキラの顔が目の前にあった。

「このライダーって、なんだ？」

口調が変わった。

「それでしたら、過去の文献にあつて。まあ、風向きやら、高さを利用して空を飛ぶ物らしいんですが……」

「過去の戦術書や戦略書は、ボクも読んだ。でも、こんなもの存在は知らない」

だろうな。

暇つぶしに読んだ子供向け童話が、その策の原案だって、言ったら、きつと怒るんだろうな……。

「それと、この重装騎士。こいつは面白い。上手く行けば、戦いの常識が変わる発想だ。なぜ、こんなことを考えた？」

「それでしたら……今の戦闘って、騎兵と歩兵じゃ、騎兵が圧倒的に有利じゃないですか。じゃ、思いつきり歩兵を強くしたら……まあ、これはどちらかと言えば、呆れるという類いのもですよ。ただ、装備を強くするだけのものですから……」

「そんなことはない！」

とアキラは声を荒らげて言うが、全裸では少し迫力に欠ける。

「面白い！ しかし、おまえと来たら、本当に馬鹿だな。こんな面白い案をボツにして、詰まらない案ばかりを立案しやがって」

「すみませんね……」

その詰まらない案ばかりを採用していたのは、どこのどいつだ。そう耳元で叫んでやりたい。

「もっと失敗案はないのか？」

「いや…失敗をねだられても困るんですが……」

その後、アキラは「面白い！」を連発しながら、右手をやたら振り回した。タクトを持たせたら面白そうだったが、全裸なので止めておいた。

こうして、また一日が終わる。

第37話 狂愛

この日のアキラは何か思いついたらしく、俺の失敗案ばかりを纏めた書類を持って『第八連隊』へ向かった。

「おまえはここにいろ。性悪女とは、ボクが一对一でケリをつける」「決闘するんじゃないんでしょ？ グライダーが製作可能かどうかの質疑に行くんだから、物騒な言い方しないで下さいよ」

「よし、おまえはこの失敗案をもっと煮詰める。これも……ああ、これも面白い。こいつもだ」

煮詰まらないから、失敗案なんだが……。

アキラが行ってしまい、そんなことを考える俺は、勿論、執務の時間を持て余す。

未処理の棚から未開封の手紙を取り、封を切る。宛て名は俺になっているが、差出人が不明だ。

インクが赤黒い。

血？

「ぐくり、と息を飲む。明らかに異質な感を漂わせるその手紙を開封する。」

「こ、これ、ジークか……？」

差出人は不明だ。確証はない。宛て名は俺になっている。

流れ出した冷や汗が止まらない。

この手紙の差出人がジークなら、アスペルマイヤーの家紋が押印してあるはず。だが、それはない。

だとすると、イザベラか？

ジークだ。根拠はないが確信がある。

頬を伝った汗が、ぼたりと紙面に落ち、赤黒いインクが流れ出す。

今は、アキラがいない。俺、一人だ。

その事実には、歯の音が、がちがちと鳴る。

モノクルを外し、手のひらで汗を拭う。と、その時

トン、トン

とノック音がする。思わず、びくりとするが、礼儀正しく続くノック音に、平静を取り戻す。

「だ、誰だ？」

「第五連隊の者です」

耳に入った若い男の声に、長く細い息を吐く。動機が収まり、冷たい汗が引いて行く。

しかし、なぜ俺が男の声を聞いて安心しなければならないのだろう。おかしい話だ。

「入れ」

「はい……あれ？ 開きませんか？」

「そうか。すまん、今開けるから待ってくれ」

鍵を掛けたのはアキラだろう。用心深いことだ。ノックでもしない無粋な来客でもあったのだろうか。そんなことを考えながら、ノブに手を掛ける。

「……？」

開かない。なぜだ？ ドアのこちら側にあるはずの、鍵がない！

「お、おお、俺は、アキラに監禁されているのか？」

いつから？

また、冷たい汗が吹き出す。頭痛、吐き気、目眩、様々な不具合が俺を襲う。

「す、すまん。こちらからは、開かないようだ。そっちで何とかならんか？」

「……………」

返答がない。ややあつて、

「……………悪い猫の考えそつなことだね」

と低いハスキーな声で応答があった。

「ジーク？　なぜ貴女がここにいます？」
開かない扉に向かい、話しかける。

「もう耐えられないって、手紙に書いたよね……？」
低く、どこまでも暗い声で返答があった。

冷たい汗が止まらない。運動しなくても、人間というものは汗が流れるのだ。それを痛感する。

めきめきっ

とドアが鈍い音を起てる。

『猫目石』の団長であるアキラの執務室は、有事の際は司令室に該当する。そのため、扉は大砲の直撃でも受けられない限り、破損の恐れはない。

その扉のノブが、ごがんっ、と大きく音を起てて丁番ごと弾け飛んだ。

扉そのものでなく、その接続部分がジークの膂力に屈したのだ。

もう、おしまいだ……。

扉の向こうに居るのは勇者などではない。怪物だ。

ジークが外れた扉を丁寧な壁に立て掛け、ゆっくりと室内に入ってくる。切れ長の赤い瞳が、瞬きすらせず、俺を見つめている。

「大丈夫？　すごい汗だよ？　悪い猫に、ひどいことをされたんだね」

そう言って、ぺろりと長い舌で俺の頬をなめ上げる。

「モノクル……可愛いね」

「ジーク……」

「なに？」

空気になって消えてしまいたい。それが俺の心境だ。だが、言わねばならない。いつも手紙に書いた文言を口にする。

「俺は、ジークの求愛を受けることはできません」

「父上だよ。あれは、もういいんだ。今頃は、星になって、きつと私たちのことを認めてくれているよ」

「帰ってください。お願いします……」

その言葉に、ジークは薄い笑みを浮かべ、首を振る。

「もう焦らさないでほしいんだ。さあ、一緒に帰ろう。暖かいベッドを用意してある。勇者と姫は、愛し合うべきなんだ」

勇者と姫……壊れていたときと、言っていることが一緒だ。

それは……まだ、壊れたままということなんだろうか。

室外から鎧や盾の擦れ合う音が響いて来る。『第七連隊』の騎士たちだろう。この気配からする限り、武装している。

震えと冷や汗が止まらない……。

異常な緊張のせいか、残った目の視力が低下したのか、視界がぼやける。

「疲れたんだね。寝てて、いいよ。その間に、全部終わらせておくからね」

ジークの薦めに従い、俺は一つきりの目を閉じる。これはもう、俺の手を遥かに越えた出来事だ。

暗闇の向こうから、ジークの狂ったような哄笑が聞こえる。

激しい剣戟の音が響き渡り、悲鳴と轟音とが尽きぬ怨嗟のように耳に絡み付いて来る。

薄れ行く意識の中、俺は、世界の終わりを連想した。

宵闇。

薄暗い室内の中で、アキラとエルが、ひそひそと密談している。

「すごかったよ。やつは狂ってる。いつそ、清々しいくらいだった」

「……」

「…それは、ボクが悪かった。反省してる。もうしないよ……でも、だからと言って、キミもひどいな。ヤツに告げ口するなんて……」

「……」

「そつなんだ。それは朗報だね」

何を話している？

「こっちはまあまあだ。うん、年内には……」

「イザベラ……バックハウス……」

「面白いね。ぜび、やりなよ」

エルとアキラ。酷い胸騒ぎがする。

「うん……うん……それは、レオも連れて行くことと思ってる。危ないからな」

「……」

「うん、キミも来てくれ」

「……！」

「レオ！ 目を覚ましたのか！？」

この二人……。

第七連隊の兵舎で乱闘を起こしたジークは、無期限の謹慎処分となった。

事態を重く見たアキラは、自らによる裁定を避け、事を軍警察に委譲した。

ジークは拘束こそされないものの、今後は所轄の兵舎以外への立ち入りを一切禁止された。そこには俺個人への接触禁止令も含まれている。

彼女の家柄と軍階級、幸い死者が出なかったこと、最後は、自らの意志で投降したことなど、その他諸々の事情を考慮した結果の裁定らしい。

「殺しても殺し足りないやつだが、まだ利用価値がある」

アキラはそのように述懐した。

自ら騒乱を引き起こしておきながら、最終的に投降を選んだジークは、笑っていたらしい。

あつさり諦めるとは、狼らしくない。

おそらく、ジークは現状の不利を認めたのだ。きっと、今は雌伏の時で、機会を待つに違いない。俺への狂愛ゆえに、誇りを捨てた赤い目の飢狼となって。

そして、この大き過ぎる騒動を吹き消す嵐の到来が『猫目石』に訪れる。

皇帝からの勅命だ。

猫目石に『シュヴァルツブルク要塞』攻略の勅命が下ったのだ。

第37話 狂愛（後書き）

これ以降、忠告の前書きはしません。これ以降の読了を望まれる方は、『大人』であると信じています。

第38話 野心(前書き)

投下開始。

第38話 野心

『猫目石』にシュヴァルツブルク要塞攻略の勅命が下り、兵舎内は俄に喧噪を増した。

アキラは首都『サクソン』まで皇帝の勅書を取りに行かねばならず、宮廷まで直接足を運ぶこととなった。

往復に1週間程の道程だが、アキラの命令で、それには俺も同行することとなった。

アスペルマイヤー、バツクハウスの両大佐に留守と出征の準備を任せる形となり、不安を禁じ得ない俺は、再三、再考を求めたが、アキラの考えは変わらなかった。

「ぐだぐだ言うな。ボクが来いと言ったら、おまえも来るんだ」

俺は、アキラ・キサラギの副長だ。強く言われては引き下がるより外ない。

「エルも連れて行くけど、いいよな」

「……はい」

アキラ・キサラギは『エミリア騎士団』の准将だ。立場上、身の回りに信用できる者を置きたい気持ちは分かる。家人であるエルが選ばれるのは喜ばしいことでもある。しかし、軍関係の問題にエルを関わらせたくない俺としては、複雑な気持ちだった。

アキラに行動を管理されているのではないか。

その疑心を拭えぬまま、俺は一時、『猫目石』の兵舎を離れ、一路首都『サクソン』へ赴くこととなった。

馬車にはアキラの他に俺とエル。計三人が乗り合わせ、その警護には第七連隊から一個中隊……約二〇〇人が当たっている。

道中、アキラはすこぶる上機嫌だった。

「楽しいね。キミと一緒に旅行できるなんて、思いもしなかったよ」「遊びに行くんじゃないんです。もっと、気を引き締めてくださいよ」

そう、問題はそれだ。

冬の到来の近い今の時期、出征の勅命が下るとはどういうことなのか。

俺の個人的な悩みは置いて、現在、一番気掛かりなのはそれだ。

『シユヴァルツブルク要塞』は堅固な『要塞』だ。攻略にはそれなりの時間と人員を必要とする。

『攻城戦』の経験の浅いエミリア騎士団が、冬の到来が間もないこの時期に出征して、よい結果を出せるとは思えない。

味方の将兵も、きつとやる気にならんだろう。

大勢を動員し、多量の物資を食い潰してまでやる価値があるとは思えない。

負けてこい、ということだろうか。

一瞬、考えて打ち消す。それはありえない。

『要塞』の攻略には多大な人員を必要とする。動員される人員は、最低でも『軍団』レベルになる。数としては大体十万人程度の兵員が動員されることが予想される。

『軍団』の総司令官には『中将』が指揮官として充てられる。猫目石もその『中将』の指揮の元、戦うことになるだろう。それほどの大規模な出征を行うとしては、今のこの時期は少しいや、かなりおかしいとしか言いようがない。

……きなくさい匂いがする。

何らかの謀略の気配がする。思いもかけぬ事態に巻き込まれるのではないだろうか。

サクソンに向かう馬車の中、思索に耽る俺に、アキラが言った。

「どうしたの？ 難しい顔して。キミらしくないよ、そんなの」

「アキラ……この時期の勅命は……」

アキラは、にっこり微笑んだ。

「うん、おかしいね」

「…！」

思わず俺は鼻白む。

だが、アキラに慌てた様子はない。つまり、アキラには今後の展望があるのだ。

アキラは頬を染め、照れたように、もじもじしている。兵舎を出てからは、ずっとそんな感じだ。もじもじしながら言った。

「キミとエルにだけ言うけど……内乱が起こるんだよ」

「……内乱？」

「うん。フォン・カロツサがついに起つ」

「エル！」

これは間違っても聞かれてよい話ではない。エルに素早く下知して、周囲を警戒させる。

アキラはフォン・カロツサと言った。

つまりこれは……現エミーリア騎士団団長であり、元帥であるヒルデガルド・フォン・カロツサを含めたカロツサ一族郎党のことだ。動機がした。そして胸に沸き上がる強い昂揚感。

ついに来たのだ。時代の裂け目とも言える時が。

「キミの膝に座ってもいい？」

「はい」

アキラを抱き寄せる俺を、エルがちらりと一瞥し、馬車の出入り口近くに腰掛ける。

アキラの話ではこうだ。

皇位継承権第二位のフリートヘルム・フォン・カロツサ公爵は皇帝である兄ハルトムート三世の不予に際し、ついに野心を露にし牙を剥く、というのだ。

「皇帝不予の噂は聞いてましたが……」

「まだ余裕はあるみたいだね。衰弱が酷いらしいけど……そして、皇帝の息子は未だ四歳。まあ……ボクが彼でもそうするだろうね」

「ですが、それと要塞攻略の話は、どう繋がるんですか？」

「んっ、お腹をさすってくれると嬉しい……」

俺はアキラの腹をすりすり考える。

これは……最高にして最大のチャンスだ。アキラ・キサラギが、もしその小さい身体に大きな野心と夢を持ち合わせるならば、これが飛翔の、最初にして最後のチャンスになるだろう。

アキラは、はあっと悩ましげに息を吐く。

「フォン・カロツサは……自分の軍勢以外の兵員を、一時、遠ざけたいんだよ……この勅命には、そういう裏がある……」

「……」

なるほど。自分以外の勢力を一時追い払い、その間に実権を握る、ということか。

「……カロツサの決起の時期は……？」

「皇帝の、崩御と……うんっ……同時になるだろうね……」

「准将……もう少し、真面目にお話しされては……」

エルが呆れたように首を振る。

「ごめん……でも、嬉しいんだ……ボクがいて、エルがいて、そしてレオ、キミがいて……ようやく、ここまで来れた……」

「では……」

俺は息を飲む。否が応にも胸が高まるのは、武人としてのこらえ切れぬ性分か。それともやはり、俺も男ということなのだろうか。

アキラ・キサラギは細く長い息を吐き出した。

「勿論、このボクも起つ。レオ、幼帝を押さえるぞ」

「……はっ」

ついに来た。

アキラ・キサラギがついに起つ。

胸が震える思いだ。万感の念がある。こんなにも、俺は武人だったのだ。それがこんなに誇らしく思えたことはない。

時代の風雲児アキラ・キサラギの飛翔の瞬間を、隣で体感できる。

「兵力が足りませんが……」

「構わない。このレースは早い者勝ちになる。ボクと同じことを考えるやつもいるだろう。直属の第七連隊が鍵になる。幼帝を手中に収め、兵権を奪取してしまえば、カロツサとも五分に渡り合える」
「はっ……」

これまで傭兵として、騎士として、数々の死線を抜けて来たつもりだ。その集大成とも呼べる戦いを前に、どうしようもなく胸が震えてしまう。

それでも、俺は勳が働く方だ。

その勳が告げている。

俺は、この戦いを生きて終わることは、できない。

「この出征に意味がないわけでもない」

アキラは言う。

「カロツサからすれば、一番避けたいのはアルフリード側の介入だろうからな」

「なるほど……」

俺たちの気分は関係ない。出征してしまえば、そのこと自体が、アルフリード側に対する強い牽制になるというわけだ。

「勅命には皇帝の玉璽が必要ですが……」

アキラは腹の上に置いてある俺の手を握った。

「……玉璽は既にカロツサの手にあると見るべきだろうな」

「……」

既に玉璽はカロツサの手にある。

これは大きな問題だ。

勅命に玉印がある以上、どんなに嫌でも『シュヴァルツブルク要塞』に出征せねばならないし、皇帝崩御の後も、カロツサは先帝の遺志を受け継いだのは己だと強弁することもできる。

一番たちが悪いのは、カロツサの陰謀を見抜いているこの状況にあつてなお、カロツサの意のままに動かねばならないということに尽きる。

そして出征せねばならない以上、

「行動の限界点を見切らねばなりませんね……」

「それが一番難しい問題だ」

つまり皇帝崩御の時期だ。シュヴァルツブルク要塞に居ては、崩御の報を受けた時は、既に手遅れだろう。

かと言って、崩御前に行動してしまえば野心を疑われる。

ベストなのは皇帝崩御の時期を前以て知ることだが……

アキラは、ぎりりと歯を食いしばる。

「その問題をクリア出来るやつが、一人だけいる……」

「はい……」

イザベラ・フォン・バックハウス。

『呪術師』だ。

第39話 猫の懐刀

空を見つめていた。

能気な馬鹿のように。

或いは、レオンハルト・ベツカーのように。

だが、レオンハルト・ベツカーのようにには、涙は流れない。きつと、人が人のために流す涙は、美しいのだ。

イザベラ・フォン・バックハウスは、涙を流したことがない。少なくとも、彼女自身が知る限り。

苛立ちに曇ることはあっても、その深く青い瞳が、涙に濡れたことは一度もない。

思い返せば、レオンハルト・ベツカーはいつも空を見上げていたように思う。

四年前、拾って来た猫の娘が、なかなか食事を取らないと言って。

三年前、ジークの期待を裏切って申し訳無いと言って。

二年前、昔馴染みの仲間が死んだと言って。

一年前、戦で大勢殺したと言って。

レオンハルト・ベツカーは零れそうな涙を堪えるため、空を見るのだ。

彼の持つ、黒耀石の瞳から、涙が零れる。

壊れ、あどけなく笑うジークのために。

そして イザベラのために。
人が人のために流した涙は美しい。少なくとも、イザベラはそう
思う。

では、レオンハルト・ベッカーが、イザベラ・フォン・バックハ
ウスのために流した涙の価値はいかばかりか。

そのことを考えると、イザベラの胸は擦れ、張り裂ける。

出征が近づき、第八連隊の兵舎は忙しい。主に、工作、兵站、伝
令を担うイザベラの部隊は尚のこと、出征の準備に忙しい。

冬將軍の到来を間近に控えたこの出征、勝ち目はない。

こんな無駄な出征に手間を割くのはイザベラの好むところではな
い。準備は部下に一任してある。

当然、暇を持て余したイザベラは、何をするでもなく、兵舎の屋
上から、ただ、空を見上げる。

空が藍色の趣を見せ、星が瞬くようになっても、イザベラはただ、
空を見る。

やはり、涙は流れない。だが、星たちは色々なことを教えてくれ
る。

やがて、一つの星が落ち、周囲の星たちが輝きを増すこと。その
周囲の星に、イザベラの星も含まれること。

占星術は得意でないが、嗜みのあるイザベラには分かる。
時代が変わろうとしているのだ。

くだらない。

イザベラは眉を寄せる。

星々は、イザベラの知りたいことまでは、教えてくれない。

その翌日のことだ。

アキラ・キサラギが皇帝の勅書を持ち、首都サクソンから帰ってきた。

アキラと俺、エルの三人がサクソンから帰り、早二日が経過しようとしている。

イザベラの調略を薦める俺に対するアキラの反対が原因で、この意味のない二日間の停滞を生んでいる。

「性悪女の手は借りたくない」

アキラがそんな駄々を捏ねる間にも、事態は進行する。

『猫目石』は既に出立の準備を終え、団長であるアキラの号令を待つのみとなった。

再三に渡る俺の諫言に、この二日間のアキラはびりびりと苛立っている。

「やつのおまえを見る目が気に入らない」

「なんですか、その理由は。そんな詰まらない理由で大局を見誤らないで下さいよ」

「詰まらないとはなんだ！ ボクら二人の間に、あのエルフは関係ないだろう！？」

「だから……」

結局、俺はアキラの説得を諦め、独自の判断でイザベラに接触することにした。

ここ最近のアキラは睡眠時間を多く取るようになっていた。隙を突くのは容易い。

エル曰く。

「満足すれば、猫が寝るのは当然のこと」

元の強い怠惰の悪癖も相俟って、猫の特質が強く出ているのだ。

朝早く出仕する俺は、立ち並ぶカタバルト投石機や据え置き式のバリスタ弩弓等の攻城兵器を横目に、第八連隊の兵舎に向かう。

ちなみに俺個人に対する第八連隊への出入り禁止は解かれていない。だが、出征間近のこの時期に、『猫の懐刀』である俺の行動を制限するような者は、風紀部に拘わらず、何処にもいない。当然だ。彼らとて戦争に行くのだ。色事の取り締まりで騒ぐのは平時に限られる。

第八連隊の副長の話によれば、隊長のイザベラは、ここ最近はずっと兵舎の屋上で事の成り行きを見ているらしく、あまり真面目に出征の準備を進めてはいないらしい。

……今回の出征の意味を看破していると見て間違いない。やる気のなさはその現れだ。

だがそれならそれで話は早い。

協力を条件に、イザベラが取引を持ちかけて来るなら、こちらの目的は達せられたようなものだ。空取引という言葉もある。なんともする自身はある。

特長のある青いトীগに、ぴったりとしたレギンスを纏い、イザベラ・フォン・バックハウスは魅入られたように空を見上げていた。

何かあるんだろうか……。

俺もイザベラの隣に立ち、同じように空を見上げてみる。

いつもと同じ、青い空が広がるばかりだ。特に珍しい何物もない。

「うひゃあっ！」

素っ頓狂な声を上げたのはイザベラだ。

気づいているのかと思ったが、どうもそうではなかったようだ。

「あっ、あっ、あんた……救急箱、いつ、いつからそこにいたのようー！」

これは面白い。

あの性悪女ことイザベラが、耳まで真っ赤になって、本気で動揺している。

「な、何、にやにやしてんのよ！ 救急箱のくせに！」

しまった。顔に出ていたようだ。これはこれで、可愛いものがあるが、今日はエルフを観覧に来たのではない。

「申し訳ありません。何やら物憂げな表情で、空を見上げておられたようなので、つい……」

……さて、どうするか。

知患者バツクハウス 性悪女バツクハウスを相手取り、元傭兵の俺がどこまでついて行けるやら……。

イザベラは胸に手を置き、深く大きい呼吸を繰り返している。

「実は、イザベラさまに個人的なお願いがございまして……」

僅かな自嘲が込み上げる。

元傭兵のこの俺が、エルフ相手に小細工などと……よくまあ、付け上がったものだ。ここは一つ

「皇帝の崩御の時期が知りたいのです。イザベラさまなら、何か方法をご存じだと思ひまして、今日は伺った次第です」

「……………」

イザベラは、胸に手を置いたままの姿勢で、しばらく惚けたように俺を見つめていたが、

「あつ、あんた、馬鹿じゃないの？ それって、それって」

不逞の企みがあると言っているようなものだ。イザベラは、その明け透けな物言いに驚いたのだろう。

「はい、イザベラさまの思うとおりでございます」

こんなことは話していればばれる。小細工は無しだ。正面からぶつかると。ほんくらの俺が頭を使ったからと言って、知恵比べでイザベラに勝てるとは思えない。

「それって、ちよつ、え？ あのおかしな猫が、蜂起するってこと？」

「……………」

その質問に答えることはできない。いざとなれば、この身を切る。或いは この場でイザベラを斬り捨てる。

俺は僅かに笑みを返す。

イザベラはなぜか、非常に困惑した様子で、何度も手を揉み絞った。

「え？ え？ 待ちなさいよ……あなたが、それを聞きに来るってことは……え？ そういうことなの？ あんたも行くの？」

「……………」

アキラ・キサラギが起つ。

そう聞いた時、己に対する未練は切って捨てた。そもそも命を惜しんで、国取りができるか。

平民出のいやしい傭兵上がりのこの俺の、命の価値など知れたもの。

一代の風雲児の見せるうたかたの夢に咲いて散る。それも一興。

これが俺の選んだ運命だ。

もはや、何の苦悩もない。おそらく俺も、『何者』かになったのだ。

さあ、『知恵者』イザベラ・フォン・バックハウス。

おまえもこの時代の裂け目に居合わせた『何者』かではあるのだ。俺は命を張っている。

おまえも命を張ってみろ。

「あっ、あんた、馬鹿じゃないの！？ あんたみたいな雑魚がどうなるか分かってんの？ ねえ！？」

「……………」

「……………」

これもまた本音だ。

命懸けと自殺願望は、まったく違う。自らの行為に酔うつもりは無い。雑魚は雑魚らしく、全力で、手段を問わず戦い抜く。

俺はその先にあるものが見たいのだ。

「イザベラさま、重ねて申し上げます。ご協力を、願えますか……？」

低く言う言葉の先に、殺気が籠もる。これは、『そういう』話し合いだ。

「ちよっ、ちよっと待ちなさいよ、ねえ……！」

イザベラは長く美しい金髪を振り乱して言った。

「ついて行けないわよ……あんたは、一体なんなのよ……！」

おかしなことになって来た。あの、イザベラが涙ぐんでいる。

「俺ですか？ あなたの言葉で言うなら、ニンゲンです」

それは戦う者だということを示している。

「わかんない！ わかんないわよ！ 私が聞きたいのはそんなことじゃない！ 私は、あんたをそんなふうに思っていない！」

「……？」

ついに、イザベラの青く深い瞳から涙が溢れ出した。

そしてイザベラの言葉の意味が、よくわからない。
俺がこの場で殺意を持ち、交渉していることを非難しているのだ
ろうか。

イザベラが、つと歩み寄り、華奢なエルフと思えぬほどの力強
さで俺の肩を掴んだ。

「ねえ！ 今からでも遅くない！ 私のものになりなさいよ！ あ
の卑しい猫が、フォン・カロツサに勝てるわけがないんだから！」

確かにそうだ。この決起は勝ち目が薄い。

フォン・カロツサは『軍』を所持している。旅団クラスの兵力し
か持たないアキラのことなど気にも止めないだろう。

だが、今起たずして、いつ起つのだ。

アキラは決意した。この胸に抱いた風雲児の決意したことだ。俺
はそれに準じる。

イザベラが俺の肩をゆらす。

「ねえ、ねえ……！ あんたが馬鹿なのは、もう十分分かった。だか
ら、ね？ もう、やめて？ 何も死に行くことないじゃない、ね
？」

「……………」

俺におかしな執着を持っていたのは知っていたが……。

イザベラが更に詰め寄って来る。

「ねえ、あんたのためだったら、何だってやって上げる。父上だっ
て、あんたのために始末したんだから、ね？」

「俺の、ため？」

泣き濡れた顔に笑みを浮かべ、イザベラは言った。

「そうよ。あの男が私を使って、あなたの居場所を割り出させたのだから、死んで当然。ね？ 私は、何だってあなたのためにしてあげる。だから、ね？ もうやめよう？」

「……………」
「あなたの涙は、もう見たくない。あなたの流れる血は見たくないの……………ねえ、レオンハルト……………」

イザベラは初めて、俺の名を口にして、その後は、ただ泣き崩れた。

生まれて初めて泣く赤子のように、頑是なく。

ここに居るのは、恋に狂ったただの女だ。

買いかぶったか。『知恵者』バックハウスは何処へ行った？
だが、これはこれで利用価値がある。

イザベラの髪を撫でながら、その細い腰を引き寄せる。

「あつ……………」

僅かな抵抗を飲み込み、落とし込むように口づける。
求めに応じるように、イザベラの手が首に絡み付く。

もう、何も感じない。

この身に背負う裏切りも、苦悩も、俺を止めることはできない。

俺はレオンハルト・ベッカー。

『猫の懐刀』だ。

第40話 運命の足音

先陣が『第五連隊』のジーク。中陣が『第八連隊』のイザベラ。後詰めにアキラの直属である『第七連隊』の順に『猫目石』は進発を開始した。

街道沿いに国境に入り、道中、他の部隊と合流し、規模を大きくして行く。最終的には『軍団』レベルの規模になるだろう。

目端の利く者は、この出征に意味を感じないようで怠慢甚だしいが、俺はそれを敢えて止めずにおいた。

秋も終わりに近づき、風には冬の寒気が混ざり始めている。迫り来る寒気の影響か、右足がしくしくと痛み出してくる。

今回の出征にはアキラの要請で、エルも同行することになった。

女性の将校が、身の回りの世話のため、侍女を帯同することは珍しいことではない。その一人にエルが選ばれた。

このことに関しては、アキラも交え、三人で大揉めに揉めた。

やむを得ずエルに修道院入りの許可を出した俺に対し、アキラとエルの反発は苛烈を極めた。

「エルはボクの家族も同然だ。キミの言うことでも、そればかりは承服できない！」

と、アキラは肩を怒らせ、一方エルは、

「少佐……どうしても、というならば、エルを切って行かれて下さい……」

と言い出す始末だ。

そういう顛末で、エルは『猫目石』に従軍することとなった。

エルが来る以上、俺は絶対に勝ち、生き残らねばならない。

その決意をあざ笑うかのように、吹き付ける寒気が右足の古傷を悪化させて行く。

行軍の内容は、国境を越える当たりまで接敵の恐れがないため、旅次行軍となる。

人馬の疲労を避けるため休養に重きを置き、兵器の愛護に留意する内容であるため、大事を取って騎乗での行軍を避け、馬車でエルを含む少数の非戦闘員と共に従軍する事になった。

不甲斐なさに口を噤む俺の右足を、揉み解しながらエルが言う。

「少佐、張りが取れません。また杖を使われますよう……」

運命の足音が聞こえて来る。

レオンハルト、絶対に、お前を逃がしはせぬぞ、と嘲笑っている。

行軍の最中、エルは甲斐甲斐しく俺に尽くした。この出征ではアキラの侍女であるはずが、俺だけの世話を焼くことに終始した。

「エル…すまん」

言葉少なく言う俺に、エルが答えを返す事はなかったが、その口元には僅かな笑みが浮かんでいた。

イザベラからは、アキラに内密で頻繁に手紙が届く。

手紙の内容は、呪術で知り得た現在の皇帝の容体と、俺の身体を気遣う内容だ。そこには多分に己の心情を綴る言葉が書き連ねられており、戦時であるというのに、些か気の抜ける思いだった。

イザベラの寄越す情報の大切さを思えば、返事をさぼるわけにも行かず、俺はそのことにも頭を痛める嵌めになった。

自由の利かない右足のお陰で、この手紙の返事にもエルを頼らなければならぬ。

エルは手紙の内容こそ聞かないものの、使いを頼む度に、

「少佐は、きつと、ろくな死に方はなされぬでしょう……」

と呟く。身に積まされる思いだった。

アキラは首都サクソンに伸ばした自らの情報網を頼りに、フォン・カロツサの動向と皇帝の容体を探って入るようだが、イザベラのもたらす情報より遅れたものが多い。

俺とイザベラが内密理に繋がっていることはアキラには秘密にしてある。故に、皇帝の容体に関する限り、俺が一步先に行く形となっている。

そのアキラだが、夜間になると度々、痲癩を起こし、設営した己の天幕に俺を呼び付ける。

「何で、おまえと居られないんだ！」

「行軍中ですよ？ 同衾するわけに行かないでしょう……」

「ふざけるな！ なんなんだ！ おまえの態度は！ ボクがどんなに寂しい思いをしているか、想像できないのか！？」

これさえなければ、素晴らしい上官なのだが……。

猫目石の副長である俺には、小さいが専用の天幕が宛てがわれている。

その天幕には、俺の身の回りの世話のため、エルが付けられることになった。

適当な従騎士を選んでそいつをこき使おうと思っていたのだが、それはエルの矜持が許さないらしい。

行軍中にも拘わらず、エルを同伴しているためか、夜は気が緩んでしまう。

「少佐、何か暖かいものをお持ちしましょうか？」

「ああ、おまえも飲むといい」

行軍中であるため、夜間とはいえ、エルはもう休めとは言わない。副長には行軍中の仕事もある。行軍病 凍傷や疲労から来る疾病が発生していないか。不足している物資はないか。兵站は上手く機能しているか。それらの報告書に目を通す俺の足に、エルが膝掛けを被せて来る。

「冷えます……」

「……アルフリードは雪国だからな。これから、もっと寒くなる」

そろそろ、行動の限界に達する。行軍を止めるなり緩めるなりしなれば……。

そんなことを考える俺の肩に、エルがそつと手を置いて来る。

「少佐……」

軍用椅子に腰掛け、見上げる形になった俺に、エルが唇を合わせに来る。

つつ、と伝う銀の滴をなめ取りながら、エルが耳元で囁く。

「エルは……いつになったら、少佐に情けをかけてもらえるのでし

よ……」

「……」

殺したいと憎むほどの男に尽くし、抱かれないと望むエルの気持ちにはよく分からない。

憎愛というやつだろうか。それは、俺を酷く息苦しくさせる。

鞭打たれたかのように、エルの顔が歪む。

「もう、我慢できません…」

命をくれてやると決めた女の言うことだ。最大限、尊重してやりたい。

再び、唇を合わせて来るエルに応えながら、ぐっと身体を抱き寄せる。

人殺しのレオンハルト・ベツカー。

裏切り者のレオンハルト・ベツカー。

それらの事実が、俺を苦しめることは、もうない。

「ああ…レオンハルトさま…」

ただ、俺は…重苦しいのだ。

歓喜に打ち震えるエルの喘ぎを受け止めながら、胸の重苦しさに封をする。

この胸の重苦しさも、息苦しさも、終わる日が近い。

それを約束する猫の女を胸に抱き、また、一日が終わる。

第41話 終わりの前に

決戦の日が近い。

エミーリア騎士団における『軍団』は、四個『師団』を基幹とする。

一個『師団』は、四個『旅団』から成る。

今回、出征したのは四個『師団』。約九万六千人の将兵が『シユヴァルツブルク要塞』攻略に参加していることになる。

アキラ・キサラギのような准将が計十六名。師団長として『少将』が四名。総司令官として『中将』が一名。

『猫目石』は既に『中将』率いる『軍団』に吸収されている。アキラの旅団内における指揮権も総司令である『中将』に一部委譲されることになる。

アルフリードの国境に近づき、計二二名の将官クラスによる軍議が開かれることになった。

俺も、アキラ・キサラギの幕僚として軍議に参加し、膨れ上がりつつある兵員の再編成を具申し、行軍の足を止めた。

これはただの方便だ。

行動の限界をここと定めた俺の独断だ。

フォン・カロツサの蜂起を控え、開かれた軍議は異様な物々しさに溢れている。

将官の中には、我こそが、と思う者もいるようだ。野心を抱くの

はアキラだけではないようだ。

その物々しい雰囲気漂う軍議の中で、全軍の足を止める発言をするのは、後の禍根となりかねない。普段なら、発言すら許されないだろう将官ばかりのこの軍議において、士官である俺の発言が通ったのは、皆一様にこれ以上進軍の必要性を感じていないのが一つと、だからだと長引くばかりで方向性を持たぬ軍議に皆苛立ちを感じていたのが大きな理由だ。

「馬鹿共め…！」

軍議終了後、ほっとしたように指揮部隊へ帰って行く将官たちの後ろ姿を睨み付けながら、アキラは口汚く罵った。

「これだけ雁首並べて、指針すら決められないのか！」

「アキラだって、発言しなかったじゃないですか。要塞攻略は勅命ですからね。皆、面と向かって刃向かうのは嫌だったんですよ」

「うるさい…！」

『猫目石』の本陣にある天幕で二人きりになった途端、アキラはいつになく大きな癩癩を爆発させた。

「お前、自分の発言が意味していることが、分かってるのか!？」

「はい」

「二心を疑われた際、真っ先に切り捨てられるのは、お前なんだぞ」

「はい」

「…！」

アキラは押し黙り、手に持った鋼鉄製のタクトを折り曲げた。小柄でありながら、すごい腕力だ。

「お前……何でも、はいはい言えば、ボクが納得すると思ってるだろっ……っ？」

ばれてる。

「しかし、誰かが言わねばならないことでしたし……」
「それでもだ！ お前が言うべきじゃなかった！」
「気にしすぎですよ、アキラ。少し落ち着きましょうっ」

アキラは曲がったタクトを放り投げ、いらいらと天幕の中を歩き回った。

「……それで、足はどうなんだ？」

その質問に、俺は笑みを返す。右のブーツの拍車を杖でコツリと叩いて見せた。

「大丈夫です。一応、大事を取って杖を使っていますが、急場には対応できます」

嘘だ。

右足は膝が固まってしまい、これでは棒杭が付いているのと同じだ。こうしている今も疼痛が酷く、杖がなければ立つことさえままならない。

「本当だろっな……っ？」

アキラは低く言っ。

「レオ……おまえ……勝つ気がないんなら、今からでも追い返すぞ……？」

言葉の内容とは裏腹に、アキラのコバルトブルーの瞳は、不安の色に震えている。

「らしくないですよ、アキラ。自信がないんですか？」

「違う……！ そんなんじゃない……ボクは、ただ……おまえが居ない……」

あの、強気の固まりのような、アキラ・キサラギが弱気になっている。

関係を持つてから、アキラは精神的に安定している。だが出征してからは互いに忙しく、二人の時間を持てなかったことに、不満を抱いているのだろうか。

アキラを抱き寄せる。

「大丈夫。アキラが勝ちます」

譬え、これから一敗地に塗れようと、そのまま終わるアキラ・キサラギではない。

「なんてったって、俺がついてますからね」

「こいつ……！」

悪戯っぽく笑って見せると、ようやくアキラの頬に笑みが浮かんだ。

きつと分かっているのだ。

その身に宿す野生の本性が、間近に控えた決戦を前に、震えているのだ。

きつと分かっているのだ。

別れがもう、間近にあることを。

アルフリードへの国境を前に、部隊の再編が行われることとなった。

将兵たちは既に厭戦気分に関われており、その動きには覇気がない。

その最中、第七連隊の大隊長三人を俺の天幕に呼び出した。

アキラはぎりぎりまで説明はいらなうと言った。俺もそう思う。

咄嗟の判断で、付いて来られない者は、後々、災いの種になるかもしれない。

アキラは自らを追い込み、負けたときのことは考えないようにしているようだが、副長の俺はそういう訳にも行かない。

考えられる全てに手を打つ。

フォン・カロツサの蜂起。

それに連られる形ではあるが、ついにアキラが起つ。

それらを告白したとき、大隊長の三人には動揺はなかった。

「まあ、いつかはやるだろうと思っとなよ」

「猫の大将、欲張りっすからねえ」

「今更だぞ、神父の息子。俺たちが怖じけづくとも思っただか？」

第七連隊は結成当初からアキラ・キサラギの子飼いの軍勢だ。特に不思議はない。アキラも彼らを信じるからこそ、事前の説明を省いたのだ。

「まあ、俺らみたいになごろつきが、大将の下以外で、騎士なんてやつてられませんからねえ……」

「そういうことだ」

「大将が夢見るってんなら、俺らも見るしかねえだろう」

苦笑う。

俺がしたいのは、その意思確認ではなく、もしもの時の決め事だ。

その時、俺が最後まで残って指揮を執る。

その時、アキラを縛ってでも逃がす。

そして、もう一つ。

「ウチのメイドのことなんだが……個人的な願いになる……」

前者二つの要請に関しては、黙って聞いていた馬鹿共だったが、最後の一つには、あからさまに呆れた表情になった。

「副長……あんた、戦より先に、女に殺された方が似合いなんじゃないんですか？」

「神父の息子よ……お前の罰当たりも、ここに極まったんじゃないか、ええ？」

「で、どっちがよかった？」

最後の一人の発言には、杖で頭をぶつ叩いておいた。

「そんなのじゃない」

嘘だ。そんなのだ。だから死なせたくない。

「彼女は……エルは……」

過去、未だ傭兵だった時分の作戦で小さな村を焼き払ったこと。エルはその村の生き残りであること。強く俺を憎んでいること。そしておそらく、最後の時、エルのやりそうなこと。

馬鹿共は、時折何か言いたそうに口を開こうとしたが、最後まで黙って聞いてくれた。

「最初で最後の我が儘だ。頼めるか？」

「この馬鹿野郎」

というのが彼らの答えだ。

準備万端整った。これでもう、待つだけだった。

第42話 急報

後顧の憂いを断ち、静かにイザベラからの最後の知らせを待つ俺の元へ、その報告が届けられたのは、朝早くの出来事だ。

第五連隊の騎士数名が、人目を避けるようにして陽も上がらない内から、俺の天幕へと訪れた。

第五連隊の大隊長三名に副長の四名だ。誰も『第五連隊』の運営を成す面では重鎮の顔触れだ。

天幕に通しながら、エルに茶の準備をさせる。

四名は何度も顔を見合わせ、続いてエルの顔を見る。

男の士官が己の天幕に女を連れ込むことは、そう珍しいことではない。彼らも男だ。身に覚えはあるはず。それが気まずそうにしている。

……人払いを、ということだろう。

早朝ということもあり、着衣の乱れた俺を気に掛けるエルに、一度外に出るよう命じる。

「で、望み通りにしてやったわけだが……どうかしたか？」

旅団内部での位置付けは俺の方が上だ。そのこととは関係なく寝起きの不快さから、横柄な口の利き方をする俺に、四名は口ごもり、互いに肩で肩をつつきあっている。

第五連隊は第七連隊と同じように、勇武を売りにする連隊だ。その様を見るからに、余程言い辛いことなのだろう。

ややあつて、大隊長の一人が、重々しく口を開いた。

「じ、実は、アスペルマイヤー隊長が、い、いません」

「ああ？」

「あつ、アスペルマイヤー隊長が、行方不明になりました……」

「なんだと？」

俺は頭を抱えた。

日々の雑務と、イザベラにかまけ、ジークの方をおざなりにしていた。そして、彼らの様子から察するに、ジークが居なくなつたのは、昨日今日の話ではなさそうだ。

「いつから居ない！」

つい声を荒げる俺に、四名はまた肩をつつき合う。

「さつさと答えんか！」

「ひゃっ！ 四日前……からです」

「な、なんだと……」

四日前というと、全軍による軍議が行われた日だ。俺やアキラの隙を突いて出て行ったのだ。これはつまり……。

「馬鹿共が！ 軍法会議ものだぞ！ お前ら！」

苛立ち紛れに怒鳴る俺だが、これは単純な敵前逃亡などではないだろう。

「お、俺たちは、てっきり、副長のところに居ると思って……」
「！ 下種が！」

四名のエルを見た時の不審な態度はそれが原因だったのだ。ここにジークが居ると思っていたのだ。そのため、人目を避けた早朝訪問というわけだ。

「エル！ エル！」

ぼんやりしては居られない。天幕から飛び出し、エルを呼び付けると同時に、周囲で警戒に当たる第七連隊の騎士たちも呼び付ける。

エルには、至急、アキラの元へジーク失踪の報を届ける命令を出すと同時に、第五連隊の指揮官四名の身柄を拘束してしまう。

「覚悟しろよ！ 譴責や訓戒などで済むと思うな！」

起こってしまったことは、もうどうしようもない。

ジークの失踪、不在という事実をどのようにして今後にかかすかだ。

この機に乗じて、第五連隊の指揮系統を分解してしまう。皇帝崩御の際、指揮系統のない第五連隊は対応出来ず、派手に混乱を起こして他の部隊の足止めをしてくれるだろう。咄嗟に思いつくのはその程度だ。

杖を片手に大声で喚き散らす俺の元へ、一騎の使者が現れる。

『第八連隊』の騎士だ。腕に赤い腕章をしている。イザベラからの合図だ。皇帝の容体が急変したことを知らせる報だ。

「くっ……なんて、慌ただしい……」

イザベラからの手紙には、皇帝の容体の急変、フォン・カロツサの動向が書きなぐられてある。余程、急いだのだろう。インクが所々かすれている。

今。

今、動かねば全てはふいになる。

ナイトガウンにレギンスのいかにもな風体のまま、俺は杖を片手に足を引きずりながら、自らアキラの天幕に向かう。

「少佐！」

アキラの天幕からエルが飛び出して来て、俺の腰を支える。

「准将が至急のお召しです」

それに強く頷き掛け、アキラの天幕に入る。

「ああ、レオ……」

アキラは一つ欠伸をして、大きく伸びをする。

「クソ犬がいないんだって……？ そんなことより、エルの身体から、キミの匂いがぶんぶんする理由を聞きたいな……」

「今はそれよりも」

アキラは俺を遮って、エルに飲み物を頼んだ後、席を薦めてくる。落ち着け、ということだ。

「まあ、エルならいいかな……元々の約束だったし……」

アキラは、ごくごく自然に俺の膝に腰掛ける。

「約束？」

この二人には何らかの約定があるようだ。急場だが、つい思考が逸れてしまう。

「アキラ、皇帝の容体が急変しました。意識がありません」
「……………」

アキラは二、三度腰を揺すって、しばらく考え込む様子だったが、

「その情報はどこから？」

「俺独自の情報網です。信頼できる情報かと……………」

「ふう、ん……………」

と、またしても考え込む様子のアキラに、エルが「どうぞ」と茶を振る舞う。

「エル、ずるいぞ。ボクが、どれだけご無沙汰だと思ってるんだ？」
「……………」

アキラの追及に、エルは答えず、笑みを浮かべて一礼する。

「よくはないけど……………我慢しないとな。エルも我慢したんだし……………」
「フォン・カロツサが門閥貴族共を煽って、兵力を糾合しています」
「けど、これは……………なかなか、忍耐を要するな……………」
「こちらの思惑は、もうばれていきますね」

ここにいる『軍団』勢力は、フォン・カロツサが危険と見なした勢力の殆どなのだろう。だとすると、カロツサが首都の防御を固めてしまう前に反転、急襲しなければならぬ。

皇帝の崩御を待っていては遅い。

「アキラ……ご決断を」

「独り占め……でもエルは……一つに……」

駄目だ。会話が成立していない。アキラはぶつぶつと何やら呟いている。

不意に、アキラはエルを睨み付けた。

「エル、バックハウスはどうなってるんだ？」

「……予定通りに……」

何の話だ？ イザベラ？ 嫌な胸騒ぎがする。

この猫二匹は、何を企んでいるんだ？

いや、今は考えるな。それよりも

「レオ、第七連隊を集結させる。反転する」

「ははっ。それでは……」

アキラ・キサラギは深く頷いた。

「一路、首都サクソンを目指す。荒っぽく行くことになる。遅れたやつは置いて行け」

はじまった！

第43話 急行軍

他の部隊との接触を避けるため、国境付近の警戒と称して、街道に一時、アキラ直属の第七連隊を集結させる。そこで第七連隊への事情の説明が行われた。

「レオ、やれ」

アキラが首をしやくる。

第七連隊の副長に就任以来、作戦の説明は先ず、俺の口を通してはじまるのが通例だ。

「いいか、馬鹿共！ よおく、聞け！ 今、サクソンでは我らが皇帝陛下が、意識不明の重体だ！」

その俺の呼びかけに対し、馬鹿共の反応は様々だ。

それが？ という者も居れば、俺の雰囲気から抜き差しならざるものを感じ取る者もいるようだ。

「サクソンでは、今、フォン・カロツサの悪党どもが、この機に乗じ、不逞にも玉座を狙って蠢動している！ これから俺たち第七連隊は『中将』の統制から離れ、独自の判断で反転、一路サクソンを目指し、必要とあらば、これと一戦する！」

この時点で、鈍い者も聡い者も、事情を理解したのだろう。部隊

全体が困惑したようにざわめき立った。

「まじかよ……!!」

「独自のって、おい、それって!」

杖を振り回し、俺は力の限りがなりたてる。

「騒ぐな! 馬鹿野郎共! そんなに難しい話じゃない! 一旗上げたいやつは、大将について来い!」

この判断は命懸けとなる。反逆者と見做され、失敗すれば破滅は避けられない。

「命知らずの馬鹿野郎だけついて来い! 勝てば全ては思いのままだ!」

水を打ったように、辺りが静まり返る。

そして

「かぁー……死ぬまで馬鹿は治らねえって、言うしな……」

「乗るか、反るか……おもしれえ……」

ぼつり、ぼつり、と湧き出す不埒ながらも心強い、奮起の声。

つつ、とアキラが歩み出る。小さな身体に、力を漲らせ、叫んだ。

「おまえらっ! 稼ぎ時だ! しっかり稼ぎな!」

部隊全体に、アキラの覇気が染み渡って行くような気さえした。

一瞬の静寂の後

「「「おおっっ！」「」

叩きつけられたアキラの鋭気に反応するように、皆異口同音に、叫び、剣を振り上げる。

不敵な笑みを浮かべ、胸の前で拳を握るアキラの肩に、そっと手をかける。

「第七連隊、1700名……。準備出来ました」

しかし、しつかり稼げ、はないだろう。それは傭兵を鼓舞するやり方だ。

「おまえがいつも、やってるからな。ボクも一度、やってみたかったんだ」

雪がちらつく曇った空の下、アキラは蒼天のように晴れ渡った笑みを浮かべる。

緊迫の空気から一転、雰囲気の中、お祭り騒ぎになりだした馬鹿共を満足そうに見やるアキラに、そっと耳打ちする。

「第五、第八連隊は、どうなさいますか？」

「いない。この第七連隊が、ボクの翼だ」

かくして、第七連隊は『軍団』の統制を離れ、単独で首都サクソンを目指す運びとなった。

行きは旅次行軍のゆつたりとした道程であったが、これより先は強行軍となる。

装備を輕易にし、カタパルトやバリスタ等の兵器は捨てて行く。当然だが、動員される兵員が多ければ多し程、行軍の日程は増加する。『軍団』と『連隊』ではその移動速度は全然違う。

アキラが第五、第八連隊の帯同を嫌ったのは、好き嫌いの問題ではない。

可能な限り、迅速に行軍し、首都サクソンまでたどり着くことが出来れば、少数でも十分に勝ち目はある。そう見越してのことだ。

問題は

「アキラ。フォン・カロツサは、どれぐらいの兵力を糾合できるでしょうか」

「『軍団』に門閥貴族のバックハウスがいるくらいだ。むこうも取り込みには苦勞しているんだろう。よく集めて……一個師団というところかな」

イザベラがこの出征に参加している理由は他にも考えられる。アキラが上げたように、カロツサが門閥貴族の取り込みに手間取っていることが一つと、もう一つは、彼女が未だ爵襲も領襲 爵位と領土の譲渡 も済ませていないことと大きな関係があるだろう。実権の伴わないイザベラに用はない。そういうことだ。

イザベラか……。

彼女に会うことは、もう無いだろう。俺が知っている女性の中では、最も美しく、最も女性らしかった。

利用するだけ利用して、捨てて行く形になった。

違う出会い方をしたならば、違う関係もあつたのだろうか……。

頭を振って、その思いを追い払う。

街道を真つすぐに首都『サクソン』を目指す第七連隊は強行軍の日程だ。休日を廃し、休息を減らしての行軍となる。

カタパルトやバリスタ等の兵器を破棄した第七連隊であるが、馬車等の移動車両については、指揮系統を解体した第五連隊から接收し、数を増やしてある。

そのため、動員している騎士は騎乗の者が多く、驚異的な速度で行軍を進めている。

拘束していた第五連隊の仕官たちは、程よい場所で解放した。皆一様に途方に暮れていたが、アキラから、

「荷物は捨てて行け」

との命令だ。可哀想だが、しょうがない。

俺とアキラは、消耗を避けるため軍用馬車で行軍する。これにはエルも同行している。道中、下車し、近くの山村で迎えを待つよう命じ、これにはアキラも賛成したが、エルは頑として聞き入れなかった。

エルは、俺にだけそつと耳打ちして来る。

「少佐……絶対、逃がしません……」

やれやれだ。

げに恐ろしきは女の情念ということだろう。それにしても命懸けになるといふのに。

クリソベリルキャッツアイ 『猫目石』の石言葉は驚愕。そし

て、心変わり。

エミールリア騎士団の統制から外れ、脅威的な速度で首都サクソンに進軍。

今はもう、旅団ではないが、名称にこの名を用いたアキラは、ここに至るまでの道筋を、最初から構想していたのだろうか。

アキラは、首都サクソンを直前にして、一度進軍を停止し、部隊の編制を行う命令を出した。

フォン・カロツサと一戦交えたとしたらここしかない。戦略上の要衝に差しかかったためだ。

放った斥候の報告では、サクソンへ通じる街道の開けた場所に、準旅団クラスの軍勢が陣を張り、待ち受けているという。

その軍勢の旗印にはアスペルマイヤー家の家紋が刻まれているらしい。

軍勢の指揮官は、アスペルマイヤー伯ジークリンデ。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだ。

「なに……?」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーが、首都サクソンを背に、陣を張っている。

斥候からのその報告に、俺は、ひたすら困惑した。

その一方で、その知らせを受けた瞬間、アキラは膝を打って、大笑いした。

「あははははははは！ あのバカ犬、ホントにやっちゃったよ！」

「え？」

アキラが何を言ってるか理解出来ず、俺は絶句した。

「くふふふふ！ レオ、何を驚いているの？ 後ろにヤツが居ないんだから、前から出て来るのは当たり前じゃないか！」

アキラは笑いが止まらぬ様で、正しく抱腹絶倒の勢いで笑い続けた。

街道を封鎖するようにして展開している第七連隊の仮設本陣で、ぽかんとする俺。

斥候の騎士が不可思議な表情を浮かべ、去ると、アキラは、なおさら笑い狂った。

「フォン・カロツサは、もういない！ アスペルマイヤー、ヤツは本物の反逆者さ！」

「何を……」

喉が渇き、そこから先が言葉にならない。

つまり……こういうことか？

単騎、サクソンへ向かったジークは、私兵を以てフォン・カロツサ一党を誅し、実権を手中にして……しつつある。

これが可能か、と言われれば可能だ。

要塞攻略に参加していた以上、カロツサがジークを危険分子の人と見ていたことは疑いない。

だが、ジークはアスペルマイヤー伯だ。家督を持つ有力な門閥貴族だ。カロツサからすれば、喉から手が出るほど協力は欲しかろう。その意図を利用して、カロツサに恭順の意志を見せ、近づき、隙を

突いて行動に至る。

この方法は騙し討ちだ。誇り高いジークが、好んでその方法を用いるとは思えない。

アキラが、ジークを唆した？

笑いに噎せるアキラの表情には、狂気の色が見え隠れしていて

「ああ、笑った！ さあ、アスペルマイヤーを殺して、仕上げだな
！」

「ジークが……反逆……なぜ？」

この急すぎる展開に付いて行けず、ひたすら首を傾げる俺の頬を撫で、うっとりとしたように、アキラは言った。

「なぜって……キミのために、決まってるじゃないか」

「俺……？」

「そっだよ」

アキラは請け合った。

「全ては、キミのため。ボクにしても、あの狂った狼にしても、この瞬間は、全てキミのために用意したんだよ」

「す、すみません……わ、わわ、わかりません……」

俺は、アキラもジークもひたすら恐ろしくて、意識せずとも、唇が震えてしまう。

「愛しているんだ！」

アキラは狂おしく叫び、俺に飛びつくや否や、噛み付くように唇を押し付けて来る。

腰を擦り付け、鼻息も荒く、獣のような口づけを交わす。

俺は、されるがままにされていて、この状況を上手く飲み込めずにいる。

アキラは肩を大きく上下させながら、悩ましげに囁いた。

「愛してる。愛してるんだよ、キミだけを……」

「は、はははい」

アキラもジークも、俺一人のためだけに国に背き、俺一人のためだけに、これから多くの血を流すことも厭わないということなのだろうか。

その考え方は　その愛は、俺には到底理解できない。

嫌悪すら覚え、冷たい汗を流す俺とは違い、エルはいつものように無表情だ。きらきらと瞳を狂気に輝かせ、滔々と愛の告白をするアキラを前にしても、いつもと何ら、変わった様子はない。

まるで俺だけが、アキラの愛を理解出来ずにいるかのようだ。

「キミだけだ。キミだけが、この世界で価値あるものの全てなんだよ」

俺は何度も唇を嘗め、渴きからヒリつく喉を潤すため、唾を飲み込む。

「この国を、キミにあげる。ううん、国だけじゃない。ボクも、全部、キミにあげる。受け取ってほしい。愛しているんだ、キミだけ

を」

アキラはそこまで言っても、未だ物足りないようだ。ひたすら口を噤んだ俺の様子に、もどかしそうにして その胸の内、全てを捧げるように、両手を差し出して、小さく首を傾げる。

「足りない？」

「……いや、お、俺は……」

何度も喘ぐようにして言葉を継ぐとして失敗し、俺は喉元に手をやる。

「気に入らないなら、焼き払ってあげるよ？」

アキラは、可憐な仕草で胸元を押さえているが、吐き出す言葉はどこまでも狂気に満ち満ちている。

「遠慮しなくていいんだ。ボクがやってあげるよ？」

「……」

俺の……アキラは何処へ行った？

俺が抱いた、アキラ・キサラギは、いつからこんなにも狂っていたのだ？

幾千、幾万の犠牲を顧みず、アキラは俺のために国取りを考え、俺のためだけに、それすら焼き払ってしまえるというのか？

アキラは、時代の風雲児などでなく、最初から、狂った、ただの

「准将……とても輝いて……」

エルがぼつりと呟いた。

そうだ。

この猫の女も、どこかおかしい。

俺を愛しているというくせに、俺の死にひたすら執着し続けている。

俺は、いつから、この狂った猫のワルツに身を任せ、踊っていたのだろう……。

だがもう、俺に引き返す道はない。この命果てるまで、踊り続けなければならない。ここまで来てしまったのだから。

アキラがコバルトブルーの瞳を狂気の色に輝かせ、身をすり寄せて来る。

瞬間、背筋に走った寒気に、突き離してしまいそうになるが、ぐっと堪える。

アキラが言う。

「レオ、ボクに力をくれないか……？　この世界で、キミだけが、ボクにそれができる」

「はい……」

天を仰ぎ、アキラの身体を強く抱き寄せる。

「アキラ、勝つて下さい。あなたを……あなただけを、愛しています」

この先になにがあるというのか。

これから俺は、それを見に行くのだ。

第44話 愛が流れる 1 (前書き)

ヒロインたちの視線になります。

第44話 愛が流れる 1

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー率いる四〇〇〇人弱の準旅団クラスの兵力と、アキラ・キサラギを主将とする第七連隊は、街道の一部開けた平原で相対することになった。

アキラ・キサラギは遠目に、ジークの軍勢を見つめ、面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「レオ、アスペルマイヤーのやつをどう見る？」

「間違っています」

第七連隊、副長のレオンハルト・ベツカーは言う。

「こちらは寡兵。本来なら、アスペルマイヤーは『フランクス』の陣で正面からこれを迎え撃ち、撃砕するのが本道でしょうが、彼女は『レギオー』の陣を敷いています」

アキラはその答えに、満足そうに笑みを浮かべる。

「うん、続ける」

「はい。『レギオー』の陣は『フランクス』にない柔軟性がありますが、その代償として突進力が著しく減退します。それでは、最高の戦士である彼女の能力を十分に活かすことができません」

「おまえの据えたお灸が、よほど効いてるんだろっな。……これにどう対処する？」

ゆつたりと答えながら、その内心で、アキラは狂喜に悶えそうになった。

レオは、一つ頷いた。

「『フアランクス』を用い中央突破を敢行します。一気に敵本陣を突き、相手の兵力を封殺し、短期決戦を狙います」

ジークにとっては、因縁の『フアランクス』だ。その効果は、彼女の精神にも少なからず影響を与えるだろう。

アキラは湧き出した笑みを押さえ切れず、声を上げて笑った。

これがレオンハルト・ベッカーだ。アキラ自らの手で作り上げた最高の補佐。

ここまで成るとは思っていなかったのが、アキラの本心だ。

最初は、どうしようもない馬鹿だった。呑気で、お調子者で、しかも適当だった。

ただ、本当に素直で、純粹で

感受性というのだろうか。彼はそれに優れている。アキラの教えに反発することなく、正しいことは、正しいと、素直にそれを吸収した。成功、失敗に拘わらず、それを糧に成長し続けた。アキラはそれを無心で磨き続け、

そして、今。

レオンハルト・ベッカーは、アキラ・キサラギの最も頼りになる副長として、最も愛する男として、常に傍らにある。

これを言はずして、アキラは何を喜ぶのだ。

「ボクもおまえと同意見だ。だが、相手はあの『万夫不当』だぞ？ どうやって討ち取るんだ？」

時を置けば、ジークは兵力を糾合し、兵力差は開くばかりだろう。

こちらは寡兵。短期決戦は、アキラにとって望むところだ。敵将を討ち取り、早期に決着を目指すレオの提案は悪くない。

だが、その場合、ジーク個人の武勇が一番の難問となる。

レオは言った。

「こちらにも、アスペルマイヤーに劣らぬ無敵の剣士がいます。差し支えないかと……」

「……」

その言葉の意図するところを感じ取り、アキラは凄惨な笑みを浮かべた。

「ボクだな」

「はい」

この男は、どこまでアキラを理解してしまったのだろう。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだけは、アキラ自身の手で殺したかった。彼は、それをやれと言っ。

「いいのか？ やつとは懇意にしていたんじゃないのか？」

「もう、止めません。存分のお働きを……」

アキラは、これが聞きたかったのだ。

レオンハルト・ベッカーの口から、あのジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーを殺せ、と。

優劣ここに決したり。その愉快さに、アキラは思わず笑ってしまった。

「よし。では、ボクが先頭に立つ。おまえは後方で一個中隊を率いて、連隊の指揮を執れ」

「はっ！」

本人は隠し切れているつもりなのだろうが、アキラの目は節穴ではない。レオの右足は、もう限界だ。

レオは不調を押しはこの場にいる。外ならぬ、アキラのために。その事実が嬉しく、より一層、アキラの狂愛を加速させる。

「レオ。すぐ、ヤツを殺して来るからな」

その後は、国を枕に存分に愛し合おう。アキラはその言葉を飲み込む。

まだ早い。

「中央突破を敢行する！ フアランクス！」

レオが大声で下知し、伝令の騎士が方々に散って行く。アキラはそれを見届けて、自らも騎乗し、フアランクス（密集隊形）の先頭に立つ。

アキラ・キサラギ率いる『フアランクス』とジークリンデ・フォーン・アスペルマイヤー率いる『レギオー』は、首都サクソンを間近に控えた平原で、『会戦』の形で相对することとなった。

部隊同士が『会戦』の形で相对することは珍しい。通常、戦闘と呼ばれるものの殆どが、『攻城戦』か国境を挟んだ『偶発戦』である。

短期決戦を目論むアキラとしては、望んでもない好契機だ。この『会戦』でジークリンデを討ち取ることが出来れば、おそらくは彼

女が手中にしているであろう次代の幼い皇帝の身柄と玉璽を手にする事が出来る。

後方からは『中将』率いる『軍団』が迫っている。こちらの到着にはまだ、しばらくかかるだろう。だが、のんびりしてもいられない。

アキラは愛刀『菊一文字』を引き抜くと、切っ先を前方に掲げる。

「全騎突撃！ 狼の首を取る！ 後に続けっ！」

決着を前に、アキラ・キサラギは、一瞬、幸福だった。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの用いた陣形『レギオ』の特徴は、その柔軟な隊列にある。散開による包囲戦と、必要に応じ隊列を組み替えることで持久戦に優れる。その代償として『フアランクス』のような突進力は削られる。

前に行くアキラであるが、ジークが直接決着を望まぬのであれば、それはそれでいいとも考えている。その場合、中央突破の勢いそのままに首都になだれ込むまでのことだ。

ジークの『レギオ』はアキラを先頭とした第七連隊を包囲する動きを見せた。

アキラは少し、後方に下がりながら、敵兵の相手を取り巻きの騎士に押し付け、詰まらなそうに鼻を鳴らす。

馬鹿か、こいつ。

凹形に展開する以上、自然、中央部分は薄くなり、アキラの突撃を機とする結果になる。

だが

その薄くなった中央に、白馬に跨がった一人の騎士の騎影を前に、アキラは思わず手綱を引く。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだ。

反逆者の汚名に塗れて尚、彼女の堂々の気風は衰えることを知らぬようだ。

「やつは、ボクがやる！ おまえたちは手出しするな！」

「おうっ！」

アキラの叫びに第七連隊の猛者たちが応え、ジークと対峙するアキラを囲むようにして、周囲で激しい戦闘が始まった。

足を止めるからには、第七連隊は包囲される形になる。形勢の不利は否めない。そのため、アキラは必ずジークを討ち取る必要があった。

「やあ、団長。思ったより、早かったね」

不敵に笑い、ジークは羽根飾りの付いた兜をその場に捨て去る。

「ああ、約束だからな」

アキラは応え、納刀すると馬から飛び降りる。ジークもこれに応え、下馬する。

白兵戦。思う存分、やろうということだ。

アキラは敏捷性の殺がれる重い甲冑を嫌う。故に、この乱戦の最中にありながら、武装は薄い胸当てと愛刀『菊一文字』のみだ。対するジークは白い甲冑に身を包んでいる。

飛来する流れ矢を鬱陶しそうに刀の鞘で打ち払いながら、アキラは言った。

「幼帝と玉璽は？」

「もちろん、確保してあるよ。じゃないと、団長は私を相手にしてくれないからね」

ジークは油断なく、手に持ったハルバード（斧槍）を構える。

アキラは鞘に手を掛けながら、言った。

「おまえの、その余裕ぶつたスカした顔が、前から大嫌いだったんだ」

「奇遇だね。私も、団長の顔が大嫌いさ」

じりじりと距離を詰めながらも、ジークの浮かべた笑みは消えない。

「レオはどこ？」

「汚い狼の血で汚したくない。後ろに置いて来た」

「残念……いいところ、見せようと思ったのに。でも……やっぱり、安全なところに居てほしいかな……」

「死ね！」

その瞬間、ジークの目には、アキラの姿は三つほどにぶれて見えた。

両者をよく知るレオンハルト・ベッカーならこう答えただろう。

確かにジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは強い。まとも
に戦っては、一個大隊を用いても彼女一人に苦戦するだろう。
それでも、勝利を収めるのはアキラ・キサラギだ、と。

瞬時にして距離を詰め、斬撃を繰り出したアキラから危険を感じ
取り、刹那、飛びのいたジークは、額に冷たい汗を浮かべた。気づ
くと、ハルバードの穂先が足元に落ちていく。

チンツ！ と鞘打ちの音が耳を衝き、ジークは、はっと前方
に向き直る。

「いい勘だな、クソ犬。……どうした、笑えよ」
「……………」

見えなかった。躲けたのは、ただのまぐれだ。以前の、レオンハ
ルト・ベツカーに敗れる前のジークなら、僅かに感じた危険をプ
ライドでねじ伏せ進み、あっけなく切られて終わっただろう。

今のジークは、己が無敵でないことを知っている。それが刹那の
一瞬、彼女の命を繋いだ。

「少しでも踏み込んで来れば、その首をたたき落としてやったのに」
不敵に笑うアキラだが、その口ぶりほどは余裕がない。

攻撃に関しては無類の強さを誇る『刀』だが、守勢に弱いという
一面がある。一度でも受け太刀に回れば、直ぐに刃毀れを起こし、
『居合』も『斬撃』も威力は半減するだろう。そうなのは、ジ
ークの甲冑は断ち切れない。

「す、すごいね、団長。それが東方の剣術なの？ 初めて見たよ」

ジークは息を飲む。

不利だ。圧倒されている。アキラ・キサラギの戦法は、ジークにとっては謎の固まりだ。東方の剣術もそうだが、納刀されたままの『刀』は間合いが読めない。先程の歩法も何かおかしい。姿がぶれて見えたのは、錯覚ではないだろう。

ジークは棒切れになったハルバードを投げ捨て、腰の左右に差した長剣を抜き払い、双剣にてアキラと再び対峙する。

じり、とアキラが間合いを詰める。即座に反応したジークが、稲妻のようなスピードで双剣を振るう。

びゅびゅんっ、と風切り音がして、アキラは剣風に晒される。

怪物め！

アキラは内心、舌を巻く。

瞬きほどの間に八度の斬撃があった。これに反応し、回避し得たアキラであるが、間合いの外だ。反撃するに至らない。

アキラの愛刀『菊一文字』は、彼女の小柄な体格に合わせ、打ち直している。そのため、間合いでは、どうしてもジークに上を行かれてしまう。

「まだだよ、団長。まだ、早くできるよ」

再び、アキラはジークの巻き起こした斬撃の嵐に巻き込まれながら、僅かに眉を寄せる。

使うか？ 『あれ』を。

キサラギ家の『奥義』だ。他者の目に付く場所での使用は禁止されている。門外不出の『あれ』ならば、ジークを、あつと言つ間に

地獄に落とすことが出来るだろう。

アキラが手を拱く間にも事態は進行する。最初、数本の髪の毛を撒き散らし、続いて頬、二の腕、足、徐々にジークの斬撃が、アキラの身体を削り出す。

間合いの外からの一方的な攻撃に、勝機を見いだしたジークの頬に、再び余裕の笑みが込み上げる。

「レオは返してもらおうよ。元々、私のものだからね」

「！」

瞬時にアキラは退き下がり、距離を取る。

「レオが、おまえのもの？ 彼は、ボクのさ」

「言うね。面白くない冗談だ」

ゆつたりと言うジークを、アキラは心の底から嘲笑った。

「冗談？ レオは言ったんだ。ボクだけを愛してるって」

その瞬間、ジークの笑みは、氷点下までその温度を下げ、凍りついた。

「レオが、そんなこと言うはずない……」

「言ったよ。何度も何度も。ついでに、何度も愛し合った」

そこでアキラは、決闘の最中であるにも拘わらず、吹き出してしまった。

「あはっ！ それ、その顔！ おまえのその顔が見たかったんだよ！」

ジークは言葉もなく、口元を引きつらせ、眉間に深い皺を寄せ、狼の本性そのままに低い唸り声を上げた。

「……れ」

「え？ なんだって？ ボクとレオを歓迎してくれるのか？ そいつはありがとう！」

アキラは、けたけたと笑いに噎せる。

「……まれ」

「気にするなよ！ 祝儀は、そうだなあ……おまえの命でいいよ」

来る！ アキラは僅かに身を沈め、刀の柄に手を掛ける。

次の瞬間、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは力の限り吠え狂った。

「黙れ！ 黙れ！ 黙れ！ 黙れ！ 黙れ！ 泥棒猫の分際で、やっていいことと悪いことがある！ レオは、おまえみたいな、薄汚い卑しい猫が触れていい男じゃないんだ！」

「知らないね、おまえの勝手な理屈なんてさ」

アキラは、せせら笑った。

「ウウウウウウ アアアアアアアアア！」

怒りの炎に身を焦がし、ジークがアキラに肉薄する。

ジークの表情に、余裕の色は微塵も伺えず、赤い瞳は狂気の色に燃え狂っている。

アキラは悪魔のように口角を吊り上げた。凄まじいスピードで迫るジークに、菊一文字の紫の刀身が鞘走る。

そして二人は交錯し

チンツ！ という鞘打ち音の一瞬後に、宙を舞った黒い影が、どさつ、と小さく音を立てて大地に転がった。

一陣の風が両者の間を吹き抜ける。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの瞳に浮かんだ狂気は瞬時に、消え去り、地に転がる己の右肘から先の部分を、呆然と見つめている。

アキラは言った。

「おまえはもう、おしまいだ」

ジークは、何度も首を振った。

その表情に『万夫不当』と謳われた勇者の風格もなければ、嫉妬から来る怒りの色もない。

右肘から吹き出す鮮血が、マントを、甲冑を赤く染めて行く。

ジークは、この先にある未来を思う。

この一騎打ちは大勢決したと言っていていいだろう。

敗北を喫することで、あの泣き虫で、笑顔の優しいレオンハルト・ベツカーに二度と逢えなくなることが、この上なく、辛く悲しい。

それは、失った右腕の喪失感や痛みよりも大きな苦しみとなって、幾重にもジークの心を苛んだ。

ジークは何度も首を振る。

この敗北を受け入れるわけには行かない。

「愛してる。愛しているんだ……」

ぼろり、ぼろり、とジークの切れ長の瞳から涙が溢れ出す。

右肘から溢れる鮮血に構わず、いつからか懐に忍ばせるようになった『それ』に、ジークは左手を忍ばせる。

いつも、『それ』だけが寄る辺ないジークの寂しさを紛らわせた。いつも、『それ』だけが身も心も張り裂けそうなほどの愛情のぶつけ所だった。

眠れない夜は、いつも彼のことを考えた。

……それじゃあ、ジークのかちでいいかなあ。

……いいですとも。

覚えている。

たびにしよう。ジークがゆうしや、レオがおひめさまをするんだ。はい……ジークは勇ましいですね。お供いたし……

言葉に詰まり、嗚咽に肩を震わせ、涙を流す彼を、覚えている。

負けたくない。死にたくない。痛切に、そう思う。

腐らないよう処置し、特殊な技術でコーティングして保護してある『それ』は、自分だけのものだ。

『それ』だけが、ジークの慰めだったのだ。

この恐ろしい猫は、本当に欲張りだ。

何もかも手に入れなければ気が済まないのだろう。

けれど、それは、ジークにもよくわかる。

「これは、ジークのだよ」

「おまえ……！ 本当にいかれているな！」

「ほしいの？」

「それはボクのものだ！ やつに流れる血の一滴、髪の毛の一筋すらもボクのものだ！」

ジークは、まだ負けてはいない。

「じゃあ、とつてごらん」

手に持った球形の『それ』を、ジークは天高く、放り投げた。

「あっ！」

アキラ・キサラギは既に己の勝利を信じて疑っていない。

その視線が、宙に舞う『それ』に釘付けになったのを見計らい、

ジークは地に落ちた剣を拾い上げ、半月の弧を描き、振り下ろす。

がきつ、と真の通った何かを切る感触に、ジークは牙を剥いて吠えた。

「私は負けない！ 何としてもだ！」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの振り落とした長剣は、アキラ・キサラギの宙に延ばした左腕を切り落とし、そのまま左足の太ももに食い込み、止まった。

アキラ・キサラギは立っていた。

その表情は苦痛に歪み、たった今、切り落とされた左腕の断面を強く右手で押さえ付けている。

「きさま……やってくれたな……！」

「あげるわけ、ないよね」

転がる『それ』を広い上げ、懐にしまいながら、ゆったりと言いつつジークの額には、びっしりと脂汗が浮き、その両肩は荒い呼吸に揺れている。

「このやり方は……団長が教えてくれたんだよ……」

ほしい物は、なりふり構わずつかみ取れ。

過去のジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーには出来なかったことだ。

「と、どめを」

とどめを刺してやる。そう言い放とうとしたジークの視線が、ぐらりと傾く。血を失い過ぎたのだ。

膝を地に着き、せいせいと息を吐くジークと、こちらはその場に胡座をかくようにして座り込むアキラの目が合う。

双方共に、身動きできないほどの重傷だ。

「引き分けだ！」

わつと、両軍から一斉に声上がる。

「引き離せ！」

「退却！ 退却だ！」

互いに牙を剥き、睨み合う二人に両軍が殺到する。

途切れがちな意識の中、ジークは口元に微かな笑みを浮かべた。

この場でアキラ・キサラギを退かせることは、自分が勝ったも同然のことだ。

幼帝も玉璽もこちらの手にある。明日になれば、さらに兵力を糾合し、倍の勢力で当たることができる。

この国を手に入れる。

これで、レオンハルト・ベッカーは自分を受け入れるよりない。

ジークにはこのやり方しか思いつかない。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーという女性の地位も、状況もレオとの関係を許さない。そのことを盾に、何度も拒絶された身だ。誰にも文句を言わせない手は、これ以外に思いつかない。

外でもない己が頂上に上り詰める。そうすれば、誰も己を拒絶できない。

そのように考えていた所へやって来たアキラ・キサラギの策略に、ジークは一も二もなく飛びついた。

事は、万事上手く進み、この国だけでなく、最大の障壁であるあのアキラ・キサラギまでも退けた。

後はもう、迎えに行くだけだ。

「レオ……逢いたいなあ……」

そのジークの弦きは、戦場の喧噪に消えて行く。

第45話 愛が流れる 2 (前書き)

レオ視点

第45話 愛が流れる 2

街道の出入り口に、一個中隊を用いて陣を構える俺の元へ、頻々と伝令が訪れて、刻一刻と変わる戦況を告げる。

第七連隊は、ジーク率いる準旅団に包囲される形を取っている。アキラがこの形を好んで採ると思えない。

恐らく、戦場にてジークと相対しているに違いない。

狼の獣人の運動能力は異常だ。だが、アキラが……というより『キサラギ』が勝つだろう。『キサラギ』という一族が煮詰め、練り込んだ技術がジークを殺すだろう。

そう信じる俺だが、胸に巢喰う不安は、何故か晴れることはない。

「おい、あれの準備は出来ているか？」

俺の護衛に付いている中隊の隊長に問いかける。

「重装騎士……ですか？」

この戦局に投入された重装騎士は僅かに百名。少数だが、もしも
の場合は、これが最後の頼みの綱になる。

「防御方陣を敷いておけ」

俺のその言葉に、若い中隊長は、ぎょっとした表情になった。

「ま、負けるんですか、オレたち!？」
「念のためだ」

もしそうなるなら、追撃を受けるであろう本隊とアキラを逃がすため、街道を封鎖しつつ、隘路に退き、重装騎士の防御力を盾に徹底的にやり合う嵌めになるだろう。

そう考える俺に、エルがいつものように茶を振る舞う。

「どうぞ」

「ああ、エル、今からでも遅くない。避難する気にならんか？」

うつすら笑みを浮かべ、エルは首を振った。

「これからです。これから、少佐は、最後の輝きを見せてくれます。何故、エルが逃げ出さなければいけないのです」

「……………」

呆れて最早、言葉もない。

だがこれはこれで 一人の男としては幸せなのかもしれない。そんなことを考える俺の元へ、息を切らせた伝令が急報を告げる。

「団長が！ 団長が、切られました……………」

「……………」

夢破れる、か。

俺は静かに息を吐く。

予感があった。驚きはない。よくあることだ。夢の実現の一步前まで来ておきながら、最後の一步を踏み外し、時代の影に消えて行った者のなんと多いことか。

だが、まだだ。俺がいる。俺が、アキラ・キサラギをもつ一度、夢の舞台に乗せる。

「団長 アキラは、生きていますか？」

「は、はい！」

「怪我の具合は？」

「左腕を切り落とされました。後は、左の太ももを半ばほどまで…

…」

「そうか」

大隊長の三人と決め事をしておいて、本当によかった。

「少佐」

エルが耳元で囁く。

「契機です。今こそ、起たれますよう」

「……」

一瞬、言葉の意味が分からず、俺は呆然としてしまう。

「准将の後を引き継ぎ、少佐が国を取られるのです」

「……」

この女は、何という毒を吐くのだ。

俺とて、一人の武人だ。その言葉は余りにも甘く魅力的に聞こえる。

アキラが重傷を負った今、第七連隊の指揮権は完全に俺に移譲されたと言って差し支えない。

エルの言つとおり、夢を見るなら今しかない。

だが、それは 痴人の夢だ。

俺は、俺という人間を知っている。時代の覇者たる気概はなく、

才幹にも乏しい。

エルは声色に興奮を隠し切れないようだ。震える声で言った。

「さあ、少佐！ 起たれるのです！ 最後の輝きを、エルにお見せ下さい！」

「……………」

「少佐は人殺しの裏切り者ではございませんか！ 何をためらっておられるのです！ この期に及んで、エルまで裏切るのでございますか!?」

馬鹿馬鹿しい。

俺はエルに踵を返す。この女の讒言をまともに聞いてはられない。

「防御方陣を二重に敷け！ 敵の追撃に備えろ！ 本隊と合流して、街道に引き返す！」

その一喝に、俺とエルとのやりとりを呆然と見つめていた中隊長が、はっとしたように我に帰る。

「はっ！ 直ちに！」

「大丈夫だ！ 俺たちはしつこい！ 大将が生きてりゃ、違っておてんとさんが拝めるさ！ 生き残るぞ！」

アキラの負傷の報に、沈む中隊の騎士たちに喝を入れる。

「……お、おうっ！」「……」

多少の動揺はあるものの、帰って来た力強い応答にうなずき返す。

「負傷者の受け入れ準備、急げ！」

「少佐……なぜです？　なぜ、戦われないのですか？」

杖を振り回し、大声で指示を飛ばす俺の背に、エルが縋り付く。

「……エルは、レオンハルトさまを愛しているのです。何故、エルのために戦われないのですか……」

それは多分、俺　レオンハルト・ベツカーは、アキラ・キサラギを愛しているからだろう。

だからこそ、俺は『猫の懐刀』であることを望んだ。

だからこそ、アキラを裏切ることが出来ない。

アキラの狂愛は、俺の身も心も掌握してしまっている。

俺は　アキラ・キサラギを愛している。彼女がしばしば見せた強い執着や狂気に嫌悪を抱くと同時に、どこかで強く魅かれていたのだろう。

「少佐、しょうさあ……」

俺を呼ぶエルの声が鼻声になる。

「愛しているんですよ……レオンハルトさまあ……」

だが、その反面で、エルは俺の死を望んでいる。

愛と憎しみ。この二つ感情は、一つの心に共存できるものなのだろうか。

「准将は……負けてしまいました」

不意に、背後の空気が変わる。

「だからもう……少佐は、エル一人のものに、致します……」
「どういう意味」

脇腹に、冷たいものを押し込まれた。

ちくり、と痛みが走り、その衝撃が全身を伝わり、俺は堪らずその場に膝をつく。

「愛しています、愛しています、少佐。だから、エルのものになってください」

二度。

三度。

エルに、冷たいものを押し込まれる。

視線を落とすと、いつだったか、アキラに授かったという短刀が突き立っている。

喉に競り上がるような圧迫感があり、俺は、がっとな量の血を吐いた。

「すぐ、エルも追いつきます。ご安心を……」
「いや……」

俺は首を振った。

「おまえとはもう、これきりだ」

エルを死なせたくない。

だが、こころも思う。

こんな陰気な女に、死んだ後まで付きまとわれて、たまるか。

第46話 愛が流れる 3

前線に出ていた馬鹿共が帰って来た。

「うは！ 副長、マジ刺されてんすけど！」

「おお、神父の息子。とうとう、年貢の納め時だな」

馬鹿共なら、笑ってくれると思っていたが、こつも予想どおりだと面白くない。

「……ベツカー、くたばるか……？」

「ああ」

中隊の騎士に後ろ手に縛られ、地面に転がるエルと目が合う。俺の指示で猿轡をしてあるため、喋れない。その目が、

なぜ……？

そう言っている。

とにかく疲れた俺は、その場に腰を下ろし、モノクルを取り、額の汗を拭った。

「アキラは？」

「大パニツクだ。おまえのことを呼んでるが、会いに行くか？」

「……勘弁してくれよ。これもんだぞ」

俺はマントを捲り、今や血溜まりに腰掛けるような在様を見せてやる。

「馬鹿野郎……」

「死んでくやつは、珍しくないだろう。しみつたれたツラするな」

理由はどうであれ、女に刺されたんだ。俺なら、笑う。その方がいい。

「……腕は、ちゃんと拾って来たか？」

「ああ……できるか？」

「やるさ……それより急げ、眠たくなって来た」

まだまだ。俺にはまだ『猫の懐刀』として、最後の仕事が残っている。

『アスクラピア』の蛇は、使用の代償として術者の意識を食らう。怪我の程度からしても、今眠れば、もう二度と目を覚ますことはないだろう。

清算。

そんな言葉が脳裏にちらつく。

「追撃は、かかっているか……？」

いかん。目が霞む……。

「あっちも腕一本。おあいこさ。狼の大将連れて、引きこもってる」「そうか……」

成程、ジークは賢明だ。ここで無理せずとも、時間さえ稼げば、勝利は向こうからやって来るということを知っているようだ。

「ベツカー、あまり喋るな」

「……………」

切断された手足を繋ぐのは、それなりに意志の力を必要とする。俺の『蛇』はあんまり強くない。

できるだろうか。弱り果て、死ぬのを待つだけの俺に…………。

「ああああああ！ レオ！ レオーーーーーっ！ 何処だ！ 何処にいる！」

アキラが担架に担がれてやって来る。

「ここにいますよ、アキラ……………」

俺の口から出たのはとても小さい声だ。

その瞬間、アキラは暴れ狂い、担架から転げ落ちた。

「レオ！ うづう、レオーーーーーっ！」

左腕を切り落とされ、傷ついた肢体で這いずるようにして、アキラがこちらにやって来る。己のことで精一杯なのだろう。俺の怪我には気づかない。

やれやれ…………。

俺は草臥れた体に鞭打って身を起すと、アキラを抱き寄せる。

「うづう！ レオ！ ボク、やられたのか！？ あんなクソ犬に、

「負けたのか!？」

「まさか。アキラがやられるわけないですよ」

「でも、ボクの腕が! う、うつつつつ!」

悔しさからか、ぐしゃぐしゃに泣き濡れたアキラの顔は、血色を失い痛々しい。

「レオ! レオ! もういやだ! ボクと一緒に死のう!」

これはまた……ダイレクトな要求だ。

そう言えば、エルも殆ど同じことを言っていた。

なんだろう。これには深い意味がある気がする。

アキラは、一本になった腕で、必死に俺にしがみつく。しっかりと止血処置されているが、それでも完全に出血は止まらない。流れ出した血が、俺の血と混ざり合う。

「レオ、愛してるって、言ってくれ」

アキラの背中を撫で、落ち着けるように心掛けながら、その耳元で囁く。

「アキラ、愛してる。この世界で、あなただけです」

「うん! うん!」

強く頷くアキラのコバルトブルーの瞳から、新しい大粒の涙が溢れ出す。

「ボクと、死んでくれるよね……？」

俺は首を振った。

「おことわりします」

「え？」

反論を許さず、アキラの唇を奪う。これまで誰にもしたことのな
いくらい、激しい、とびきりのだ。

瞬間、惚けたようにされるがままになっていたアキラだが、思い
出したように応える。

最後のキスだ。

俺は、これだけ持って行ってしまおう。

「愛してます」

「……うん……」

アキラには刺激が強すぎたようだ。とろりと蕩けた表情で頷く。

俺は三人の大隊長たちに目配せする。これも最後の取り決めの一
つだ。

「大将、すまねえ」

「え？ おい！ なにするんだよ！ え？ え？ レオ？」

大隊長三人に、俺から引きはがされ、アキラは困惑したように、
俺と大隊長たちを見比べた。

「おい、どういうことだ、レオ？」

「どぎついのをやる。口を塞いでくれ。舌を噛むかもしれん」
「わかった。……本とに、すまねえ、大将！」

一人がアキラを背後から羽交い締めにし、一人が馬乗りになる。残った一人が口に猿轡をして、切り落とされた左腕が動かないよう押さえ込む。

「うぐう！ うぐぐぐ！」

両腕の袖を捲る。

俺の呼び出しに応じ、たちまち『アスクラピア』の蛇が顔を出す。それを見て、アキラはあからさまに、ぎょつとした表情になった。意外なものを見た。そんな風に見えた。

「はじめる」

猿轡をかまされたアキラの視線が忙しなく動き、血まみれになった俺の腰を捕まえる。

さーっと、アキラの表情が青くなる。

「うがっ！ ががががが！」

怪我に構わず、激しい抵抗を見せるアキラを無視し、俺は更に集中を深める。

先ず、アキラの半ばほどまで切られた左の太ももに触れる。

「ふっふっふっふー！」
アキラが唸る。

たちまちのうちに出血が止まり、それと比例するようにして、意識が遠くなる。

「ベツカー、頑張れ……！」

大隊長が苦汁に満ちた声で呼びかける。

「……………アキラの腕を、持って来い……………」

もう意識が飛びそうだ。

情けない。この何年かは、アキラと共に指揮する側に居たことが原因で鈍っている。

「……………すまん、一発、殴ってくれ……………」

「…ゆるせよ、神父の息子……………」

大隊長に平手で打たれ、少しだけ意識が戻って来る。

……………アスクラピアの『絞り出し』だ。

理屈は簡単。

アスクラピアの蛇は意識を食らう。力を行使し続けたいのなら、意識を食らわせなければよい。

親父は言っていた。

アスクラピアの治療魔法には、様々な技があるが、その中でも、この方法は外法と呼ばれるもので、もつとも性質の悪いものだ、と。

お預けを食らった蛇が怒るらしい。

腕を見ると、いつもは黒いアスクラピアの蛇が、怒ったのか、赤黒く変色している。

ここからが本番だ。

アキラの切り落とされた左腕を、傷口に押し付ける。

「があああああっ！」

神経や骨の剥き出しになった傷口を触られるのだ。アキラは、さぞ痛がるう。悲鳴を上げて逃れようと大暴れするが、大隊長たちに押さえ付けられ動けない。

切断された手足を繋ぐのは難しい。繋ぐ際、少しでも断面がずれれば、繋がっても動かない場合がある。そのため、細心の注意を払いながら治癒を施す。

「……殴れ……」

意識が遠のく。

大隊長が何事が眩き、また頬に衝撃が走るが、今度はそれでも足らない。

俺は、何度も首を振る。

「ひゃめろっ！ えおおあぐるな！ あぐるな！」

アキラの声に張りが出て来る。傷が塞がるのだから、俺の弱り具合と比例して元気になるのは当然のことだ。

蛇を使い続ける。

さんざん、殴られ、蹴られ、意識を繋ぐ。痛みはあまりない。蛇が意識を食っているのだ。痛みもそれに含まれるのだろう。

「すまねえ、すまねえ……」

「副長、すいません、すいません……」

大隊長が泣いている。

「えお！ おおやえろっ！ おおいい！」

アキラも泣いている。

最早、アスクラピアの蛇は血の色に染まり、太さをいつもの倍にまで成長させている。

最後に、これだけ言っておいた。

「アキラ……おさらばです……」

薄れ行く意識の中で僅かな喧噪が耳を衝く。

「ベツカー！ よくやった。頑張ったなあ……」

「副長！ もういい、もういいんです……」

「ばかやろう、ばかやろう！ 神父の息子！」

アキラ・キサラギ……俺の、風雲児……。

「あー……っ！ レオ！ おい！ 離せ！ ボクをどこに連れて行く！ 離せよ！ この馬鹿共！ レオ！ レオ！ ああああああああああ！」

その声も遠ざかる……。

満足だ……。

第47話 愛と運命と（前書き）

イザベラ視点です。

第47話 愛と運命と

第七連隊失踪の報を聞き、すぐさま部隊を纏め上げ、街道を首都サクソンに向け、急行軍で引き返すイザベラが、中々行軍速度の上からぬ部隊に見切りを付け、単騎にて昼夜を問わず馬を進めること三日後のことだ。

洒落者のイザベラらしくなく、着の身着のまま埃に塗れるのも構わず、一路サクソンへと急ぐ彼女の目に入ったのは猛スピードで街道を逸れ西の国境を目指す『第七連隊』の騎兵たちだった。

イザベラは木陰に身を隠し、第七連隊をやり過ごす。
逃がっている。

それがイザベラの印象だった。

おそらくアキラ・キサラギ率いる第七連隊は、フォン・カロツサに敗れ、国境の外に退路を求めているのだ。

だがおかしい。イザベラは考える。

見る限り、第七連隊は、未だ戦闘集団としての体を為している。敗走するにしては、数が多く、隊列も余り乱れた様子がない。ということは、一時、退却し、捲土重来を図るのだろう。

この第七連隊を率いているのはだれだ？

『第七連隊』は癖の強い部隊だ。

実戦慣れしており強力だが、傭兵上がりの乱暴者が多く、軍規を破ることもしばしばある。秩序ある集団として纏めるには指揮官に強いカリスマ性が求められる。

そこから導いたイザベラの答えは

アキラ・キサラギは、負傷しているかもしれないが、健在だ。この部隊を纏められるのは、彼女より他にあり得ない。

副長のレオンハルト・ベツカーはそれなりに優秀かもしれないが、剣士としての腕っ節は並で、荒くれの『第七連隊』を纏めるには、いささか求心力に欠ける。

アキラ・キサラギは逃走している。だが、追っ手はかかっていない。

つまり、誰かが後方に残って殿を努めている。そして、その『誰か』は、副長のレオンハルト・ベツカーである可能性が非常に高い。狂ったように副長に執着しているあのアキラ・キサラギが、その副長を手放すことは考えられないが、少数で追っ手を食い止められる優秀な配下の持ち合わせは、彼女には、その優秀な副長以外にはいない。

イザベラは、血の気が引く音を聞いたように思った。

あの猫は、レオンハルト・ベツカーを捨て駒にして、逃げている可能性が高い。

一軍を率いる将としては、その判断は妥当かもしれない。大を生かすために小を殺すのも、長としての務めだ。

だが、もしそうならば

イザベラは、アキラ・キサラギだけではなく、この世界の全てが許せそうにない。

第七連隊が砂塵を巻き上げ、去った方向を睨み付け、唇を噛み締めるイザベラの口元に血が伝う。

イザベラは再び馬上の人となり、更にサクソンへの道程を急ぐ。

アキラ・キサラギが副長を率いているのなら、それはそれでよい。生きていれば、再び会える日もあるだろう。

だが、後方に居残り、殿を努めているならば、これを救えるのは自分より他にあり得ない。

フォン・カロツサに頭を下げるのは癪だが、それはまだ我慢できる。

そう考えるイザベラは、ひたすらサクソンへの道を急ぐ。

レオンハルト・ベッカーは、イザベラを愛してはいない。

それはよい。イザベラはそれを許す。涙を流し、許しを請う彼を見ている。世界中の誰が、彼を許さずとも、イザベラだけは、彼を許して見せる。

レオンハルト・ベッカーがこの先、どのような裏切りを働こうが、どのような悪事を行おうが、イザベラはそれを全て許して見せる。

誰も彼を許さぬと言つならば、この世界など焼いてしまっても構わない。

全てを許す。

イザベラの愛は、そういう愛だ。そのような愛でなければならぬ
いと思っっている。

そうでなければ、彼は、ずっと空を見上げたままに違いな
い。

全てを許す。

だから、まだ死ぬな。レオンハルト・ベッカー。

張り裂けそうな胸を押さえ付け、イザベラは、ただ急ぐ。

日暮れ頃、取る物も取り敢えず、遺棄されたであろう第七連隊の本陣で、イザベラ・フォン・バックハウスは、レオンハルト・ベッカーを見てしまう。

イザベラは、頭の奥で、世界が崩壊をはじめめる音を聞いた。

瞬き一つせず、見開かれたままの深く青い瞳からは、尽きせぬ涙が流れ出し、放心したかのように開いたままの口元に、つとと涎が伝う。

許せない……。

この第七連隊の本陣で、どのような無法を許せば、レオンハルト・ベッカーはこのような有り様になるのだ。

殴られ、蹴られ、刺され、レオンハルト・ベッカーは打ち捨てられたごみのように、ただ、転がっている。

夜の闇のように黒かった髪には所々、白い物が交じり、エミールア騎士団の紋章が刺繍されたマントもトーガも汚れ、自身の血に塗

れ、元の色さえ分らない。

「お、おお……神よ……」

イザベラはそれだけ口にして、それ以降の眩きは、呼吸さえ許さぬ嗚咽の中に飲まれ、消えて行った。

事情の前後などわからない。わからないが、イザベラ・フォン・バックハウスは許さない。

世界の全てを許さない。

『呪術師』イザベラ・フォン・バックハウスは許さない。

聖なるもの、邪まなものの全ての境なく。世界の全てを許さない。

レオンハルト・ベッカーは善人ではない。だが、このような無法で報われねばならないほどの悪人でもないだろう。

イザベラは、世界をさえ焼き尽くす本物の憎しみを知る。

美しい白い肌に伝う涙に高貴なエルフの血が混じり、魔力を伴うものになった頃、イザベラは、ただ立ち尽くすのを止め、よろよるとレオに歩み寄る。

レオンハルト・ベッカーは、まだ生きていた。

早く浅い呼吸は、彼自身の命が、最早長くないことを明確に告げている。

イザベラ・フォン・バックハウスの全てを許す愛は、この瞬間、裏返り、全てを許さぬ憎しみとなって、世界を席卷する。

呪われるがいい。

レオンハルト・ベッカーを胸に抱き寄せた時、はらりと捲れたマントの陰に、幾度も刺された痕跡を認める。

呪われるがいい。顔をも知らぬ咎人よ。どのような場所に身を隠そうが、必ず見つけ出し、必ず殺す。どのような経緯を辿ろうが、イザベラが必ず、この手で殺す。『呪術』はそのためにこそある。

だが、今は

イザベラは尽きぬ憎しみをねじ伏せる。

その瞳が、アスクラピアの蛇を見つけ、新なる憎しみに燃え上がる。

アスクラピアの『絞り出し』だ。

本来は黒いはずのアスクラピアの蛇が、赤く色を変える時、術者の魂さえも一呑みにしてしまうと、何かの文献で読んだことがある。元は黒一色だった頭髪に、白い物が混じり出したのはこれのせいだろう。

この世界は、どこまでレオンハルト・ベッカーが憎いのだ。

イザベラは、これ以上の運命の狼藉を許さない。新たな、涙に濡れながら、指の腹を咬み裂き、『蛇封じ』の呪印を施そうと試みる。

だが、それを為そうにも、怒りに指が震えてしまう。突き上げた嗚咽が胸を詰まらせる。

それを押し殺し、レオンハルト・ベッカーの胸に、イザベラは何か『蛇封じ』の呪印を完成させる。

そして、この場にて、誰の助けも得られぬ以上、レオンハルト・ベツカーの死は避け難い。

イザベラの能力は、そんなに都合のよいものではない。今にも涸れ尽きそうなのにこの命を留める事はできない。

だが、この世界が、このように彼を憎むなら、変わりの祝福を与えてやることは出来る。

せめて、その魂が安らうよう、慰安をもたらすゼラニウムの呪印を施す。

幸福な愛を引き寄せるブバルディアの印を、魔力の籠もったイザベラ自身の血で刻み込む。

ついでにバックハウスの家紋であり、無言の愛を象徴するブルースフラワールの印も、書き記しておく。イザベラのサインだ。

思いつくまま、夢中で、レオンハルト・ベツカーに『呪い』という名の祝福を与え続けるイザベラの口元には狂気的笑みが浮かびはじめる。

まだだ。

もっと、もっと、祝福してやる。

ああ、あれもやっておかねば。永遠の愛を誓わせる呪いだ。今のイザベラは、これ以上ないくらい魔力が高まっている。その効力はレオンハルト・ベツカーの魂が存在する限り続くだろう。

その呪印を半ばほどまで描き終えたとき、イザベラの胸に背後からの衝撃が突き抜けた。

剣だ。

突如、イザベラの胸に生えた銀の手は、その切っ先が、レオンハルト・ベツカーの目前で停止している。

鼓動が一つ打つ度に、胸に灼けるような痛みが走り、己の命が急激に燃え尽くされるのを実感する。

イザベラは、ゆっくりと振り返る。

「……………」

その視界に入ったのは、流れるような銀色の髪に、切れ長の紅い瞳を持つ顔見知りの狼の騎士だった。

「……………この、バカ犬……………！」

苛立ちを吐き捨てるイザベラの口元に、一筋の鮮血が伝う。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、右腕が気になるように、頻りに、特に右肘の部分をなで回している。言った。

「悪い魔女は、ジークが退治するよ」

「……………」

イザベラとジークは睨み合い、そして

レオンハルト・ベツカーを抱き締めたまま、かくっ、とイザベラの肩が落ちる。

「なんて顔をしているの、イザベラ」

世界中の全てを呪い、憎悪の表情のまま事切れたイザベラの足元に、ジークは一枚のハンカチを投げ落とす。

白いハンカチには、金色の糸で、イザベラ・フォン・バツクハウスの名が刺繍されている。

レオンハルト・ベッカーに仕える猫のメイドが持って来たものだ。

「少佐がお世話になりました。バツクハウスさまに、そうお伝えくださいませ」

薄く、笑っていたのを思い出す。

空に、幾つかの星が瞬きはじめた頃、ジークは曾て、幼馴染みであつたものに、最後の言葉を投げかける。

「さようなら、イザベラ・フォン・バツクハウス」

イザベラの拡散する瞳孔は、ただ一点、憎むべき相手を捕らえたままにいる。

『呪術師』イザベラ・フォン・バツクハウスは、『憎しみ』を形にする術を知っている。そのイザベラの、血涙を流す青い瞳は、銀色の毛を持つ狼の女騎士を、ただただ、見つめ続けている。

第48話 戦い終えて

ニーダーサクソンの国境沿いに、第七連隊が西のノルドライン目指して移動を開始して三日目のこと。

先頭を行く三人の騎士が、馬を隣り合わせにして、難しい表情で話し込んでいる。

「おい、そろそろ団長が目を覚ますんじゃないか？」

大の男が三人がかりでようやく押さえ付けたアキラ・キサラギであるが、その後も暴れ狂ったため、拘束を止む無くされた。

アキラは狂ったように抵抗し、気絶するようにして眠りに落ち、目を覚ましては暴れ狂うというサイクルを、既に三日繰り返している。

「ベツカーの手紙には、何て書いてある？」

「絶対に刀を渡すな、だってさ」

三人の表情は、この先の展望を語るかのように、皆一様に暗い。

「武器を渡さんのはいい。だが、いつまでもそういつ訳には行かんだろう」

彼らの指揮官であるアキラ・キサラギという女性の強さは、荒くれの『第七連隊』の皆が認めるところだ。素手でも、そこらの男などよりよほど強い。

アキラ・キサラギは小柄だが、強く、抜け目ない。そのうち何とか自力で縄目から抜け出し、武器を手にするのは時間の問題と思われる。

武器を　特に刀を手にしたアキラ・キサラギの強さは正しく鬼神だ。理性の箍が外れたアキラがどうするか。大隊長たちが頭を悩ませるのはそこだ。

アキラの自力での問題解決は、三人の大隊長たちとの間に深刻な溝を生むだろう。

「国境外への退去を指示したら、渡してかまわんとよ」

大隊長たちは胸を撫で下ろすと同時に、少し呆れてしまう。彼らの副長が、根は真面目で、殊の外、心配症なのは知っていたが、遺書とも呼べる手紙にここまでのことが書いてあるとは思わなかったのだ。

「そうか……他に、まだ何かあるか？」

「……後は、エルって娘と、団長個人への手紙だな……」

それきり、三人の大隊長たちは、口を閉ざした。

日が落ち、設営されたアキラ・キサラギの天幕から悲鳴が上がったのは、深夜になってからだ。

「うああああーっ！　馬鹿共、縄を解け！　おまえら、一人残らず叩き切ってやる！　菊だ！　ボクの菊を持って来い！」

今夜もまたか、と大隊長たちは頭を抱える。

アキラの愛刀『菊一文字』は、特殊な武器であり、これの替えはない。それ故に戦乱の最中でも回収されてある。だが恐慌甚だしい彼らの指揮官に、それを渡すことはためらわれる。

「レオ！　レオ！　何処だ！　何処にいる！　やつが死ぬはずはな

「いんだ！」

三人の大隊長たちは、疲労の濃い表情で、話し合う。

「まあ……ひどい別れ方でしたからね……」

「で、どうするよ……?」

「ベツカーの手紙には、あのエルって娘に任せろってあったが……」

その答えは、アキラの天幕から響いて来た。

「エル！ エル……っ！ よくもレオを刺したなあっ！ 殺し

てやる！ 絶対に殺してやるぞっ！」

こりゃ、駄目だ。三人の話し合いは、いつもここで終わる。

「馬鹿共！ よくもレオを殴ってくれたな！ 楽に死ぬると思うな

よっ！」

それをやったのは、他でもないレオの指示によるものだ。だからと言って、三人は開き直るわけではない。瀕死の彼に行った無法の裁きを受ける覚悟はある。アキラの報復は恐ろしいが、殊更それを恐れることはない。そのように、腹の据わった三人だからこそ、レオは後事を託したのだ。

「でも、いつまでもこのままってわけにも……」

「だな……」

「俺らみたいな、ぼんくらが話し合っても何も変わらない……ここは、もう神父の息子の手紙通りにするしかないぞ……」

三人は頷き合う。

『猫の懐刀』が失われて三日。それぞれ思うところはあ
る。レオは、神父の息子であるためか、慈悲深く、優しい男だった。
戦の終わりは、彼が死者を弔うのが常であった。
罰当たりでも神父の息子だ。祈りを捧げ、死者を悼むのが、いつ
の間にか彼の役割の一つになっていた。

「こりゃあ……おちおちくたばることもできんな……」

いつ、どこの戦場で死んでも、彼が骨を拾ってくれる。彼が自分
を送ってくれる。第七連隊の騎士たちは、皆、それを受け入れてい
た。

「置いてきちやいましたからね……団長が怒るのもわかります……」

「……本人が望んだんだろう……」

「皆と一緒に、よかつたんだろうな……」

立てない者は、置いて行く。戦場の習いだ。

「嫌ですよ。野垂れ死には……」

「……だな。送るやつも、もうおらんからな……」

「ああ……神父の息子のためにも……」

このままでは終われない。

それが三人の共通した意志であった。

暗い天幕の中では、後ろ手に拘束されたアキラが、呪詛の言葉を撒き散らし、辺りを転がり回っている最中であった。

恐慌を起こし、ひたすら荒れ狂うアキラとは違い、一方のエルは落ち着いたものだ。

拘束を解かれた後は、行動も特に変わったことはなく、きちんと睡眠を取るし、食事も欠かさず取る。

この猫の娘に対して、三人の大隊長たちは困惑と同時に嫌悪を抱いた。

彼女が、レオンハルト・ベツカーを刺したのだ。

だが悪びれる様子もなければ、行為を反省する様子もない。

「准将とお話しすればよいのでしょうか？」

「あ、ああ……頼む。元気付けてやってくれ……」

エルは一つ頷き、

「それでは」

と天幕の中へ入って行く。

次の瞬間、天幕の中からとてつもない呪詛の叫びが上がる。

「エル！ ああ、エル！ よくもボクの信頼を裏切ってくれたな！

？ この世に生を受けたことを後悔するほどの苦しみと痛みを与えてから、おまえを殺してやる！」

「准将、怒っておられるので？」
「当たり前だ！」

アキラは喚き散らし、ぎりぎり歯を鳴らした。拘束されたままの姿で、狂ったように辺りを転がり回る。

エルは首を傾げた。

「なぜ、エルが怒られるのでしょうか？」

「いちいち、ボクに、おまえのしたことの説明をさせるつもりかあっ！」

悪びれず言い放つエルの様子に、アキラは尚更暴れ狂う。

一頻り暴れ狂い、体力を消耗した後で、アキラは呻くように言った。

「なぜだ……なぜ、レオを刺した……」

「それを怒っておられるのでしょうか？」

どうしても理由が分からないというエルの様子に、アキラは再び激発しかけるが、両手両足を拘束されたこの体勢ではいかんともし難い。ぎりぎり歯を食いしばる。

エルは言った。

「准将とエルは、目的を共にして参りました。准将が手傷を負われた以上、エルが事を為すのは当然のことではありませんか」
「目的を、共にだと……!?」

アキラは身を焦がす怒りのあまり、気絶しそうになった。

「ボクがおまえの同志みたいな言い方をするな……！」

エルは、怪訝そうに眉を寄せる。

「准将、話がかみ合っていないません。なぜ、嘘を吐かれるのですか？」
「嘘だと!？」

「はい。准将はエルと同じ。少佐を、殺めたいほど愛しておいでになられたはずです」

「

その瞬間、アキラは絶句した。

呆れたのでなければ、込み上げた怒りのせいでもない。エルの言葉が当を射たためだ。

「ちっ、違う！ ボクは、レオを殺そうなんて

「嘘です」

互いに言葉にしたことはない。

猫の獣人が持つ同族感での強いシンパシーだ。

猫は互いに争わぬ。そう言われるのは、その強いシンパシーあつてのことだ。

アキラとエルは、初対面で強く同調した。それは、心の一部を共有したと言っても差し支えないほどの強い共感だった。

それ故、アキラとエルはここまで上手くやって来たのだ。

「准将は……少佐を殺めたかった。すり潰して、自らもまた、溶かし、それこそ混ざり合ってしまったかった」

「違う、違う……ボクは、そんなこと……」

答えながら、アキラの声は、徐々に勢いを失って行く。だが、はつとしたように再び怒りを込めて言う。

「仮に、ボクがそう思っていたとして、おまえはどうなんだ？ ボクと一緒に、おまえはなぜ生きている」

「少佐の死を確認しておりません」

「口は重宝だな。何とでも言いようはあるものな。レオの仇は取らせてもらう。今の内に神に祈っておくんだな」
「……」

エルは少し考え込むようにして黙り込んでいたが、ややあつて口を開いた。

「エルに先を越され、それで怒っておられるのでしょうか。それならば、少しは分かります。ですが、それは先程申した通り、准将が手傷を負われたからで」

「黙れ黙れ黙れ！ 耳が腐る！」

「それでは、エルが問いますが、准将は、少佐をどのようにされたかったのですか？」

アキラは鼻を鳴らした。

「決まってる！ ボクは、レオを……レオを……」

どうしたいのか。それが答えられず、アキラは動揺する。

アキラ・キサラギは、レオンハルト・ベッカーをどうしたいのか。それを明確に考えたことはなかったのだ。

エルが告げる。

「准将は、少佐を殺めたかったです」

「違うっ！」

「では……准将は、どのようにして少佐と一つになられるおつもりで？」

「それは」

アキラは途方に暮れた。エルの問題に、答えられないからだ。

そして、その問いに答えたのは、エルだ。同族感の強いシンパシ
ーが、その問いの答えを掴んでいる。

「准将は、少佐の子を孕むことができませぬ」

「や、やめっ」

その先は、聞きたくない。アキラは耐え難い苦痛から逃れようとするかのように、固く目を閉じる。

アキラ・キサラギはハイブリッドだ。生命体として随分進化している。その新人類とも言うべき彼女が、最早、旧態前とした人間の血を受け入れぬことは自然の理と言ってよい。人間という種族が、滅びかけているのがその証明でもある。

エルは続ける。

「准将は、いくら身体を重ねようと、心を重ねようと、少佐と一つには、なれないのでございます」

「やめろっ！ 言うな！ 言うなっ！」

「だからこそ、准将は国を志されたのでは？」

アキラ・キサラギという生物は、レオンハルト・ベッカーという男を受け入れることは出来ない。

薄々感じてはいたが、アキラはそのことに関する思考を避けてい

た。

「少佐は、お優しい方でしたが、心の底では戦うことを愛されておりました。なればこそ、准将は、何より偉大な軍人であらねばならなかった。戦うことで己を表現するしかなかった」

それは、アキラ・キサラギの真実だ。

突き付けられた真実に耐え切れず、アキラは悲鳴を上げる。

「あああああーっ！ やめろっ、それ以上、言っなっ！」

エルは頷いた。

「准将が、エルを恨むことは筋違いであるとお解りいただけただし
ようか」

「……………」

「未来を与えてやれぬ女が、愛する男を手に入れるためには、殺めてしまう以外に方法はない。そうお考えになられたからこそ、准将とエルは同調したのです」

「っっっっっっっっ」

アキラは泣き出した。

それでも、アキラ・キサラギは女で、レオンハルト・ベッカーは男なのだ。

愛して、何が悪い。愛しい者を傷つけられて怒ることの何が悪いというのか。

だから、アキラは言う。

「……それでも、彼は、ボクを愛してくれたんだ。ボクは、彼が居ないと、ダメなんだ……」

難しい理屈はどうでもいい。

レオンハルト・ベッカーが恋しかった。

第49話 平穩（前書き）

???視点

第49話 平穩

ある日、何かが俺の心を捕らえる。

鳥の囀り。暖かな日差し。そんなものだ。

「ああ、白のお方さま。このような所においででしたか。お部屋にお戻りになりますよう。また、中將に怒られてしまいます」

「……もう少し」

首都サクソンを前にした平原での戦いが終わり、四カ月程が経過しようとしている。

アスクラピアの蛇は、俺……レオンハルト・ベツカーという男から、様々なものを奪って行った。

身体の色素や、記憶、寿命、感性、他にも色々。

重傷を負い、傷ついたレオンハルト・ベツカーは、ニーダーサクソンの女騎士ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー中將に保護された。その後、アスクラピアの神官の尽力と強いまじないお陰で、何とか命を繋いだらしい。

らしい 俺には、記憶がない。

気づいた時には、既にここ、サクソンの宮殿らしいが そこに居て、手厚い看護を受けていた。

「ああ……白のお方さま。お願いでございます。どうか、お部屋に帰って下さい……」

俺に付けられたメイドは、日々変わる。

今日は、犬の獣人であるらしい。その犬のメイドが、困り果てたように俺に言う。

「白のお方さま、そろそろ中將が戻られます。どうか、どうか……」

白のお方……レオンハルト・ベッカーは、知らない男の名前だ。俺がそう言つと、メイドたちは、皆、そのように俺を呼ぶようになった。

すっかり白くなってしまった髪や、いつも着ている白い貫頭衣から名付けたのだろう。

「ジークリンデさまは優しい。きっと許してくれるよ」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー中將は、とても優しい狼の女性だ。俺がどんな我が儘を言つても、首を振ったこともなければ、怒ったこともない。

だが、犬のメイドは、両肩を抱き、脅えたようにこう言った。

「中將が優しい？ それは、白のお方さまだけにでございます。このような所まで、白のお方さまが来られたことを知れば、どのような癩癩を起こされるか……」

レオンハルト・ベッカーは傷ついた男の名前でもある。

左目はなく、右足も不自由だ。他にも色々無いものが多い。この宮殿の中庭に歩いて来るのにも、俺はひどく苦労した。

「ジークリンデさまは怒ることができるのか？ 少し、見てみたい
な……」

興味からそう言つと、メイドは真つ青な表情になつて、その場に平伏した。

「ああ……ああ！ 白のお方さま、この通りでございます！ どうか、どうか！」

「わかつたわかつた……戻る、戻るから……」

しかし、あのジークリンデが怒るとは思えない。皇帝に会つてみたいと言つても、二つ返事で頷いたほどだ。

「直ぐに車椅子をお持ち致します。ここから動かれぬよう」

そう言い残し、メイドは駆けて行つた。

このメイドにも、もう二度と会うことはないのだろうか。

万事に鷹揚で、寛容なジークリンデだが、特定の女性が俺の周囲に侍ることを、事のほか嫌がる。

芝生の感触が、素足に心地よい。

暖かい日差しと、鳥の囀りと、緩やかな風。

これだけあれば、俺は十分だ。

心の平穩は、胸や手足に描かれた『呪印』のお陰であるらしい。

ジークリンデは、これを消そうと高名な呪術師を呼んだり、託宣を受けたりと躍起になつてはいるが、血のように赤く刻まれた『呪印』は、痣のようになって、消える所が薄まる気配すらない。

色々足りないものの多いレオンハルト・ベッカーだが、替わりに呪われているらしい。

この男は、一体どれだけ業深いことをしたのだろう。

アスクラピアの神官の話では、俺はあまり長生きできないようだ。

アスクラピアの蛇が俺と共生するようになったためだ。

俺　レオンハルト・ベッカーの様々なものを食い散らかした蛇だが、呪いのお陰でそれ以上食うことも動くことも出来なくなった。蛇は、余程困り果てたのだろう。俺を宿主として共に生きる道を選んだ。

アスクラピアの蛇と一体化した俺は、この身に重い制限を負うことになった。

自由な能力の行使と引き換えに、俺が覚醒していられる時間は、一日に数時間ほどしかない。

不定期に訪れる眠りは発熱を伴い、眠れば体力を消耗する。

蛇封じの呪印のお陰で命拾いした俺だが、今度は常駐するようになった蛇に、寿命を削られている。

呪いというものは、そういうものだ。効果は大きい、副作用も大きい。

サクソンにあるこの宮殿は、一二の区画に別れており、その内の一区画がジークリンデのために用意された生活空間であるらしい。メイドが言うには、皇族並の待遇のようで、ヘイミンの俺が、この高待遇を受けられるのは、ジークリンデの気まぐれによるものであるらしい。

動くな、と言われた俺だが、その場を離れ、広い中庭の中央にある噴水の辺まで歩いて行く。

噴水で足を洗っていると、ジークリンデが物凄いスピードでやって来るのが見えた。

マントをはためかせ、僅かに糸を引いてすら見えるほどのスピードで駆け抜けるジークリンデは、この国では救国の英雄と呼ばれている。

そのジークリンデが、俺の目の前で、びたりと停止する。

「レオ、こんなところに居たの？ 私の部屋に居ないから、とても心配してしまっただよ」

「ジークリンデさま。おはようございます」

彼女は、くしゃりと顔を歪め、悲しそうにする。

なぜ、ジークリンデさまと呼ぶのか聞かれた時、ヘイミンだからと答えたら、ジークリンデの顔色は青くなり、続いて、真っ赤になったのを思い出した。

その後、物知りで厳しい狼のメイド長は姿を消し、犬のメイドが増えた。

ジークリンデが余りに力強く走るの、芝生が少し抉れてしまった。

「メイドは何処に行ったの？ 役に立たないメイドには、後で、鞭を百もくれてあげないとね……」

ジークリンデは、切れ長の瞳に僅かな笑みを湛えている。

……きっと冗談だろう。優しいジークリンデがそんなことをするはずがない。

「さあ、レオ。部屋に帰ろう。暖かいスープを用意してあげるよ」

ジークリンデは右肘を摩っている。先の戦いで受けた傷が原因で、少し働きが悪いらしい。

そのジークリンデだが、噴水から上がった俺を見て、僅かに眉根を寄せた。

「裸足なの？ 少し血が滲んでしまっているね……」

珍しい。

いつも鷹揚で穏やかなジークリンデが苛立っているのは初めて見た。

苛立ったジークリンデは、腕組みして考え込むようにしていたが、はっとしたかのように、びくりと震え、それから目元を潤ませて言った。

「わ、私が抱いて行ってあげよう」

何故かジークリンデが少し怖い。この申し出を断るのは、とてもよくない気がする。

この区画には人目は余り無い。その思惑から、頷くと、ジークリンデは先程の苛立ちも忘れたかのように上機嫌になった。

「触るね……？」

頬を染めたジークリンデに抱えられ、サクソンの宮殿を、彼女に割り振られた部屋に向かう。

ジークリンデは、いつも俺のことを壊れ物のように扱う。抱き上げる腕は力強いが、鳥の羽根のように優しい。思い出したように、言った。

「そうだ。レオ、私は今度、大将になるんだよ」

ジークリンデはこの前、中將になったばかりだというのに、もう出世するらしい。忙しいことだ。だとすると、またパーティをやるのだろうか。

その前に出て行かないといけない。

キゾクの連中は、ハイミンである俺が、ジークリンデと一緒に居ることを嫌がる。ジークリンデの居ない所で罵られるのはうんざりだ。

「とりあえず、おめでとうございます」

「とりあえず、なの？」

ジークリンデは面白くなさそうに口を尖らせる。

「すみません、失言でしたね。それより、神官衣を一着用意してほしいのですが、構いませんか？」

「……神官衣？ それは、すぐ準備できるけど……どうするの？」

ジークリンデは用心深く言う。俺の匂いを嗅ぐのはやめてほしい。

「……故郷に帰ろうと思います」

「……………」

ジークリンデは立ち止まり、いつになく厳しい表情で俺の目を覗き込む。

「故郷の場所は、思い出せなかったはずだよね……………」

「アスクラピアの神官として旅立ちます。旅の目的は故郷を探すことです」

「レオ。私は反対だよ。どうしても、と言うなら、私はそれに力を貸さない」

「はい」

ジークリンデは少し震えて、それから鼻声になった。

「どっちやって、帰るの?」

「この二本の足と、杖……ああ、力は貸してくれないんですね。では、この足だけを頼りに行くとしましよう」

「一日に、ほんの少ししか、起きていられないのに、死んでしまっよ……?」

「はい。それもよろしかろうかと」

「なんで……」

ジークリンデの切れ長の瞳に、大粒の涙が光る。彼女は、とても優しい。怒ることはしない。

「なんで、そんなことを言うの? レオの時間は、とても貴重なんだ。そんなことは、させられないよ……」

「ジークリンデさまは、強くて優しいお方です。だからこそ、行きたいのです。ここに居ては、俺は、きつと駄目になってしまう」

「……駄目でいいよ。レオは、もう、十分やったんだ……」

ジークリンデは落ちる涙に構わずに、何度も何度も首を振る。

「言ったよね……私と、私の一族は、レオに返しても返し切れない借りがあるって……」

「それは、もう十分、返して戴きました。笑って送っては、くれませんか?」

「……できないよ……」

「……泣かないで下さい。貴女が泣くと、俺も泣きたくなくなってしまいます……」

「私はレオを幸せにしたいんだ……ただ、それだけなんだ……」

俺は首を振る。

きつと、レオンハルト・ベツカーという男は、自分の道を、自分で決められる男だったのだろう。

そして、燃え尽きてしまった。

その燃え残りである俺が、ジークリンデに甘えることは、レオンハルト・ベツカーの誇りを傷つけることになりはしないだろうか。

「ジーク……それは、責任感から言う言葉ではありません。誰か、そう……貴女が、愛する方に言ってあげてください」

ジークリンデは愛称で呼ばれることを好む。だが、それをやると黙っていないのがキゾクの連中だ。

ハイミンとは、ミブンが違うのだからはじめを付けるとうるさい。だから、彼女をジークリンデと呼んでいたが、この時は敢えて禁を破り、愛称で呼んだ。

ジークは聞き分けのない子供のように、何度も首を振った。

「違う……私は、責任感なんかで、こんな言葉を使いほしくない……」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは救国の英雄だ。だが、頼りなく震える肩を見ると、どうしてもそうだとは思えない。

指でジークの涙を拭う。

「行かせない。行かせないよ、レオ。私は、レオのために生きているんだ……」

「行かせては、くれませんか……？」

ジークは強く頷いた。

「行かせない。愛しているからね」

強く優しいジークの欠点は、とてもしつこくて頑固なところだ。
駄目だと言えば、絶対に駄目なのだろう。

少し眠い。欠伸を噛み殺していると、

「いいよ、寝ても。起きたら……全部忘れていいからね……？」

というジークの勧めに従い、俺は目を閉じる。

緩やかな風が吹き、ジークの髪が、俺の頬を撫でる。

「……私は、あの猫とは違う。レオに乱暴なことはしない……しな
いんだ……」

ジークは自らに言い聞かせるように呟いた。

時折、ジークが言うこの『猫』とは一体、何の 誰のことなん
だろう……。

意識に、夜の帳が降りる。

第50話 残光（前書き）

ジーク視点

第50話 残光

サクソン手前での『会戦』に於いて、アキラ・キサラギを退けたジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーであるが、その後の行動は目的意識を欠いたものとなった。

レオンハルト・ベッカーを手に入れたジークにとっては、国も権力も色あせた偶像でしかなく、何の意味も価値も見いだせなくなつたためだ。

自ら皇位に着くことはなく、要塞攻略を放棄して帰還した『軍団』を解体した後は、幼い皇帝の後見人の地位に着くことのみを留めた。一時は野心を疑われたジークだったが、その後、あっさりと兵権を返上したことにより、『救国の英雄』『忠義の士』と国内外問わず、評判を上げたのは皮肉な事実だ。

頼みもしないのに軍階級が上がり、行く行くは元帥の地位が約束されている。

あの忌ま忌ましい猫のアキラ・キサラギが健在でなければ、軍階級など宮廷に突き返し、レオとアスペルマイヤー領に引きこもるものを。

上手く行かない現状に、ジークは内心、唾を吐きかけてやりたい気分だ。

アキラ・キサラギ率いる傭兵団『猫目石』の報告書に目を通しながら、ジークは寝台で静かな寝息を立てるレオに視線を移す。

ジークにはこれだけあればよい。

今はもう、すっかり白くなってしまったレオの髪を指で梳りながら、ジークは胸のうちに訪れた安息を噛み締める。

……だが、あのアキラ・キサラギが生きている。

いつか、必ず来る。その思惑が、ジークをエミール騎士団に留まらせている。

『猫目石』がノルドライン領の砦を急襲、制圧して、そこに居を構えたのがサクソンでの敗北の後、僅かに二週間後のことだ。

無論、ジークは指をくわえて見ていたわけではない。ノルドラインに働きかけ、反逆者アキラ・キサラギの身柄を要求した。

ノルドラインの打つ手は早く、一個師団が編成され、この討伐に当たったが、これは悲惨な結果に終わった。

『猫目石』に物資を奪われた揚げ句、退却中に徹底的な追撃を受け、討伐の軍勢はなんと八割もの死傷者を出した。

更に、猫目石は報復措置として、周囲の町や村を焼き払ったため、辺りは焦土化し、その再建に忙しいノルドラインは、新たな討伐軍の編成もままならぬ有り様だ。

その後、猫目石は周囲の弱小傭兵団や盗賊の類いを吸収し、勢力を伸ばしつつある。今では旅団クラスを有しており、ノルドライン側も対応に手を焼いている。

ジークにとって始末に負えぬのは、この『猫目石』が傭兵団を名乗ったことだ。

傭兵というのは、早い話が戦場の『何でも屋』だ。金さえ払えば何でもやらかす。

新たな報告書には、猫目石がノルドラインの敵対勢力と結ぶ動きを見せているとある。

僅か一個連隊であったアキラ・キサラギの軍勢は、もはやノルドラインという一国家を揺るがす存在になりつつある。

ここに至るまで、僅か半年。

事の是非は置き、何という軍才だ。ジークは唇を噛み締める。

いずれ立ち塞がるであろう強敵が、その影をどんどん濃くして行く。

「ジーク……？」

唇を噛むジークの肩に、そっと手が置かれる。

「ああ、レオ。起きたんだね。すぐに食事を用意させるからね」

時刻はもう深夜だが、ジークはメイドに命じて取り急ぎ食事の準備をさせる。

レオが取る眠りは、アスクラピアの蛇に強制されたものだ。そのため睡眠時間はまちまちで、長い時もある、短い時もある。

問題は、眠りの長い時、最長で三日もの睡眠を取ることだ。その間は食事もせず、ひたすら眠り続ける。発熱を伴う命を削る眠りだ。ジークは、レオが眠る度に、もう目を覚まさぬのではないかと気が気でない。

アスクラピアの神官が宣告したレオの余命は、一年。

数々の高名な呪術師や神官に見せたが、皆、口を揃えてこう言った。

「彼は、何故、生きているのでしょうか」

イザベラ・フォン・バックハウスがレオンハルト・ベッカーに施した『呪い』の数は実に二十二にも及ぶ。

この個人にかけるにはふざけた量の『呪い』には、イザベラのオリジナルのものも含まれており、その種類や効能の判別も困難な状況だ。

呪術師曰く。多種多様な『呪い』が齎した結果が、現在のレオの危うい命のバランスを取り持っているらしい。一つでも『呪い』を

外せば、命の保証はないそうだ。

イザベラの残した『呪い』は、それほどまでに強固なものであり、宿命のようにレオに付きまとい続けている。

ジークは、ぽつりと呟いた。

「やってくれたね……イザベラ……」

狼の獣人は気高く、しつこい。ジークは諦めるなど思いもつかぬ。ジークは、日々、執務と軍務に追われる傍らで、呪術師や神官とレオの容体について話し合う。余暇などないが、何時何処で何をしていたようと、ジークはレオの覚醒の報を聞くと、何もかもを放り出し、レオの元へ駆けつける。

方々手を尽くすジークであるが、いかんせん時間が足りない。

ジークの時間は貴重過ぎる。アキラ・キサラギの相手をする時間などない。

いっそ、この事実をアキラ・キサラギにも教えてやったらどうだろう。

半ば自棄になって考えるジークの視界に、スープを口に運びながら、『猫目石』の報告書に目を通すレオの姿が飛び込んで来る。

ジークは、あつと悲鳴を上げそうになった。

レオはアスクラピアの蛇の暴走により、記憶を失ったが全てが損なわれたわけではない。言葉を話すし、身分のなんたるかも理解している。アキラ・キサラギを連想させる全ての情報は、ジークが封殺している。この居住区に猫の獣人が一人もいないのもそのせいだ。

もし……レオンハルト・ベッカーが、アキラ・キサラギのことを、

少しでも覚えていたら、ジークは、壊れてしまう。

闇を共にするようになって結構経つが、今でも時折『ジークリンデさま』と呼ばれるジークは、どうすればよいかわからなくなってしまう。

そのジークの気が狂いそうな程の数瞬の懊悩の後、レオが口を開いた。

「猫目石……」

ジークは、ごくりと息を飲む。

「アキラ・キサラギ……」

その名がレオの口から出た瞬間、ジークの心臓が、どくと大きく一つ撥ねる。

レオは、言った。

「こいつは、狂っていますね。ひどい綱渡りをしています」

「そ、そう思う、の……？」

おずおずと問うジークに、レオは片方だけの視線を向ける。

「それ以外の評価が適当とは思えませんが……。この猫目石の資料はまだありますか？」

「え？ あ、うん、あるけど……」

「見せてもらえますか？」

レオンハルト・ベッカーは、モノクルを時折、気にしながら、じつと資料を眺め続け、幾つかの質問をジークにぶつけた後、言った。

「まず、噂でも撒きますか……」

「噂……?」

「そうですね……人殺しのならず者とも触れ回ってやりましょう」

「そ、それは皆、知っていると思うけど、何か意味があるの?」

「ありますよ。でかい声でそう言ってやれば、周辺国家は、手を組みたがらないでしょうね」

そこに居るのは、曾て『猫の懐刀』と呼ばれた男だ。辛辣で、敵の弱点を決るのに、容赦のない男だ。ジークは、身を持って知っている。

「猫目石の拠点近くの銅山。こいつは潰してしましましょう」

「潰す?」

「資金源ですからね。焼くのが一番早いですが……一時使用不能にできればそれで事足りるでしょう。ついでに、交通も妨害してやりましょう。川でも氾濫させますか……」

「そ、そんなことをすれば戦争に……」

「猫目石がやったことにすればいいでしょう。幸い、こいつらは悪名に不自由してないでしょうし……」

「そ、そこはノルドライン領」

「では、ノルドラインにやらせればよろしい」

ぴしゃりと言って、『猫の懐刀』は続ける。

「猫目石は、ノルドラインの首を締め上げている最中です。効果があると知れば、ノルドラインは何だってやるでしょう。耳に吹き込んでおけば、時間の問題ですよ。必ずやります」

「……」

ジークは軽い目眩を覚えた。

『猫の懐刀』と呼ばれたレオの軍才は損なわれていない。

「物資を消耗させた後で攻城戦をしかければいいでしょう。猫目石は、あつという間に干上がりませよ。……と、まあ、ならず者にはこれで十分でしょう。後はノルドラインを上手く誘導してやればいいんです」

「誘導……」

「アキラ・キサラギは、元々このニーダーサクソンの将官なのでしよう？ そろそろノルドラインが痺れを切らして責任を取れ、と言つて来る頃です」

「派兵するの？」

レオは首を振る。

「まさか。一ならず者相手にそれは面白くありません。だから、ノルドラインを手玉に取つて踊らせるんですよ」

「うん……うん……」

レオの提案に、ジークは無心で頷きかける。

あのアキラ・キサラギと戦場で事を構えるのは御免だ。右腕に不安を抱えるようになり、ジークは強くそう思うようになっていた。彼女からは既にほしいものを取り上げた後だ。もう用はない。

ジークの心境は複雑だった。

未だ健在であるレオンハルト・ベッカーの軍才。頼もしくはあるが、その反面で危ういもののようにジークは思えてならない。

そして アスクラピアの蛇に食われ、消えて行ったアキラ・キサラギの記憶。

これがどのような運命に帰結するのか。

答えを知る者はなく　　全ては夜の闇に消えて行く。

朝の青白い光の中、ジークはゆっくりと覚醒する。

昨夜は、殊の外よく眠れた。きつと、アキラ・キサラギに対する明確な方針が定まったお陰だろう。

「おはようございます。ジーク」

その声が、心地よくジークの耳朶をくすぐる。

ナイトガウン一枚の扇状的な身体を起こし、ジークは、ほうと悩ましげな息を吐く。

レオはもう起きていて、窓際の椅子に腰掛け、真剣な面持ちで軍の執務関係の書類に目を通してている。

軍関係の問題には関わらせたくなかったが、この才能を寝かせておくのは惜しい。その思惑から、ジークが許可したのだが、これが今朝の一時に大きな心境の変化をもたらしつつある。

執務に取り組むレオの表情は、いつになく厳しい。

だが、それを見ているジークの胸に去来する感情は、ひたすら安心、というものだ。

そもそも、ジークは机の前で書類仕事に没頭するよりも、剣を握り一戦場に思いを馳せる方が楽に感じる典型的な武人タイプの軍人だ。情報処理、判断能力に優れ、計画の立案や策略の提案を得意とするレオとはタイプが別れる。

この二人の軍人としての相性は、相補の関係に当たる。

アキラ・キサラギが、かつてレオンハルト・ベッカーとの間に構

築していた関係より、余程前向きで健全なものである。

今朝のジークは、心身の疲労から解放され、精気に満ちている。

書類を片手に思索に耽るレオを見ていると、これまで己に足りなかった歯車が、ぴったりと合わさったような気がする。

二人で、一つ。

ふにやつ、とジークの頬が緩む。

これから、全てが上手く行くような、そんな気すらして来る。

一方でこうも思う。

アキラ・キサラギは、この感情を独占していたのだ。

この充実感を。

この万能感を。

この安心感を。

そんなアキラ・キサラギに、ジークリンデ・フォン・アスペルマ
イヤーが敵わぬのは当然ではないか。

ジークの胸に、むらむらと得体の知れない黒い何かが込み上げる。

「レオ。口づけをしよう」

「え？ あ、はい。それは構いませんけど、今朝のジークは、えらく直接的ですね」

「うん、私は直接的なんだ」

噛み付くような、情熱的なキスをする。

腰砕けになりながら、ジークは荒い息を吐く。

「ず、ずるいよ、レオは。こんなのを隠し持っているなんて……！」
「それはこっちのセリフです……」

レオは目を回したようだ。ふらふらと、ジークの隣に腰を下ろす。

「なんだって、朝早くから、こんな激しいやつをするんです……」
「……」

ジークは、にこにここと笑みを返す。

その内心は

アキラ・キサラギには死刑が相応しい。

絶対、この手で、殺してやる。。

第51話 純白(前書き)

ジーク視点

第51話 純白

ニーダーサクソンの首都サクソンにある統帥総本部で開かれた軍議に於いて、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤー大将の提案したアキラ・キサラギに対する策略は、賛成多数で可決された。

レオンハルト・ベッカーの提案した策略であるが、本人の意志により、この策略はジーク本人の献策として、動議された。

この策略の、最もよい所は、こちらが動かすのは口だけだという点である。

内乱の傷痕は少ないものの、政変が起こった後のニーダーサクソンに於いて、この策略は特に喜ばれた。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは武人である。

軍議の最中は口を噤み、成り行きを見守ることが常であった。そのジークの発言、そして優れた献策に、周囲の軍高官たちは驚きを隠せないようだった。

ジークは得意だった。

いつもは、だらだらと長いだけで結論を見ぬ軍議に自ら終止符を打ち、しかも評価された策略は、本当はレオの提案だ。

策はすぐにも動き出す。重荷を一つ降ろした感に、ジークの足取りは軽い。

足取り軽く統帥総本部を後にしようとするジークを呼び止める一人の騎士があった。

「やあ、ジークリンデ。これから食事でもどうだい？」

フォルクマール・フォン・バウマイスター少将だ。

狼の獣人の若い男で、門閥貴族の出身だ。エリート意識の塊のよきな男で、ジークは彼に対し、吐き気以外の感情を覚えたことはない。

「私は中将だ。口を謹むんだね、バウマイスター」

「おやおや、ジークリンデは、白いニンゲンにご執心。小官など、目に入りませぬか」

ジークの、ぴんと立った二つの耳が、ひくりと動く。

今すぐにでも、バウマイスターを切り捨ててしまいたいが、軍にはまだ利用価値がある。この男は不快だが、それと引き換えにはできない。

レオのためだ。ジークは、ぐつと拳を握り込みに留める。

対するバウマイスターは、口元に歪んだ形の笑みを浮かべている。女の癖に生意気な、という暴力衝動のようなものが見え隠れする笑みに、ジークはやはり、吐き気を催す。

「ところで、ジークリンデ。小官からの求婚の件、考えてくれましたか？」

恭しく頭を下げるバウマイスターに、ジークは誠意を持って答えた。

「そのことだけどね、バウマイスター。一度でいいんだ。二度、三度そうしるとは言わない。だから……一度でいい。死んでくれないか……？」

「なっ！」

狼の獣人は誇り高い。侮辱にも命を懸ける。怒りで真っ赤になったバウマイスターを、ジークは鼻であざ笑う。

「一人で難しいなら、私が手伝っても構わない。どう？」

決闘ならば受けて立つ。それがジークの心境だ。
対するバウマイスターは、瞳を赤く燃やし、身振り手振りを大袈裟に訴える。

「何故だ！ ジークリンデ！ 何故、分からない！ 誇り高い狼の血統を忘れたのか！？ 俺にはおまえしかいない！ おまえにも、俺だけのはずだ！」

狼の獣人は希少種だ。血統を守るため、配偶者は限られる。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの愛には障害が多い。

これも彼女が乗り越えなければならぬものの一つだ。

「俺の何処が気に入らない！ 血統も家柄も、申し分ないはずだ！」
「……………」

ジークは思う。

旧態前とした種のプライドなど、犬にでも食わせてしまえばよいのだ。

血統も家柄も、ジークの心を震わせたことはない。

「あの貧弱な、白いニンゲンが、そんなにいいのか！？」

そのバウマイスターの叫びは、意外な鋭さを持ってジークの胸に突き刺さる。

レオンハルト・ベッカーは白くなった。

燃え尽きて、白くなった。残された命は、後、僅か。

アスクラピアの『絞り出し』は、術者当人の強い目的意識が必要となる。

レオンハルト・ベッカーは、アキラ・キサラギのために、命を燃

やし尽くして、白くなった。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーのためではない。

だから、なんだ？

ジークを顔を上げる。

「バウマイスター。おまえとなんて、死んでもいやだね」

そう言い残し、踵を返す。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの愛は、奪う愛だ。

レオンハルト・ベツカーは燃え尽きて白くなった。その心も全てを忘れ、白くなった。誰も住まなくなったのだ。

力づくで、アキラ・キサラギから奪ったのだ。

だから白くなった。

結構なことだ。手に入れたことの証しではないか。むしろ、それを誇らしく思う。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの愛は、気高く、奪う愛だ。

それは、純白の白であるべきだった。

第52話 猫が嘔吐するとき(前書き)

アキラ視点

第52話 猫が嘔吐とき

ノルドライン領 。
フェルトブルガー砦はニーダーサクソンの国境の西にある森林の中にある。

施設には居住棟、管理棟、厚生棟がおよそ四〇棟。警備するだけでも約二〇〇〇名の兵員を必要とする。

サクソンでの敗戦を経て、アキラ・キサラギがこのフェルトブルガー砦を再起の場に選んだのは、幾つかの拠点候補の中で広大で且つ、守護の兵員が少なかったことが大きな事由である。

制圧、占領の後、アキラの指示で防衛のための軍事化が進められ、堅固な防壁や兵站、指揮等に必要な施設が増設された。

フェルトブルガーの周囲には有刺鉄線が張り巡らされており、収容している兵員は現在、4734名。旅団クラスの人員が収容されている。

電光石火の奇襲でこのフェルトブルガーを制圧してから、三千人近い兵員を増やしていることになる。

その居住棟の一室では、アキラ・キサラギが無表情でこまごまとした執務をこなしている。

急速に膨れ上がったこの『猫目石』は、いつも物資が不足している。アキラがこの『猫目石』を維持、発展させて行くためには長期に渡り利益を生む構造が必要だ。

今は付近の銅山を手中に置き、そこから得た収入で兵員を賄っているが、軍隊というのは、存在するだけで金を食う代物だ。新たな資金源を考えなければならぬ。

副長のレオンハルト・ベツカーを失ったことは、アキラ・キサラギにとって、半身をもがれたに等しい痛手となって実感されている。現状では『猫目石』で優秀な指揮官は、アキラのみだ。

大隊長の三人はそれなりだが、留守を任せられるほどではない。

あまりにも多忙な現実が、アキラの感情を圧殺しているのが現在の状況だ。

アキラは、ぽつりと呟く。

「疲れた……」

そんなとき、アキラは何度も読み返し、既にぼろぼろになった手紙を読み返す。

手紙には、レオの思うアキラの長所が沢山書かれている。

小柄で可愛い。賢い。強い。儉約家である。案外面倒見がよい。……案外は余計だ。

アキラは、へらつと笑う。

手紙には、短所も書かれている。

短気。乱暴。凶暴。狂暴。傲慢。嗜虐的。怠け者。
副長である自分が、いかに迷惑を被ったか、事細かに書いてある。
量的には、長所の三倍にはなるつかという苦情の羅列だ。

アキラは、いらつと毛を逆立てる。

短所の最後にこうある。

レオンハルト・ベッカーを好きなこと。これだけは何とかした方がよい、と。

「どつという意味だ。あの、うすらとんかちめ……」

手紙は、こつ締めくくられる。

あなたと会えて、本当によかった。
幸せでした。

「ばーか、ばーか……」

アキラの心の堤防は、いつも決壊してしまつ。
尽きることのない水脈を掘り当てたかのように、涙が溢れて来る。

「アキラさま……」

「！」

そつ、と肩に掛けられたエルの手を払い除け、アキラはごしごしと袖で涙を拭う。

「ボクに触るんじゃない。……少し、泣く……おまえは出て行くんだ」
「……」

エルは、すつと一礼し、静かにその場を去る。

アキラはエルを断罪できずに居る。未だ、心の一部を共有しているからだ。そのエルを断罪することは、自らを断罪するに等しい。レオの手紙を読み返す度に、エルへの憎しみを飛躍的に増進させるアキラだが、一方で、エル以上の最大の理解者はいないことも自覚している。

つまり、アキラは、レオンハルト・ベッカーを

殺したいほど愛してる。

サクソンに張り巡らせたアキラの情報網は、未だ健在である。

エミール騎士団でレオンハルト・ベッカーという騎士の記録は、過去、現在に於いて抹消されている。

イザベラ・フォン・バックハウスは、要塞攻略の任務から帰還途中、行方不明。

レオの痕跡を消したのは、ジークリンデだろう。間違っても、彼を反逆者にしてしまうわけには行かない、という意志が見えている。それを匿う彼女の保身のためでもある。

レオは生きている。

だが、その後の行方が杳として知れない。

ジークリンデが宮殿に住居を移し、そこで困っている男 『白い男』が、おそらくそうだろうが、事情の分からないアキラは確信していないながらも、断定できずにいる。

『白い男』に関する噂は、不吉過ぎるのだ。なんでも、記憶を無くし、重大な呪いに身を侵されているのだとか。

消えてしまったイザベラと何か関係があるのだろうか……。周辺に漂う噂から、アキラが冷静に分析するに この『白い男』は長くない。

『白い男』は、レオンハルト・ベッカーではない。

アキラのその願望が、ここ最近の停滞を生む土壤になっている。

だが、あのジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーが方々手を

尽くし、『白い男』のために躍起になって神官や呪術師を呼び寄せ
ているという報告を受ける度に、

『白い男』は、レオンハルト・ベッカー以外の何者でもない。

という結論に至らざるを得ない。

ジークリンデを蛇蝎のように嫌うアキラだが、ジークリンデのレ
オに対する感情だけは認めている。

それを認めなかったアキラは、ジークリンデのその部分に敗北を
喫したのだ。

失ったものの大きさを思えば、悔やんでも悔やみ切れない失敗だ。

「白い、男、か……」

アキラは呟く。

白い男は、記憶を失っているという。

アキラにとって、それは不安要素にはならない。

愛していると言ったのだ。アキラが呼びかければ、草臥れた魂も
蘇る。

逢いに行こうか……。

そこまで考えた時、ドアが強く叩かれる。

息を切らせて現れた大隊長の一人が悲鳴混じりに報告する。

「銅山が、焼けてます……！」

「そいつは辛辣だな！」

アキラは嗤った。

行け！

最早、進退窮まった。

胸がざわめく。

また、あの舞台へ登るのだ。

アキラ・キサラギに舞台袖は似合わない。

耳の奥で、テンポのよい淡々とした円舞曲のリズムが流れ出す。

ワルツだ。

男女が対となり、体を合わせ踊るそれを、アキラは事のほか好んで踊った。

アキラの、狂気のワルツがはじまる。

第53話 愛と憎しみと(前書き)

エル視点

第53話 愛と憎しみと

四年前。

焼けて行く故郷で、一人の男が表情を消し、口の中でアスクラピアの聖句を呟きながら、血に塗れた剣を振るっている。

妹のアルも、この男の手にかかった。

よかった。

エルはひたすらそう思う。

体中に紫斑が浮かび、末端から腐り落ちて行く業病『黄金病』。妹の口癖は、

「殺して……」

エルにそうする勇氣はなく、ただひたすら神の思し召しを待つのみだった。だから、その男　レオンハルト・ベッカーが現れた時、エルはこれこそ神の思し召しだと思った。

他の傭兵たちがそうするように、レオも血に塗れ、無表情で家屋に火を放つ。

レオンハルト・ベッカーは、常にエルの期待を裏切った男だ。

妹の死を喜ぶ姉に、生きる資格はない。

レオの足元に縋り付きながら、裁きの時を待つエルの口から勝手に言葉が溢れ出す。

「お願いします、助けてください……」
怖かった。

あらゆる快樂も、あらゆる苦しみも生者の特権だ。エルは、それを手放すのが怖かった。

その後、レオは、作戦途中にも拘わらず、エルを連れて村から離脱した。

単騎、脱走兵としてサクソンへ向かう間中、傭兵のレオンハルト・ベツカーは、震えるエルを力の限り抱き締めて、泣いていた。

「大丈夫、大丈夫だ……。きみは、病気に罹っていないから……。俺が、俺が絶対助けて見せる……」

暖かかった。安堵の中、微睡むエルの耳元でレオは囁き続ける。

「神さま……神さま……ねえ、居るんでしょ？俺、どんな罰でも受けますから、この子だけは……どうか……」

刹那の快樂主義者の多い傭兵の中で、この男は変わり種であるらしい。

全財産を投げ打ち、貴族に頭を下げて回り、本当にエルを助けてしまった。

その後、エルは酷い自己嫌悪に取り付かれることになる。

妹の死を喜んだ姉として。

自罰を望みながら、それを恐れ、事もあるうに妹を手にかけた男の慈悲に縋った姉として。

食事を拒否し、全ての善意を拒絶するエルに、レオが取ったのは、その彼女をメイドとして雇うという行動だった。

レオンハルト・ベツカーは、どうしようもなく甘い男だった。

雇ってやると横柄に言う癖に、その表情はエルを気遣う不安に塗れていた。

素直に善意を受けられないエルを思いやり、逆に厳しく接するこ

とで正当な代価として、善意を受けさせようとしたのだ。

レオの庇護から外れることは、未だ大人に成り切らない当時のエルにとって最悪の人生を約束することになる。

少しだけ、あと少しだけ、この男に甘えよう……。

その思惑から、エルは、レオに仕えることになった。自罰意識の豊富な彼女にとって、最悪の決断になると知らずに。

当初、レオは少し頭の足りない青年だった。たいして強くない癖に喧嘩っ早く、叩きのめされて帰って来ることもしばしばで、遊びに夢中になる余り、酔い潰れ、色街に迎えに行くこともしょっちゅうあった。

馬鹿なやつだと呆れる反面、エルはどうしても彼を心配してしまっ

放って置けば、この男がそこから野垂れ死にするのは目に見えて

貴族の口利きで命こそ助かったものの、任務放棄の責を取らされ、レオが仕事から干されてしまい、きつい時もあった。

純粹種の人間にニードーサクソンの冬は厳しい。寒さに震える彼と抱き合って眠ることもあった。

「す、すまん、エル。俺、もうちょっと頑張るから……」

凍え、歯を鳴らすレオに抱き締められ、エルは口元に僅かな笑みを浮かべる。

そこには確かに、エルの居場所が存在した。益々、レオから離れられなくなる。

そんなある日。

「エルーっ！ やったぜ！ 俺、騎士になるぞ！」

「……」

高らかに笑うレオを前に、エルは呆然となった。

この考えの足りない男が国を守る騎士などと……世も末だ。

「これでエルの給料も、しっかり払ってやれるな！」
「……」

子供のように胸を張るレオの様子に、じんわりと暖かい何かが、エルの胸に込み上げる。

だが、この男は妹を殺めたのだ。

だが、この男は優しいのだ。

だが、この男は故郷を焼いたのだ。

だが、この男が愛しいのだ。

騎士になってからのレオは、しこたま殴られて帰って来ることが多くなった。

「いてて……あのチビ、容赦ねえな……」

「小さいのですか？」

「おお！ 豆粒みたいだ！ けど、べらぼうに強くてよ……返り討ちに遭っちまった」

レオが他所の猫の匂いを付けて帰って来るようになったのはこの頃からだ。

「少尉、変な匂いがします」

「あー……今日も、あの豆にやられてよ……気絶して、目え覚ましたら、厠の中だったんだ……あの豆、いつか踏み潰してやる……」

猫はもう、自分がいる。エルは不快だった。

レオンハルト・ベツカーは神父の息子である。遊び好きだが、根は真面目。騎士という職分は、彼に向いていたのだろう。上官の厳しい教育の成果もあり、時を経て変化する。

いつからか、その表情から甘えが抜け、男の顔になって行く。

「エル、またアルフリードが攻めてきた。俺は第七連隊の副長として行かねばならない。万が一にもやられはせんが、もしもの時は」

いらぬ気遣いだ。エルは遮って言う。

「中尉を信じています。任務に励まれますよう」

「よし。行ってくる」

戦いの気配は、彼の横顔を通じて、エルには分かる。

鋭利に研ぎ澄まされた刃物のように、迷いなく全てを断ち切る表情。

レオンハルト・ベツカーは剣によって生きて来た男だ。斃れる時も、剣によってであらねばならない。

戦場に、レオを送り出す時の切ない心持ちが、エルにはたまらなく甘美だ。

戦いを控え昂揚し、ぴりぴりと張り詰め、余計な気遣いをしない彼が好きだ。

いつか この男の命の輝きを間近で見たい。
それは、きつとエルの身も心も灼くだろう。

「ああ、レオンハルトさま！ お慕いしております！」

「よし！ では地獄までついてこい！」

「はい！」

だが、この男はエルの妹を殺し、故郷を焼いたのだ。

レオンハルト・ベッカーが死ねば、エルは嬉しい。

レオンハルト・ベッカーが死ねば、きっとエルの胸は悲しみに張り裂けてしまう。

それでも共に在ることが許されるというならば、地獄の炎に焼かれても構わない。

妹の死を喜ぶ姉が。

死に行く故郷が焼け落ちる様に安堵を覚えた自分が、この愛を成就させるのは、地獄より外にありえない。

フェルトブルガーの砦から少し離れた森の中で、エルは身を折って、胃の内容物を吐き出した。

「まさか……」

予感があった。

毎月、定期正しく訪れるものがない。丸みを帯び、少しずつ膨れ出す胸と腹。

そしてなによりも　いつも予想を超える形でエルの期待を裏切るレオンハルト・ベッカー。

人間という種族は、基本的にはどの種族とも相性がよい。猫の獣

人との間に子を為すことは、可能性としては低いが、ないことはない。

「どうでしょうか……」

感情の起伏に乏しいエルにしては珍しく、途方に暮れる。レオンハルト・ベッカーのただ一つ 命が欲しかった。それを、このような形で受け取ることになるうとは……。

フェルトブルガー砦の方向が騒がしい。

夜中であるというのに、男たちの怒号が飛び交い、馬の嘶きが辺りに木霊する。

煌々と焚かれた篝火が、エルの足元まで差し込んで来る。

ああ、行くのだな……。

エルには、すぐ分かった。

アキラ・キサラギが、全ての煩わしいものを切り捨て、たった一つを指す時が来たのだ。

直ぐにでも駆けつけようとしたエルだが、その足元に迷いが生じ、立ち尽くす。

「レオンハルトさまの輝きが、ここに……」

運が無かったのだ。エルは即座に振り切り、フェルトブルガー砦に走りだす。

大掛かりな門の前には、荒くれの傭兵たちが集結しつつある。皆一様に鎧兜を身に纏い、物々しい雰囲気周囲に撒き散らしている。

「おお、ベッカーんとこの、猫の嬢ちゃん」

エルに声を掛けたのは、元第七連隊の大隊長の一人だ。

「行かれるのですね？」

息を弾ませるエルの手は、無意識の内に腹を庇うように宛てがわれている。それを怪訝そうに見やりながら、大隊長は頷いた。

「ああ、これで嬢ちゃんとも、お別れだ。達者でな」

資金源を絶たれた『猫目石』は、このままでは先細り、内側から崩れ去るのは時間の問題だ。アキラの考えは分らないが、今起つことは正しい決断の一つであると信じる。

これが最後の戦いになるだろう。彼とて、歴戦の兵だ。軍から外れた流浪の集団の行く末くらいは察しがつく。

死なば諸共。

これまで、アキラ・キサラギの下で面白おかしくやって来た。彼女の指揮に準じ、最後までついて行くつもりだ。

彼だけでなく、元第七連隊に所属していた騎士の殆どがそう考えている。

「私も、お供いたします」

「……」

大隊長は首を振り、静かに視線を飛ばした。

そこではアキラ・キサラギが、全身に、ぴったりとした黒い衣を身に纏い、タクト替わりに刀を振りかざし、大声で指揮を振るっている。

「総員、騎乗できる者は騎乗しろ！ 物資をありったけ持って来い

！ 遠征するぞ！」

アキラのコバルトブルーの瞳は、篝火の光を受け、燃えるようだった。

エルは僅かに微笑み、そのアキラに歩み寄る。

「アキラさま……エルも連れて参られますよう……」

その静かな決意の言葉に、アキラは残酷な笑みで答えた。

「駄目だ。おまえは、ここで腐って行け」

「え？」

エルが見たもの。

菊一文字の紫の刀身が横凧ぎに閃き、篝火を照り返す美しくも怪しい輝きだった。

第54話 終わりのはじめり(前書き)

投下開始

第54話 終わりの始まり

ジークの不安が目に見える形となり、現実になって降りかかる日がやって来た。

その朝。

レオは目を覚まさなかった。

ジークがどのように強く呼びかけようと、強く揺さぶろうと、発熱を伴う健やかでない睡眠を貪り続けた。

取り乱したジークは、半狂乱になって神官や呪術師を呼び付け、処置に当たらせしたが、レオの症状は重く、どのような治癒魔法もまじないも効果を示さなかった。

ジークは全ての責務を放棄して事の解決に当たったが、結果は悲惨なものだった。

どのような施術も寄せ付けず、また発熱の原因もよく理解できないという現状から、治療は発熱に対する対症療法にのみ止められ、ジークはその経過を見守るよりほかなかった。

ジークは悶えんばかりに怒り狂った。

「どうなっている！？ おまえたちは、一年あると言ったじゃないか！」

状況の説明を求め、荒れ狂うジークに、神官も呪術師も顔色を青くしたが、その口から吐き出された、

「何も分からないのです。申し訳ございません……」

という言葉は、尚更ジークの怒りを煽るだけだった。

「この呪いをかけた者ならば……」

冷たい汗を拭う神官たちの言葉に、ジークは唇を噛む。

「そいつは既に、この世界のどこにも存在しないよ……」
「馬鹿な！ そんなはずは……」

神官も呪術師もお手上げと言わんばかりに首を振る。

イザベラを手に掛けたことに後悔はない。彼女は信頼を裏切ったのだ。その行いは死をもつて償わせるべきだ。むしろ、痛め付け、自らの行いを悔いさせてから死なせるべきだったと、ジークは思っている。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの愛は気高い。立ち塞がる困難は、自らの手に依つてのみ打ち砕かれるべきである。今更、イザベラを惜しむことなどない。

居並ぶだけでこの状況に何の対抗手段も持たない神官や呪術師に向けられるジークの不信感と怒りは大きい。

「おまえたちの首から上は飾りなの？ だったら、いらぬよね…

…」

レオの眠り 最早、昏睡状態と呼んでいいその状態は、十日に
渡り続いた。

覚醒したレオに間を置かず訪れたのは衰弱による眠りだった。発熱はないが、意識のない状態がさらに三日続いた。

半月に満たない間にレオは見る影も無く痩せ衰え、さらに体の色素を飛ばし、一層白くなった。

己の無力に、血が出んばかりに唇を噛むジークに飛び込んで来たのは、猫目石蜂起の報せだった。

猫目石はフェルトブルガー砦を焼き払い、ノルドライン領を北へ向けて進軍を開始した。

ノルドラインはこの猫目石の過剰で素早い反応に、ほとんど対応できなかった。

防衛の軍勢は、集結前に各個に撃破され、周辺都市は、放火と略奪と虐殺とにより、壊滅的な打撃を被った。

たかが一旅団。されど一旅団。五千人余りの兵力であったが、優秀な指揮官の元、効果的に繰り返される略奪と虐殺は、ノルドラインの国家としての機能を破壊し、その領土を地獄に変えつつある。

既に、ノルドラインの領土の5分の1が焼け野原になり、被害は更に拡大することが予想されている。

ノルドラインを唆し、物資と交通の面から猫目石を追い詰めるレオの策略は、思惑通り効果があった。効果があり過ぎた。それは、猫目石の暴発を誘発し、ノルドラインはこの半月余りの間に、亡国の憂き目を見る有り様になった。

猫目石はノルドライン領を焼き払い、略奪と虐殺を繰り返しながら北上している。

そのノルドラインからは、泣き付かんばかりに援軍要請の使者が、

続々とやって来ている。

この原因の発端となった献策者のジークに、エミールア騎士団から、緊急に開かれる軍議に出席するよう、強い要請があった。

僅か半月余りの間に起こった出来事は、全てジークの理解と能力を超えている。

理解を超えたアキラの凶行。それはまだいい。

能力を超えたレオの惨状に、ついにジークは、膝を抱えて泣き出した。

「……ジーク、泣いているんですか……？」

弱り果て、消え入りそうな背後からの声に、ジークは、はっとして振り返る。

「レオ……」

大粒の涙を浮かべるジークに向かって、レオは両腕を開いて見せる。優しく見つめるその瞳からも、ついに色素が抜け落ち、血の色を浮かんでいる。

ジークと同じだが、その性質はまったく違う。最早、レオは陽の下に出ることはない。太陽の強い光りは、一つしかない彼の瞳を焼いてしまうからだ。

その余りの儚さに、ジークは胸を掻き毟られたような気がして、逃げ出すようにレオの胸に飛び込んだ。

「……ジーク……ごめんなさい……心配させてしまったみたい、です……」

蚊の鳴くような謝罪の声に、ジークは一層泣き崩れた。

アキラ・キサラギの凶行。エミリア騎士団からの出頭命令。そんなものは、もう、どうでもよい。

「寝ていた間に、何か困ったことはありませんでした……？」

そう尋ねる声にも覇気がない。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの、ただ一つの真実が、ひっそりと消え行くこうとしている。

万策尽きた、とはまだ言わぬ。だが、見守るばかりのこの状況。ジークの切れ長の瞳から、涙は尽きる事なく溢れ出る。

「いいんだ。もう、いいんだ……。レオは、もう、何も心配しなくて……」

「ジーク……」

「もう、ここから動かない。ずっと、一緒に居る……。レオは、私が守るんだ……」

レオは、ゆっくりと首を振る。

「ジーク……自分を大切にできない者は、誰も守れません……。俺も、そういう人に、守られたくありません……」

諭すように言う。かつて、アキラ・キサラギにそうしたように。

「話してください……。まだ、あなたのお役に立てるうちに……」

はっ、と息を飲み込み、ジークの両肩は大きく震えた。

傷つき、弱り果てた鳥が、もう一度だけ、己のために羽ばたこうとしているように見えた。狼の彼女が、何故、それを打ち払うこと

ができるだろうか。

間を置き、ジークは嗚咽に言葉を詰まらせながらも、事態の説明を始める。

レオはジークの銀髪を撫でながら、時折、眉根を寄せ、思案深げに視線を伏せ、俯き加減に説明を聞いている。

隻眼に、理知の輝きが灯り出す。呼吸を整え、言った。

「……まず、騎士団からの出頭に応じましょう。あなたは何も悪くない。ノルドラインはこの際、無視するといいでしょう。使者は、酒と女でも与えて歓待して、煙に巻くといい。対応仕切れないノルドラインが無能なのです……」

「うん……」

「アキラ・キサラギは狂っています。ですが、狂人は狂人なりに、目的があるでしょう。彼女の情報を、もっと……」

現在のレオは、ジークにとって何者にも代え難い存在だ。全てを話すことに忌憚はない。だが、アキラ・キサラギの情報に関する限り話は別だ。特に、レオが『猫目石』の副長であったという事実は、伏せておきたい。この愛に曇りがあってはならないのだ。

無論、ジークはこの愛を信じている。

だが万が一にも……。

そういう繋がりは断っておきたい。

ジークにとって、この愛は素晴らし過ぎる。貴過ぎる。試すなど思いもよらない。

涙を拭い、視線を上げた。

鮮血の紅は、鉄より固い狼の決意に燃えている。

「アキラ・キサラギと私には、強い因縁があるんだ。彼女はきっと

……私を殺しに来るんだと思う……」

嘘は言っていない。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの愛に、偽りは一分子もあつてはならない。

「……そうですか……」

鉄より固い鮮血の紅に出会い、レオは諦めたように頷いた。

ジークはアキラの最終的な目標が、ほかならぬ彼であることを告げなかった。

アキラ・キサラギは、ニーダーサクソンの大き過ぎる負債である。取り立て人は、ほかならぬ彼女だ。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーだけが、そのことを知っている。

第55話 ラスト・ワルツ1

フェルトブルガー砦の炎上から僅か半月。

今や、ノルドライン領内に於いて、小柄な悪魔、アキラ・キサラギの名を知らぬ者はない。

ノルドラインは、アキラの狂気に燃え尽くされ、国家としての体を為さぬようになっていく。

「すべて燃やせ！　すべて奪え！　すべて殺せ！」

最早、アキラは何者の存在も許さぬ。

ノルドラインの国境沿いに、ニードーサクソンの首都を目指すアキラは、周囲の全てを焼き払い、奪い、殺しながら、狂気の進軍を続ける。

けらけらと笑いに噎せながら、アキラは馬上にて燃え盛る都市群を見つめている。

猫目石　元第七連隊を基幹とする旅団クラスのこの軍勢は、その大半が野盗と傭兵から成り立っている。

個々の武勇も比類ないが、秘めた残虐性も比類ない。

アキラ・キサラギという強力なリーダーがあつてこそ、軍隊としての体をしてきたのだ。その強力なリーダーの狂気が今の猫目石の求心力だ。

アキラは、逃げ惑う民間人を老若男女の区別なく、公平に切り捨てた。手にしたそれ　妖刀とも呼ばれている『菊一文字』の紫の刀身は血に塗れながらも、燃え盛る炎に一層妖しく照り返り、その輝きを増すかのようだった。

アキラは、さんざん虐殺を行った後、『猫目石』を細かく分解した。

猫目石は先ず、三個大隊に別れ、個別に進行し、それは更に九個中隊に別れた。最終的には二、三〇人の小集団……一個小隊ほどに散開した猫目石は、一〇〇以上の小集団となつて、二、三〇人の小集団に侵入した。

再集結の場所は、首都『サクソン』である。

アキラの強力な指導力を持つてしても、再集結後に元の戦力を保つことは難しい。

現在の『猫目石』は、人殺しのならず者集団だ。そのならず者集団をして、アキラの凶行は恐怖の対象だった。

そのアキラの命令を受け付けず、脱落者を多く出すのは自然の成り行きだと言える。

猫目石は、ここで篩にかけられる。アキラの命に従い、再び集結した『猫目石』は彼女の意志に忠実な殺戮集団として機能するだろう。

首都サクソンに集結しようとしているのは、少数でも強力で残酷な殺戮集団だ。

一個連隊……いや、二個大隊でよい。それだけの集結に成功すれば、徹底的にサクソンを蹂躪する自信がある。

アキラはそうに考えている。

アキラの愛は、破滅に向かって進む愛だ。

自らを焼き、対象を焼き、それでも足らず周囲すべてを焼き払わずにおかない地獄の業火だ。

かつて、レオンハルト・ベッカーという男は、これを命懸けで愛した。

その彼の、壮絶なアスクラピアの『絞り出し』を見て、アキラは、まだ足りない。

もっと、もっと愛してほしい。

その命、燃え尽きてなお。

漆黒の衣を纏った小柄な悪魔、アキラ・キサラギは、夜陰に乘じてついに首都『サクソン』への侵入を成功させる。

同時にアキラは『猫目石』の人員、約五千人の内、三千人の再集結に成功した。彼女自身が想像していたのより、ずっと多い兵員だ。やはり、彼女の想像を上回る破壊と殺戮を行うだろう。

アキラはこの兵力を一か所に集めず、サクソンには三方向から放火と虐殺を行いながら攻め入るという作戦を立てた。

この全てが陽動だ。

アキラ自身は、単騎にてサクソン宮殿を目指す。

第56話 欠片

俺は、もう、長くない。

二週間ほどの眠りから覚めた感想がそれだ。

アスクラピアの神官から余命一年の宣告を受けて、未だ半年。残り、半年を耐える余力が、この身体には残っていない。

俺が目覚まし、一度は騎士団の出頭要請に応じたジークだったが、それ以降は俺から離れなくなった。メイドですら寄せ付けず、衰弱した俺の世話を、自らの手で行っている。

ジークは、俺の容体について、一言足りとも言及しないが、返ってそれが事態の深刻さを告げている。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、未完の大器だ。

武勇に優れ、その人格は鷹揚にして寛容。……粘着質の嫌いはあるが、欠点は誰にでもある。その欠点を補ってなお、彼女の美点は余りある。

俺の最後の使命は、この未完の大器を完成させ、世に放つことだ。ちっぽけなただ一人の人間であるこの俺だが、生きた証しが欲しいのだ。

不意に違和感。

以前の俺　レオンハルト・ベッカーの記憶の残滓だろうか
脳裏にちらつく。

とても小柄な誰かの影だ。

……おさらばです。

その小柄な誰かに別れを告げ、レオンハルト・ベッカーは力尽きた。

燃え尽きる前の俺は、優れた『何者』かを世に送り出したのだ。

後、一度だけでいい。

逢いたいなあ……。

だが俺に残された時間は、余りにも少なくて……。

眠るばかりの時間が過ぎる。

俺の体調は、時を経て薄紙を剥がすようにしか良くならず、一進一退の状況が続いた。

そんなある日。

犬のメイド三人が、ぱたぱたと忙しなく動き回る気配に目を覚ました。

この日のジークは、惜しげもなく裸体を晒したガウン一枚の格好ではなく、騎士のトーガとマントに身を包み、数々の勲章を胸に飾っていた。

ジークは窓際の椅子に深く腰掛け、メイドたちに長く美しい銀髪を梳らせている。眉間には奇立ちから来る深い皺が刻まれていて、周囲の空気は、ぴりつと張り詰めていた。

「……おまえたち、もう少し静かにするんだ。もし、レオが起きたら……わかるね？」

淡々と言い放つジーク。俺は眠っているふりをする。

ジークがとても苛立っていることは察するに難くない。厳しい表情もそうだが、メイドたちに話しかける声色が、俺に対するものは全然違う。

ジークは言った。

「私の大将昇格のパーティは中庭で開く。ここに誰か来るかもしれないが、決して誰も通してはいけないよ。レオに何かあつたら、すぐに呼ぶんだ。つまらないパーティはおひらきにする。皇帝も帰らせる」

鷹揚でなければ、寛容さのかけらもない高圧的で威圧的な声に、ジークの正装を整える三人のメイドたちは脅えたように頷いた。

犬の獣人は、個体差はあるが、大抵が従順で大人しい。狩猟時代と呼ばれる大昔には人間と互いに助け合い、生きていたそうだ。そのためか、人間と犬の獣人は非常に相性がよい。

狼の下級種と呼ばれる犬の獣人だが、俺に言わせれば、この二つはまったく違う。

闘争を好み、馴れ合いを嫌うのが狼の獣人。

平穏を好み、協調性があるのが犬の獣人。

一緒に居て落ち着くのは、紛れもなく後者の方だ。

その狼の獣人であるジークが、犬の獣人であるメイドたちを追い払ってしまったので、部屋の中には、寝たふりをしている俺とジークの二人きりになった。

俺は落ち着かない。

ジークが、ブーツの音を響かせて、俺が横になっているベッドの

隣に立った。

「……………」

ジークの静かな息遣いが聞こえる。かち、こち、と時計の針の音が大きく聞こえる室内で、ジークの息遣いが徐々に荒くなっ行って行く。

「まだ、時間はあるよね……………」

低く呟き、ジークが俺の髪を撫で、荒い息遣いが近くなった。

……………お、俺は、どうなるんだ？ 食われるのか？

くんくん、とジークが俺の首筋の匂いを嗅いでいる。伸びた手が、執拗に体中をはい回り、長い舌が、ペろりと頬をなめ上げる。

「もう少し……………もう少しだけ……………！」

掠れた声で言うジークは、一頻り俺を蹂躪した所で響いた背後からの控えめなノック音に、ぴたりと動きを止めた。

ジークは、ほうと息を吐く。

「それにしても……………レオは、ずるいね。寝たふりするなんて……………」

うふふっ、とジークは笑う。

「心臓の音、すごかったよ？ ………続きは、夜、ね」

だるい身体を起こし、出て行くジークの背中を見送った。

額に伝う冷たい汗を拭いながら、藍色になり出した窓の外を見る。

ジークの愛は、俺には強すぎる……。

呪いのお陰で虚弱になった身体の具合とは関係なく、俺は長生きできそうにない。

……俺は、この感覚を知っている。

危険で、狂暴で、命を削る、あまりにも愛しい求愛を知っている。思い浮かんだのは、ジークではなく、ぼやけた小柄な誰かの輪郭だった。

耳の奥で、淡々としたワルツの楽曲が流れ出す。

「来る……」

独りきり、暗く染まる部屋の中で、呟いた。

第57話 ラスト・ワルツ2

ニーダーサクソンの首都『サクソン』の東西南北の四ヶ所から火の手が上がった。

悲鳴を上げ逃げ惑う人々を、馬で蹴散らし、サクソン中央にある宮殿を目指すアキラだが、全身に不穏な気配を感じている。

火の回りが早い。

異常な速度で燃え広がるそれは、アキラの想像を遙かに超えている。

首都サクソンの造りは、城下町である『上サクソン』と貧民の住まう『下サクソン』に別れている。

アキラは、自らの侵入路に選択した『下サクソン』 オールドシティと呼ばれるここでは放火を行う指示は出していない。

古い木造の建築物が多いオールドシティで放火を行うのは、彼女自身の身の危険を呼び込むため、これを避けたのだが、侵入時、既にオールドシティは炎上を開始していた。

誰かが、サクソンを攻めている！

アキラは、己以外の存在で、このような凶行を犯しそうな人物に、一人だけ心覚えがある。

のためなら、世界を焼き尽くす覚悟がある！

狂気のおにみに青い瞳を輝かせ、そう言い切ったエルフの女を思い出す。

「くっそお！ エルめ！ しくじったなあ！？」

苛立ちを吐き出しながら、馬に鞭を振るうアキラの騎影を追うように、一塊の炎が追走して来る。

アキラの背後から迫る炎の塊は、徐々に人型を象って行く。それは、

「性悪女！」

イザベラ・フォン・バックハウスだ！

アキラの背筋が総毛立つ。

炎に包まれたイザベラ・フォン・バックハウスの纏う空気は、生者のそれではない。

「おい、性悪女！ ボクを追って来るんじゃない！」

死してなお、この決戦の地に駆けつけるとは、どういうことだ？

『呪術師』イザベラ・フォン・バックハウスは、どれだけの怨念を持って、この怪奇を可能にしたのだ？

それらの疑問に、イザベラは答えない。

オールドシテイの石畳みの道を、駆け抜けながら、馬上でアキラは激しく舌打ちする。

「おまえもか！ おまえも、やつが欲しいのか！？」

その問いに応じるように、イザベラを象る炎が激しく、妖しく揺らめき立つ。

「なんてたちの悪いエルフだ！ これだから、ボクはエルフが嫌い

なんだ！」

悲鳴混じりのアキラの嘆息をあざ笑うように、炎の化身と化したイザベラから炎弾が飛び出して、周囲に新しい火種を生み出して行く。

ぱつちりとした少し吊り上がり気味のアキラの瞳に、涙の筋が浮かぶ。

「くっそお……やっぱりだ……ボクだけだって言ったのに……ボクだけだって言ったのに……！」

……一緒に食事をしたり、話し込んだりするような仲ではないです。

あっけらかんと言ったレオの顔を思い出した時、アキラの怒りは頂点に達した。

殴らねば気が済まない。

記憶を失っているらしいが、そうしてやれば、きっと具合がよくなるだろう。

「つすらとんかちの浮気者……行くから、逃げるなよおっ！」

燃えるニードーサクソンに、アキラの呪詛が響き渡った。

第58話 祝杯

自らの軍階級昇格を祝う園遊会を行う宮殿の中庭で、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーはこの上なく不快だった。

続々と詰め掛け、祝いの言葉を述べる門閥貴族の連中も、この二ーダーサクソンの中核を成す軍高官の顔触れも、ジークの胸に何の喜びももたらさない。

おかしなことだ。

一年前のジークなら、この状況を喜び、楽しんだらう。

「どうぞ、ジークリンデさま」

エルフの執事の注いだ年代物のワインのグラスを受け取りながら、ジークは一層、眉間の皺を深くする。

あの憎たらしい猫のアキラ・キサラギが、准将の軍階級を賜った時、にこりともしなかつたのを思い出す。

おかしなことだ。

ジークは首を傾げる。

現在のジークには、その時のアキラの気持ちがよく分かる。それが彼女にとって、何の意味も価値も持たないものであったことがよく分かる。

ジークにとつて、アキラは不倶戴天の天敵だ。アキラの方でも同じように思っているだろう。

憎み合っていることは疑いない。だが、一部ではこれ以上ないほど理解し合っている。

おかしなことだ。

ジークはアキラに会いたくない。

アキラほどジークを脅かす存在はないからだ。
アキラにしてもそうだろう。ジークほど危険で、アキラを脅かす存在はない。

だが、おかしいことに、こつも思つ。

ジークはアキラに会いたい。

会つて、自身の手であの細い首をねじ切つてやりたい。
恐らく、アキラもそうだろう。

機会が有れば、ジークの命を狙うだろう。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーと、アキラ・キサラギ。
どちらかの死を以てしか、互いの胸は安らがない。

アキラ・キサラギは、今頃どうしているだろうか。

ジークは少し考える。

勝つたのは己だというのに、望みもしないパーティの会場で、嬉しくもないのに祝杯を挙げている。

滑稽だ。

見上げた宮殿の三階部分の私室では、衰弱したレオがいる。

誠心誠意、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーという女が愛している男が死にかけているというのに、当の彼女は祝杯を挙げている。

これを滑稽と言わずして、何を滑稽というのか。

何のために、あのアキラ・キサラギと死力を尽くして戦つたのか。

少なくとも、この場で祝杯を挙げるためではなかったはずだ。

ジークの眉間に刻まれた皺が、益々、深くなる。

楽士たちが手にした楽器で緩やかな旋律を奏で出す。

カドリールだ。

そう、ジークはこのために戦ったのだ。そして大きな報酬を得られたのだ。

手にしたグラスの中に踊る液体を見つめ、ジークの口元に柔らかな笑みが浮かぶ。

「これはジークリンデ。今日もお美しい。小官と、ぜひ一曲、踊って頂けませんか？」

銀色の髪。恵まれた逞しい体躯を折って恭しく頭を下げるのは、フォルクマール・フォン・バウマイスター少将だ。

台なしだ。せつかく、ほんの少しだけ、いい気分になりかけていたのに。

ジークは眉を寄せ、グラスの中身をバウマイスターの下げた頭に振りかける。

「何をする！ この……！」

ワインでずぶ濡れになりながら、いきり立ったバウマイスターは何事も悪口を叩こうとして、周囲に並ぶいずれも高貴な来客の顔触れの視線に出会い、忌ま忌ましそうに口ごもった。

「おまえを呼んだ覚えはないよ、バウマイスター」

ジークは鮮血の瞳で、静かにバウマイスターの首から上の辺りを見る。

「私の居住区に、嫉の悪い野良犬が迷い込んだ。だれのことか、わかるね……?」

「なっ……」

周囲で事の経緯を見守っていた面々から、失笑の音が漏れ、バウマイスターは真っ赤になって押し黙った。

「お似合いの野良犬とでも踊るんだね、バウマイスター」

もつとも、とジークは付け加える。

「汚いおまえなんて、野良犬の方でも願い下げだろうけどね」

「……くそっ、覚えてろよ!」

怒りのあまり、赤から青になった顔色でバウマイスターは踵を返す。

執事を押しつけ、態とらしく大きな物音を立てて去る姿は滑稽なだけでなく、惨めですらあった。

その次の瞬間には、ジークの頭からバウマイスターの姿は消え去る。

レオなら、どうやって私を誘うだろうか……今度は、女のパートで踊りたいな……。

そんなことを考えた。

第59話 ラスト・ワルツ3

窓を開け放ち、流れ込んで来るカドリールの旋律を聞いていた。階下から聞こえてくるパーティーの招待客たちの喧噪は嫌いだが、音楽に身を任せるのは嫌いじゃない。

ベッドの上で身を起こし、目を閉じたまま、訪れた心の平穩に身を任せていると、何やら騒々しい物音が響いてきた。

「誰も立ち入らぬようにとの、ジークリンデさまからの厳命です！
おやめ下さい、バウマイスター少将！」

メイドの咎めるような叫び声上がり、続いて若い男の声の怒鳴り声がある。

「やかましい！ ここにジークリンデの困ったペットがいるんだろ
うが！」

「ああ、駄目です！」

物々しい雰囲気警戒していると、二人のメイドが部屋に飛び込んできた。

ジークの身の回りの世話をしていた犬のメイドたちだ。

「大変です！ 白いお方さま、お逃げください！ バウマイスター
のならず者が」

メイドは、最後まで言うことは出来なかった。

嵐のように飛び込んで来た銀髪の男に、メイドは二人とも突き飛ばされ、壁にぶつかってその場に崩れ落ちた。

「……貴様が白いニンゲンか……」

残酷な笑みを浮かべる銀髪の男と目が合う。

頭の奥で記憶の断片が、澱のように僅かに舞い上がり、消えて行く。レオンハルト・ベツカーのものだろう。

悪い予感がする。

「バウマイスター……キゾクの方ですか……？」

バウマイスターはキゾクだろう。キゾクというやつは、高貴の家柄とか抜かす割に、礼儀正しかったことは一度もない。それらしい登場の仕方だ。

バウマイスターは、問いの答えかわりに、俺の頬を平手で強く打った。

頭に、かっとなが血が上る。平手で顔を打つのは、騎士に対する最大級の侮辱だ。

待て。騎士？ 誰が？ 俺？

ただの平手とは言え、弱り果てたこの身体には堪える。目の前がちかちかする。

「下種に名乗る名などない！」

バウマイスターは口角から泡を飛ばして喚き散らした。

「……白……さま、お逃げください……」

バウマイスターの足元に、メイドの一人がしがみついている。犬の獣人は庇護欲が旺盛で、弱いものを守るうとする習性がある。だがこの場合、その習性は

「この犬コロめが！」

「やめろ！」

俺の制止は間に合わず、怒りを爆発させたバウマイスターが、足にしがみつくメイドの首筋を強く踏み抜いた。

「ごきり、と鈍い音がして、メイドは口から血を吐き、痙攣する。

致命傷だ。

だがまだ間に合う。その思いから、メイドに駆け寄る。同時に、この呪われた身体と一体化したアスクラピアの蛇が両腕に浮かび上がった。

俺の命を削る忌ま忌ましいやつだが、こういうときはありがたい。

「貴様、アスクラピアの使い手か……！」

バウマイスターの声色に僅かな驚愕が滲むが、それも一瞬のこと。直ぐさま俺に歩み寄り、髪の毛を掴んでメイドから引き離す。

俺は、バウマイスターの顔に唾を吐きかけてやった。

「女に手を上げるとは、騎士の風上にも置けん！ このクズが！」

「貴様あ！」

更に怒りの色を濃くしたバウマイスターに投げ飛ばされ、俺は、

強かにドアに背中を打ち付けた。
胸の奥で鈍い音がしたが……ざまあみろ、治してやった。

怒り狂ったバウマイスターに、引きずられるようにして、宮殿前の広場に通じる大きな通りに出た。

ジークの大将昇格パーティーに出席しているドレスを着込んだ貴夫人たちが悲鳴を上げて俺と、バウマイスターとを指さす。

「ご婦人方、この男は卑しいヘイミンです。お気になさらぬよう」
悪びれずに言うバウマイスターに更に急ぎ立てられ、俺は長い道を進む。

「ニンゲンに、この宮殿は相応しくない。摘まみ出してやる！」
返事がわりに、血液の混じった唾を吐き捨てた。

予想していたのと随分違うが、この宮殿を出て行けることに関しては安堵を覚える。

俺が死ねば、ジークは、きっと立ち直れない。
そう自惚れてしまえるくらいには、ジークは俺を愛してくれた。

不意に、バウマイスターが歩みを止め、ふんふんと鼻を鳴らす。
訝しむように言った。

「火事……?」

その声に反応し、俺も顔を上げる。

燃えている。

サクソンの街が、燃えている。

バウマイスターに再び頬を張られ、俺は宮殿の外に放り出された。

「失せる、ニンゲン。これでジークリンデも我に返るだろう」
「……………」

はいつくばりながらも、俺はバウマイスターを強く睨みつけてやる。

騎士に向かって平手とは……………最低限の礼儀も知らんのか。

だが、バウマイスターが適当に痛めつけてくれたお陰で、未だ意識を保っていられる。

頭がずきずきと痛む。

次々と浮かぶのは、レオンハルト・ベッカーの記憶だ。

狼の獣人に殴られたことと、宮殿の前にあるこの広場に集結している騎士たちが醸し出す物騒な戦場の雰囲気、俺の何かを強く刺激したのだろう。

所々、破け、虫食いのある地図を連想する。

それが今の俺　レオンハルト・ベツカーだった男。

俺の記憶喪失は、物理的なものや精神的打撃を要因にしているものではない。失われたものは二度と帰らない。だが、全てが損なわれたわけではない。暴走した『蛇』の食い残しが、外的要因で表面化したのだろう。

その破け、虫食いのある地図に、白い男の記憶がはまり込む。

現在の状況は、非常によくない。

身体は弱り果て、骨折はないものの、全身が酷く痛む。記憶の整理が上手く行かず、多少混乱の気配がある。

俺は、だれだ？

わからない。

宮殿の外壁に背中を凭れ、呼吸を整える。

隊長と思しき男が、武装した騎士の集団に大声で指示を飛ばす光景が、俺の中の何かを強く押す。

……ここは戦場になる。

速やかに移動しなければならぬ。

戦場で一番危険なのは、何もしないことだ。状況について行けず、遅れてしまうことだ。

俺は、まだ生きている。

生きているということは、立って戦えということだ。

この弱り切った身体で、なぜ、そんなことを考える？

いかん、思考が纏まらない。

何故、俺はここに居る？

何故、こんなにも白くならなければならない？

何故、こんなにも呪われている？

何故、殴られなければならない？

何故、こんなにも傷つかねばならない？

もう、疲れた。

それなのに、まだ立たねばならないのか。

意識が、混濁する。蛇を使ったこととは関係なく、俺は消耗してきたようだ。

詰んだか……これは……。

騎士たちの鎧兜の擦れ合う音が耳の奥で鳴るワルツの旋律をかき消して

「レオンハルトさまあつ！」

呼ぶ声。

引っ張られるようにして、意識が現実に舞い戻る。

ぼろぼろに薄汚れた身なりの、猫の女が、驚愕に目を見開いて立ち尽くしている。

悲しみと、喜びの同居する表情で、ぎこちない笑みを浮かべた後、僅かばかりの荷物を投げ捨て、走り寄って来る。

女は、何か言いたそうに、喘ぐようにして口を開くが、全身を震わせる嗚咽がそれを許さない。少し垂れ気味の大きな瞳から、ぼろぼろと涙が溢れ出す。

……おかしい。このように正体もなく、泣くようなやつではなかったはずだ。

何故か、そんなことを考える。

しかし、この女は一体何者なのだ？

「きみは……誰だ？」

猫の女は、打たれたように、びくと震え、言葉もなくその場に泣き崩れた。

「……う、はあっ……おっかれ、さまでございましたあっ……！」

猫の女は、額を地面に擦り付け、平伏したまま、嗚咽混じりに労いの言葉を投げかける。

全然意味がわからんが……女は、俺の顔見知りであるようだ。

どつやら、神は居るらしい。

まだ生きる。

そして あの日続きをやれと、俺の耳に囁いた。

第60話 狂騒

ノルドラインを亡国の危機に追い込んだ『猫目石』傭兵団襲撃の報に、サクソンの宮殿内は俄に混乱の様相を呈した。

ジーリクンデ・フォン・アスペルマイヤー主催の園遊会には、このサクソンに駐在する高級将官の殆どが参加している。

襲撃の報を告げる騎士たちが、続々とジークの居住区に訪れ、口々に大声で、自らの部隊の指揮官の名前を叫んでいる。

ジーリクンデ・フォン・アスペルマイヤーは大将である。フォン・カロツサ元帥亡き今、この首都サクソンに駐在する武官の中で最も強い指揮権を持つのは外ならぬ彼女だ。

ジークは叫んだ。

「慌てるな、静まれ！」

『救国の英雄』の一喝に、皆一様に注目した。

「猫目石がいかに優れた指揮官の元に動く部隊とは言え、その数は寡兵である！ 落ち着いて対処すれば、恐れるに足らず！ 冷静な判断を旨とせよ！」

感嘆の溜め息と共に、落ち着きを取り戻し始めた周囲の対応に、ジークは一つ頷く。

アキラ・キサラギが来るのは分かっていたことだ。慌てることは何もない。

対応策は、既に出来てある。

彼女がレオを狙うことは分かりきっている。軍を率い、彼を死守していれば、自ら望んで死地に飛び込んで来るだろう。

数を頼りに待ち受けるだけでよいのだ。

弱り切ったところで、ジークが自ら処刑する。それで、アキラ・キサラギとの宿命にも似た腐れ縁もここまでだ。

一応、皇帝の守護のため一軍を回し、宮殿奥に下がるよう指示した後、ジークは自らの私室に一度引き取る。

そして。

ジークは棒立ちになった。

白を基調とした室内は血に汚れ、家具は壊され、住人の激しい抵抗の痕跡を知らせるように、床にも引きずったような血の跡がある。

なんだ、これは？

血の気を失い、最早涙さえ浮かべたジークは、慌てて寝室に飛び込む。

「う……」

ぐらりと、ジークは足元が傾いたような感覚に襲われた。

さんざん抵抗したのだろう。足元にはメイドが口から血を吐き倒れ、レオが寝ていたベッドには飛び散った返り血の痕跡が生々しい。

「レオは、何処に行ったの……？」

ほんの数時間ほど前までジークが掛けていた椅子は、横倒しに倒れ、そこには二人のメイドが折り重なるようにして倒れている。

ジークが確信できるのはただ一つ。

これは アキラ・キサラギの仕業ではない。

同じ男を愛したのだ。あのアキラ・キサラギがいくら狂っているとは言え、こんなことをするはずがないのだ。それだけは請け合ってもよい。

「……ジーク、リンデさま……」

放心したままのジークは、声のする方向に視線を向ける。

口から血を吐き、絶命していると思われたメイドが、途切れがちに言葉を紡ぐ。

「……バウマイスターで、ごさいます……あの、痴れ者が、恥知らずにも、白いお方さまに、暴行を働いたあげく、連れ去ったのです……」

「バウ、マイスター？」

ぼんやりと反芻し、未だ我に返らぬジークは、本当におかしなことでだが、アキラに申し訳なく思った。

間抜けにも、己が望みもしない祝杯を挙げている間に、賊の侵入を許し、狼藉を許したあげく、レオンハルト・ベツカーは連れ去られたのだ。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、自らの行いを恥じたことはない。

戦友であり、幼馴染みであるイザベラを背後から手に掛けたことも、一騎打ちにて騙し討ちに近い形でアキラを退けたことも、全ては愛深きゆえにしたことだ。恥じるべき何物もない。

だが今、ジークは恥じていた。

寡兵にてこのサクソンに乗り込んだアキラ・キサラギには捨て身の覚悟があるだろう。その彼女に、どの口で、同じ男を愛したと言えるのだ。

恐らくは己を目印にレオを指すであろう彼女に、何と言いつくればよいのだ。

後先の順番や、運不運は関係ない。

レオがアキラ・キサラギを愛したのは必然だったのではないか？

「アアアアーーーーッ！」

認めない！

ジークは、全身で吠えた。

握り締めた両の拳が、めきめきと音を立て、身体中から吹き出した怒気で辺りの空間が歪むかのようにだった。

「バウマイスター……！」

唸るように呟くや否や、ジークは稲妻のようなスピードで窓ガラスを突き破り、屋外へ飛び出した。

大気に漂う焦げ臭い匂いが、ジークの鼻控を攪る。

宙空に放たれた狼の女が目にしたものは、きらめく星々と赤々と燃えるサクソンの町並みだった。

胸一杯に、大気を取り込み、ジークは咆哮した。

赤い瞳を新なる怒りに染め上げて、ジークは狼の本性に立ち返り、着地と同時に、四本の手足で駆け出す。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーの誇り高く、気高い愛は踏み躪られた。

今はただ、純然たる怒りだけが胸を突く。

そのジークに、狼の純粹な血が囁くのだ。

踏み躪られたのなら、食い破ればよい。

それによってのみ、失われた道は開かれる。

昏きを拓くのは、いつの時も　　力のみ。

真の強者のみが、進むべき道を切り開く。ジークにとって、当然のことだった。

第61話 ラスト・ワルツ4

首都サクソン オールドシティ。

「バックハウスうううう！」

オールドシティの入り組んだ町並みを、城下町『上サクソン』に向けて、ひたすら馬を進めるアキラ・キサラギは、背後からつかず離れずの距離を保ち、追走して来る炎塊に罵倒の声を投げ付ける。

「未練がましい化け物め！ 死人は、おとなしく引っ込んでろ！」

炎の化身と化したイザベラは、まるでこの世界全てに復讐したいと言わんばかりに、次々と炎弾を打ち出して、辺り一面を火の海に変えて行く。

煉獄と化したオールドシティの町並みを逃げ惑う人々に、アキラは大声で喚き散らした。

「退け、退けえっ！ 切り捨てるぞおっ！」

予想外だ！

後背に人外と化したイザベラ。目前に恐慌状態にある民衆を見据え、アキラは内心激しく毒づいた。

おそらくは一軍を率いて事に当たるであろうジークリンデへの対策はしてある。

ジークリンデは大軍を有している。圧倒的に有利な立場であるが、それだけに取られる戦術は限定され、行動は予想し易い。

限定された状況と行動は、奇策を生む土壌になる。アキラが勝機

を掴むとしたら、正にその一点にしかない。

猫目石はアキラの制御から離れ、自由にサクソンを蹂躪している。ジークリンデは立場上、これに対処するを得ず、兵力は拡散する。部隊を率いては目立ちやすい。その思惑からの単独での侵入だったのだが、それを背後から追いつがるイザベラが、ふいにしようとしている。

現状は、アキラの予想できる範囲をとうに超えている。

サクソン駐在の騎士の通常任務には、治安と警備が含まれる。部隊が現れるのは時間の問題だ。

……振り切つてやる！

アキラは身を屈め、鞭を振るって馬のスピードを上げる。

逃げ惑う民衆は、火の手を避けるようにして『上サクソン』を指している。目的地を共にするこの民衆たちが、アキラは邪魔で仕方がない。組織化されてない分、軍隊などより余程始末に負えない。

『あははははは！』

突如響いた狂笑に、アキラは、ぎよつとして振り返った。

背後で、炎を纏ったイザベラが頭上に巨大な炎弾を作り出している。

エルフという生き物が使う『魔術』というものを、アキラは過去に何度か目撃したが、イザベラの作り出したそれは、見たことがない程、巨大なものだ。個人で扱うレベルを大きく超えている。

一撃で一個中隊　二〇〇人は薙ぎ払うだろう。

「ば、化け物め……！」

あれはもう、イザベラではない。

炎の精 エレメントだ。通常の武器では撃退できない。

アキラは腰に差した『菊一文字』に視線を走らせる。

『妖刀』菊一文字。

これでなら撃退は可能かもしれない。

アキラの頬に冷たい汗が伝う。それを試そうとは思えない。

「う、撃つのか、あれを……。民衆に ボクに向かって？」

イザベラは目の前に殺到する民衆を、炎弾で薙ぎ払うつもりだ。そこにはアキラも含まれる。

咄嗟の判断で、アキラは馬を乗り捨てるとその小柄と敏捷性を最大限に発揮して、隘路に殺到する民衆を踏み付け、大きく飛び上がる。

その直後、イザベラの放った炎弾が、民衆に直撃して大爆発を起こした。

目茶苦茶だ！

アキラは空中で爆風に身を揉まれながらも、姿勢を立て直し、木造の住居の屋根に着地する。

『キサラギ』は元を辿れば、その祖先は『ニンジャ』の末裔だ。

アキラはその『ニンジャ』がどういったものかは知らないが、キサラギの文献で知る限りにおいては、最強の戦士の一種類であることは確かだ。

現在、アキラが身に纏う身体に張り付くこの黒い衣も『キサラギ』から受け継いだものだ。鋼線が縫い込まれており、防御性に優れ、

且つ柔軟性に富み、夜陰に紛れる黒色は隠密行動に向いている。
身体の線が浮き彫りになるこの衣装は、ちょっとエロいのが難点
だ。

「……………」

アキラは狂ったように笑い続けるイザベラを観察する。

イザベラは小さくなった。巨大な炎弾を撃ち出す前と比べ、身の
丈が半分ほど　アキラより頭一つ分は小さくなっている。

あれは連発できないようだ。

好機！

すつ、と腰を落とし、菊一文字の鞘に手を掛けるアキラと、イザ
ベラの視線が合う。

イザベラは、にたと笑って、炎を纏う指先で一点を差す。

宮殿の方向だ。

今は、先へ行けということだろう。

アキラは視線を細め、一瞬思考する。同時に、吹き飛んだ民衆の
向こうからエミリア騎士団の旗印を背負う騎士たちが湧き出して
来る。

アキラは鼻を鳴らし、この場での決着を諦めると屋根伝いに駆け
出した。

共闘……という訳ではない。あれはあれで機会を待っていたのだ。
アキラの蜂起に乗じる形で目的を果たそうとしているようだ。一時
的に協力の姿勢を見せたのは、今はという限定付きのことだろう。

大きな食い違いを見せたものの、アキラは予定通りに『上サクソン』に侵入した。

主に貴族連中の住まうこの『上サクソン』は、『下サクソン』を見下ろす高台に位置している。

レオンハルト・ベツカーの居る宮殿までは、後、僅か。再会に胸を躍らせ、先を急ぐアキラではあるが単独で何の細工もなく宮殿に突っ込むほど愚かではない。

『上サクソン』を睥睨する時計塔に最後の仕掛けを用意させている。元々、サクソンに潜入させていた手下に用意させたものだ。

このような状況での使用を想像していたわけではないが、エミリア騎士団の統制から外れた後も開発を進めていたものだ。

完成品と呼ぶにはお粗末な代物だが、アキラの期待に応えるには充分な出来だ。

燃え盛るサクソン上空では上昇気流が巻き上がっていることだろう。それに加えて、自身の小柄な体格が有利に働く。

グライダーだ。

レオの構想したそれで、空から宮殿内部に乗り込む。彼と合流した後は……知るものか。

切って、切って、果てるもよし。逃げ惑い、最後まで足掻くもよし。共にあるならば、なんでもよい。

いずれにしても、最後は、この手にかけてやる。

燃え盛るこのサクソンで、アキラ・キサラギとレオンハルト・ベツカーの命は、一つになるのだ。

その時を思えば、アキラは腰から下の力が抜けそうになってしま
う。

エルは置いて来た。

憎たらしいが、それでも彼女は、アキラにとって無二の親友だ。

そして、レオの子を孕んでいる。それもまた、煮え繰り返るほど腹立たしいが、アキラが望んでいたものに外ならない。

その子は未来なのだ。

それはエルにくれてやる。

レオンハルト・ベツカーの居ない未来を、アキラ・キサラギは必要としない。

エルはこの最後の舞台に決して間に合わない。レオンハルト・ベツカーの居ない未来で、静かに腐り果てて行くといい。

それがアキラがエルに与えた罰だ。

『上サクソン』でも三本の指に入るほどの高い建築物である時計塔の屋上から、周囲を俯瞰して、アキラは穏やかな笑みを浮かべる。グライダーは、既に組み上がっており、飛んで行かないよう縄で括りつけて固定してあった。

テスト飛行は済ませている。飛距離は十分。片道切符だが、アキラに思い残すことなどない。

「レオ……今から、行くね」

アキラは、燃え盛るサクソンの空に飛翔した。

赤々と燃えるサクソンの町並みが美しい。その美しさに、アキラ

は涙すら流した。

「なんて……綺麗なんだ……」

それはアキラがやったのだ。

彼は、褒めてくれるだろうか。

刹那に燃え上がるこの美しい贈り物を、喜んでくれるだろうか。

上昇気流を受け、アキラの操るグライダーは、更に空高く舞い上がる。

ついにこの高台に位置する『上サクソン』にも火の手が上がり始めたのが、視界の端に見える。

猫目石の幾つかの部隊が、この上サクソンへの進攻を果たしたのだ。

『それ』を見て、夜空を滑空するアキラは眉を寄せた。

皇帝の住まうエーデルシュタイン宮殿。ニードーサクソンの宝石と呼ばれるその宮殿前の広場がひどいパニックに陥っていた。

宮殿は未だ猫目石の襲撃を受けていないはずだ。そもそも、アキラは猫目石に宮殿襲撃を命令していない。命令したのは、あくまでも首都サクソンの破壊だ。

可能な限りサクソンの首都機能を破壊した後は離脱を許可してある。

炎のエLEMENTと化したイザベラも到着していない。

だが、広場は大きな恐慌状態に陥っており、されていて然るべき部隊編制もされていなければ、防御方陣も敷いていない。

アキラは、周囲を旋回しながら眼下の様子を観察する。

方々で掲げられた篝火の中を、一人の騎士が暴れ狂っている。パニックの原因は、どうやらその騎士のようだ。

不規則、且つ、出鱈目なスピードで動き回り、その騎士が動く度に、武装した騎士の集団が弾け飛ぶ。

グライダーの高度を下げ、更にアキラはその騎士に刮目する。

元は白かったであろうマントとトーガを鮮血に染め上げ、暴れ狂う騎士は

「アスペルマイヤー……！」

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーに、アキラは嫌悪以外の感情を持たない。

ジークリンデは危険な相手だ。

このニードーサクソン広しといえど、アキラに勝利を収める可能性のある戦士は、彼女をおいてありえない。現に一度、不覚を取った。

ジークリンデとの決着に、アキラは拘泥しない。避けて通れないと思っていたのも事実だが、サクソン襲撃の目的は、ジークリンデの殺害ではない。それは二義的なものだ。

ジークリンデの有利は大軍を擁するという面にある。

だが、眼下で起こるジークリンデのこの乱心。決着を控え、気が違ったとしか思えない。そこまで考え、アキラは自嘲の笑みを浮かべる。

今宵、誰が一番、正気でないか。

誰も彼も狂うがいい。

狂った猫のワルツに合わせて踊るがいい。

イザベラは化けて出た。

ジークリンデ。お前は、どんな狂気を見せてくれるのだ？

明けない夜の夢を見ているようだ。

愉快になり、アキラは嗤った。

第62話 対峙

― 宮殿警護の指揮を執るバウマイスターの元に訪れたジークが取った行動は、問答無用の殺戮だった。

稲妻のようなスピードで振るわれたジークのハルバード（斧槍）は、バウマイスターの周囲に侍る騎士十二名を瞬殺した。

全身に怒りを漲らせ、殺意を剥き出しにした鬼気迫るジークの形相と、その勇名に違わぬ実力に恐怖に駆られたバウマイスターが逃げ果せたのは、狼の獣人の類い希なる運動能力のお陰だろう。

部下の死も顧みず、言い訳もせず、逃げ出したバウマイスターの判断は全く正しい。既に彼は、自らの死刑執行書にサイン済みだ。

バウマイスターは、上官であるジークの私室に押し入り、客人に暴行を働いた揚げ句、その身柄を不当に拘束、更には拉致し、おまけに行方不明にするという暴挙に及んだのだ。

ジークの怒りは激しく、深刻であり、しかも正当なものだった。

ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは鷹揚で寛容な性格をしているが、一度怒りを抱くと、これを制するには実力を持つてするより外に手段はない。

バウマイスターが自らの愚行を後悔した時はもう遅かった。

「し、白いニンゲンだ！ 白いニンゲンを直ぐに連れて来い！」

恐怖に震え、部下に命じるバウマイスターだったが、その命令は余りにも漠然としており、部下たちは途方に暮れるよりほかなかった。

バウマイスター以外の指揮官が、ジークの有無を言わさぬ先制攻撃で殺害されていたのも、この混乱に更なる拍車をかける原因となった。

バウマイスターは自陣の中を逃げ回り、その最中、応戦の指揮を試みたが、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーはエミリア騎士団の誇る万夫不当の勇者であり、現状、このサクソンに駐在する武官の中では最高の指揮権を持つ『大将』だ。進んで前に立つ者などいるわけがない。

「バウマイスター！ 何処だあああああ！」

騎士たちが上げる悲鳴の中、ジークは味方の返り血に染まりながら、力の限り吠えた。

空には尖った月が浮かんでいて、ジークのすることを見つめている。

そうだ。

あの夜も、そうだった。

月が輝く空の下で、ジークは、レオが、永遠に治ることのない傷を負うのを見つめていた。

激しい怒りが忍耐の限度を超えた時、ジークリンデ・フォン・アスペルマイヤーは、ただの狼の獣人であることをやめたのだ。

ジークが持つ真紅の瞳は、種の限界を突破した証しだ。

そしてまた、この月の輝く夜。

バウマイスターの暴挙は、ジークに新なる力を与えた。

ごくごく単純な表現をするならば、戦士としての彼女は、以前よりも、強くなった。

腕力、敏捷性、生命力、反射神経。その全てが、狼の獣人の限界を超えている。

フォルクマール・フォン・バウマイスター少将率いる一個師団は、ジークの一方的な攻撃に、半壊滅状態に追い込まれた。

指揮系統が破壊され、戦闘集団としての体を為さなくなったのだ。広場に集結する騎士たちは、最早軍隊と呼べる代物ではない。目的もなければ意志もない、ジーク一個人を恐れ、恐慌に荒れ狂う烏合の衆となり果てている。

右往左往する騎士たちの悲鳴が飛び交う陣中で、ジークはついにバウマイスターを追い詰めた。

腰を抜かしたバウマイスターはその場にへたり込み、鮮血と狂気に塗れたジークを、ただぼんやりと見上げていた。

これは、自分と同じ生き物ではない。

あまりに強い。あまりに疾い。あまりに怖い。これは狼などという可愛らしいものではない。怪物だ。

バウマイスターが、そのことに気づいた時は既に遅すぎる。

そこかしこに掲げられた篝火と、醒めた月明かりが、狂った戦場の女神を映し出す。

「……レオに何をしたの……？」

尋ねるジークの声には、どのような感情の発露も見受けられなかった。怒りも戸惑いもなければ、この惨状に頓着する気配もない。

それがひたすら、バウマイスターは恐ろしい。合わせた歯の根が、

がちがち鳴った。

「……レオは何処……?」

「し、知らない! 俺は知らない!」

答えることが出来たなら、バウマイスターがとうに己で迎えに行っている。

「バウマイスター……おまえは、これから死ぬのだけれど……どちらか選ぶことは出来るんだよ……?」

彼女の父がそうであったように、その娘である彼女もやはり残酷でしつこい。言った。

「苦しんで死ぬか、それとも、とても苦しんで死ぬか。どっちがいい……?」

それは、事実上の死刑宣告だ。しかも、いたぶってから殺すと言っている。バウマイスターには苛酷過ぎる二者択一だった。

「お、おお俺は、門閥貴族だ! 相応しい待遇と裁判を要求する!」

それがバウマイスターの最期の言葉になった。

ジークは嘲笑う。鮮血と狂気に塗れ、なお美しい戦場の女神がそこにいる。

「いい言葉だね。おまえの墓碑名には、そう刻んでおくよ」

次の瞬間、バウマイスターの首と胴は、永遠に離縁する嵌めになった。

右から左に走った紫の閃きが、その固い繋がりを断ち切ったのだ。

血飛沫を上げ、倒れるバウマイスターの背後から現れたのは、アキラ・キサラギ。

小柄な悪魔。

アキラ・キサラギだ。

第62話 対峙（後書き）

投下終了

今年はもう来れそうにありませんので。

書き上がり、推敲しています。練りに練っています。
それでは皆さん、よいお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3115y/>

猫とワルツを

2011年12月30日01時51分発行